

ジェンダー・ステレオタイプと性役割的偏見の  
再生産に関わる社会的認知研究

研究課題番号：19530559

平成 19 年度～平成 21 年度

科学研究費補助金（基盤研究(C)）研究成果報告書

平成 24 年 3 月

研究代表者 沼崎 誠

首都大学東京・人文科学研究科・教授

## は し が き

本報告書は、平成 19 年度～平成 21 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「ジェンダー・ステレオタイプと性役割的偏見の再生産に関わる社会的認知（研究課題番号：19530559）」の成果をまとめたものである。本研究における研究組織、交付決定額、発表済みの研究は以下のとおりである。

### 研究組織

#### (1) 研究代表者

沼崎 誠（NUMAZAKI MAKOTO）首都大学東京・人文科学研究科・教授

#### (2) 研究協力者

天野 陽一（AMANO YOICHI）首都大学東京・人文科学研究科・助教

高林 久美子（TAKABAYASHI KUMIKO）一橋大学・社会科学研究所

石井 国雄（ISHII KUNIO）首都大学東京・人文科学研究科

麻生 奈央子（ASO NAOKO）お茶の水女子大学・人間文化創成科学研究科

佐々木 香織（SASAKI KAORI）首都大学東京・人文科学研究科

長田 眞由子（NAGATA MAYUKO）一橋大学・社会学研究科

### 交付決定額（配布額）

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 19 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
平成 20 年度	800,000	240,000	1,040,000
平成 21 年度	700,000	210,000	910,000
総 計	3,200,000	960,000	4,160,000

### 研究発表

〔雑誌論文〕（計 7 件）

1. 石井国雄・沼崎誠（印刷中）. 自己価値への脅威が男性の女性に対する潜在的偏見に及ぼす影響 対人社会心理学研究, 12.
2. 石井国雄・沼崎誠（2011）. 自己価値への脅威が男性のジェンダーに関する潜在的態度に及ぼす影響 社会心理学研究, 27, 24-30.
3. 高林久美子・沼崎誠（2010）. 女性による伝統的女性と非伝統的女性への偏見とステレ

オタイプの適用：潜在レベルからの検討 社会心理学研究, 26, 141-150.

4. 麻生奈央子・沼崎誠 (2010). 潜在・顕在的なロマンティック幻想と結婚満足感 パーソナリティ研究, 18, 244-247.
5. 沼崎誠 (2010). 死すべき運命の顕現化が日本人男子大学生の性役割的偏見に及ぼす効果 首都大学東京 東京都立大学 人文学報, 425, 15-30.
6. 石井国雄・沼崎誠 (2009). ジェンダー態度 IAT におけるステレオタイプの刺激項目の影響 社会心理学研究. 25, 53-60.
7. 高林久美子・沼崎誠・小野滋・石井国雄 (2008). 活性化した自己表象が女性サブカテゴリーへの偏見とステレオタイプに及ぼす効果 心理学研究, 79, 372-378.

[学会発表] (計 23 件)

1. Numazaki, M., Ishii, K., Sasaki, K., Amano, Y. & Takabayashi, K. (2010). *The effects of priming of a threatening out-group on men's benevolent sexism and gender-related self-stereotyping*. Presented poster at The 11th annual Society of Personality and Social Psychology conference, Las Vegas, USA.
2. Ishii, K. & Numazaki, M. (2010). *Does reducing intergroup bias lead to group-based stereotyping?* Presented poster at The 11th annual Society of Personality and Social Psychology conference, Las Vegas, USA.
3. Numazaki, M., Ishii, K., Sasaki, K., Amano, Y. & Takabayashi, K. (2009). *The effects of priming of a threatening out-group on women's benevolent sexism*. Presented poster at The 10th annual Society of Personality and Social Psychology conference, Tampa, USA.
4. Ishii, K. & Numazaki, M. (2009). *Effect of saliency of gender category on threatened men's automatic derogation toward women*. Presented poster at The 10th annual Society of Personality and Social Psychology conference, Tampa, USA.
5. Takabayashi, K. & Numazaki, M. (2009). *The impact of the significant other's expectancies on self-stereotyping*. Presented poster at The 10<sup>th</sup> annual Society of Personality and Social Psychology conference, Tampa, USA.
6. 沼崎誠・石井国雄 (2009). 日本の犯罪状況の悪化情報が現システムの正当性認知に及ぼす効果 日本心理学会第 73 回大会発表論文集, 116.
7. 沼崎誠・高林久美子・石井国雄・佐々木香織・天野陽一 (2009). 性役割的偏見とジェンダー・ステレオタイプのシステム正当化機能 (ロング・スピーチ) 日本社会心理学会第 50 回大会 日本グループ・ダイナミックス学会第 56 回大会 合同大会発表論文集, 58-61.
8. 沼崎誠・高林久美子・石井国雄・佐々木香織・天野陽一 (2009). システム脅威となる外集団の顕現化が女性サブカテゴリーに対する男性の偏見とステレオタイプ化に及ぼす効果 日本社会心理学会第 50 回大会 日本グループ・ダイナミックス学会第 56 回大会 合同大会発表論文集, 462-463.
9. 石井国雄・沼崎誠 (2009). 自己のポジティブ/ネガティブな出来事の想起が潜在的な態度に及ぼす効果の検討 日本社会心理学会第 50 回大会 日本グループ・ダイナミックス学会第 56 回大会 合同大会発表論文集, 454-455.
10. Numazaki, M., Takabayashi, K., & Amano, Y. (2008). *Automatic self-presentational behavior: The subliminal priming effects of romantic relationships on activation of feminine*

*constructs and on subsequent eating behavior among women.* Presented poster at The 9th annual Society of Personality and Social Psychology conference, Albuquerque, USA.

11. Ishii, K., & Numazaki, M. (2008). *The effects of threat of self-worth on males' implicit ingroup-outgroup bias related to gender.* Presented poster at The 9th annual Society of Personality and Social Psychology conference, Albuquerque, USA.
12. 沼崎誠 (2008). 自己呈示行動の自動性と自尊心による調整効果—異性愛関係の閾下ブライミングが女らしさ自己呈示目標の活性化と摂食行動に及ぼす効果— 日本グループ・ダイナミクス学会第 55 回大会発表論文集, 6-9.
13. 沼崎誠・高林久美子 (2008). 重要他者のジェンダー期待にあわせるのはどのような女性か?—平等的性役割観の調整効果— 日本心理学会第 72 回大会発表論文集, 206.
14. 石井国雄・沼崎誠 (2008). 自己の対人的特性に対する脅威が男性の潜在的な女性ステレオタイプ化に及ぼす効果の検討 日本心理学会第 72 回大会発表論文集, 239.
15. 麻生奈央子・沼崎誠 (2008). 潜在・顕在的な異性愛の幻想と結婚満足感の関係 日本教育心理学会第 50 回大会発表論文集, 463.
16. 高林久美子・沼崎誠 (2008). 自己表象の顕現化が女性に対する偏見とステレオタイプ化に及ぼす効果—Implicit Association Test を用いた検討— 日本社会心理学会第 49 回大会発表論文集, 70-71.
17. 長田真由子・沼崎誠 (2008). 反ステレオタイプの情報のステレオタイプの連合低減効果に競争マインドセットが及ぼす効果 日本社会心理学会第 49 回大会発表論文集, 314-315.
18. 沼崎誠・高林久美子・天野陽一 (2007). 異性愛の顕現化が伝統的女性と非伝統的女性に対する偏見とステレオタイプ化に及ぼす効果 日本グループ・ダイナミクス学会第 54 回大会発表論文集, 38-41.
19. 沼崎誠・高林久美子・天野陽一 (2007). 死すべき運命の顕現化と性役割観が大学生の人生設計に及ぼす効果, 日本心理学会第 71 回大会発表論文集, 226.
20. 石井国雄・沼崎誠 (2007). Implicit Association Test を用いたジェンダーに関わる潜在的な内集団バイアスとステレオタイプ化 日本心理学会第 71 回大会発表論文集, 211.
21. 沼崎誠 (2007). 異性愛の顕現化が男性のジェンダー関連自己ステレオタイプ化に及ぼす効果 日本社会心理学会第 48 回大会発表論文集, 94-95.
22. 石井国雄・沼崎誠 (2007). 自尊心脅威状況におけるジェンダーに関わる潜在的な偏見・ステレオタイプ化の検討 日本社会心理学会第 48 回大会発表論文集, 242-243.
23. 沼崎誠 (2007). 両面価値的ステレオタイプ/セクシズムのシステム正当化機能と状況依存性 (ワークショップ「両面的ステレオタイプ研究の発展」話題提供者) 日本社会心理学会第 48 回大会発表論文集, 19.

〔図書〕 (計 1 件)

1. 沼崎誠 (2010). ステレオタイプと社会システムの維持 村田光二 (編) 「認知心理学講座第 6 巻 社会と感情」 北大路書房 Pp. 272-297.

〔その他〕

ホームページ

<http://www27.atwiki.jp/numazaki/pages/28.html>

## 目次

概要	1
<b>I部 死すべき運命の顕現化とジェンダー・ステレオタイプの適用と性役割的偏見</b>	
<b>—文化的世界観の正当化—</b>	15
1章 死すべき運命の顕現化とステレオタイプの適用と偏見	16
2章 死すべき運命の顕現化が伝統的および非伝統的女性の頻度推定に及ぼす効果	26
3章 死すべき運命の顕現化と性役割観が大学生の人生設計に及ぼす効果	
—持ちたい子どもと将来の理想収入に焦点を当てて—	34
<b>II部 システム正当化とジェンダー・ステレオタイプの適用と性役割的偏見</b>	
<b>—システム正当化機能—</b>	45
4章 システム正当化とステレオタイプの適用と偏見	46
5章 犯罪状況の悪化情報が現システムの正当性表明に及ぼす効果	62
6章 ジェンダー・ステレオタイプの表明がシステムの正当性認知に及ぼす効果	70
7章 システムの脅威となる外集団の顕現化は女性サブカテゴリーに対する偏見や ステレオタイプ化を強めるか?	77
<b>III部 異性愛とジェンダー・ステレオタイプの適用や性役割意識</b>	
<b>—ジェンダー・システムの基盤—</b>	103
8章 ジェンダー・ステレオタイプと性役割的偏見の基盤として異性愛	104
9章 異性愛の顕現化が男性のジェンダー関連自己ステレオタイプ化に及ぼす効果	114
10章 異性愛関係の関下プライミングが女らしさ呈示目標の活性化と摂食行動に及ぼす効果	
—自己呈示行動の自動性と自尊心による調整効果—	121
11章 恋愛は相補的なジェンダー・ステレオタイプの適用を強めるか? —異性愛プライムが伝統的性役割観を持つ男性による作動性と共同性における自己と 女性の相補性認知に及ぼす効果—	140
12章 潜在・顕在的なロマンティック幻想と女性の世界観	155
<b>IV部 自己に対する脅威と男性が女性に向ける偏見 —自我正当化機能—</b>	165
13章 自己価値への脅威下における偏見	166
14章 ジェンダー態度IATにおけるステレオタイプの刺激項目の影響	184
15章 自己価値への脅威が男性のジェンダーに関する潜在的な偏見に及ぼす効果	196
16章 自己価値への脅威が男性の女性に対する潜在的偏見に及ぼす影響	207
17章 男女の顕現性が脅威下における潜在的偏見に及ぼす効果	228

V部 女性のジェンダー関連自己ステレオタイプ化と性役割的偏見	243
18章 女性の女性に対する偏見とステレオタイプの適用	
—サブカテゴリー自己表象からの検討—	244
19章 重要他者からのジェンダー・ステレオタイプの期待が女性の自己ステレオタイプ化に及ぼす効果	
—性役割観による調整効果—	246
20章 女性のサブカテゴリー自己表象が女性に対する偏見とステレオタイプ化に及ぼす効果	
—顕在レベルからの検討—	256
21章 女性による伝統的女性と非伝統的女性への偏見とステレオタイプの適用	
—潜在レベルからの検討—	266
VI部 ステレオタイプのカテゴリー機能	281
22章 反ステレオタイプの情報のステレオタイプの連合低減効果に競争マインドセットが及ぼす影響	282

## 概要

本報告書で報告する研究は、平成15年度～平成17年度に科学研究費補助金を受けておこなった研究「潜在的性役割的偏見の発現とジェンダー・ステレオタイプを受容における心理過程の検討（沼崎, 2006）」を発展させたものである。

近年の認知的社会心理学やジェンダー研究は理論的にも方法論的にも大きな進展を見せている (e.g., Dovidio, Hewstone, Glick, & Esses, 2010; Glick & Rudman, 2008; Klauer, Voss, & Stahl, 2011; Gawronski & Payne, 2010; Van Lange, Kruglanski, & Higgins, 2012). 本報告書で報告する研究も、この研究動向を踏まえておこなっている。ここでは、これら動向を踏まえた本研究の研究視点について述べた上で、本報告書で報告する研究の概要を紹介する。

### 本研究の視点1：自動的過程と自動的行動

認知社会心理学の研究動向として、社会行動における無意識性や自動性に対する関心の増大がある (e.g., Bargh, 2007). 偏見やステレオタイプの研究においても、IATやSequential Primingといった主に反応時間を用いた潜在測度の開発により (e.g., Klauer, et al., 2011), 質問紙などの顕在測度で測定される意識的な反応とは異なった、意識に上らない無意識の反応が測定できるようになってきている。さらに、閾下プライミングをはじめとするさまざまなプライミング技法の開発により、意識下で知覚された環境手がかりによって、意識的な意図や動機づけ、また、認知的資源がなくても、高度な心理過程が自動的に作動し、社会的行動が自動的に生じることが示されるようになってきている (e.g., Dijksterhuis, Chartrand, & Aarts, 2007). ステレオタイプと偏見の研究では、統制された過程と自動的過程の区別は比較的早い段階から注目されていたが (Devine, 1989), これらの技法と理論の進展により急速な発展を見せている。ジェンダーに基づいた性役割的偏見や差別を無くしていこうという社会情勢の中で、ジェンダー・ステレオタイプや偏見はあからさまに表出されることは少なくなっている。そのため、ジェンダー・ステレオタイプや性役割の再生産の過程を理解するには、無意識な過程や自動的な過程に注目をする必要がある。

本報告書で報告する研究でも、ジェンダー・ステレオタイプや性役割の再生産の過程を解明するために、顕在的測度ばかりではなく潜在的測度を従属変数に用いて検討をおこなった (9章, 14章, 15章, 16章, 17章, 21章, 22章)。また、ジェンダーに関わる信念も顕在測度と潜在測度の両方を使用して測定し、女性の人生設計や幸福感に及ぼす効果について検討をおこなった (12章)。さらに、ジェンダーに関する行動の自動性を検討するために、閾下プライムによって異性愛概念の活性化を操作して、その後の自動的自己呈示行動について検討をおこなった (10章)。

### 本研究の視点2：ステレオタイプと偏見の機能

認知社会心理学の研究動向の2つめとして、認知と動機の相互規定性に対する関心の増

大がある (e.g., Shah & Gardner, 2008). 意識的なステレオタイプの適用や偏見の表明といった統制された過程が動機によって影響を受けるばかりではなく、ステレオタイプの活性化といった自動的過程も動機によって影響を受けることが広く認識されるようになってきている (e.g., Blair, 2002; Kunda & Spencer, 2003). この研究の流れの中で、ステレオタイプや偏見の機能についても関心が集まり、ステレオタイプの活性化と適用および偏見の状況依存性についても注目されている。ステレオタイプや偏見がある機能を果たすとするならば、その機能が必要な状況においてはステレオタイプの活性化や適用および偏見がより強まることが考えられ、この点を明らかにする実証研究がおこなわれるようになってきている (e.g., Kunda & Spencer, 2003).

ステレオタイプと偏見の機能を整理しておく、偏見およびステレオタイプの研究の古典である「偏見の心理学」の中で Allport (1955) は、ステレオタイプと偏見のカテゴリー機能と正当化機能を指摘している。

既存知識としてあるカテゴリーが表象されていると、それを利用して、外界に関する情報を組織化することができる。人の認知資源の容量には限りがあるため、他の特別な動機づけがない限り、認知的負荷の低い処理が好まれ、そのためカテゴリーが利用される。ステレオタイプは、ある集団や集団成員に関する情報を処理する時に、カテゴリーとしての機能を果たす。

正当化機能に関しては、何を正当化するのかを基準として、自我正当化と集団正当化とシステム正当化の3つのレベルの機能が指摘されている (Jost & Banaji, 1994)。

他者に望ましくないステレオタイプを適用したり、望ましいステレオタイプを適用したりすることにより、自己価値を高めることができる。これがステレオタイプの自我正当化機能と呼ばれるものである。ステレオタイプがこの機能を果たすことは、自己への脅威を回避し賞賛を拡大する方向にステレオタイプの自動的活性化が促進したり抑制したりすることからわかる (e.g., Sinclair & Kunda, 1999; Spencer, Fein, Wolfe, Fong, & Dunn, 1998)。

内集団に望ましいステレオタイプを付与し、外集団に対して望ましくないステレオタイプを付与することにより、外集団と内集団を区別するとともに、内集団の価値を高めることができ、さらに、内集団の外集団に対する差別的な行動を正当化することができる (Tajfel, 1981)。これがステレオタイプの集団正当化機能と呼ばれるものである。ステレオタイプがこの機能を果たすことは、内集団びいき行動を正当化するために内集団に対しては望ましいステレオタイプを外集団に対しては望ましくないステレオタイプを適用しやすくなることからわかる (Rutland & Brown, 2001)。

ステレオタイプの内容により、現状の地位の格差や偏見や差別が妥当化されるのならば、社会システムは公正であると考えられることができる。これがステレオタイプのシステム正当化機能と呼ばれるものである。近年のステレオタイプ研究では、ステレオタイプは相補的



な両面価値的な特徴を持つことが指摘されている (e.g., Cuddy, Fiske, & Glick, 2008; Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002). この両面価値的なステレオタイプは、システムにおいて高地位を占めている人にも望ましくない特性を付与し、一方、低地位を占めている人にも望ましい特性を付与することになる。そのため、世の中はバランスが取れているという認知を生じさせ、システムの正当性の認知を高めることができる。ステレオタイプがシステム正当化機能を果たすことは、システムへの脅威があるときには、社会的地位に基づいた両面価値的で相補的なステレオタイプを適用しやすくなることからわかる (e.g., Jost, Kivetz, Rubini, Guermandi, & Mosso, 2005; Kay & Jost, 2003).

本報告書で報告する研究でも、ジェンダー・ステレオタイプや性役割的偏見の機能を明らかにするために、特定の機能を果たしやすい状況でジェンダー・ステレオタイプの活性化や適用、そして性役割的偏見が強まるかを検討している。本報告書はVI部構成になっているが、それぞれジェンダー・ステレオタイプの機能に対応している。I部では、システム正当化機能のうち、存在脅威管理理論 (e.g., Greenberg, Solomon, & Pyszczynski, 1997; Pyszczynski, Greenberg, & Solomon, 2005) に基づき、ジェンダー・ステレオタイプや性役割的偏見が文化的世界観の防衛に果たす役割について検討した (1-3章)。II部では、システム正当化機能のうち、システム正当化理論 (e.g., Jost, Kay, & Thorisdottir, 2009; Kay, Jost, Mandisodza, Sherman, Petrocelli, & Johnson, 2007) に基づき、ジェンダー・ステレオタイプや性役割的偏見が現状のシステムの防衛に果たす役割について検討した (4-7章)。III部では、システム正当化機能のうち、アンビバレント・セクシズム理論に基づき (e.g., Glick & Fiske, 2001a, 2001b)、ジェンダー・システムの基盤にある異性愛が、ジェンダー・ステレオタイプや性役割的偏見の再生産に果たす役割について検討した (8-12章)。IV部では、男性における、ジェンダー・ステレオタイプや性役割的偏見の自己正当化機能を検討した (13-17章)。V部では、女性サブカテゴリー集団間での集団正当化機能を検討した (20, 21章)。VI部 (22章) ではステレオタイプのカテゴリー化機能について、反ステレオタイプの情報が持つ意味について検討した。

### **本研究の視点3：自己に対するステレオタイプの適用－自己ステレオタイプ化－**

本研究のもう1つの重要な視点は自己に対するステレオタイプの適用－自己ステレオタイプ化－を重視している点である。これまで、ステレオタイプや偏見の研究は他者に対するステレオタイプの適用や偏見を扱ったものが多かった。自己ステレオタイプ化は、自己カテゴリー化理論 (Turner, 1987) の中で提唱された概念であり、これまで主に集団間関係の文脈で検討されてきた。しかし、社会に共有された知識であるステレオタイプは、集団間関係の文脈を超えて自己の表象に取り込まれ、多くの社会的行動に影響を与えることが実証的に検討されるようになってきている (e.g., Mussweiler, Gabriel, & Bodenhausen, 2000; Sinclair, Hardin, & Lowery, 2006.)。ジェンダー・システムの再生産が生じる要因として、ステレオタイプの受容が重要な要因であることは明らかである。どのような状況に

において、自己の表象の生成にジェンダー・ステレオタイプが利用されるのかを明らかにすることは、ジェンダー・ステレオタイプや性役割的偏見の再生産の理解には不可欠であろう。

本報告書では、他者にステレオタイプが適用されやすい状況（死すべき運命の顕現化状況や異性愛が顕現化した状況）での自己ステレオタイプ化を検討した（3章，9章，10章，11章）。また、重要他者からの期待と自己ステレオタイプ化の関係について検討をおこなった（10章，19章）。さらに、ジェンダーに関して自己カテゴリー化が生じたときの他者に対するジェンダー関連のステレオタイプの適用や偏見について検討をおこなった（20章，21章）。

#### **本研究の視点4：サブカテゴリーの存在と偏見とステレオタイプの両面価値性**

ジェンダー・ステレオタイプに関しては、男性ステレオタイプや女性ステレオタイプといった単純なステレオタイプがあるのではなく、ジェンダーに関してはサブカテゴリー・ステレオタイプが広く、女性において特に顕著に、存在していることが示されている（e.g., Deaux, Winton, Crowley, & Lewis, 1985; Six & Eckes, 1991）。サブカテゴリー・ステレオタイプは「作動性」と「共同性」という次元で理解でき、かつ、ポジティブな側面とネガティブな側面の双方を含む両面価値的であることが指摘されている（e.g., Glick & Fiske, 2001）。性役割的偏見に関しても、ステレオタイプばかりではなく、男性が女性を評価する場合でも女性が男性を評価する場合でも、ネガティブな評価ばかりでなくポジティブな評価も存在する両面価値的なものとなっていることが指摘されている。また、これらの評価の理解には、地位の格差・支配と家父長制・親密な関係と敵対的關係、といった社会構造の理解が不可欠であることが指摘されている（e.g., Glick & Fiske, 2001; Jost & Hunyady, 2002）。最近の性役割的偏見の研究においては、社会構造を踏まえた敵意的偏見と好意的偏見の双方を考慮に入れた研究がなされるようになってきている。

本報告書では、V部において女性のサブカテゴリー化の進展に伴う、女性が女性に対して偏見やステレオタイプ化をおこなう現象に注目して検討をおこなった。それ以外の多くの章でも、単純な男性-女性のカテゴリーだけではなくサブカテゴリーを考慮に入れ、また、ステレオタイプと偏見の両面価値性を考慮に入れ、検討をおこなった。

#### **本報告書の概要**

本報告書は本研究の視点3で指摘した機能に主に対応させた6部構成になっている。

I部（1-3章）では、システム正当化機能の中でも、存在脅威管理理論に基づき、文化的世界観防衛にジェンダー・ステレオタイプや性役割的偏見が果たす役割について検討した研究を報告する。

1章では、文化的世界観にジェンダー・ステレオタイプや性役割的偏見が果たす役割に関する先行研究を、前報告書（沼崎, 2006）の成果を含めてレビューした。

2章では、死すべき運命が顕現化したときに、伝統的性役割観を持った男性は反ステレ

オタイプ的女性をサブタイプ化することにより、平等主義的性役割観を持った男性は女性のサブグループ化を低下させることにより、ジェンダーに関わる文化的世界観を防衛していることを検討した研究を報告する。あらかじめ平等主義的性役割を測定していた男子大学生を実験参加者として、死すべき運命の顕現化の有無を操作した上で、伝統的女性（専業主婦志向の女性）と非伝統的女性（キャリア志向の女性）の頻度推定をおこなわせた。結果として、死すべき運命が顕現化すると、伝統的性役割観を持つとする男性は、非伝統的女性の頻度を低く伝統的女性の頻度を高く推定するようになった。一方、平等主義的性役割観を持つとする男性は、非伝統的女性の頻度を高く伝統的女性の頻度を低く推定するようになった。この結果は、死すべき運命が顕現化すると、伝統的性役割観を持った男性は反ステレオタイプ的女性をサブタイプ化することにより、平等主義的性役割観を持った男性は女性のサブグループの違いを小さくすることにより、伝統的な男-女カテゴリーを維持し、ジェンダーに関わる文化的世界観を防衛していることを示すものであった。

3章では、存在脅威管理理論に基づき、死すべき運命を顕現化が日本人男女大学生の将来展望（持ちたい子どもの数と将来の理想収入）にどのように影響を与えるか調べることにより、通常の状態の質問紙調査では捉えづらいジェンダーに関わる文化的世界観について検討をおこなった研究を報告する。平等主義的性役割観をあらかじめ測定していた日本人男女大学生を実験参加者として、死すべき運命の顕現化を操作して、子孫を持つことの志向と経済的成功への志向を測定した。結果として、性別とは無関係に、死すべき運命が顕現化すると、伝統的性役割観を持つとする人では持ちたい子どもの数が増え、平等主義的性役割観を持つとする人では将来の希望収入が上昇した。この結果は、現代日本においては、子どもを持つことと経済的な豊かな生活が両立しないという信念が共有されていること、伝統的性役割観を持つ人は継続する自己の反映物となる子孫を持つことによって自分の人生の意味を見だし象徴的な不死を得ようとしていること、平等主義的性役割観を持つ人は経済的成功で得られる継続する自己の反映物となる金銭や名声によって自分の人生の意味を見だし象徴的な不死を得ようとしていること、を示唆するものである。

II部（4-7章）では、システム正当化機能の中でも、システム正当化理論に基づき、現状のシステムの防衛にジェンダー・ステレオタイプや性役割的偏見が果たす役割について検討した研究を報告する。

4章では、システム正当化理論とステレオタイプの適用と偏見が現状のシステムの維持に寄与していることを示す研究のレビューをおこなった。

5章では、日本においてもシステムに対する脅威がシステムの正当性の表明を高めるかを検討した研究を報告する。男女大学生実験参加者にして、システムに対する脅威として日本の犯罪状況が悪化しているという情報を与え、従属変数として日本の現システムの正当性の表明を測定した。結果として、日本において犯罪が増えているという情報に接した参加者は、その情報の意味することとは逆に、日本の現システムがよいものであると

回答した。この結果は、システムに対する脅威がシステム正当性の表明を高めることを示唆するものである。

6章では、相補的なジェンダー・ステレオタイプの接触と表明が、現状のシステムの正当性認知を高めるかを検討した研究を報告する。男女大学生参加者にして、ステレオタイプの女性ポジティブ5特性か、ステレオタイプの男性ポジティブ5特性か、無関連5特性か、いずれかを呈示して、男性と女性にどの程度当てはまるかを回答させた後で、ジェンダー・システムの正当性認知と一般的な日本システムの正当性認知を測定する尺度に回答させた。結果として、先行研究 (Jost & Kay, 2005) とは異なる、ステレオタイプの女性ポジティブ特性が女性にあてはまると表明すると、男性参加者においては、ジェンダー・システムにとどまらず一般システムに対しても、正当性認知が高まることが示された。この結果は、伝統的な意味で女性的なポジティブな特性を女性が持つという認識が、少なくとも男性においては、ジェンダー・システムばかりではなく、日本のシステム全般を正当化することを示唆するものである。

7章では、日本において女性に関わる相補的ステレオタイプがシステム正当化機能を果たすかどうかを検討した研究を報告する。研究1では男子大学生を実験参加者として、研究2では女子大学生を実験参加者として、日本のシステムに対する脅威となる外集団が顕現化した状況としていない状況で、伝統的性役割に一致した女性と伝統的性役割に一致しない女性のプロフィールを見せ、好意やステレオタイプ化を測定し、ジェンダー・システムの正当性認知として慈愛的偏見尺度に回答させた。規範的女性ステレオタイプのシステム正当化機能を明らかにするため、システム脅威が顕現化したときの規範的ステレオタイプに合致した女性と合致しない女性に対する好意を検討したところ、男性参加者と伝統的性役割観を持つ女性参加者において、システム脅威が顕現化したときには伝統的性役割に合致した女性への好意が上昇した。この結果は、日本においては男性と伝統的性役割観を持つ女性においては規範的な女性ステレオタイプが、システム正当化機能を果たしていることを示唆するものである。また、記述的女性ステレオタイプのシステム正当化機能を明らかにするため、システム脅威が顕現化したときに記述的女性ステレオタイプに一致した女性か一致しない女性に接触したときの慈愛的偏見を測定して検討したところ、男性参加者でも女性参加者でも、脅威がある場合には、記述的女性ステレオタイプに一致した女性に接触したときには一致しない女性に接触したときに比べて慈愛的偏見が高く、ジェンダー・システムを正当と見なすようになっていた。この結果は、男性および女性の双方において、記述的女性ステレオタイプがシステム正当化機能を果たしていることを示唆するものである。さらに、記述的女性サブカテゴリー・ステレオタイプのシステム正当化機能を明らかにするため、システム脅威が顕現化したときに、伝統低女性と非伝統的女性の相補的ステレオタイプが強化するかどうかを検討したところ、男性参加者と女性参加者の双方において、相補的ステレオタイプが強化するという結果は得られず、女性サブカテゴリー・ス

テレオタイプがシステム正当化機能を果たしているという証拠は得られなかった。この結果は、相補的で両面的な男女ステレオタイプとは異なり、相補的で両面的な女性サブカテゴリー・ステレオタイプが地位に基づかないことによるものであろう。

Ⅲ部（8-12章）では、ジェンダー・システムの基盤にあると指摘されている異性愛とジェンダー・ステレオタイプや性役割的偏見との関係について検討した研究を報告する。

8章では、ジェンダー・ステレオタイプや性役割的偏見が異性愛に基づいた相補的な役割を基盤に持つことを示す研究のレビューを、前報告書（沼崎，2006）の成果を含めて、レビューした。

9章では、異性愛という関係性が顕現化した状況での、男性のジェンダー関連自己ステレオタイプ化による、自動的な自己の変容について検討した研究を報告する。あらかじめ性役割観を測定しておいた男子大学生を参加者にして、異性愛が顕現化した状況としない状況で、自己と作動性-共同性との連合を、IATを用いて測定した。結果として、平等主義的性役割観の高い男性においてのみ、異性愛プライムを受けたときには統制条件に比べて、自己と作動性との潜在的な連合を強めた。この結果は、女性サブカテゴリーへのステレオタイプの適用と対応する結果であり、通常ではジェンダー・ステレオタイプを利用することの少ない平等主義的性役割観が高い男性においてのみ、異性愛が顕現化するとジェンダー・ステレオタイプを利用して自己や他者をカテゴリー化することを示唆するものである。

10章では、異性愛関係の閾下プライムによって、ジェンダーに関連する自己呈示目標が自動的に活性化し、伝統的性役割に沿った目標志向的自己呈示行動が自動的に生じるか、また、これらの効果を個人差（特性自尊心）が調整するかを検討した研究を報告する。研究1では、相手にあわせた自己呈示が自尊心の低い人で顕著に見られるという指摘が、女性における重要他者からのジェンダーに関する期待でも当てはまることを確認した。この結果を受けて、研究2と研究3では、恋人概念をプライムしたときに女らしさ概念が活性化するかどうかを明らかにする実験研究をおこない、自尊心の低い参加者においてのみ「女らしさ」呈示目標が強まることが見いだされた。さらに、研究3では、恋人概念を閾下プライムしたときには、女性が摂食量を低下させるかどうかを明らかにする実験研究をおこない、自尊心の低い女性においてのみ摂食量が低下することが見いだされた。これらの結果は、女性において、異性愛関係の手がかりは「女らしさ」呈示目標を自動的に活性化させ、「女らしさ」を自己呈示する行動が自動的に生じること、このような自己呈示は、相手にあわせて自己呈示をしやすい自尊心の低い女性において顕著であること、を示唆するものである。

11章では、異性愛プライムまたは仕事プライムを受けたときの自己概念の変化と伝統的女性・非伝統的女性に対する印象評定を測定することにより、男女の関係性の異なる側面が活性化されることで作動性と共同性における自己と女性の相補性がどのように変化するのかを検討した研究を報告する。男子大学生を実験参加者にし、異性愛の顕現化している

状況としていない状況で、自己概念と家庭志向女性かキャリア志向女性に対する印象を測定した。結果として、異性愛プライム条件では、性格特性の自己評価は影響されていなかったが、家庭志向の女性に対しては自分よりも男性的でないと評価し、キャリア志向の女性に対しては自分よりも男性的であると評価していた。好意と魅力については、家庭志向の女性のほうがキャリア志向の女性にくらべて恋人としての魅力を高く評価されていたが、一般的な好意や友人としての魅力の評価では差が見られず、一夜限りの相手としての魅力ではキャリア女性の方が高く評価されていた。これらの結果は、異性愛概念が活性化した状況での女性に対する偏見とステレオタイプを扱った先行研究（沼崎・高林・天野, 2006）で、伝統的性役割観の強い男性でみられた結果と一致するものであった。

12章では、潜在測度と顕在測度で女性のロマンティック幻想—王子様などファンタジー物語の登場人物と現実のパートナーとを重ね合わせる傾向—を測定し、女性の態度・信念や世界観にいかなる影響を及ぼすかを検討した研究を報告する。研究1で青年期の女性を対象とし、ロマンティック幻想と間接的達成動機—自分自身の力ではなく結婚相手の社会的地位や収入を通じて達成動機を満足させたいと考える傾向—との関連を検討した。結果として、潜在的ロマンティック幻想が高いほど結婚相手に対する依存志向が強い、すなわち結婚相手には高地位・高収入を望み、結婚相手の仕事の成功が自分の価値を高め、女性の評価は結婚相手によって決まると考える傾向にあることが示された。研究2では成人期の既婚女性を対象とし、ロマンティック幻想と現実生活への不満との関係を検討した。結果として、潜在的ロマンティック幻想が高いほど、結婚生活満足感が低くなることが示された。これらの結果は、潜在的ロマンティック幻想は女性の心理的依存状態を予測し、心理的依存状態は女性の長いライフスパンの中で、パートナーとの関係満足感を低下させる可能性があることを示唆するものである。

IV部（13-17章）では、ジェンダー・ステレオタイプと性役割的偏見の、男性における自我正当化機能を検討した研究を報告する。

13章では、ステレオタイプと偏見の自我正当化機能を検討した先行研究のレビューをおこなった。

14章では、ジェンダーに関わる態度を測定するための複数のIATを開発し、潜在的内集団バイアスに性差が見られるか、ジェンダー態度IATにおいてステレオタイプ的な刺激項目が影響を与えるか、を検討した研究を報告する。研究1では、主に男女高校生を参加者にして、ステレオタイプ的な刺激を含まないIATを実施したところ、潜在的内集団バイアスは男性に比べ女性に強く見られることが示された。この結果は、潜在的態度の内集団バイアス傾向の性差に関する欧米の先行研究の知見を再現するものであった。研究2では、主に男女高校生を参加者にして、好ましき判断に用いる刺激項目にステレオタイプ的な刺激項目を用いた向男性的IAT（ポジティブ語として作動性ポジティブ語を、ネガティブ語として共同性ネガティブ語を用いたIAT）と向女性的IAT（ポジティブ語として共同性ポジ

ティブ語を、ネガティブ語として作動性ネガティブ語を用いた IAT) を実施した。女性参加者では、向男性的 IAT では内集団バイアスを示す結果が得られないのに対して、向女性的 IAT では内集団バイアスが見られた。男性参加者では、向男性的 IAT では男性概念をポジティブ属性と結びつける内集団バイアスが見られたのに対し、向女性的 IAT では内集団とネガティブ属性を結びつけるような傾向が見られた。この結果は、IAT 効果には判断に用いるカテゴリ・ラベルによる効果のみではなく、刺激項目のステレオタイプ性によって影響を受けることを示唆するものである。

15 章では、自己価値が脅威にさらされた男性のジェンダーに関する潜在的態度において、内集団バイアスが強まるかを検討した研究を報告する。男子大学生を実験参加者にして、ネガティブ・フィードバックを受ける条件（脅威あり条件）と受けない条件（脅威なし条件）とで、ジェンダーに関するステレオタイプの刺激を用いない一般的態度 IAT と、ステレオタイプの刺激を用いたステレオタイプの態度 IAT を実施した。結果として、脅威なし条件においてすでに内集団バイアスが見られていたステレオタイプの態度 IAT のみでなく、脅威なし条件では内集団バイアスが見られなかった一般的態度 IAT においても、脅威あり条件では統制条件に比べて、内集団バイアスが強まった。この結果は、ジェンダーに関する潜在的な内集団バイアスによって、男性が自己価値への脅威を対処することを示唆するものである。

16 章では、自己価値が脅威にさらされた男性において、女性に対する潜在的偏見が強まるかを検討した研究を報告する。15 章で報告した研究では男性に対する態度と女性に対する態度を分離して測定していなかったため、この 2 つの態度を分離して測定できるシングル・カテゴリー (SC-) IAT を用いて検討した。あらかじめ顕在的自尊心を測定してあった男子大学生を実験参加者にして、ネガティブ・フィードバックを受ける条件（脅威あり条件）と受けない条件（脅威なし条件）とで、女性に対する潜在的態度を測定する SC-IAT（実験 1）と男性に対する潜在的態度を測定する SC-IAT を実施した（実験 2）。結果として、顕在的自尊心の高い男性において、ネガティブ・フィードバックを受けた場合に、女性とネガティブ評価概念を結びつける潜在的偏見が生じるが、顕在的自尊心の低い男性においてはそうした影響が生じないことが示された。また、ネガティブ・フィードバックを受けても、自尊心の高低とは無関係に、内集団である男性に対する潜在的態度に変化はなかった。この結果は、少なくとも自己価値の脅威に敏感な顕在的自尊心の高い男性は、女性への潜在的偏見を示すことによって、自己価値への脅威を対処することを示唆するものである。

17 章では、男女カテゴリーの顕現性を低めると、16 章で明らかとなった自己価値への脅威による男性が示す女性に対する自動的偏見の増強効果が、弱くなるかを検討した研究を報告する。男女カテゴリーの顕現性を低減するために年齢カテゴリー（若者－高齢者）の顕現性を高める条件（顕現性低条件）と、男女カテゴリーの顕現性のみを高める条件（顕

現性高条件)で、関下評価プライミング課題を実施して、男性に対する潜在的評価と女性に対する潜在的評価を測定した。結果として、顕現性高条件では、脅威あり条件の男性は脅威なし条件よりも、女性に対する潜在的評価がより否定的となった。その一方、顕現性低条件では、脅威によって女性に対する潜在的偏見が強まる傾向は見られなかった。また、男性に対する潜在的評価には顕現性も脅威も影響を与えなかった。この結果は、男女に関わるカテゴリーの顕現性を低めた場合には、男性は女性への潜在的偏見を、自己価値への脅威の対処手段として用いなくなることを示唆するものである。

V部(18-21章)では、女性が女性に対して示す偏見とステレオタイプの適用について、潜在測度と顕在測度の双方を用いて、女性の「伝統的女性」と「非伝統的女性」という2つのサブカテゴリー自己表象の機能から検討をおこない、2つのサブカテゴリー集団の集団正当化の過程についても検討をおこなった研究を報告する。

18章では、女性が女性に対して示す偏見とステレオタイプの適用について、V部で実証的に扱う問題を整理した。

19章では、重要他者からのジェンダー・ステレオタイプの期待が女性の自己ステレオタイプ化に及ぼす効果を検討し、その効果を調整する要因として平等主義的性役割観に注目した研究を報告する。研究1では、重要他者からのジェンダー・ステレオタイプの期待の知覚/ジェンダー・ステレオタイプに関する自己評価/性役割観を測定し、重要他者のもつジェンダー・ステレオタイプの期待が、その重要他者といるときの女性のジェンダーに関連した自己ステレオタイプ化に及ぼす効果を検討し、実験参加者本人の性役割観がその効果を調整するかについて検討した。結果として、男性ポジティブ特性と男性ネガティブ特性、女性ネガティブ特性において重要他者の期待に一致する方向で、自己にステレオタイプを適用する傾向が認められた。さらにこの傾向は、伝統的性役割観をもつ女性ほど顕著に現れた。研究2では、研究1で見られた相関関係について、プライミング手法を用いて重要他者(母親)の活性化を操作し、重要他者(母親)のジェンダー・ステレオタイプの期待と女性の自己ステレオタイプ化の因果関係について検討をおこなった。結果として、伝統的性役割観を持つ女性において、男性ポジティブ特性においてのみ重要他者の期待に応じた自己ステレオタイプ化がみられた。一方、平等主義的性役割観をもつ女性においてはむしろ逆のパターンがみられた。この結果は、伝統的性役割観をもつ女性は、「女性は従順であるべき」という規範を内在化しているため、重要他者の期待に応じた自己ステレオタイプ化がみられることを示唆するものである。

20章では、現代の女性が伝統的な女性としての自己と非伝統的な女性としての自己の両方を内在化させており、一方の自己表象が活性化すると他方の女性に対して偏見を示したり、ステレオタイプを適用したりするかについて検討した研究を報告する。女子大学生を実験参加者にして、将来家庭にいる自分あるいは働いている自分を想像させ、活性化する自己表象を操作し、家庭女性あるいはキャリア女性のプロフィールを提示して印象を評定



させた。結果として、想像がうまくできた実験参加者においてのみ、伝統的な女性としての自己表象が活性化した場合には、非伝統的な女性が活性化した場合に比べて、伝統的な女性を非伝統的な女性よりも好意的に評価し、非伝統的な女性に女性ステレオタイプをキャリア女性に男性的ステレオタイプを適用しやすくなった。この結果は、活性化する自己表象によって、その自己表象に沿った偏見やステレオタイプを、女性が女性に対して向けることを示唆するものである。

21章では、女性が女性のサブカテゴリーに対してどのように偏見とステレオタイプを示すのかについて、一時的にプライムされた自己表象と慢性的な自己表象が潜在的偏見とステレオタイプの適用に及ぼす効果を調べることにより検討した研究を報告する。あらかじめ平等主義的性役割観尺度に回答していた女子大学生を実験参加者として、将来家庭にいる自分もしくは働いている自分を想像させ、偏見の反応とステレオタイプの反応を測定するため2種類のIATを実施した。その結果、伝統的な自己表象がプライムされた女性参加者は非伝統的な自己表象がプライムされた女性参加者に比べて、女性サブカテゴリーへの潜在的なステレオタイプ一致反応を強めた。また、伝統的性役割観を持つ女性は平等主義的性役割観を持つ女性に比べて、キャリア女性より家庭女性を潜在的に好意的に評価した。この結果は、女性サブカテゴリー間に集団葛藤が生じる可能性を示唆するとともに、偏見の反応とステレオタイプの反応が独立であることを示唆するものである。

VI部の22章では、ステレオタイプのカテゴリー機能を明らかにするため、反ステレオタイプの情報が、顕在/潜在測度で測定されるジェンダーに関わるステレオタイプの連合を低下させるかを検討した研究を報告する。あらかじめ自尊心を測定してあった女子大学生を実験参加者にして、競争マインドセットをプライムするか否かを操作したうえで、反ステレオタイプ事例か無関連な事例を呈示し、その後、男女のジェンダー・ステレオタイプの連合を測定するIAT（潜在測度）と質問紙（顕在測度）を実施した。結果として、潜在測度と潜在測度の双方において、自尊心の低い参加者においてのみ、反ステレオタイプ的事例がジェンダー・ステレオタイプの活性化や適用を低下させることが見いだされた。この結果は、反ステレオタイプ事例を接することによりカテゴリー機能を果たさない可能性を示唆されると、少なくとも自尊心の低い人においては、潜在的/顕在的の双方でステレオタイプの連合を低下させる可能性を示唆するものである。

一連の研究によって、ジェンダー・ステレオタイプや性役割的偏見がカテゴリー化機能と複数の正当化機能を持っていること、そして、その機能を使う必要のある状況においては、顕在尺度で測定しても潜在尺度で測定しても、ステレオタイプの適用や性役割的偏見が強まることが示された。また、他者に対するステレオタイプの適用と自己に対するステレオタイプの適用が密接に関連しており、ジェンダー・システムの再生産を理解するためには、自己ステレオタイプ化についてより詳しく検討していく必要があることが示唆された。このような心理メカニズムが現代日本の社会におけるジェンダー・ステレオタイプや

ジェンダー秩序の再生産にどのように寄与しているのかについては、各章ごとに考察を加えているので、そちらを参照していただきたい。

(文責 研究代表者：沼崎 誠)

#### 引用文献

- Allport, G. W. (1954). *The nature of prejudice*. Boston, MA: Addison-Wesley. 原谷達夫・野村昭(訳) (1961). 偏見の心理学(上・下) 培風館
- Bargh, J. A. (Ed.) (2007). *Social psychology and the unconscious: The automaticity of higher mental processes*. New York, NY: Psychology Press.
- Cuddy, A. J., Fiske, S. T., & Glick, P. (2008). Warmth and competence as universal dimensions of social perception: The stereotype content model and the BIAS Map. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 40, pp. 61-149.). San Diego, CA: Academic Press.
- Deaux, K., Winton, W., Crowley, M., & Lewis, L. L. (1985). Level of categorization and content of gender stereotypes. *Social Cognition*, 3, 145-167.
- Devine, P. G. (1989). Stereotypes and prejudice: Their automatic and controlled components. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 5-18.
- Dijksterhuis, A., Chartrand, T. L., & Aarts, H. (2007). Effects of priming and perception on social behavior and goal pursuit. In J. A. Bargh (Ed), *Social psychology and the unconscious: The automaticity of higher mental processes* (pp. 51-131). New York, NY: Psychology Press.
- Dovidio, J. F., Hewstone, M., Glick, P., & Esses, V. M. (2010). *The Sage handbook of prejudice, stereotyping and discrimination*. Los Angeles, CA: Sage.
- Dovidio, J. F., Glick, P. & Rudman, L. A. (Eds.) (2005). *On the nature of prejudice: Fifty years after Allport*. Malden, MA: Blackwell.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content: Competent and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 878-902.
- Gawronski, B., & Payne, B. K. (Eds.) (2010). *Handbook of implicit social cognition: Measurement, theory, and applications*. New York, NY: Guilford Press.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (2001a). An ambivalent alliance: Hostile and benevolent sexism as complementary justifications for gender equality. *American Psychologist*, 56, 109-118.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (2001b). Ambivalent sexism. In M. P. Zanna (Ed.),

- Advances in experimental social psychology* (Vol. 33, pp. 1150-188). San Diego, CA: Academic Press.
- Glick, P., & Rudman, (2008). *The social psychology of gender: How power and intimacy shape gender relations*. New York, NY: The Guilford Press.
- Greenberg, J., Solomon, S., & Pyszczynski, T. (1997). Terror management theory of self-esteem and cultural worldviews: Empirical assessments and conceptual refinements. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol. 29. San Diego, CA: Academic Press. Pp. 61-139.
- Jost, J. T., & Banaji, M. (1994). The role of stereotyping in system-justification and the production of false consciousness. *British Journal of Social Psychology*, 33, 1-27.
- Jost, J. T., & Kay, A. C. (2005). Exposure to benevolent sexism and complementary gender stereotypes: Consequences for specific and diffuse forms of system justification. *Journal of Personality and Social Psychology*, 88, 498-509.
- Jost, J. T., Kay, A. C., & Thorisdottir, H. (Eds.) (2009). *Social and psychological bases of ideology and system justification*. New York: Oxford.
- Jost, J. T., Kivetz, Y., Rubini, M., Guermanni, G. & Mosso, C. (2005). System-justification functions of complementary regional and ethnic stereotypes: Cross-national evidence. *Social Justice Research*, 18, 305-333.
- Kay, A. C., & Jost, J. T. (2003). Complementary justice: Effects of "poor but happy" and "poor but honest" stereotype exemplars on system justification and implicit activation of the justice motive. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 823-837.
- Kay, A. C., Jost, J. T., Mandisodza, A. N., Sherman, S. J., Petrocelli, J. V., & Johnson, A. L. (2007). Panglossian ideology in the service of system justification: How complementary stereotypes help us to rationalize inequality. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 39, pp. 305-358). San Diego, CA: Academic Press.
- 沼崎誠 (2006). 潜在的性役割的偏見の発現とジェンダー・ステレオタイプの受容における心理過程の検討 平成15年度～平成17年度 科学研究費補助金(基盤研究(C)) 研究成果報告書(研究課題番号 15530402)  
<http://www.repository.lib.tmu.ac.jp/dspace/bitstream/10748/2164/1/10040-001.pdf>
- 沼崎誠・高林久美子・天野陽一 (2006). 恋愛は女性に対するステレオタイプ化や偏見を強めるか?—異性愛プライムと平等主義的性役割観がキャリア女性と家庭女性に対する印

象や評価に及ぼす効果— 平成 15-17 年度科学研究費補助金研究成果報告書「潜在的性役割的偏見の発現とジェンダー・ステレオタイプの受容における心理過程の検討（研究代表者：沼崎誠，研究課題番号：15530402）」, pp.125-146.

- Mussweiler, T., Gabriel, S., & Bodenhausen, G. V. (2000). Shifting social identities as a strategy for deflecting threatening social comparisons *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 398-409.
- Pyszczynski, T., Greenberg, J. & Solomon, S. (2005). The machine in the ghost: A dual process model of defense against conscious and unconscious death-related thought. In J. P. Forgas, K. D. Williams, & S. M. Laham (Eds.), *Social motivation: Conscious and unconscious processes* (pp. 40-54). New York: Cambridge University Press.
- Rutland, A., & Brown, R. (2001). Stereotypes as justification for prior intergroup discrimination: Studies of Scottish national stereotyping. *European Journal of Social Psychology*, 31, 127-141.
- Shah, J. Y., & Gardner, W. L. (2008). *Handbook of motivation science*. New York, NY: The Guilford Press.
- Sinclair, S., Hardin, C. D., & Lowery, B. S. (2006). Self-stereotyping in the context of multiple social identities. *Journal of Personality and Social Psychology*, 90, 529-542.
- Sinclair, L., & Kunda, Z. (1999). Reactions to a black professional: Motivated inhibition and activation of conflicting stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 885-904.
- Six, B., & Eckes, T. (1991). A closer look at the complex structure of gender stereotypes. *Sex Roles*, 24, 57-71.
- Spencer, S., Fein, S., Wolfe, C. T., Fong, C., & Dunn, M. A. (1998). Automatic activation of stereotypes: The role of self-image threat. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 24, 1139-1152.
- Tajfel, H. (1981). *Human groups and social cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Turner, J. C. (1987). *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Cowley Road, Oxford, UK: Basil Blackwell
- Van Lange, P. A. M., Kruglanski, A., & Higgins, E. T, (Eds.) (2012) *Handbook of theories of social psychology* (Vol 1 & 2). Thousand Oaks, CA: Sage.

## I 部

### 死すべき運命の顕現化と ジェンダー・ステレオタイプの適用と性役割偏見 －文化的世界観の正当化－

# 1章 死すべき運命の顕現化とステレオタイプの適用と偏見

沼崎 誠

(首都大学東京大学院人文科学研究科)

I部では、ステレオタイプや偏見が心理的・経済的に依存しているシステムの正当化機能、その中でも特に心理的に依存している文化的世界観の防衛機能について検討をおこなう。本章では、最初に文化的世界観防衛動機を提唱している存在脅威管理理論 (Terror Management Theory : 以下 TMT と略記) について概観し、次にステレオタイプや偏見がこの動機を満たす機能を果たすことを示した実証研究を、ジェンダー・ステレオタイプと性役割的偏見を扱った研究を中心にレビューし、最後に前報告書 (沼崎, 2006b) で報告した女性サブカテゴリーへの偏見を扱った実証研究の結果と理論的考察をまとめ、次章以降で実証的に扱う問題を整理する。

## 存在脅威管理理論 (TMT)

TMT とは、Greenberg, Pyszczynski, Solomon とその共同研究者が唱えている、非常に多くの社会的行動を説明するグランド・セオリーである (e.g., Greenberg, Solomon, & Pyszczynski, 1997; Pyszczynski, Greenberg, & Solomon, 2005; Solomon, Greenberg, & Pyszczynski, 1991)。彼らは他の動物と共通して人が持つ特性として、「自己保存への本能的傾向」をあげる。そして、他の動物と相違して人が持つ特性として、「高度な知的能力を備え、自己意識が生じ、かつ、自分の傷つけられやすさや不可避である死を認識できる」ことをあげる。彼らによれば、この2つの特性から、人は根元的に自己の存在に脅威を感じるので、この脅威を無力化する、生き続けるために必要な潜在的な力を必要とする。そして、これが文化であるとする。彼らによれば、文化とは自然世界を意味の世界 (文化的世界観) へと変換するシステムであり、死の気づきによって生じる存在論的不安の緩和という重要な機能を果たす。なぜなら、文化的世界観は、世界は安定的で秩序があり有意味だと示唆するよう人の知覚を組織化する概念や構造を提供し、文化価値基準に適合することは、文字どおりの不死 (不死の魂や死後の世界といった精神的概念) や象徴的不死 (①自己よりも永続するもの (例えば国家) への同一化, ②身体的な死後にも引き続き残る自己の反映物 (例えば子孫や金銭)) を提供するからである。そして、有意味な世界の価値ある成員であるという知覚から成立するのが自尊心であるとし、自尊心が高いということは文化的世界観に適合していることを意味するという。

TMT は、このように検証困難な進化論的前提をおくが、この前提から実証可能な仮説を導き出すことができる。2つの主要な仮説は、不安緩衝仮説 - 自尊心及び文化的世界観に

対する信頼を強化すれば、不安や脅威に対する不安関連行動を低下させるであろうと、死すべき運命の顕現化（mortality salience：以下 MS と略記）仮説—人々に死すべき運命を思い出させれば、自己価値や文化的世界観への信頼の感覚を妥当化しようとする欲求が生じるであろう—である。一神教的世界観を持つ西欧文化圏においては、多くの実証研究が行われ、2つの仮説は支持されている（Greenberg et al., 1997; Pyszczynski, et al., 2005）。MS 仮説に関して言えば、MS 時には文化的世界観に沿った価値基準に適合しようとする行動が増大すること（e.g., Greenberg, Simon, Porteus, Pyszczynski, & Solomon, 1995; Paulhus & Levitt, 1987; Simon, Greenberg, Harmon-Jones, Pyszczynski, Solomon, Arndt, & Abend, 1997）、MS 時には文化的世界観を支持する人や思想への魅力が増大し文化的世界観を侵害する人や思想への反発が増大すること（e.g., Greenberg, Pyszczynski, & Solomon, 1990; Harmon-Jones, Greenberg, Solomon, & Simon, 1996; McGregor, Lieberman, Greenberg, Solomon, Arndt, Simon, & Pyszczynski, 1998）、が特に多くの実証研究によって示されている。また、死生観が異なると考えられる仏教・儒教文化圏でも MS 仮説を支持する結果が得られている。例えば、Heine, Harihara, & Niiya (2002) は、日本人大学生を実験参加者にして、死に関する自由記述を行うという最も典型的な操作をした MS 条件では、統制条件に比べ、日本文化を非難する外国人を低く評価するという MS 仮説を支持する結果を報告している。

### 存在脅威管理理論と規範的ステレオタイプに伴う偏見

近年のステレオタイプの研究では、社会的認知研究で注目されていた「〇〇はこうである」という記述的ステレオタイプばかりでなく、「〇〇はこうあるべきだ」という規範的ステレオタイプにも関心が向けられるようになってきている（e.g., Burgess & Borgida, 1999; Glick & Fiske, 2001）。ジェンダー・ステレオタイプに当てはめると、記述的ステレオタイプが男性や女性を特徴づける属性や役割や行動に関する信念であるのに対して、規範的ステレオタイプは男性や女性が従うように期待される属性や役割や行動に関する信念である。そして、記述的ステレオタイプの機能が日常生活における情報の構造化であるのに対して、規範的ステレオタイプの機能は社会における勢力の不平等の正当化にあることが指摘されている（Burgess & Borgida, 1999）。

TMT の MS 仮説によれば、死すべき運命を顕現化させると、文化的世界観への信頼の感覚を妥当化しようとする欲求が生じる。この欲求により、世界はこうあるべきであるという信念が強まる、つまり、規範的ステレオタイプに対する信頼が強まり、活性化され適用しやすくなることが予測される。この予測を支持する研究として、Schimel, Simon, Greenberg, Pyszczynski, Solomon, Waxmonsky, & Arndt (1999, study 3) は、白人を実験参加者にして、MS の操作を行った条件では統制条件に比べ、規範的黒人ステレオタイプに不一致な有能できちんとした黒人に対して敵意を、規範的黒人ステレオタイプに一致し

た勤勉でなく怠惰な黒人に対して好意を向けることを見いだしている。

ジェンダー・ステレオタイプと偏見を扱った研究として、Hoyt, Simon, & Reid (2009) は、死すべき運命が顕現化した時に、男女リーダーの評価が、参加者の性とリーダーが持つステレオタイプの属性（男性的-作動的属性 vs. 女性的-共同的特性）によって異なってくるかを検討している。結果として、統制条件に比べ MS 条件では、男女参加者は同性の評価を高めることを見いだしている。さらに、女性参加者では、統制条件に比べ MS 条件では、リーダーの性にかかわらず、共同的属性を持つリーダーに比べて作動的属性を持つリーダーを高く評価するようになることを見いだしている。さらに、Schimel et al. (1999, Study 4) は、女性を実験参加者にして、ジェンダー・ステレオタイプと一致したまたは不一致な男性または女性の就職志願者のいずれかの印象を評定させた。その結果、ステレオタイプに一致した志願者では、統制条件に比べ MS 条件では印象がよく、ステレオタイプに不一致な志願者では有意ではないものの、統制群の方で印象がよいことを見いだしている。これらの研究は、死すべき運命を顕現化させると、規範的ステレオタイプに対する信頼が強まり、活性化され適用しやすくなることを示すものである。

#### 女性サブカテゴリーと死すべき運命の顕現化（前報告書での成果）

ジェンダー・ステレオタイプ、特に女性のステレオタイプの大きな1つの特徴として、男性ステレオタイプや女性ステレオタイプといった単純なステレオタイプがあるのではなく、ジェンダーに関してはサブカテゴリー・ステレオタイプが広く、女性において特に顕著に、存在していることが示されてきている (e.g., Glick, Zion, & Nelson, 1988; Eagly, Mladinic, & Otto, 1994)。一般に人は女性を、主婦のような伝統的な女性、キャリア女性のような非伝統的な女性、性的対象としての女性の3つのサブカテゴリーから捉えやすいことが指摘されている (e.g., Six & Eckes, 1991)。これらの中でも、主婦のような規範的性役割に一致した伝統的な女性のステレオタイプと、キャリア女性のような規範的性役割に不一致な非伝統的な女性のステレオタイプは、近年のステレオタイプの両面価値性を巡って多くの研究が行われている。ステレオタイプの両面価値性とは、「温かさ」と「有能さ」の次元で、一方がポジティブであれば、他方がネガティブな両面価値的なものとなることを指す (e.g., Cuddy, Fiske, & Glick, 2008; Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002; Glick & Fiske, 2001)。両面価値的ステレオタイプとして、「温かいが無能である」という家父長的ステレオタイプのクラスターと「有能であるが冷たい」という嫉妬的ステレオタイプというクラスターの2つがあるが、どちらのクラスターになるのかは社会的地位と競争関係という社会的な構造要因によって決定されることが実証的に示されている (Fiske, et al., 2002)。そして、伝統的な女性は「温かいが無能である」という家父長的ステレオタイプに含まれ、非伝統的な女性は「有能であるが冷たい」という嫉妬的ステレオタイプに含まれる。このような両面価値的なステレオタイプという観点を導入することにより、ネガティブな評価を



するばかりではなくポジティブな評価をすることも、ステレオタイプの適用や偏見の現れと見る必要性が生じる。女性に対する性役割的偏見に適用した場合、規範的女性ステレオタイプに一致した女性（i.e. 主婦）に向けられる好意的偏見と、規範的女性ステレオタイプに不一致な女性（i.e. キャリア女性、フェミニスト）に向けられる敵意的偏見の双方に研究関心が向けられている（e.g., Glick, Diebold, Bailey-Werner, & Zhu, 1997; Glick & Fiske, 2001）。

存在脅威管理理論と女性サブカテゴリーの議論からは、死すべき運命の顕現性が高まった場合には、規範的ジェンダー・ステレオタイプに一致した家庭志向女性に対してポジティブな評価（好意的偏見）を、ステレオタイプに一致しないキャリア志向女性に対してネガティブな評価（敵意的偏見）をしやすくなると予測される。沼崎（2006b, 前報告書）では、男性参加者の性役割観（伝統的性役割観 vs. 平等主義的性役割観）を測定しておいた上で、両面価値的なステレオタイプで問題になる「温かさ」と「有能さ」の両方の次元を捉える従属変数を用いて、この予測を検証する実証研究を行った。その結果、平等主義的性役割観を持つとする男性では、統制条件に比べ死すべき運命が顕現化すると、家庭志向女性に対する個人的好意と仕事仲間としての好意が高まり、キャリア志向女性に対する好意に違いは見られなかった。この結果は、平等主義的性役割観を持つとする男性では、死すべき運命が顕現化すると、「温かさ」と「有能さ」の双方の次元で、伝統的性役割観に一致した女性に対して望ましい評価を向けることを示している。一方、伝統的性役割観を持つとする男性では、統制条件に比べ死すべき運命が顕現化すると、家庭志向の女性の個人的親しみやすさを高く評価し個人的に好意を持つようになり、キャリア志向の女性の個人的親しみやすさを低く評価し個人的な好意を低下させていた。この結果は、伝統的性役割観を持つとする男性では、死すべき運命が顕現化すると、「温かさ」の次元ではポジティブな評価を向けるようになることを示している。これらの結果は予測を支持するものであったが、伝統的性役割観を持つとする男性では、予測と異なった興味深い結果が得られた。伝統的性役割観を持つ男性では、統制条件に比べて死すべき運命が顕現化すると、仕事仲間としての好意においては、家庭志向女性への好意を低下させ、キャリア志向女性への好意を高めていた。

この興味深い結果と類似した結果が、異性愛の顕現化を操作した研究でも見られている（沼崎・高林・天野, 2006：前報告書）。異性愛は伝統的ジェンダー・システムの基盤にあるものであり、両面価値的な性役割的偏見を生じさせると考えられている（e.g., Glick & Fiske, 1996; 2001）。沼崎他（2006）は、性役割観を測定しておいた参加者に対して、異性愛に関わる対連語を学習させ異性愛を顕現化させる条件と無関連な対連語を学習させた統制条件を設け、伝統的性役割観に一致した家庭女性か伝統的性役割観に一致しないキャリア女性を、「温かさ」と「有能さ」の双方の次元で評価させた。結果として、平等主義的性役割観を持つとする男性では、統制条件では好意に差がなかった伝統的女性と非伝統的女

性に対して、異性愛が顕現化すると、伝統的女性に対しては個人的好意や上司としての望ましさを高め、非伝統的女性に対しては個人的好意や上司としての望ましさを低下させ、家庭女性とキャリア女性のステレオタイプの評価（家庭女性を女性的に、キャリア女性を男性的とする評価）を弱めていた。一方、伝統的性役割観を持つとする男性では、統制条件では伝統的女性に対して好意的であったものが、異性愛が顕現化すると、非伝統的女性に対する個人的好意や上司としての望ましさを高め、伝統的女性をより女性的に非伝統的女性をより男性的に評価するという、サブカテゴリー・ステレオタイプの評価を強めた。

異性愛の顕現化状況と死すべき運命の顕現化状況で共通して見られたこれらの現象を、沼崎（2006b：前報告書）は次のように解釈している。平等主義的性役割観を持つ男性では、通常時では、女性カテゴリーの中に伝統的女性カテゴリーと非伝統的女性カテゴリーというサブカテゴリー表象が形成されているため、単純な女性カテゴリーが活性化されず、それぞれのカテゴリーに含まれる女性を異なった基準で評価している。しかし、死すべき運命や異性愛が顕現化すると、このようなサブカテゴリー表象の活性化が低下し、単純な女性カテゴリーが活性化し、伝統的女性も非伝統的女性も女性カテゴリーに含め、同じ基準—伝統的女性を評価する次元—で双方の女性を評価するようになる。一方、伝統的性役割観を持つ男性は、通常時でも伝統的女性カテゴリーや非伝統的女性カテゴリーといったサブカテゴリーの表象の形成が弱く、単純な女性カテゴリーが活性化しているため、伝統的女性も非伝統的女性も同じ基準で評価している。しかし、死すべき運命や異性愛が顕現化すると、非伝統的女性を女性カテゴリー表象から除外し、異なった基準で評価するようになる。このことにより、単純な女性カテゴリー表象を強化することにもなり、伝統的女性や非伝統的女性に対してサブカテゴリー・ステレオタイプをより強め適用することとなる。

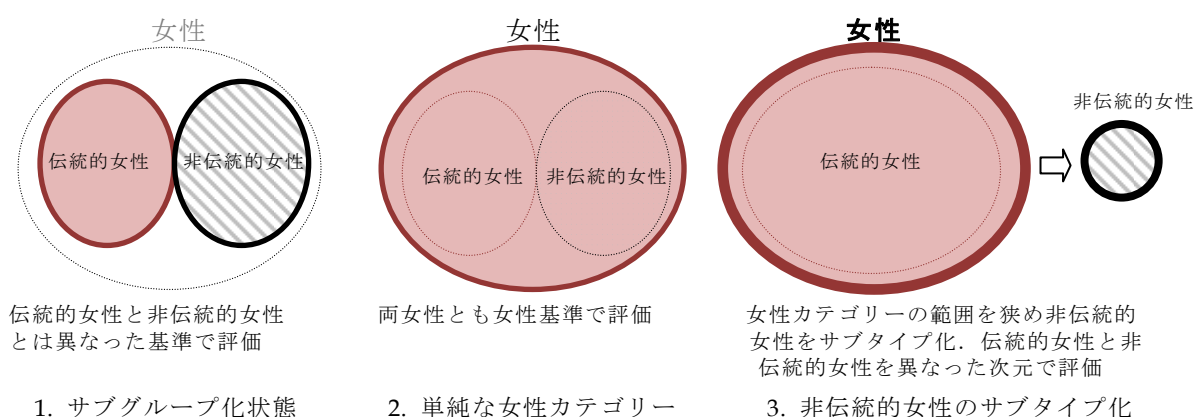


Figure 1 女性カテゴリーとサブカテゴリーのサブグループ化とサブタイプ化

伝統的性役割観を持つ男性の方略は非伝統的女性のサブタイプ化と、平等主義的性役割観を持った男性の方略はサブグループ化の低下と見なすことができるであろう。サブグル

ープ化とサブタイプ化とは、反ステレオタイプ事例がステレオタイプの変容を促進する場合と抑制する場合があることを説明するために導入された2つの過程である(e.g., Maurer, Park, & Rothbart, 1995; Richards & Hewstone, 2001). サブタイプ化とは、反証事例によるステレオタイプ変容を抑制する過程であり、特定の集団のステレオタイプを反証する集団成員を別のカテゴリーへと分離し、例外として特定の集団カテゴリーから排除するような表象を形成する過程である(e.g., Weber & Crocker, 1983). この過程により、特定集団のステレオタイプを維持することができる. それに対して、サブグループ化とは、反証事例によるステレオタイプ変容を促進する過程であり、上位カテゴリーの中に、上位カテゴリーを確証するカテゴリーと反証するカテゴリーの複数のサブカテゴリーが表象されると、上位カテゴリーのステレオタイプが低減する過程である(e.g., Park, Ryan, & Judd, 1992). この2つの過程を、女性関連カテゴリーに適用して、図示したのが Figure 1 である.

沼崎(2006b: 報告書)と沼崎他(2006: 前報告書)では、この過程をジェンダー・カテゴリーに当てはめて、死すべき運命と異性愛の顕現化状況での結果を説明している. 平等主義的性役割観を持つ男性では、通常では伝統的女性カテゴリー表象と非伝統的女性カテゴリー表象がサブグループとして形成されているため、単純な女性カテゴリーの表象が優勢ではない. しかし、死すべき運命や異性愛が顕現化すると、単純な女性カテゴリー表象が優勢となる. つまり、Figure 1-1 から Figure 1-2 へと変化する. 一方、伝統的性役割観を持つ男性では、通常の状態ではサブグループ化が生じておらず、単純な女性カテゴリーが優勢である. しかし、死すべき運命や異性愛が顕現化すると、非伝統的女性カテゴリー表象がサブタイプ化され(非伝統的女性を女性として表象しない)、女性カテゴリーが伝統的女性カテゴリーのみが含まれるカテゴリー表象となりより強化される. つまり、Figure 1-2 から Figure 1-3 へと変化する. このように、サブグループ化の低減と非伝統的女性のサブタイプ化は、どちらも単純な女性カテゴリーを強化する方略であるが、通常時に持っているジェンダーに関わる表象が、伝統的性役割観を持つ男性と非伝統的性役割観を持つ男性では異なるために、異なった方略がとられると考えられる.

### 本報告書で実証的に扱う問題

ここまで紹介した研究を受けて2つの実証研究を行った. 2章では、伝統的性役割観を持つ男性の死すべき運命が顕現化した時のサブタイプ化について異なった指標を用いて検討した. 3章では、死すべき運命が顕現化した時の、他者に対する評価ではなく、自己に関わる判断について検討をおこなった.

2章では、沼崎(2006b)を拡張する研究を報告する. 沼崎(2006b)では、死すべき運命の顕現化条件(および異性愛顕現化条件)での平等主義的性役割観を持つ男性と伝統的性役割観を持つ男性の、伝統的女性への評価と非伝統的女性への評価の変化から、このような過程が生じたと議論をしている. しかし、サブタイプ化とサブグループ化の議論では、

評価基準の変化まで言及されていないため、この過程が生じたことが明確に示されているわけではない。そのため、これらの過程が生じていることをより直接的に実証することを目指し、伝統的女性や非伝統的女性に対する評価とは異なった指標を用いて、サブグループ化の低減とサブタイプ化について検討をおこなった。サブタイプ化とは、サブカテゴリー成員を例外として上位カテゴリーから排除する過程である。例外とするためには、頻度が低いことが必要となると考えられる。そこで、性役割観を測定しておいた男子大学生を参加者として、死すべき運命の顕現化を操作して、伝統的女性と非伝統的女性の頻度が異なるかを検討した。

3章では、死すべき運命の顕現化が自己に関わる判断に影響を及ぼすか、また、性役割観によって異なるかを検討した研究を報告する。死すべき運命が顕現化した時に、伝統的性役割観を持つ男性と平等主義的性役割観を持つ男性では、どちらも単純な女性カテゴリー表象をより強化するが異なった方略がとられていた。女性においても、参加者が持つ性役割観によって、死すべき運命が顕現化したときの伝統的女性と非伝統的女性に対する評価の変化が異なることが明らかとなっている（沼崎, 2006b: 前報告書）。統制条件では、伝統的性役割観を持つ女性と平等主義的性役割観を持つ女性のどちらも、伝統的女性と非伝統的女性に対する好意は異ならなかった。しかし、死すべき運命が顕現化すると、伝統的性役割観を持つ女性では伝統的女性に対しては好意が上昇し非伝統的女性に対しては好意が低下していた。一方、平等主義的性役割観を持つ女性では伝統的女性に対しては好意が低下し非伝統的女性に対しては好意が上昇していた。通常の状態では、性役割観に関係なく女性のサブカテゴリーのどちらの生き方に対しても認め、同等の好意を示すが、死すべき運命が顕現化すると自分と同じカテゴリーに含まれる女性に対してより好意を向ける集団間バイアスが生じることを、この結果は示唆している。

このように、男性においても女性においても、その人が持つ性役割観によって、死すべき運命が顕現化した時の他者に対する評価が異なってくるものが明らかになっている。それでは自己に関わる判断でも、性役割観によって異なる判断が生じるであろうか。近年のジェンダーと関わる大きな社会問題として少子化の問題がある。そこで、3章では、持たたい子どもと将来の経済的成功に焦点を当てて大学生の人生設計に、死すべき運命の顕現化が及ぼす効果を検討した。

## 引用文献

- Burgess, D., & Borgida, E. (1999). Who women are, who women should be: Descriptive and prescriptive gender stereotyping in sex discrimination. *Psychology, Public Policy, and Law*, 5, 665-692.
- Cuddy, A. J., Fiske, S. T., & Glick, P. (2008). Warmth and competence as universal dimensions of social perception: The stereotype content model and the BIAS Map. In M.

- P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 40, pp. 61-149.). San Diego, CA: Academic Press.
- Eagly, A.H., Mladinic, A., & Otto, S. (1994). Cognitive and affective bases of attitudes toward social groups and social policies. *Journal of Experimental Social Psychology, 30*, 113-137.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology, 82*, 878-902.
- Glick, P., Diebold, J., Bailey-Werner, B., & Zhu, L. (1997). The two faces of Adam: Ambivalent sexism and polarized attitudes toward women. *Personality and Social Psychology Bulletin, 23*, 1323-1334.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (2001). Ambivalent sexism. *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol. 33. San Diego, CA: Academic Press. Pp. 115-188.
- Glick, P., Zion, C., & Nelson, C. (1988). What mediates sex discrimination in hiring decisions? *Journal of Personality and Social Psychology, 55*, 178-186.
- Greenberg, J., Pyszczynski, T., & Solomon, S. (1990). Anxiety concerning social exclusion: Innate response or one consequence of the need for terror management? *Journal of Personality and Social Psychology, 43*, 702-709.
- Greenberg, J., Simon, L., Porteus, J., Pyszczynski, T., & Solomon, S. (1995). Evidence of a terror management function of cultural icons: The effects of mortality salience on the inappropriate use of cherished cultural symbols. *Personality and Social Psychology Bulletin, 21*, 1221-1228.
- Greenberg, J., Solomon, S., & Pyszczynski, T. (1997). Terror management theory of self-esteem and cultural worldviews: Empirical assessments and conceptual refinements. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol. 29. San Diego, CA: Academic Press. Pp. 61-139.
- Harmon-Jones, E., Greenberg, J., Solomon, S., & Simon, L. (1996). The effects of mortality salience on intergroup bias between minimal groups. *European Journal of Social Psychology, 72*, 24-36.
- Heine, S. J., Harihara, M., & Niiya, Y. (2002). Terror management in Japan. *Asian Journal of Social Psychology, 5*, 187-196.
- Hoyt, C. L., Simon, S., & Reid, L. (2009). Choosing the best (wo)man for the job: The effects of mortality salience, sex, and gender stereotypes on leader evaluations. *The Leadership Quarterly, 20*, 233-246.
- Maurer, K. L., Park, B., & Rothbart, M. (1995). Subtyping versus subgrouping processes in

- stereotype representation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 813-824.
- McGregor, H. Lieberman, J. D., Greenberg, J., Solomon, S., Arndt, J., Simon, L., & Pyszczynski, T. (1998). Terror management and aggression: Evidence that mortality salience motivates aggression against worldview threatening others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 590-605.
- 沼崎誠 (2006a). 潜在的性役割的偏見の発現とジェンダー・ステレオタイプの受容における心理過程の検討 平成 15~17 年度 科学研究費補助金 (基盤研究(C) : 15530402) 研究成果報告書 <http://www27.atwiki.jp/numazaki/pub/2003-2005.pdf>.
- 沼崎誠 (2006b). 死すべき運命の顕現化が性役割的偏見に及ぼす効果 平成 15~17 年度 科学研究費補助金 (基盤研究(C) : 15530402) 研究成果報告書「潜在的性役割的偏見の発現とジェンダー・ステレオタイプの受容における心理過程の検討」 pp.63-93.
- 沼崎誠・高林久美子・天野陽一 (2006). 恋愛は女性に対するステレオタイプ化や偏見を強めるか? —異性愛プライムと平等主義的性役割観がキャリア女性と家庭女性に対する印象や評価に及ぼす効果— 平成 15~17 年度 科学研究費補助金 (基盤研究(C) : 15530402) 研究成果報告書「潜在的性役割的偏見の発現とジェンダー・ステレオタイプの受容における心理過程の検討」 pp.125-146.
- Park, B., Ryan, C. S., & Judd, C. M. (1992). Role of meaningful subgroups in explaining differences in perceived variability for in-groups and out-groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 553-567.
- Paulhus, D. L., & Levitt, K. (1987). Desirable responding triggered by affect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 245-259.
- Pyszczynski, T., Greenberg, J. & Solomon, S. (2005). The machine in the ghost: A dual process model of defense against conscious and unconscious death-related thought. In J. P. Forgas, K. D. Williams, & S. M. Laham (Eds.), *Social motivation: Conscious and unconscious processes*. New York: Cambridge University Press. Pp. 40-54.
- Richards, Z., & Hewstone, M. (2001). Subtyping and subgrouping: Process for the prevention and promotion of stereotype change. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 5, 52-73.
- Schimmel, J., Simon, L., Greenberg, J., Pyszczynski, T., Solomon, S., Waxmonsky, J. & Arndt, J. (1999). Stereotypes and terror management: Evidence that morality salience enhances stereotypic thinking and preferences. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 905-926.
- Simon, L. Greenberg, J., Harmon-Jones, E., Pyszczynski, T., Solomon, S., Arndt, J., Abend, T. (1997). Terror management and cognitive-experiential self-theory: Terror management occurs in the experiential system. *Journal of Personality and Social*

*Psychology*, 72, 1132-1146.

Six, B., & Eckes, T. (1991). A closer look at the complex structure of gender stereotypes. *Sex Roles*, 24, 57-71.

Solomon, S., Greenberg, J., & Pyszczynski, T. (1991). A terror management theory of social behavior: The psychological functions of self-esteem and cultural worldviews. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol. 24. San Diego, CA: Academic Press. Pp. 91-159.

Weber, D. M., & Crocker, J. (1983). Cognitive processes in the revision of stereotypic beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 961-977.

## 2章 死すべき運命の顕現化が伝統的および非伝統的女性の 頻度評定に及ぼす効果

沼崎 誠

(首都大学東京大学院人文科学研究科)

本研究では、死すべき運命の顕現化が伝統的性役割観を持つ男性と非伝統的性役割観を持つ男性の女性に関わる表象に及ぼす効果について検討をおこなった。

存在脅威管理理論に基づいて行われた多くの実証研究において、死すべき運命が顕現化した状況においては、文化的世界観防衛が強まることが示されている (see Greenberg, Solomon, & Pyszczynski, 1997; Pyszczynski, Greenberg, & Solomon, 2005; Solomon, Greenberg, & Pyszczynski, 1991). この理論や知見に基づいて行われた、沼崎 (2006a: 前報告書) では、死すべき運命を顕現化させた場合、伝統的性役割観を持つとする男性では、キャリア (非伝統的) 女性をより有能であるが冷たく、家庭 (伝統的) 女性はより暖かいが無能であると評定する傾向が見られていた。つまり、伝統的性役割観を持つとする男性では、伝統的女性と非伝統的女性というサブカテゴリー・ステレオタイプを強化するようになった。このような方略は、異性愛を顕現化した場合でも伝統的性役割観を持つとする男性で見られていた (沼崎・高林・天野, 2006)。この伝統的性役割観を持つとする男性の方略は、1章で詳しく検討したように、非伝統的女性を女性カテゴリーから排除し、女性カテゴリーをより純粋なものとしてしまうサブタイプ化 (e.g., Maurer, Park, & Rothbart, 1995; Richards & Hewstone, 2001; Weber & Crocker, 1983) として解釈できると考えられる。

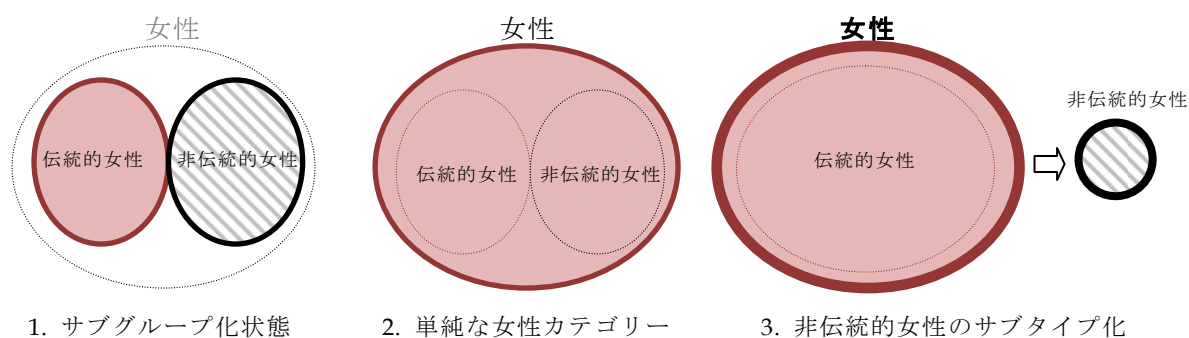


Figure 1 女性カテゴリーとサブカテゴリーのサブグループ化とサブタイプ化

本研究では、この解釈が妥当であるかを検証するために、より直接的な伝統的女性と非伝統的女性の頻度評定を用いて検討をおこなった。Figure 1に示したように(2から3へ)、サブタイプ化が起こった場合には、ステレオタイプに反するサブカテゴリーは例外と見なされて、上位カテゴリーから排除されると考えられる。例外と見なされるためには、その



ようなカテゴリーの成員の頻度は低く評定されると考えられる。そこで、「伝統的性役割観を持つとする男性において、死すべき運命が顕現化した場合には、しなかった場合に比べて、伝統的女性（専業主婦志望女性）の頻度を高く見積もり、非伝統的女性（キャリア志望女性）の頻度を低く見積もるようになるであろう」という仮説を設けた。

沼崎（2006a：前報告書）の実証研究において、死すべき運命を顕現化させた実証研究と異性愛を顕現化した実証研究の双方で、平等主義的性役割観を持つとする男性では、キャリア女性と家庭女性の区別を曖昧にするサブグループ化を低下するという方略（Figure 1の1から2へ）が見られていたが、これが頻度評定にどのような効果を及ぼすかは必ずしも明確ではない。そこで、平等主義的性役割観を持つとする男性に関しては仮説を設けずに探索的に検討をおこなった。

死すべき運命の顕現化の効果を検討している沼崎（2006b）においては、死に関連する尺度に回答させないことにより統制条件を設けており、見いだされた効果がネガティブ感情による可能性を完全には排除できていなかった。そのため、本研究においては、統制条件としてネガティブな感情を喚起させるが、死を連想しない質問紙を回答させることにより、死すべき運命の顕現化が女性サブカテゴリー表象に及ぼす効果がネガティブな感情によるという別の説明可能性を排除できるかについても検討を行った。

上記点を検討するために、本研究においては、あらかじめ性役割観を測定しておいた男子大学生を、死に関する質問に回答させる死すべき運命の顕現化条件と歯科治療に関する質問に回答させる統制条件にランダムに割り当てて、その後、伝統的女性と非伝統的女性の頻度について回答させた。伝統的女性としては専業主婦を希望する女性について、非伝統的女性としては出産後も結婚前と同様のフルタイムの職を持ちたいと希望する女性（キャリア志望女性）の頻度について回答させた。その際には比較的情報の多い同世代の女性と情報の少ない30代の女性について回答させ、情報の多さによって操作の影響され方が異なるかもあわせて検討をおこなった。

## 方 法

**実験計画** 死すべき運命の顕現化（死すべき運命の顕現化（MS）条件 vs. 歯科条件：参加者間）×評定させる対象人物（専業主婦希望 vs. キャリア女性希望：参加者内）×評定させる対象人物の世代（同世代 vs. 30代：参加者内）×平等主義的性役割観尺度得点（連続変量）の要因計画で実施した。

**実験参加者** 本実験の約2ヶ月前に授業時間に集団でバッテリー・テストとして平等主義的性役割観尺度短縮版（SESRA：鈴木，1994）に回答をしていた東京大学男子大学生42名。本実験において回答に不備のあった1名を除外し、41名を分析の対象とした<sup>1</sup>。

---

<sup>1</sup> 女子学生2名と平等主義的性役割観尺度に未回答の男子学生5名にも本実験を実施したが、ここでは報告をしない。

手続き 本実験は 3-14 名の集団実験で 1 名の女性実験者が実施した。参加者同士の回答が見えないように着席をさせた後、パーソナリティなど個人差に関する質問と現在の社会に関する質問に回答するよう依頼した。その際に、参加は自由であり質問紙に回答しなかったり、提出をしなかったりしても、不利益を受けないことを説明した。その後、ランダムに質問紙を配布し、参加者のペースで回答させた。全員が回答を終了した後、ディブリーフィングを行ない、研究の本当の目的を説明し参加者からの質問に答えた。最後に、質問紙を提出することによりデータの使用の許可をいただいたと判断することを教示して、実験者が見えない位置に置かれたボックスに質問紙を提出させ、実験を終了した。

**質問紙の構成** 1 枚目は表紙で、2 枚目以降は 2 部構成になっていた。第 1 部では個人差を測定すると称して、フィラーの質問項目に回答する質問項目、死すべき運命の顕現化の操作を行う質問項目、最後に 24 項目の感情チェックリストが含まれていた。第 2 部では社会に関する認知についての質問紙であった。そこには、16 の人物タイプの頻度評定を回答させ得る質問項目が含まれていた。その内の 4 項目は従属変数の測定のための項目、残りの 12 タイプはダミーの項目であった (e.g., 同世代の日本人の中で民主党を支持する人、同世代の世界中の男性の中で、サッカーよりも野球が好きな男性)。

**死すべき運命の顕現化の操作** MS 条件の参加者には、沼崎 (2006b) と同様に、死に関する複数の尺度 (e.g., 金児, 1994) から宗教など文化的価値観を含む項目を除いた 32 項目に回答させ、統制条件の参加者には、新たに作成した歯科治療に関する質問項目に回答させた (Appendix 参照)。

**従属変数の測定** 社会に関する認知についての質問項目の中で、「次のような人たちはどの程度の頻度でいると思いますか? 0-100%でお答え下さい」という教示の元、伝統的性役割人物として専業主婦志望女性の頻度を、同世代と 30 代の日本人の女性について、「同世代の日本人女性の中で、専業主婦を希望する女性」「30 歳代の日本人女性の中で、現実とは別として、専業主婦を希望する女性」の 2 項目で、非伝統的性役割人物としてキャリアウーマン希望女性の頻度を、同世代と 30 代の日本人の女性について、「同世代の日本人女性の中で、出産後も結婚前と同様のフルタイムの職を持ちたい女性」「30 歳代の日本人女性の中で、現実とは別として、出産後も結婚前と同様のフルタイムの職を持ちたい女性」の 2 項目で測定した。

## 結 果

**感情チェックリスト** 感情チェックリスト 24 項目の回答に対して因子分析 (主成分分解・バリマックス回転) を行い、初期固有値と解釈の適切性から 4 因子を抽出した。第 1 因子は喚起高ポジティブ感情 (e.g., はつらつとした, 活気のある, 氣力に満ちた), 第 2 因子は他者に向けられたネガティブ感情 (e.g., 不機嫌な, むっとした, 怒った), 第 3 因子は喚起低ポジティブ感情 (e.g., のどかな, 気分の良い, 快適な), 第 4 因子は自己に向けられ

たネガティブ感情 (e.g., 自信がない, 不安な) であった. 各参加者の因子得点を求め, 因子ごとに SESRA を標準化した上で, MS×SESRA の交互作用効果を含む一般線型モデルによる分析を行った. 結果として, 他者に向けられたネガティブ感情においてのみ MS の主効果が見られ ( $F(1, 38) = 6.23, p < .05$ ), その他の効果は有意ではなかった ( $F_s < 1.61, ns$ ). 他者に向けられたネガティブ感情の MS の主効果は, 統制条件 ( $M = 0.33$ ) が MS 条件 ( $M = -0.43$ ) に比べてネガティブ感情が強いことによる効果であった.

仮説の検証 SESRA を標準化した上で, MS×SESRA×対象タイプ×対象世代の全ての交互作用項を含む回帰分析を実施した<sup>2</sup>. 結果として, SESRA×対象世代の交互作用効果と SESRA×対象タイプの交互作用効果と対象タイプ×対象世代の交互作用効果が有意であった ( $F(1, 37) = 6.42, p < .05$ ;  $F(1, 37) = 5.76, p < .05$ ;  $F(1, 37) = 5.15, p < .05$ ). もっとも重要なことには, これらの効果に加えて MS を含む効果として MS×SESRA×対象タイプの交互作用効果が有意であった ( $F(1, 37) = 4.85, p < .05$ ). しかし, MS×SESRA×対象タイプ×対象世代の4要因の交互作用効果は有意ではなかった ( $F(1, 37) = 2.10, ns$ ).

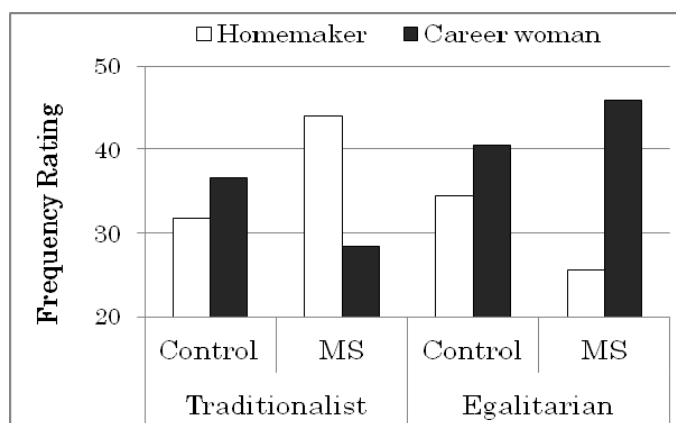


Figure 2 Frequency ratings as a function of MS, SESRA and target type.

MS×SESRA×対象タイプの交互作用効果を検討するために, 専業主婦希望の頻度推定とキャリア志望頻度推定として同世代と30代の平均値を求め, SESRAの1SDを平等主義的性役割観を持つ男性 (egalitarian), -1SDを伝統的性役割観を持つ男性 (traditionalist) とし, 図示したのが Figure 2 である. 伝統的性役割観を持っているとする男性では, MS 条件では統制条件に比べ, 専業主婦希望女性の頻度推定を高く推定しキャリア志望女性の頻度を低く推定する傾向にあり. 平等的性役割観を持っているとする男性では逆の傾向が見られた (ただしこれらの単純主効果は下位検定では有意とはならなかった). また, 統制条件では, 性役割観によって専業主婦希望の女性の頻度推定にもキャリア希望の女性の頻度推定にも差が見られないが ( $t(37) = .38, ns$ ;  $t(37) = .60, ns$ ), MS 条件では, 専業主婦

<sup>2</sup> 感情チェックリストで MS の効果が見られた他者に向けられたネガティブ感情を要因に含めた分析を行ったが, 以下で報告する効果に違いは見られなかった.

希望の女性の頻度推定は伝統的性役割観を持つとする男性の方で高く ( $t(37) = -2.70, p < .05$ ), キャリアを志望する女性の頻度推定は平等主義的性役割観を持つとする男性の方で高くなっていた ( $t(37) = -2.66, p < .05$ ).

## 考 察

伝統的性役割観の高い参加者においては、死すべき運命が顕現化すると伝統的女性の頻度を高く推定し、非伝統的女性の頻度を低く推定するようになり、統制条件において頻度評定に差がなかったものが、死すべき運命が顕現化すると伝統的女性の頻度を非伝統的女性よりも有意に高く評定するようになった。この結果は、仮説を支持するものであり、先行研究(沼崎, 2006b)で見られた、伝統的性役割観を持つ男性では、キャリア(非伝統的)女性をより有能であるが冷たく、家庭(伝統的)女性はより暖かいが無能であると評定する傾向—伝統的女性と非伝統的女性のサブカテゴリー・ステレオタイプの強化—が、非伝統的女性をサブタイプ化し、女性カテゴリーを強化するように表象するようになったという解釈を支持するものといえる。一方、平等主義的性役割観を持つとする男性では、死すべき運命が顕現化すると伝統的女性の頻度を低く推定し、非伝統的女性の頻度を高く推定するようになり、統制条件において頻度評定に差がなかったものが、死すべき運命が顕現化すると非伝統的女性の頻度を伝統的女性よりも有意に高く評定するようになった。先行研究において、平等主義的性役割観を持つとする男性においては、伝統的女性と非伝統的女性の区別を曖昧にするサブグループ化を低下(Figure 1の1から2へ)するという方略が見られていた。この先行研究の結果と併せて考えると、非伝統的女性ステレオタイプを弱めることにより、非伝統的女性に含まれる女性が増えることになり、その結果として、非伝統的女性の頻度が高まることになったと解釈できよう。

沼崎(2006b)では、統制条件としてネガティブな事象を思い出す操作をしておらず、先行研究の結果はネガティブムードによるものであることを完全には排除していなかった。しかし、本研究においては、統制条件として歯科体験というネガティブな事象に関する質問紙を実施し、感情チェックリストにおいて統制条件の方が相対的にネガティブな感情になっていたにもかかわらず、女性サブカテゴリー表象に関して、先行研究に対応する結果が得られたことは、本研究および先行研究で見いだされた結果がネガティブな感情によるものであるという別の説明可能性を排除できることを示している。

本研究で新たに得られたもう一つの知見として、サブタイプ化の指標としての頻度評定の有効性が挙げられよう。サブタイプ化の指標としては、これまで典型性評定などが用いられてきたが(e.g., Maurer, Park, & Rothbart, 1995), 集団の中にステレオタイプに不一致な事例がどの程度の頻度で存在するかは、その事例を例外として扱えるかどうかを規定する重要な要因であり、指標として有効であろう。今後は具体的にどの程度の頻度ならばサブグループとして機能し、どの程度の頻度ならばサブタイプ化の対象として扱われるかを

検討していく必要がある。

先行研究（沼崎, 2006b）と本研究の結果は、ジェンダーに関する偏見やステレオタイプが、男女カテゴリーと男女内のサブカテゴリーに対するステレオタイプの適用や偏見として複雑な形で示されることを、示唆するものである。今後の研究においては複数の指標を用いて、多面的にアプローチをしていくことにより、複雑な過程をより正確に捉えていく必要がある。

## 引用文献

Greenberg, J., Solomon, S., & Pyszczynski, T. (1997). Terror management theory of self-esteem and cultural worldviews: Empirical assessments and conceptual refinements. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol. 29. San Diego, CA: Academic Press. Pp. 61-139.

金児暁嗣 (1994). 大学生とその両親の死の不安と死観 人文研究 大阪市立大学文学部紀要, 46(10), 1-28.

Maurer, K. L., Park, B., & Rothbart, M. (1995). Subtyping versus subgrouping processes in stereotype representation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 813-824.

沼崎誠 (2006a). 潜在的性役割的偏見の発現とジェンダー・ステレオタイプの受容における心理過程の検討 平成 15～17 年度 科学研究費補助金（基盤研究(C) : 15530402）研究成果報告書 <http://www27.atwiki.jp/numazaki/pub/2003-2005.pdf>

沼崎誠 (2006b). 死すべき運命の顕現化が性役割的偏見に及ぼす効果 平成 15～17 年度 科学研究費補助金（基盤研究(C) : 15530402）研究成果報告書「潜在的性役割的偏見の発現とジェンダー・ステレオタイプの受容における心理過程の検討」 pp.63-93.

沼崎誠 (2010). 死すべき運命の顕現化が日本人男子大学生の性役割的偏見に及ぼす効果 首都大学東京 東京都立大学 人文学報, 425, 15-30.

沼崎誠・高林久美子・天野陽一 (2006). 恋愛は女性に対するステレオタイプ化や偏見を強めるか？ —異性愛プライムと平等主義的性役割観がキャリア女性と家庭女性に対する印象や評価に及ぼす効果— 平成 15～17 年度 科学研究費補助金（基盤研究(C) : 15530402）研究成果報告書「潜在的性役割的偏見の発現とジェンダー・ステレオタイプの受容における心理過程の検討」 pp.125-146.

Pyszczynski, T., Greenberg, J. & Solomon, S. (2005). The machine in the ghost: A dual process model of defense against conscious and unconscious death-related thought. In J. P. Forgas, K. D. Williams, & S. M. Laham (Eds.), *Social motivation: Conscious and unconscious processes*. New York: Cambridge University Press. Pp. 40-54.

Richards, Z., & Hewstone, M. (2001). Subtyping and subgrouping: Process for the prevention and promotion of stereotype change. *Personality and Social Psychology*

*Bulletin*, 5, 52-73.

Solomon, S., Greenberg, J., & Pyszczynski, T. (1991). A terror management theory of social behavior: The psychological functions of self-esteem and cultural worldviews. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol. 24. San Diego, CA: Academic Press. Pp. 91-159.

鈴木淳子 (1994). 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成 心理学研究, 65, 34-41.

Weber, D. M., & Crocker, J. (1983). Cognitive processes in the revision of stereotypic beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 961-977.

## Appendix

### MS 条件で用いた質問項目

1. 死とは何にもまして予測しがたいものである。
2. 誰かが死んだからといって、世界が変わるわけではない。
3. 死んでしまえば、自分の力を十分に生かすことができなくなる。
4. わたしは心臓発作にひどくおびえている。
5. 死について考えることはめったにない。
6. 人生の計画をたてるにあたって死はたいして重要ではない。
7. 死んでしまえば、もう人生の意義を追及できなくなる。
8. 死んでしまえば、人は忘れ去られてしまうものである。
9. わたしは時々、人生はなんと短いのだろうと考えることがある。
10. 死は複雑な人生のなかでも、もっともわかりにくいものである。
11. わたしは時があまりにも速く過ぎてしまうことを悩むことがある。
12. 死とはもっともつらいものである。
13. 死んでしまえば一人ぼっちである。
14. わたしは苦しんで死ぬことを不安に思っている。
15. 死んだ後のことを考えるとひどく悩んでしまう。
16. 死んでしまえば、もう希望を実現することができない。
17. わたしは人が第三次世界大戦について話しているのを聞くと、ぞっとする。
18. 今死ねば、あらゆる可能性を試さないままに終わってしまう。
19. 死とは最後の不幸なできごとである。
20. 死ぬことを考えて悩んだりはしない。
21. わたしは将来に不安を感じることはない。
22. 死体を見ると恐ろしくなってしまう。
23. 他の人が死について話していても気にならない。
24. 死とは最後の苦しい瞬間である。
25. わたしは手術を極度に受けたくないと思っている。
26. 死については誰もが「わからない」という。
27. わたしはしを少しも恐れていない。
28. 死とは未知のことがらである。
29. 死ぬことはとても寂しいことである。
30. わたしは癌になることを特に恐れていない。
31. 社会全体からみれば人の死など取るに足りないことである。
32. わたしは死をひどく恐れている。

### 統制条件で用いた質問項目

- 1-1 現在、虫歯など歯に問題があり、歯科にかかっている。
- 2-1 最近歯が痛むことがある
- 2-2 歯科に行くのが恐くて我慢している
- 2-3 歯科の器具の音を聞くと気分が悪くなる
- 2-4 歯科の処置で痛い思いをしたことがある
- 2-5 歯科の待合室で落ち着かないことがよくある
- 2-6 できる限り歯科に行きたくない
- 2-7 歯科の器具を見ると不安になる
- 2-8 歯科のあの痛みさえなければ、と思うことがよくある

### 3章 死すべき運命の顕現化と性役割観が大学生の人生設計に及ぼす効果 — 持ちたい子どもと将来の理想収入に焦点を当てて —

沼崎 誠<sup>1</sup>

高林 久美子<sup>2</sup>

天野 陽一<sup>1</sup>

(<sup>1</sup> 首都大学東京大学院人文科学研究科) (<sup>2</sup> 一橋大学大学院社会学研究科)

少子化問題は現代日本において重要な問題であり、現代日本人において、子どもを持つことがどのような意味を持つかを明らかにすることは重要な課題であろう。本研究では、存在脅威管理理論 (Terror Management Theory: TMT) に基づき、通常の状態の質問紙調査では捉えられづらい文化的世界観を、死すべき運命の顕現化が日本人男女大学生の将来展望にどのように影響を与えるか、持ちたい子どもの数と将来の理想収入焦点を当てて、調べることにより検討をおこなった。

#### 子孫を持つことの意味

生物である以上、個体は必ず死を迎える。つまり、生物は死すべき運命を持っている。しかし、子孫を残すことによって次世代へと遺伝子をつないでいくことができる。現在生きている生物は、過去において必ず遺伝子を残すことに成功してきた個体の子孫であり、個体の死を超えて子孫を残すことにより遺伝子を伝えてきた。その結果、現在生きている生物は少なくとも過去の環境において適応しており、子孫を残す行動を生み出す心理メカニズムを備えていると考えられる。ここから、死すべき運命が顕現化すると、子孫を残そうとする心理メカニズムが作動する可能性が考えられる (e.g., Mathews & Sear, 2008)。死を意識させるような出来事があると出生率が増えるといった逸話も多い。実証的な研究においても、1989年のヒューゴ台風後の出生数を調べた研究では、被害の大きかった地域では被害の小さかった地域に比べて、出生数が増加することが見いだされている (Cohan & Cole, 2002)。さらに、死すべき運命を顕現化させると、異性愛への関心が高まることや (Florian, Mikulincer, & Hirschberger, 2002)、長期的配偶者への基準が下がることや (Hirschberger, Florian, & Mikulincer, 2002)、持ちたい子どもの数が増えることや (Mathews & Sear, 2008; Wisman & Goldenberg, 2005)、子どもを持ちたいという欲求が高まることが示されている (Fritsche, Jonas, Fischer, Koranyi, Berger, & Fleischmann, 2007)。

しかし、このような現象について、遺伝子の伝達という生物学的な観点ではなく、異なった説明を与える議論も存在する。子孫を残すことに、生物学的な意味ではなく、文化的な意味を見いだす議論である。この議論の根拠となるのは、Greenberg, Pyszczynski, Solomon と共同研究者達が唱えている存在脅威管理理論である (e.g., Greenberg, Koole, & Pyszczynski, 2004; Greenberg, Solomon, & Pyszczynski, 1997; Pyszczynski, Greenberg, & Solomon, 2005; Solomon, Greenberg, & Pyszczynski, 1991)。この理論では、人が持つ他の



動物と共通する特性として「自己保存 (self-preservation) への本能的傾向」,そして,人が進化の過程で持つこととなった他の動物と相違する特性として「高度な知的能力の結果,自己意識が生じ,かつ,自分の傷つけられやすさや不可避である死を認識してしまうことから存在脅威 (terror) を感じてしまうこと」を想定する. この2つの特性から,この存在脅威を無力化する,生き残るために必要な潜在的な力を人は必要とし,この力を持つのが自然世界を意味の世界へと変換するシステムとしての文化であると想定する. つまり,文化的世界観の最も重要な機能の1つは,死の気づきによって生じる不安の緩和であり,文化的世界観は,世界は安定的で秩序だっており有意味だと示唆するよう人の知覚を組織化する概念や構造を提供するものだと考える. なぜなら,文化価値基準に適合することは,文字どおり不死や象徴的不死(自己よりも永続するものへの同一化/継続する自己の反映物)を提供するからである.

子孫を持つことは,象徴的不死である継続する自己の反映物を持つことに繋がる. 人においては自己が象徴的なものとして表象されており(e.g., Sedikides & Skowronski, 1997),子孫もまた自己の反映物として象徴的なものとして表象されていると考えられる(Wisman & Goldenberg, 2005). そのため,子孫を持つことは人生の意味や自己価値の強力な源泉となり,象徴的な不死をもたらすこととなると考えられる. このことは,個人的な自己を重視する西洋文化においてみられるばかりではなく,家系の重視や「家」の存続を重視する東洋文化においても見られると考えられよう. 実際,死すべき運命の顕現化が子孫を持つことに及ぼす効果を直接検討した研究ではないが,中国人を参加者にした研究において,死すべき運命を顕現化させると赤ちゃんの写真をより長く見ること(Zhou, Lei, Marley, & Chen, 2009),死すべき運命を顕現化させると1人っ子政策に対する反対が強まる実証研究により示されている(Zhou, Liu, Chen, & Yu, 2008).

子孫を持つことが進化的な直接的な不死ではなく,文化的で間接的な不死をもたらすことを示すいくつかの実証的な証拠も提出されている. 第1に,死すべき運命の顕現化が子孫を持つことへの希望に及ぼす影響には,性差や文化差が見られる点が上げられる. Fritsche et al. (2007)は,ドイツ人男女参加者を対象とした研究で,性別とは無関係に,死すべき運命が顕現化すると子どもを持ちたいという希望が増えることを報告しているが,イギリス人男女大学生を参加者にした Mathews & Sear (2008)やオランダ人大学生を参加者にした Wisman & Goldenberg (2005, Study 1)では,男性においてのみこの効果が見られることを報告している. これらは,文化によって性差の見られ方が異なっていることを示しており,子どもを持つことが単純な直接的な不死を意味するものではないことを示している. 第2に,子どもを持つことが集団間バイアスという文化的世界観防衛と同じ機能を持つことが示されている(Fritsche et al., 2007, Study 3). 彼らは,死すべき運命の顕現化の操作の後で,子どもを持った時のことを自由記述させるか否かを操作し,東西ドイツ人のイメージを回答させ集団間バイアスを測定した. その結果,子どもを持った時のこ

とを自由記述させなかった条件では、死すべき運命が顕現化した時には顕現化しなかった時に比べて集団間バイアスが高くなったが、子どもを持った時のことを自由記述させると、死すべき運命の顕現化が集団間バイアスを高めるという効果が消失した。この結果は子どもを持つことを顕現化すると、集団間バイアスによる文化的世界観防衛への動機づけが低下することを示しており、子ども持つことが象徴的な不死をもたらすものとして、文化的世界観防衛に役立つことを示している。第3に、文化的世界観によって、死すべき運命の顕現化が持ちたい子どもの数に及ぼす効果が異なってくることを示されている。Wisman & Goldenberg (2005, Study 2) では、参加者のキャリア志向によって、死すべき運命の顕現化が持ちたい子どもの数に及ぼす効果が異なるかを検討した結果、男性ではキャリア志向による違いはなく、持ちたい子ども数が増えるが、女性ではキャリア志向が高い場合には、死すべき運命を顕現化するとしなかった時に比べて子どもを持ちたくないという回答が見いだされている。さらに、現代オランダにおいては、女性が子どもを持つことが仕事の達成を阻害するという信念があるため、仕事での高達成を重要な文化的価値と考えている女性においては葛藤を生じさせるためであることも示されている。Wisman & Goldenberg (2005, Study 4) では、女性のみを参加者にして死すべき運命の顕現化を操作した上で、子どもを持つことが仕事の高達成（または低達成）に繋がることを示す研究成果を報告する新聞記事を読ませ、持ちたい子どもの数を回答させた。その結果、低達成記事条件では死すべき運命を顕現化させた場合とさせなかった場合には差は見られないが（死すべき運命の顕現化を高めた方が平均値としては低い）、高達成記事条件では死すべき運命の顕現化を高めると高めなかった時に比べ、子どもを多く持ちたいと回答することが見いだされている。このような実証的な証拠から、子孫を持つことが文化的な意味で象徴的な不死をもたらすため、死すべき運命が顕現化した時には、子どもを持ちたいという意向が強まることを示唆されている。

### 金銭や名声を追求する意味

生物的な動因によるものではなく、文化的世界観防衛に寄与するがゆえに子孫を持つとするならば、個人が持つ文化的世界観によっては、子孫を持ちたいという希望が、文化的世界観防衛のために抑制されることが考えられる。先に示したように、Wisman & Goldenberg (2005) は、オランダ人女性では死すべき運命が顕現化すると持ちたい子どもの数が低下することが見いだされている。それでは、このような人たちは子どもを持つ代わりにどのような方略を用いて死すべき運命という存在論的脅威に対処しているのだろうか。このことを考える手がかりになるのは、Wisman & Goldenberg (2005, Study 4) で、オランダ人女性が死すべき運命が顕現化したときにはしなかったときに比べて、「子どもより仕事を重視する」と回答する割合が増加するという知見である。オランダ人女性ではキャリア志向が強いため、死すべき運命が顕現化した場合に、子どもを持つ代わりに仕

事での成功によって象徴的な不死を得ようとする可能性である。

それでは、仕事での成功がなぜ象徴的な不死に繋がるのであろうか。仕事での成功は、子孫とは異なった形の継続する自己の反映物となる金銭や名声といったものを生み出すためであると考えられよう。金銭といった外発的な動機づけの源泉となるものは、死後の世界には持っていけないものであるため、死に対処する手段としては有効ではないように一般には考えられている。しかし、金銭といった外発的な動機づけ的な目標も、文化的世界観防衛の手段として有効であることが多くの実証研究により示されている。Kasser & Sheldon (2000) は、死すべき運命を顕現化させるとしなかった場合に比べて、15年後の収入予測が上昇することや、将来の消費予測は増大することを見いだしている。Sheldon & Kasser (2008) では、自己受容・親和 (affiliation)・連帯感 (community feeling) といった内発的目標に対する経済的成功・外見・人気といった外発的目標の相対的価値が、死すべき運命を顕現化すると高まることが示されている。また、金銭をプライムすると他者からの受容を必要としなくなることも示されている (Zhou, Vohs, & Baumeister, 2009; Vohs, Mead, & Goode, 2006)。さらに、Kosloff & Greenberg (2009) は、金銭といった外発的な価値が、死に対する直接的防衛には役に立たないが、死に対する間接的防衛には有効であることを実証的に示している。存在脅威管理の2過程モデル (Pyszczynski, et al., 2005) に基づく実証研究からは、死すべき運命の顕現化の直後では、死について自分の意識の外に追い出すような直接的防衛反応 (死の意識の抑圧、自己の死の否定) が見られ、一方、意識の外にはあるが死の概念が活性化している状態では、間接的な文化的世界観防衛が見られることが示されている (e.g., Greenberg, Arndt, Simon, Pyszczynski, & Solomon, 2000; Greenberg, Pyszczynski, Solomon, Simon, & Breus, 1994)。この2過程モデルに基づき、Kosloff & Greenberg (2009) は、死すべき運命の顕現化の直後では金銭や名声といった外発的目標を否定するが、時間をおくとより強調することを見だし、金銭や名声といった外発的目標が間接的な世界観防衛の機能を果たすことを示している。これらの研究は、金銭や名声といった外発的な目標が継続する自己の反映物となり、象徴的な不死に繋がることを示している。

## 本研究

これまでレビューをしてきたように、子孫を持つことと経済的な成功の双方が継続する自己の反映物となるため、生物学的死に対処する文化的防衛手段として利用され、その結果、象徴的な不死に繋がる。これまでの多くの研究は西洋文化の中でおこなわれてきたが、東洋文化においても同様な過程を仮定することができよう。そのため、日本人大学生を対象にしても、死すべき運命の顕現化が高まると、子孫を持つようとする志向と経済的成功への志向が高まると予測できよう。本研究の第1の目的はこの予測を検討することにあつた。

しかし、Wisman & Goldenberg (2005) が研究をおこなったオランダと同様に、現代の

日本においても、女性においては子どもを持つことと経済的な成功が対立することが指摘されている。男女共同参画社会のためのワーク・ライフ・バランスが唱えられている現代においても、子育てと仕事の両立は非常に難しい問題である（内閣府男女共同参画局, 2008）。このため、平等主義的性役割観を持つ女性は、仕事を持って経済的に成功を目指す傾向が強いため、死すべき運命が顕現化した場合でも子孫を持つことを志向せず、経済的成功を志向するであろう。一方、伝統的性役割観を持つ女性は、伝統的な家庭的な価値観を重視する傾向が強いため、死すべき運命が顕現化した場合でも経済的成功を志向せず、子孫を持つことを志向するであろう。本研究の第2の目的は、この予測を検討することにあった。

女性では上記のように予測できるが、男性ではどのようなパターンが見られるであろうか。これまでおこなわれた研究では一貫して、男性参加者では死すべき運命の顕現化が高まると子孫を持ちたいという意向が強まることを見いだされている。このことは、男性においては仕事での成功と育児負担が対立しないためと考えられている。現代日本においても、男性においては仕事での成功と子どもを持つことが対立せず、死すべき運命が顕現化した場合には両方を志向する可能性が考えられる。しかし、現代の日本においては、子どもを育てることには非常に金銭的負担が大きく、女性ばかりでなく男性においても、子どもを持つことと経済的成功を目指すことは対立的関係になっている可能性がある。また、育児負担を考えない伝統的性役割観の高い男性と異なり、平等主義的性役割観の高い男性では、自分も育児負担を負わなくてはいけないという信念を持っているため、子どもを持つことで育児負担が増え仕事に投資する資源が低下すると考え、女性参加者と同様に性役割観による違いが生じる可能性がある。本研究の第3の目的は、男性に関してどちらの予測が妥当であるかを検討することにあった。

本研究においては、ここまで述べてきた諸点を検討するために、平等主義的性役割観をあらかじめ測定しておいた日本人男女大学生を実験参加者にして、死すべき運命の顕現化を操作して、子孫を持つことの志向と経済的成功への志向を測定した。子孫を持つことの志向を測定するためには、将来に持ちたい子どもの数を測定した。1人でも子どもを持ちたい程度を測定した方が望ましいと指摘する研究者もいるが（Fritsche, et al. 2007）、経済的成功との対立を明確にするために持ちたい子どもの数を従属変数として測定した。経済的成功への志向を測定するためには、10年後の理想収入を測定した。

## 方 法

**実験計画** 死すべき運命の顕現化（MS (mortality salience) 条件 vs. 統制条件）×参加者性（男 vs. 女）×平等主義的性役割観（連続変量）×将来展望のタイプ（理想収入 vs. 希望子ども数）の混合要因計画。前3つは参加者間要因であり、後1つは参加者内要因であった。

実験参加者 個人差尺度測定セッションおよび本実験セッションに参加し、回答に不備のない 25 歳以下の明星大学生 男子 53 名、女子 33 名であった。

手続き 学期の 2 回目の授業において個人差尺度測定セッションを実施した。このセッションでは平等主義的性役割観尺度短縮版 (SESRA : 鈴木, 1994) を含む個人差尺度に回答させた。約 1 ヶ月半後、集団で授業時間に質問紙をランダムに配布し、参加者のペースで回答させる質問紙実験の形で本実験セッションをおこなった。質問紙は以下のように構成した。1 枚目は仕事や仕事と家庭の関係に関する質問項目に回答させ、キャリアと家庭に関する知識を顕在化させた、2 枚目はフィラーの個人差に関する項目が含まれていた。3-4 枚目は死すべき運命の顕現化の操作であり、沼崎 (2010) と同様に、半数の参加者には 32 項目の死に関する尺度に回答させた (MS 条件)。残りの半数の参加者には歯医者に関する尺度に回答させた (統制条件)。5-6 枚目では感情チェックリスト 24 項目に回答させた。7-8 枚目で将来の人生設計に関する複数の項目に回答させた。そこには、将来の収入の理想と持ちたい子どもの数を尋ねる項目が含まれていた。将来の理想収入に関しては「理想として 10 年後の年収はいくらくらいであって欲しいですか」に対して万単位で回答させた。持ちたい子ども数に関しては「いろいろな現実の制約を考えた上で子どもは何人くらい持ちたいですか」<sup>3</sup>を人数で回答させた。

全員が回答を終了した後、ディブリーフィングをおこない、研究の本当の目的を説明した。参加者からの質問に答えた後、質問紙を提出することによりデータの使用の許可をいただいたと判断することを教示して、質問紙を提出させ、実験を終了した。

## 結 果

**感情チェックリスト** 感情チェックリストに因子分析をおこない、2 因子 (ポジティブ感情、ネガティブ感情) を抽出し因子得点を求めた。この得点に対して MS×参加者性×SESRA の一般線型モデルによる分析をおこなったところ有意になった効果はなかった ( $F_s < 2.18, ns$ )。

**仮説の検証** 理想収入は分布に偏りがあったため対数変換をおこなった。さらに、理想収入と希望子ども数を標準化した。この指標に対して MS×参加者性×SESRA×タイプの一般線形モデルによる分析をおこなったところ MS の主効果が有意であった ( $F(1, 78) = 4.30, p < .05$ )。この結果は統制条件に比べ MS 条件では理想収入や持ちたい子どもの数が多いことによる効果であった。しかし、MS×SESRA×タイプの交互作用効果が有意であることから制限を受ける ( $F(1, 78) = 7.52, p < .01$ )。この効果を SESRA の-1SD を伝統的性役割観者 (traditionalist) とし、SESRA の+1SD を平等主義的性役割観者 (egalitarian) として、回

---

<sup>3</sup> 子どもを持つことと経済的成功が対立することを明確化するために「いろいろな現実的制約を考えた上で」という表現を入れた。質問項目には、「子どもを持つとすれば理想的には何人くらい持ちたいですか」という項目も含まれていた、この項目では本稿で報告したような効果は見られなかった。

帰曲線をプロットしたのが Figure 1 である。ここからわかるとおり、統制条件では理想収入でも持ちたい子どもの数でも平等主義的性役割観との関係は見られなかったが、MS 条件では、理想収入では平等主義的性役割観が強いほど理想の収入が増え ( $B = .26, t = 1.57, p = .12$ ), 持ちたい子どもの数では平等主義的性役割観が低いほど (i.e. 伝統的性役割観が高いほど) 持ちたい子どもの数が増えていた ( $B = -.36, t = -2.24, p < .05$ )。そして、MS の単純主効果は、将来の理想収入では平等主義的性役割観が高い人においてのみ有意で ( $t = 2.13, p < .05$ ), 持ちたい子どもの数では伝統的性役割観が高い人においてのみ有意であった ( $t = -2.15, p < .05$ )。SESRA×MS×参加者性×タイプの効果は有意ではなく ( $F(1, 78) = 0.10, ns$ ), これらの効果は参加者の性別によって影響を受けていなかった。

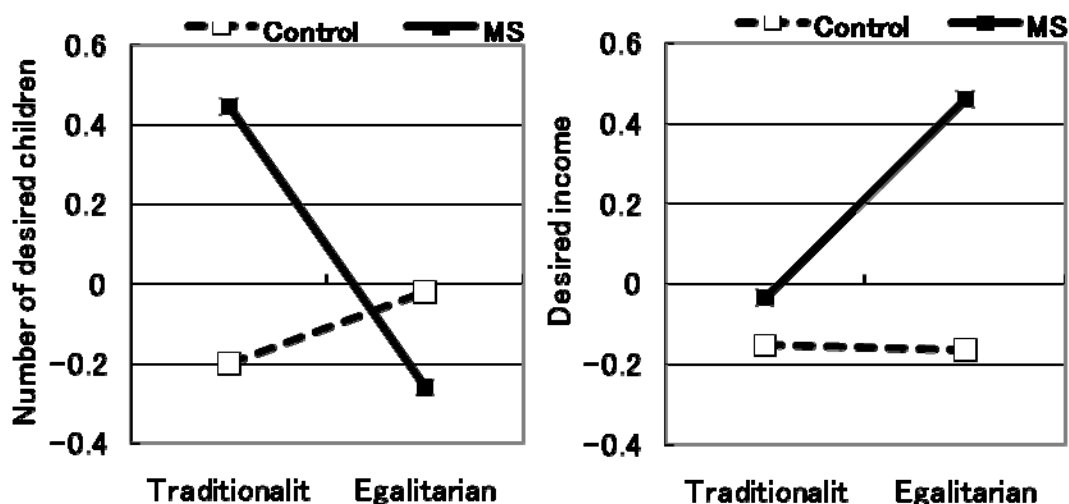


Figure 1. Desired income and desired number of children as a function of MS and SESRA.

#### 考 察

性別とは無関係に、死すべき運命が顕現化すると、伝統的性役割観を持つとする人では持ちたい子どもの数が増え、平等主義的性役割観を持つとする人では将来の希望収入が上昇した。この結果は、性別に関わらず見られた<sup>4</sup>。

この結果は、現代日本の男女大学生の文化的世界観および少子化問題を考える上で重要なことを示唆する。本研究の結果から示唆されることは、現代日本においては、子どもを持つことと経済的に豊かな生活が両立しないという信念があることである。そして、伝統的性役割観を持ち、女性は家庭/男性は仕事という価値観を持っている人は、男女を問わず、継続する自己の反映物となる子孫を持つことによって自分の人生の意味を見だし、象徴的な不死を得ようとしていると考えられる。その一方で、平等主義的性役割観を持ち女性も社会進出を果たすべきだと考えている人たちは、継続する自己の反映物となる経済

<sup>4</sup> 4 要因の交互作用効果は有意ではないが、平等主義的性役割観には性差があり ( $t(52) = 2.62, p < .05$ ), 女性 ( $M = 3.49$ ) の方が男性 ( $M = 3.17$ ) に比べて高いことには注意が必要であろう。

的成功で得られる金銭や名声によって自分の人生の意味を見だし、象徴的な不死を得ようとしていると考えられる。女性においては経済的成功と育児が対立しがちであるため、女性においてこの傾向が見られることは当然といえるが、男性においても平等主義的性役割観によって、文化的世界観防衛によって違いは見られたのはどのような理由からであろうか。いくつかの理由が考えられる。

第1に、女性は家庭/男性は仕事という価値観を持たず、男性も育児に協力するべきであるという信念があれば、子どもを持つことが経済的成功を妨害すると考えたため、平等主義的性役割観の高い男性では死すべき運命の顕現化が高まっても持ちたい子どもの数が増えなかった可能性が考えられよう。ただし、このような理由だけでは、伝統的性役割観の高い男性で死すべき運命の顕現化が高まった時に経済的成功を目指さないことを説明することは難しいかもしれない。第2に、現代日本においては育児にかかる経済的な負担が大きく、子どもを持つことが豊かな暮らしをすることを妨害するという信念があるため、伝統的性役割観を持つ男性においても子どもを持つことと経済的成功が対立的に捉えられているのであろう。そのため、伝統的性役割観の高い「家」を重視する男性は、死すべき運命が顕現化した結果として子どもを多く持ちたいという希望が強まると、経済的成功を重視しなくなる可能性が考えられる。この2つの可能性は相互背反的なものではなく、この過程の両方が働いたと考えるのが最も妥当であろう。

現代の日本においては少子化が問題となっている。本研究の結果は、この少子化問題に対してどのような示唆を与えるであろうか。少子化によって重要な問題となることの1つに労働力不足が挙げられている。そのため、これまで十分に生かされていなかった女性の労働力を日本経済のために活用しなくてはならないという議論がある (e.g., 橋本, 2005; 大沢, 2002)。労働力不足のために女性の労働力を活用しようとすることは、男女が平等な役割を持って社会に参画させる必要があり、このことはまさに平等主義的性役割観を高めることに繋がる。しかし、平等主義的性役割観を高めることは、持ちたい子どもの数を減らし少子化を促進することに繋がる。本研究の結果からは、このような悪循環が生じる可能性が考えられよう。それではどのようにしたら悪循環を断ち切ることができるであろう。Wisman & Goldenberg (2005, Study 4) の研究結果は、この問題の悪循環の解決への示唆を与えるであろう。先に紹介したように、女性参加者に子どもを持つことが仕事の高達成に繋がる研究成果を読ませておくと、死すべき運命が顕現化した時に統制条件に比べて子どもを多く持ちたいと回答することを、彼らは見いだしている。つまり、子どもを持つことが経済的成功にも繋がるという信念を持たせることにより、この悪循環を断ち切ることができると考えられる。しかし、実験室において一時的にこのような信念を持たせることは難しいことではないが、現実の世界の中でこのような信念を持たせることは容易ではないであろう。本当に子どもを持つことが仕事での高達成に繋がりやすい現実の社会を作る努力をすることによって、信念を変えていくしか方法はないであろう。

## 引用文献

- Cohan, C. L., & Cole, S. W. (2002). Life course transitions and natural disaster: Marriage, birth, and divorce following Hurricane Hugo. *Journal of Family Psychology, 16*, 14-25.
- Florian, V., Mikulincer, M., Hirschberger, G. (2002). The anxiety-buffering function of close relationships: Evidence that relationship commitment acts as a terror management mechanism. *Journal of Personality and Social Psychology, 82*, 527-542
- Fritsche, I., Jonas, E., Fischer, P., Koranyi, N., Berger, N., & Fleischmann, B. (2007). Mortality salience and the desire for offspring. *Journal of Experimental Social Psychology, 43*, 753-62.
- Greenberg J., Arndt J., Simon L., Pyszczynski T., & Solomon S. (2000). Proximal and distal defenses in response to reminders of one's mortality: Evidence of a temporal sequence. *Personality and Social Psychology Bulletin, 26*, 91-99.
- Greenberg, J., Koole, S. L., & Pyszczynski, T. (Eds.) (2004). *Handbook of experimental existential psychology*. New York: Guilford Press.
- Greenberg, J., Solomon, S., & Pyszczynski, T. (1997). Terror management theory of self-esteem and cultural worldviews: Empirical assessments and conceptual refinements. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol. 29. San Diego, CA: Academic Press. Pp. 61-139.
- Greenberg, J., Pyszczynski, T., Solomon, S., Simon, L., & Breus, M. (1994). Role of consciousness and accessibility of death-related thoughts in mortality salience effects. *Journal of Personality and Social Psychology, 67*, 627-637.
- 橋本俊詔 (2005). 現代女性の労働・結婚・子育て—少子化時代の女性活用政策— ミネルヴァ書房
- Hirschberger, G., Florian, V., Mikulincer, M. (2002). The anxiety buffering function of close relationships: Mortality salience effects on the readiness to compromise mate selection standards. *European Journal of Social Psychology, 32*, 609-625.
- Kasser, T., & Sheldon, K. M. (2000). Of wealth and death: Materialism, mortality salience, and consumption behavior. *Psychological Science, 11*, 348-350.
- Kosloff, S., & Greenberg, J. (2009). Pearls in the desert: Death reminders provoke immediate derogation of extrinsic goals, but delayed inflation. *Journal of Experimental Social Psychology, 45*, 197-203.
- Mathews, P., & Sear, R. (2008). Life after death: An investigation into how mortality perceptions influence fertility preferences using evidence from an internet-based experiment. *Journal of Evolutionary Psychology, 6*, 155-172.



- 内閣府男女行動参画局 (2008). 平成 20 年度版 男女共同参画白書  
<http://www.gender.go.jp/whitepaper/h20/gaiyou/html/honpen/index.html>
- 沼崎誠 (2010). 死すべき運命の顕現化が伝統的および非伝統的女性の頻度評定に及ぼす効果 平成 19~21 年度 科学研究費補助金 (基盤研究(C) : 19530559) 研究成果報告書「ジェンダー・ステレオタイプと性役割的偏見の再生産に関わる社会的認知研究(本報告書)」 pp. 26-32.
- 大沢真理 (2002). 男女共同参画社会をつくる 日本放送出版会
- Pyszczynski, T., Greenberg, J. & Solomon, S. (2005). The machine in the ghost: A dual process model of defense against conscious and unconscious death-related thought. In J. P. Forgas, K. D. Williams, & S. M. Laham (Eds.), *Social motivation: Conscious and unconscious processes*. New York: Cambridge University Press. Pp. 40-54.
- Sedikides, C., & Skowronski, J. J. (1997). The symbolic self in evolutionary context. *Personality and Social Psychology Review*, 1, 80-102.
- Sheldon, K. M., & Kasser, T. (2008). Psychological threat and extrinsic goal striving. *Motivation and Emotion*, 32, 37-45.
- 鈴木淳子 (1994). 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成 心理学研究, 65, 34-41.
- Solomon, S., Greenberg, J., & Pyszczynski, T. (1991). A terror management theory of social behavior: The psychological functions of self-esteem and cultural worldviews. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol. 24. San Diego, CA: Academic Press. Pp. 91-159.
- Vohs, K. D., Mead, N. L., & Goode, M. R. (2006). The psychological consequences of money. *Science*, 314, 1154-1156.
- Wisman, A., & Goldenberg, J.L. (2005). From the grave to the cradle: Evidence that mortality salience engenders a desire for offspring. *Journal of Personality and Social Psychology*, 89, 46-61.
- Zhou, N., Vohs, K. D., Baumeister, R. F. (2009). The symbolic power of money: Reminders of money alter social distress and physical pain. *Psychological Science*, 20, 700-706.
- Zhou, X., Lei, Q., Marley, S. C., & Chen, J. (2009). Existential function of babies: Babies as a buffer of death-related anxiety. *Asian Journal of Social Psychology*, 12, 40-46.
- Zhou, X., Liu, J., Chen, C., & Yu, Z. (2008). Do children transcend death? An examination of the terror management function of offspring. *Scandinavian Journal of Psychology*, 49, 413-418.



## Ⅱ 部

### システム正当化と ジェンダー・ステレオタイプの適用と性役割偏見 ーシステム正当化機能ー

## 4章 システム正当化とステレオタイプの適用と偏見<sup>1</sup>

沼崎 誠

(首都大学東京大学院人文科学研究科)

II部では、ステレオタイプや偏見が心理的・経済的に依存しているシステムの正当化機能、その中でも特に、多くの人が依存せざるを得ない現状のシステムの防衛機能について検討をおこなう。本章では、ステレオタイプの両面価値性とシステム正当化理論についてレビューし、次章以降で実証的に扱う問題を整理する。

多くの人に共有された、ある社会集団に所属する成員と結びつけられた特性に関する信念はステレオタイプと呼ばれる。ステレオタイプは、しばしば、望ましい特性と望ましくない特性の双方が含まれ、相補的で両面価値的になることがある。「キャリア」と呼ばれる高級官僚に対するステレオタイプでは「有能かもしれないが冷たい」、それと対比的に、「庶民は賢くはないが人間的には豊か」といったステレオタイプが持たれ、このようなステレオタイプに基づいた発言がしばしばなされる。本報告書に関わる男女に関わるジェンダー・ステレオタイプでは、「女性は感情豊かで温かいが論理性は弱い」、「男性は論理的ではあるが攻撃的である」、といった両面価値的なイメージが持たれていることが知られている。高級官僚/庶民ステレオタイプやジェンダー・ステレオタイプのように、どうしてこのような両面価値的なステレオタイプの内容が作られるのだろうか。ここではステレオタイプの機能、特に、システムの正当化機能に焦点を当てて、ステレオタイプが社会の中でどのような機能を果たしているのか、そしてステレオタイプの存在と利用が社会システムの維持に繋がっていることを検討した先行研究をレビューしていく。

初期のステレオタイプの研究は、特定の集団がどのような内容のステレオタイプを持たれているのかについての研究が中心であった(e.g., Katz & Braly, 1933)。しかし、1980年代以降では、ステレオタイプの認知的な側面に焦点が当てられ、ステレオタイプを信じているかいないかにかかわらず、ステレオタイプが表象として存在することが、情報処理にどのような影響を与えるのかといった研究が多くなされてきた(e.g., Macrae & Bodenhausen, 2000)。しかし、近年では、ステレオタイプと社会システムとの関係に目が向けられるのに伴い、動機的側面にも焦点が当たるようになり、ステレオタイプの内容とその規定因に関しても再注目されるようになってきている。この動機的側面で重要となっている機能はシステム正当化機能である(本報告書はしがきを参照)。

---

1 本章は、沼崎誠(2010)を元に加筆・修正をしたものである。

本章では、まずステレオタイプの両面価値性（望ましい内容と望ましくない内容の両方を含む）と社会の中で集団がどのような位置を占めるのかにより、ステレオタイプの内容が決まってくる点に注目をした研究をレビューする。次に、人には現状を維持・防衛しようとするシステム正当化動機が存在することを主張するシステム正当化理論と、ステレオタイプのシステム正当化機能に焦点を当てた研究をレビューする。

## 社会システムとステレオタイプの内容

### 対人判断の基本次元：温かさと有能さの相補性

人や集団を判断する際に使われる基本次元については議論のあるところだが、少なくとも2つの次元が重要であることは古くから指摘されてきた。例えば、Rosenberg, Nelson, and Vivekananthan(1968)は、性格特性や対人判断の基本構造を検討した結果、social good/badとintellectual good/badの2つの次元を見いだしている。また、Peeters(2002)は、性格特性を機能的に分類して、他者に利益を与える特性(other-profitability)と自己に利益を与える特性(self-profitability)とに分類している。この2つの次元に対してさまざまな命名がなされているが、Fiskeと共同研究者は、「温かさ(warmth)」と「有能さ(competence)」の次元として概念化することを提唱している(e.g., Cuddy, Fiske, & Glick, 2008; Fiske, Cuddy, & Glick, 2006)。

この2次元はどのような関係にあるのだろうか。従来の研究においては、Rosenberg et al.(1968)の研究でも見られるように、ハロー効果—ひとつの次元で望ましい特性を持っていると別の次元でも望ましい特性を持っている—が観察されることが指摘されていた。しかし近年の研究においては相補性が示されることが指摘されるようになってきている。個人の印象を扱ったJudd, James-Hawkins, Yzerbyt, and Kashima(2005)の研究3では、実験参加者に有能さを示す行動を多く行う人物と無能さを示す行動を多く行う人物の両方を見せて、温かさに関して評定をさせると、無能な人物は有能な人物に比べてより温かいと評定されることを見いだしている。また、沼崎(2007)も、冷たい行動をする人物はしない人物に比べて有能であると評定され、無能さを示す行動をする人物はしない人物に比べて温かいと評定されるという結果を報告している。これらの結果は、複数の個人を評定する際には、温かさの次元と有能さの次元が負の関係を持ち、相補的な関係になりやすいことを示している。

この温かさの次元と有能さの次元の相補的な関係は複数の集団の属性を推測する時にも見られる。Judd et al.(2005)の研究1では、有能さを示す行動を多く行う集団と無能さを示す行動を多く行う集団を示し、研究2では温かさ示す行動を多く行う集団と冷たさを示す行動を多く行う集団を示し、有能さと温かさについて印象を形成させた。結果として、無能な集団は有能な集団に比べ無能ではあるが温かいと評定され、

冷たい集団は温かい集団に比べ冷たくはあるが有能であると評定されていた。Yzerbyt, Kervyn, and Judd(2008)は、このような相補的な関係が生じるのは温かさ次元と有能さ次元との関係のみで、温かさと別の次元や有能さと別の次元では、ハロー効果が生じることを示している。

### 社会的地位・社会的関係とステレオタイプの内容

社会集団の認知において温かさと有能さが相補的になることを、社会的地位と社会的関係によって規定されるステレオタイプの内容と結びつけたのが、ステレオタイプ内容モデル (stereotype content model) である (e.g., Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002; Fiske, Xu, Cuddy, & Glick, 1999) .

Fiske et al. (2002)に基づき、このモデルを整理しておく (Table 1 参照) . 従来注目されていた全ての次元において望ましくない特性を特定の外集団に付与することは、現代のステレオタイプでは少なく、ステレオタイプが温かさと有能さの次元で両面価値的 (一方が望まなければ一方が望ましくない) になりやすいことに、このモデルは注目した。そして、このステレオタイプが、社会的地位と競争関係の有無により規定され、さらに、このステレオタイプの内容が集団に向けられる偏見や感情を規定するとしている。温かさの次元は、対象集団の目標が内集団や自己の目標と競争的か非競争的かによって規定される。対象集団の目標が競争的であると見なされると温かさが低くなり、非競争的であると温かさが高くなる。一方、有能さの次元は、対象集団が集団の持つ目標を効果的に達成する能力を持つかによって規定される。対象集団が高地位でそのような達成ができると見なされると有能さが高くなり、低地位で達成しづらいと見なされると有能さが低くなる。

Table 1 ステレオタイプ内容モデル (Fiske et al.(2002)より作成)

温かさ	有能さ	
	低	高
高	1 家父長的	1 賞賛的
	2 低地位・非競争関係	2 高地位・非競争関係
	3 憐れみ・共感	3 プライド・賞賛
	4 老人・障がい者・主婦	4 内集団
低	1 侮蔑的	1 嫉妬的
	2 低地位・競争関係	2 高地位・競争関係
	3 軽蔑・嫌悪・敵意	3 嫉妬・ねたみ
	4 ホームレス・貧民	4 ユダヤ人・金持ち・キャリア女性

註：1 ステレオタイプや偏見のタイプ，2 社会的地位・関係，3 感情，  
4 代表的な対象

内集団は、有能さと温かさの両方が高いステレオタイプを持たれ、賞賛といった感情の対象となる。一方、例えば、ホームレスといった社会的地位も能力も低い集団は、

従来の偏見の概念に一致した軽蔑や嫌悪や怒りといった侮蔑的偏見の対象となる。しかし、侮蔑的ステレオタイプや偏見が向けられる対象は現代においては少なく、両面価値的な、温かいが無能であるというステレオタイプや、有能であるが冷たいというステレオタイプを持たれていることが多い。このように両面価値的になるのは、これらのステレオタイプがシステムを正当化する機能を持つためであるとする。

社会的地位が低く競争相手とならない外集団は、温かいが無能であり、保護の対象となる憐れみや共感といった感情が向けられる家父長的偏見の対象となりやすい。このような集団の例としては老人や障がい者や伝統的性役割に従った女性（例えば「専業主婦」）が挙げられる。このようなステレオタイプを持つことにより、その集団が社会的に従属的な地位にいることが正当化される。また、保護の対象とすることにより、その低い地位の社会集団成員に対してもそのような社会的立場に従わせる働きをする。

社会・経済的に成功している外集団は競争相手となりえて脅威となる。このような外集団は有能であるかもしれないが温かさに欠けるとされ、嫉妬や妬みといった感情が向けられる嫉妬的偏見の対象となりやすい。このような集団の例としては、西洋におけるユダヤ人やアジア人、伝統的性役割に従わない女性（例えば「キャリア女性」）が挙げられる。有能さが、実力主義の現状における支配的集団とその外集団の成功を説明するとともに、温かさに欠けることにより、その外集団の成員と親密な関係にならないことが正当化される。

さらに、両面価値的なステレオタイプを持つことは、自分が外集団を一方的な偏見や差別をしておらず、近年の平等主義的価値観に合致することを意味し、自己正当化機能を果たすことにもなる。このように、温かいが無能であるというステレオタイプも有能であるが冷たいというステレオタイプも、現状を正当化し社会的な支配集団が現在の地位を維持することに寄与する。

Fiske et al. (2002, Study 1)では、これらのモデルを検証するため、大学生および一般社会人を参加者として、23の集団に対して、有能さ・温かさ・社会的地位・競争関係の度合い、を評定させた。Figure 1に代表的なものを取り出して示したように、温

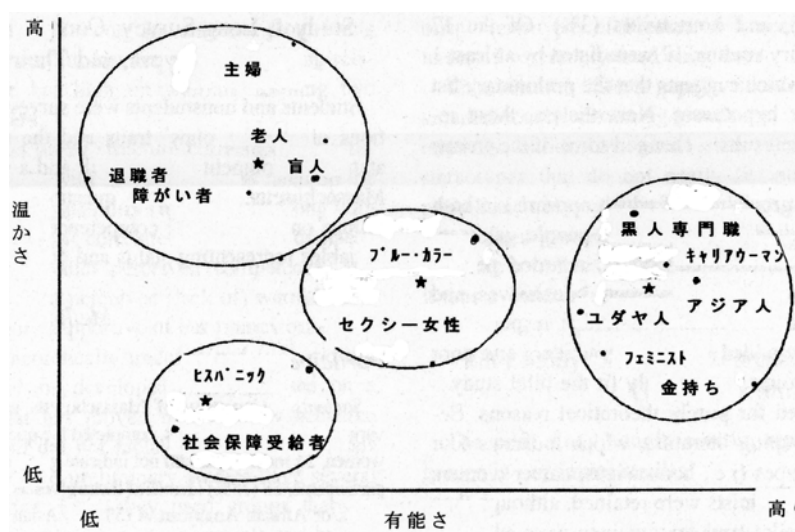


Figure 1 相補的ステレオタイプ (Fiske e al. 2002) より作成)

かさと有能さの次元で集団が構造的に配置されることを見いだしている、さらに、有能さの評定は社会的地位と正の相関があり、温かさの評定は競争関係の度合いと負の相関があることを見いだしている。

Fiske et al. (2002)のモデルは、基本的に現代のアメリカの社会を記述したモデルといえるが、この社会的地位と温かいが無能であるというステレオタイプと有能であるが冷たいというステレオタイプの関係は、他の地域にも適用できることが示されている。Jost, Kivetz, Rubini, Guermendi, and Mosso (2005)は、イギリスとイタリアの地域間の社会的地位とステレオタイプの関係と、イスラエルの民族間の社会的地位とステレオタイプの関係を検討している。社会経済的地位の高い地域（イギリス南部・イタリア北部）や民族（アシュケナージ：北欧系ユダヤ人）の人は、社会的地位の低い地域（イギリス北部・イタリア南部）や民族（セファルディ：南欧系のユダヤ人）の人に比べ、有能（知的・生産的）であるが温かさ（正直・幸福度）が低いというステレオタイプを持たれていた。

日本においても、池上(2006)は、大学間に存在する序列を社会集団の地位として、同様の相補性が見られることを示している。自分よりも学力の高い大学の成員は、学力の低い大学の成員に比べ、知性（有能さ）は高いと評定されていたが対人特性（温かさ）は低いと評定され、この傾向は、自分の所属する大学に対する帰属意識の強い参加者で顕著に見られていた。

これまで紹介してきた研究は、相関的なものであるが、実験的に社会的地位を操作しても、温かさと有能さ次元が相補的關係となり、高地位集団には有能であるが冷たく、低地位集団には温かいが無能であるという印象が形成されることが示されている。Conway, Pizzamiglio, and Mount (1996, Study 4)は、架空の部族内の2集団に関して、有能さや温かさについての行動や特性に関しては言及せずに、神話によって地位の格差が生じていることを示す文化人類学的な記述文を読ませ、2つの集団成員の温かさと有能さを評定させた。そうすると、高地位集団は有能ではあるが冷たく、低地位集団は温かくはあるが無能であるという印象を持たれていた。

ここで紹介した研究は、社会的地位により異なった相補的なステレオタイプが持たれやすく、このことが社会システムの正当化に寄与している可能性を示唆している。しかし、社会システムの正当化に寄与しているかどうかを直接的に示しているものではない。次節では、両面価値的ステレオタイプが現状のシステムの正当化に寄与していることを、より直接的に示す研究をレビューする。しかし、その前に、ステレオタイプの内容ではなくステレオタイプの信念スタイルに注目した分類についても触れておきたい。



## 記述的ステレオタイプと規範的ステレオタイプ

社会システムとステレオタイプが密接に関連していることが注目されるようになると、ステレオタイプの信念スタイル—従来のステレオタイプの記述的側面ばかりでなく、ステレオタイプの規範的側面—にも注意が向けられるようになっていく。記述的ステレオタイプとは、「〇〇は××である」という信念であるが、規範的ステレオタイプは「〇〇は××であるべき」という信念である (Burgess & Borgida, 1999)。ある集団の社会システムの中での立場がステレオタイプの内容を決めるのならば、社会システムで特定の立場を占めている集団は、記述的ステレオタイプとほぼ同じ内容で、立場に合致した特性を持っているべきであるという信念 (規範的ステレオタイプ) も生じると考えられる。

この記述的ステレオタイプと規範的ステレオタイプが顕著なのは、ジェンダーに関するステレオタイプである。ここでは、Burgess & Borgida (1999)に基づいて、男性と女性の記述的ステレオタイプと規範的ステレオタイプの違いを整理しておく。まず、記述的ステレオタイプは、男性や女性を特徴づける属性や役割や行動に関する信念であるのに対して、規範的ステレオタイプは、男性や女性が従うように期待される属性や役割や行動に関する信念である。機能として、記述的ステレオタイプは主に日常生活の情報の流れを構造化するカテゴリー機能を果たすのに対し、規範的ステレオタイプは社会における権力の不平等を維持させるシステム正当化機能を果たすとされる。差別との関係で見ると、記述的ステレオタイプでは、ステレオタイプと一致している (ように見える) 人物が、差別待遇を受けやすくなる。一方、規範的ステレオタイプでは、ステレオタイプと不一致な人物が差別待遇を受けやすい。具体的には、一般に女性は「温かいが無能である」という記述的ステレオタイプを持たれているので、このステレオタイプでカテゴリー化されると、保護や慈悲の対象とはなるものの高い地位などに就けないなどの慈愛的な偏見や差別を受けやすい。一方、キャリア女性やフェミニストといった女性は、「無能であっても温かくあるべき」という規範的女性ステレオタイプに一致しないので、敵意的偏見の対象となりやすい (Glick & Fiske, 2001a, b)。

記述的/規範的ステレオタイプと偏見や差別とにはこのような関係があるため、記述的ステレオタイプは社会的地位が高い集団成員にも低い集団成員にも持たれているのに対して、規範的ステレオタイプは相対的に社会経済的地位の高い集団の成員に持たれやすいと考えられている。

規範的ステレオタイプの機能が主にシステム正当化機能にあるのならば、システム正当化動機が高まった時に規範的ステレオタイプが使用されやすいと考えられる。

## システム正当化理論と偏見とステレオタイプの適用

前節では、社会的地位や関係によって付与されるステレオタイプが異なり、これが社会的システムの正当化に寄与している可能性を示唆した。しかし、なぜ社会的地位の低い人でも、現状の不平等を正当化するようなステレオタイプを受け入れてしまうのだろうか。システム正当化理論は「人には現状のシステムを維持・防衛しようとする動機が存在する」ことを提唱し、この疑問に答えている。本節では、システム正当化理論の全体像を簡単に紹介したうえで、この理論に基づいた、現状の社会システムの維持にステレオタイプが利用されていることを直接的に検証した研究を紹介する。まず、前節で検討した社会的地位や関係によって規定されたステレオタイプに接触することによって、社会的地位の低い人でも現状をより肯定的に見るようになることを示した実証研究をレビューする。次に、現システムへの脅威が、社会的地位や関係によって規定されているステレオタイプの活性化や適用を強めることを示した実証研究をレビューする。最後に、システム脅威が規範的ステレオタイプに一致/不一致な人物に対する好意や敵意に影響を与えることを示した実証研究をレビューする。

### システム正当化理論

システム正当化理論は、Jost とその共同研究者によって提唱された理論である (e.g., Jost & Banaji, 1994; Jost, Pietrzak, Liviatan, Mandisodza, & Napier, 2008; Kay, Jost, Mandisodza, Sherman, Petrocelli, & Johnson, 2007)。この理論によれば、人には現状を維持しようとする目標が存在し、あるシステムが確固たるものとなっていると、人はそのシステムの存在と安定を維持しようとする動機づけられる (システム正当化動機)。このような現状維持目標を持つ理由として、人が基本的に持つ、一貫性や確実性への認識論的欲求と脅威や苦悩に対処し人生に意味を見いだす存在論的欲求を想定する。今現在において実際に存在していない別のシステムに比べ、現状のシステムは、社会的地位の高い人にも低い人にとっても、馴染みがあり、予測可能で、確実であるため、認識論的欲求を満たせる。また、社会的地位の高い人にとって、不当に高い地位を占めていると考えることは罪悪感という苦悩を感じるため脅威となる。このとき、現状は正当で意味のあるものであるという認識をもてば、この脅威に対処することができる。一方、社会的地位の低い人は、フラストレーションや怒りといった苦悩を感じやすい。しかし、このとき地位の低さが正当なものであると認識できれば、フラストレーションを低減し幸福感を得ることができる。この主張を支持する研究として Jost, Pelham, Sheldon, and Sullivan (2003) は、不平等を正当で必要なものであるという信念を持つほど、収入の多さとは無関係に、幸福感が高いことを報告している。このように社会的地位の高い人も低い人も、経済的にも心理的にも現状に依存しているため、現在のシステムを維持・防衛しようとする目標を持つのである。

このような目標を達成する手段として、この理論では3つの手段を想定している。第1は現状の経済的/政治的システムのイデオロギーの表明（保守主義）という手段、第2は社会的高位地位集団成員による内集団びいきと低位地位集団成員による外集団びいきという手段、第3は、異なった社会集団に対して異なったステレオタイプを適用するという手段である（Figure 2）。

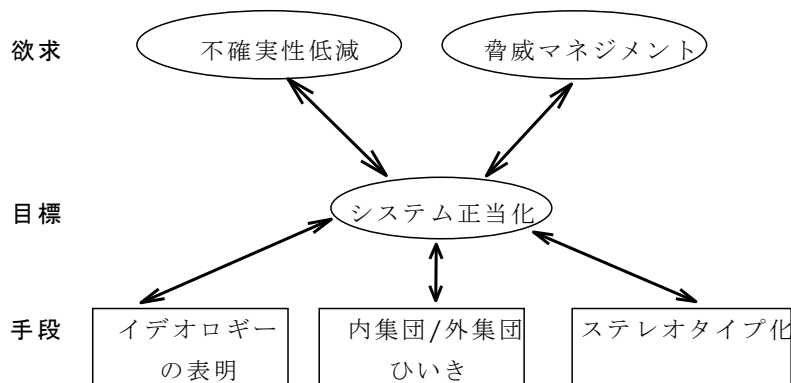


Figure 2. システム正当化理論（Jost et al. (2008)より作成）

この理論を巡っては膨大な研究がおこなわれているが（Jost, Kay, & Thorisdottir (2009)を参照），ここでは、第3の手段であるステレオタイプ化に絞って研究をレビューする。

両面価値的なステレオタイプを適用することが、なぜシステム正当化として機能するのかを、ここでもう一度整理をしておく。社会的地位が低い集団成員に対して、温かいが無能であるというステレオタイプを適用することは、その集団が社会的に従属的な地位にいることを正当化する。そして、このようなステレオタイプを適用して保護の対象にすることは、地位の低い集団に取っても一定の利益になるので、そのような集団成員にも低い社会的立場に従わせる働きをする。一方、社会・経済的に成功している成員に対して有能であるが冷たいというステレオタイプを適用することは、有能さがその集団の成功を説明するとともに、温かさに欠けるので、そのような集団成員と親密な関係にならないことも正当化する。このように、ステレオタイプの内容により偏見や差別が正当化され、社会システムは公正であると考えやすくなる。また、このような相補的で両面価値的なステレオタイプは、システムにおいて高位地位を占めている人にもネガティブな特性を付与し、一方、低位地位を占めている人にも望ましい特性を付与することになり、世の中はバランスが取れているという認知を生じさせ、このことが現システムの正当性を高める。

## ステレオタイプ（的人物）への接触と現システムの肯定化

社会集団に対する異なったステレオタイプの適用がシステムの正当化機能を果たしているとするならば、社会地位と関連した相補的で両面価値的ステレオタイプに接触すると、現状のシステムは望ましいという信念が強まることが予測される。

Jost and Kay (2005) の研究 1 では、男性は作動的で女性は共同的であるという相補的なジェンダー・ステレオタイプがシステム正当化機能を果たしていることを検証するために、女性の望ましいステレオタイプである温かさ特性を意識化させると、ジェンダー・システムが正しいという信念が強まるかを検討している。実験参加者は男女大学生で、男女の特性に関する信念を測定するとして、質問紙に含まれた特性がどのくらい男性と女性に当てはまるか 10 点尺度で回答させた。質問紙に含まれた特性のパターンは 4 通りで（①5 つの温かさ特性，②5 つの有能さ特性，③両方の特性 10 個，④統制群（何も回答しない）），実験参加者はいずれかの質問紙に回答した。次に、ジェンダー・システムの正当性を尋ねる質問に回答させた（項目例：一般に、男女間の関係は公正である）。結果として、男性は女性に比べ、ジェンダー・システムは正当であると評定していたが、温かさに関するステレオタイプに接触した女性参加者は、男性と同程度にジェンダー・システムを正当だと見なすようになった。一方、有能さに関するステレオタイプに接触してもジェンダー・システムの正当性の認知に変化は見られなかった。

Jost and Kay (2005) の研究 2 では、このような効果がジェンダー・システムばかりではなく一般的なシステムへの正当性認知（項目例：一般に社会は公正である）でも見られること示している。これらの結果は、通常は現在のジェンダー・ステレオタイプに満足していない女性であっても、女性の望ましいステレオタイプを回答することにより、現在のジェンダー構造を含むシステムを正当なものとして認識するようになることを示している。

Kay and Jost (2003) は、「地位の低い貧しい人は地位の高い金持ちに比べて温かさの次元で望ましい特性を持ち幸せである」という相補的ステレオタイプがシステム正当化機能を果たしていることを検証している。研究 1 では、参加者に「金持ちだが不幸せな人物」、「貧乏だが幸せな人物」、「金持ちで幸せな人物」、「貧乏で不幸せな人物」のいずれかを見て印象評定を行わせた。研究 2 では「幸せ-不幸せ」を「正直-不正直」の性格特性に変えて印象評定を行わせた。その後、参加者は一般的なシステム正当性認知を測定する尺度に回答した。結果として、金持ちだが不正直で不幸せである人物/貧しいが正直で幸せである人物、といった両面価値的なステレオタイプに一致する人物に接触した場合、反ステレオタイプ的人物に接触した場合に比べ、現状のシステムを正当であると見なすようになることが見いだされた。この結果は、このような相補的なステレオタイプが社会的地位の不平等を合理化する機能を持つことを示

している。

ここまでレビューした研究は、社会的地位の低い集団にも望ましい特性があり、社会的地位の高い集団には望ましくない特性があることを示す相補的で両面価値的ステレオタイプが、現状を肯定的に認識するようにさせ、現状の不平等を改善しようとする動機づけを低下させる可能性があることを示している。

### 現システムへの脅威とステレオタイプの適用

システム正当化理論が主張するように、人に現状のシステムを維持しようとする動機づけがあるとすれば、現システムが脅威にさらされた場合に、このような動機づけが強まると考えられる。そのため、システム脅威状況では、社会システムによって規定された両面価値的なステレオタイプの適用がより強まることが予測される。

Kay, Jost, and Young (2005, Study 1a)は、勢力者と非勢力者ステレオタイプを用いてこの予測を検証している。彼らは、アメリカ人を参加者にして、システム脅威条件ではアメリカ社会/経済/政治システムが危機に瀕しているという記事を読ませ、システム非脅威条件ではアメリカ社会/経済/政治システムは相対的によいものであるという記事を読ませた。その後、勢力者と非勢力者が有能さ関連次元（知的/独立的）と温かさ関連次元（幸福さ）で相対的にどのように異なるかを回答させた。社会的地位が高い勢力者は有能さ次元では高く、温かさ次元では低いと相補的に評定される傾向にあったが、この両面価値的傾向はシステムに脅威が与えられた時に強まっていた。このことは、システムに脅威を受けてシステムを正当化する動機が強まっている時には、社会的地位の高低集団の両面価値的なステレオタイプをより強く表明することにより、現システムの正当性を防衛しようとしたことを示している。

Jost et al. (2005, Study 3)では、ユダヤ社会内での格差のある地位集団を用いて、システム脅威が両面価値的ステレオタイプの表明に及ぼす効果を検討している。3節-2で紹介したように、社会/経済的に地位の高いアシュケナージ系は、有能であるが冷たいというステレオタイプを持たれているが、社会/経済的に地位の低いセファルディ系は、温かいが無能であるというステレオタイプが持たれている。Kay et al. (2005)とほぼ同様のシステム脅威の操作を行った後では、この相補的な両面価値的ステレオタイプが、アシュケナージ系の参加者でもセファルディ系の参加者でも、より強調されて表明されることを見いだしている。

ここまでレビューした研究は、現システムに脅威があり、システム正当化動機が高まった場合に、社会的地位の相違によって付与された温かさと有能さの次元で相補的な両面価値的ステレオタイプが強化されることを示している。このことは、相補的な両面価値的ステレオタイプが社会的地位の正当化に寄与しているという、ステレオタイプ内容モデルやシステム正当化理論の主張を強く裏付けるものである。

## システム脅威と規範的ステレオタイプ

先に示したように、規範的ステレオタイプは記述的ステレオタイプに比べ、システム正当化機能をより強く果たすと考えられている。規範的ステレオタイプに一致している人物は社会システムの維持に貢献するため好意を向けられ、不一致である人物は社会システムに対する脅威となるため敵意が向けられる。このようなシステム正当化機能を果たしているとするならば、この傾向は、システムに対する脅威が高い状況で顕著になることが予測される。

Lau, Kay, & Spencer (2008)は、カナダ人男子大学生を実験参加者にして、この予測を検証している。カナダの社会/経済/政治状況が悪化しているという記事か、状況は安定し望ましいという記事のいずれかを読んだ後に、実験参加者は複数の女性のプロフィールをみて、恋人にしたいかどうかを回答した。プロフィールには伝統的性役割に一致した女性と不一致な女性が複数含まれていた。システムに対する脅威を受けた男性参加者は、現状のシステム（男女の不平等）を正当化する伝統的性役割規範に一致したステレオタイプの女性に対して、好意を向けるようになっていた。このことは、規範的ステレオタイプに一致した人物に対して、ことさら好意を向けることにより、システムに対する脅威に対抗して、現システムを維持しようとしたと考えられる。

人種ステレオタイプを用いて、規範的ステレオタイプがシステム維持の機能を果たすことを示した研究もある (Schimel, Simon, Greenberg, Pyszczynski, Solomon, Waxmonsky, and Arndt, 1999, Study 3)。Schimel et al. (1999)の研究は、システム正当化理論ではなく存在脅威管理理論 (3章参照)に基づいて行われた研究である。存在脅威管理理論とこの理論に基づいた膨大な実証研究から、死すべき運命が顕現化すると、文化的世界観を防衛する動機が高まることが示されている (e.g., Greenberg, Solomon, & Arndt, 2008; Greenberg, Solomon, & Pyszczynski, 1997)。アメリカで白人大学生を実験参加者にした場合、彼らの文化的世界観の基盤はアメリカの現状であろう。そのため、死すべき運命の顕現化によって防衛する文化的世界観は、結果として現状のシステムになりやすいと考えられる。Schimel et al. (2001)は、アメリカ白人男子大学生を参加者にして、死すべき運命の顕現化を操作して、黒人ステレオタイプに一致した人物（明るい遊び好き黒人）か一致しない人物（エリート黒人）と接触させ、その人物に対する好意を測定している。システム正当化動機が低い状況ではステレオタイプに一致しないエリート黒人に対してより好意を向けていたが、脅威が与えられた状況では、ステレオタイプに一致した黒人に対する好意が高まっていた。通常では白人の規範に一致した高地位者の特性を持った反ステレオタイプの黒人を受け入れるが、脅威が与えられると、このような人物を嫌い、白人の高地位を正当化するステレオタイプの黒人を好むようになることを示しており、人種ステレオタイプにも規範的な側面があることを示唆している。

ここでレビューした研究は、システムに対して脅威が与えられシステム正当化動機が高まった状態では、規範的ステレオタイプに一致した人物に対して好意を示し、一致しない人物に対して敵意を向けることにより、現システムの正当化を行うことを示している。このことは、規範的ステレオタイプがシステム正当化機能を果たし、システムの維持に重要な役割を果たしているという主張を裏付けている。

### 社会システムとステレオタイプ

ステレオタイプは、内的表象として情報処理の際にカテゴリー機能を果たすばかりでなく、社会・文化的機能を果たし、社会システムの維持に関係している。

ステレオタイプを意識的/無意識的に用いることにより、現状のシステムを正当であると見なすように動機づけられていることは、社会変革にも影響を与える。現在の社会的地位に対応するステレオタイプを適用することにより、人は現状のシステムが正当であると見なすことができる。そして、現状のシステムが正当であると見なすことは、現状の社会的な不正義を改善しようとする動機づけを低下させる可能性がある。Wakslak, Jost, Tyler, & Chen (2007) は、社会的経済的地位の高い人を参加者として、システムが正当であることを示唆する「努力をして報われる人達」の情報か、正当でないということを示唆する「理由なく不幸になった人達」の情報かを読ませた後で、不平等や不公平に対する義憤を測定する尺度と、社会的に恵まれない人への支援制度に対する態度尺度に回答させた。システムが正当であることを示唆する情報を読んだ参加者は、義憤を感じる度合いが低く、社会的に恵まれない人に対する支援制度に対する態度が好意的ではなくなっていた。この結果は、直接ステレオタイプを扱ったものではないが、社会システムが正当であると見なすことは、社会の不平等に対する義憤を低下させ、現状の不正義を改善しようとする動機づけを低めることを示している。

本章のはじめにキャリアと呼ばれる高級官僚に対するステレオタイプを挙げた。現在問題となっている社会保険庁の問題を批判する際に、「キャリア官僚は冷たく人間味がないため年金問題が解決しない」といったステレオタイプがしばしば使われる。その一方で、「キャリア官僚が無能であるため年金問題が解決しない」といったステレオタイプに不一致な批判がなされる場合もある。前者の批判は、社会的地位の高い人の悪い側面を指摘することにより、階層的な社会を一見批判しているように見える。しかし、このような批判は、相補的なステレオタイプに接触させることであり、社会システムが正当であるという認識を強めてしまうかもしれない。一方、後者の批判は、官僚ステレオタイプによって維持されている現システムに対する脅威となるような批判である。先に示したように、現システムが脅威にさらされた場合には、現状のシステムを維持しようとする動機づけが高まる。その結果、現状のシステムをことさら良

いものとして表明するようになるかもしれない。つまり、システム正当化動機を考えると、どちらの批判も現状の階層的社会を肯定し維持することに繋がり、批判が本来目指しているはずの社会変革に向かう努力を阻害してしまう可能性がある。

このように、ステレオタイプは社会システムや社会のダイナミクスと複雑に結びついている。この結びつきを理解するためには、社会の中で多くの人に共有された（共有されていると思われる）信念の動機的機能を認識することが必要である。

## 次章以降の実証研究

先に述べた問題意識から、日本においてもジェンダー・ステレオタイプやそれに伴った性役割的偏見が現システムの正当化機能を果たすかどうかについて、一連の実証研究を行い検討した。

5章では、現システムへの脅威がシステム正当化動機を高めるかを検討した研究を報告する。現システムに対して脅威を与えると現システムの正当性をことさら強調するようになるかについて、参加者に日本の犯罪状況が悪化しているという情報に接触させ、日本のシステムの正当性の表明が高まるかを検討した。

6章では、ジェンダー・ステレオタイプが現システムの正当化機能を果たしていることを示すため、ジェンダー・ステレオタイプへの接触と表明が現システムの正当化に及ぼす効果を検討した研究を報告する。具体的には、ジェンダー・ステレオタイプを接触/表明する機会を与えることにより、現システムの正当性認知が変化するかどうかを検討した。

7章では、規範的ジェンダー・ステレオタイプに基づいた偏見が現システムの正当化機能を果たしていることを示すため、現システムの脅威となる外集団の顕現化がジェンダー・ステレオタイプに基づいた偏見に及ぼす効果を検討した研究を報告する。具体的には、日本のシステムの脅威と認識されている外国を顕現化することにより、女性のサブカテゴリー（伝統的女性 vs. 非伝統的女性）に対する好意が変化するかどうかを検討した。

## 引用文献

- Burgess, D. & Borgida, E. (1999). Who women are, who women should be: Descriptive and prescriptive gender stereotyping in sex discrimination. *Psychology, Public, Policy and Law*, 5, 665-692.
- Conway, M., Pizzamiglio, M. T., & Mount, L. (1996). Status, communality, and agency: Implications for stereotypes of gender and other groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 25-38.
- Cuddy, A. J., Fiske, S. T., & Glick, P. (2008). Warmth and competence as universal dimensions of social perception: The stereotype content model and the BIAS Map.



- In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 40, pp. 61-149). San Diego, CA: Academic Press.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J., & Glick, P. (2006). Universal dimensions of social cognition: Warmth and competence. *Trends in cognitive science*, 11, 75-83.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 878-902.
- Fiske, S. T., Xu, J., Cuddy, A. C., & Glick, P. (1999). (Dis)respecting versus (Dis)liking: Status and interdependence predict ambivalent stereotypes of competence and warmth. *Journal of Social Issues*, 55, 473-489.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (2001a). An ambivalent alliance: Hostile and benevolent sexism as complementary justifications for gender equality. *American Psychologist*, 56, 109-118.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (2001b). Ambivalent sexism. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 33, pp. 1150-188). San Diego, CA: Academic Press.
- Greenberg, J., Solomon, S., & Arndt, J. (2008). A basic but uniquely human motivation: Terror management. In J. Y. Shah & W. L. Gardner (Eds.), *Handbook of motivation science* (pp. 114-134). New York: Guilford.
- Greenberg, J., Solomon, S., & Pyszczynski, T. (1997). Terror management theory of self-esteem and cultural worldviews: Empirical assessments and conceptual refinements. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 29, pp. 61-139). San Diego, CA: Academic Press.
- 池上知子 (2006). 対人認知の相補性は何を意味するのか — System Justification との関連 — 日本社会心理学会第 47 回大会発表論文集, 78-79.
- Jost, J. T., & Banaji, M. (1994). The role of stereotyping in system-justification and the production of false consciousness. *British Journal of Social Psychology*, 33, 1-27.
- Jost, J. T., & Kay, A. C. (2005). Exposure to benevolent sexism and complementary gender stereotypes: Consequences for specific and diffuse forms of system justification. *Journal of Personality and Social Psychology*, 88, 498-509.
- Jost, J. T., Kay, A. C., & Thorisdottir, H. (Eds.) (2009). *Social and psychological bases of ideology and system justification*. New York: Oxford.
- Jost, J. T., Kivetz, Y., Rubini, M., Guermandi, G. & Mosso, C. (2005). System-justification functions of complementary regional and ethnic stereotypes: Cross-national evidence. *Social Justice Research*, 18, 305-333.

- Jost, J. T., Pelham, B. W., Sheldon, O., & Sullivan, B. N. (2003). Social inequality and the reduction of ideological dissonance on behalf of the system: Evidence of enhanced system justification among the disadvantaged. *European Journal of Social Psychology* 33, 13-36.
- Jost, J. T., Pietrzak, J., Liviatan, I., Mandisodza, A. N., & Napier, J. L. (2008). System justification as conscious and nonconscious goal pursuit. In J. Y. Shah & W. L. Gardner (Eds.), *Handbook of motivation science* (pp. 591-605). New York: Guilford.
- Judd, C. M., James-Hawkins, L., Yzerbyt, V., & Kashima, Y. (2005). Fundamental dimensions of social judgment: Understanding the relations between judgments of competence and warmth. *Journal of Personality and Social Psychology*, 89, 899-913.
- Katz, D., & Braly, K. (1933). Racial stereotypes of one hundred college students. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 28, 280-290.
- Kay, A. C., & Jost, J. T. (2003). Complementary justice: Effects of "poor but happy" and "poor but honest" stereotype exemplars on system justification and implicit activation of the justice motive. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 823-837.
- Kay, A. C., Jost, J. T., Mandisodza, A. N., Sherman, S. J., Petrocelli, J. V., & Johnson, A. L. (2007). Panglossian ideology in the service of system justification: How complementary stereotypes help us to rationalize inequality. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 39, pp. 305-358). San Diego, CA: Academic Press.
- Kay, A. C., Jost, J. T., & Young, S. (2005). Victim-derogation and victim-enhancement as alternate routes to system-justification. *Psychological Science*, 16, 240-246.
- Lau, G. P., Kay, A. C., & Spencer, S. J. (2008). Loving those who justify inequality: The effects of system threat on attraction to women who embody benevolent sexist ideals. *Psychological Science*, 19, 20-21.
- Macrae, C. N. & Bodenhausen, G. V. (2000). Social cognition: Thinking categorically about others. *Annual Review of Psychology*, 51, 93-120.
- 沼崎誠 (2007). 無能な人は温かいのか？ 冷たい人は有能か？ 首都大学東京 東京都立大学 人文学報, 380, 65-85.
- 沼崎誠 (2010). ステレオタイプと社会システムの維持 村田光二 (編) 「認知心理学講座第6巻 社会と感情」 北大路書房 Pp. 272-297.
- Peeters, G. (2002). From good and bad to can and must: Subjective necessity of acts associated with positively and negatively valued stimuli. *European Journal of Social Psychology* 32, 125-136.

- Rosenberg, S., Nelson, C., & Vivekananthan, P. S. (1968). Multidimensional approach to the structure of personality impression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 9, 283-294.
- Schimmel, J., Simon, L., Greenberg, J., Pyszczynski, T., Solomon, S., Waxmonsky, J., & Arndt, J. (1999). Stereotypes and terror management: Evidence that mortality salience enhances stereotypic thinking and preferences. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 905-926.
- Wakslak, C. J., Jost, J. T., Tyler, T. R., & Chen, E. S. (2007). Moral outrage mediates the dampening effect of system justification on support for redistributive social policies. *Psychological Science*, 18, 267-274.
- Yzerbyt, V.Y., Kervyn, N., & Judd, C.M. (2008). Compensation versus halo: The unique relations between the fundamental dimensions of social judgment. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 34, 1110-1123.

## 5章 犯罪状況の悪化情報が現システムの正当性表明に及ぼす効果

沼崎 誠

石井 国雄

(首都大学東京大学院人文科学研究科)

システム正当化理論は、Jost とその共同研究者によって提唱された理論である (e.g., Jost & Banaji, 1994; Jost, Pietrzak, Liviatan, Mandisodza, & Napier, 2008; Kay, Jost, Mandisodza, Sherman, Petrocelli, & Johnson, 2007) . この理論によれば、人は現状を維持しようとする目標を持ち、あるシステムが確固たるものとなっていると、人はそのシステムの存在と安定を維持しようとする動機づけられる (システム正当化動機) . このような現状維持目標を持つ理由として、人が基本的に持つ、一貫性や確実性への認識論的欲求と脅威や苦悩に対処し人生に意味を見いだす存在論的欲求を、この理論は想定する. 今現在において実際に存在していない別のシステムに比べ、現状のシステムは、社会的地位の高い人にも低い人にとっても、馴染みがあり、予測可能で、確実であるため、認識論的欲求を満たせる. また、社会的地位の高い人にとって、不当に高い地位を占めていると考えることは罪悪感という苦悩を感じるため脅威となる. このとき、現状は正当で意味のあるものであるという認識をもてば、この脅威に対処することができる. 一方、社会的地位の低い人は、フラストレーションや怒りといった苦悩を感じやすい. しかし、このとき地位の低さが正当なものであると認識できれば、フラストレーションを低減し幸福感を得ることができる. この主張を支持する研究として Jost, Pelham, Sheldon, & Sullivan (2003) は、不平等を正当で必要なものであるという信念を持つほど、収入の多さとは無関係に、幸福感が高いことを報告している. このように社会的地位の高い人も低い人も、経済的にも心理的にも現状に依存しているため、現在のシステムを維持・防衛しようとする目標を持つのである.

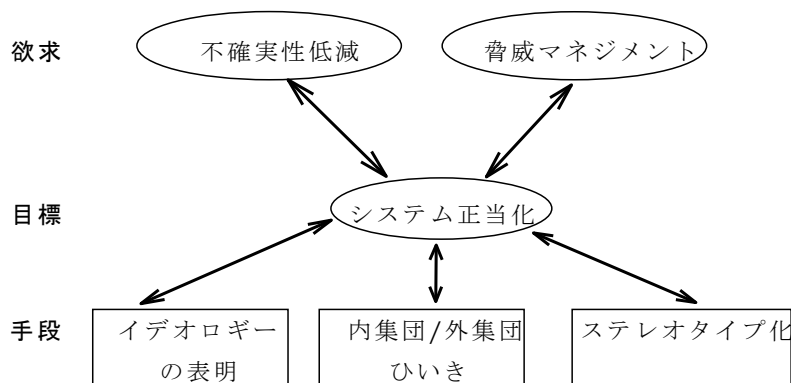


Figure 2. システム正当化理論 (Jost et al. (2008)より作成)

このような目標を達成する手段として、この理論では3つの手段を想定している。第1は現状の経済的/政治的システムのイデオロギー支持の表明（保守主義）という手段、第2は社会的高位地位集団成員による内集団びいきと低位地位集団成員による外集団びいきという手段、第3は、異なった社会集団に対して異なったステレオタイプを適用するという手段である（Figure 1）。

システム正当化理論が主張するように、人に現状のシステムを維持しようとする動機づけがあるとすれば、現システムが脅威にさらされた場合に、このような動機づけが強まり、上記3つの手段が取られやすくなると考えられる。本研究においては、第1の手段の現状の経済的/政治的システムのイデオロギー支持の表明を取り上げ、現システムが脅威にさらされた場合に、現状のシステムへの支持表明が強まるかについて検討をおこなった。

関連する先行研究として、Jost, Glaser, Kruglanski, & Sulloway (2003) は、社会システムの不安定性と政治的保守主義との関係を扱った相関研究のメタ分析をおこない、社会システムに脅威がある状況では保守主義が強まることを見いだしている（Cohen's  $d = 1.08$ ）。実験研究としては、Landau, Solomon, Greenberg, Cohen, Pyszczynski, Arndt, Miller, Ogilvie, & Cook (2004, Study 3) は、アメリカ人を実験参加者にして、2001年9月11日のアメリカ同時多発テロ事件について考えた時の情動などを記述したテロリズムを顕現化した参加者は、まもなく受けるテストについて記述した参加者に比べ、当時のBush大統領への支持が高まることを見いだしている。また、Ullrich & Cohrs (2007) は、スペイン列車爆破事件の直後にドイツ人を実験参加者にして、この事件について概要を見せられ質問を受けた参加者は、統制条件の参加者に比べて、ドイツの現状のシステムの正当性を表明する傾向が強いことを見いだしている。これらの結果は、現状のシステムに対する脅威となるテロリズムの顕現化が、現状のシステムを正当化の表明に繋がることを示唆している。Landau et al. (2004) は、この効果を存在脅威管理理論（Greenberg, Solomon, & Arndt, 2008; Greenberg, Solomon, & Pyszczynski, 1997;）をもちいて死すべき運命の顕現化として解釈しているが、Ullrich & Cohrs (2007) は、テロリズムの顕現化が、少なくともドイツ人参加者には死を顕現化させないことを示し、現状のシステムへの脅威が死すべき運命の顕現化がなくとも、システム正当化に繋がることを示している。

本研究においては、これらの先行研究を踏まえ、日本においてもシステムに対する脅威がシステムの正当性の表明を高めるかを検討した。システムに対する脅威として日本の犯罪状況が悪化しているという情報を与え、従属変数として日本の現システムの正当性の表明を測定した。犯罪状況が悪化しているという情報に接触した参加者は、悪化していないという情報に接触した参加者に比べ、その情報の意味するところとは反対に、日本の現システムの正当性を高く表明するであろうという仮説を設けた。

## 方 法

**実験計画** 1 要因 2 水準の参加者間計画(システム脅威条件 vs. システム非脅威条件).

**実験参加者** 男子大学生 28 名.

**手続き** 最初に参加者には日本の犯罪状況に関する文章を読ませた. このときランダムに約半数の参加者には犯罪状況が悪化しているという文章を, 約半数の参加者には犯罪状況は決して悪化していないという文章を読ませた. これらの文章は, 一部事実を含めながらも, 条件に合うように事実を加工して作成をした. システム脅威条件では, 凶悪犯罪や外国人犯罪が増加していて, 他の先進国と変わらない状況になることも近いと主張する文章を読ませた. 具体的には以下の文章を読ませた.

OECD (経済協力開発機構) が 2006 年に出版した『OECD Factbook 2006』に掲載されている 2000 年の OECD 諸国の犯罪被害者数の対人口比を比較したところ, 日本は 15.2% であり, 先進国では最下位であった (但し, ここでは英国のみ地域ごとの調査になっており, 北アイルランドが 15.0% と唯一日本より低いと報告されている). しかし, 8.9% であった 1989 年の犯罪率と比較すると, OECD 諸国では最も犯罪率の上昇が目立っている. また, その日本を始め, ほとんどの先進諸国では犯罪率の増加が見られているものの, 1989 年当時犯罪率は 28.9% と最も高く, 「犯罪大国」とまで称されていた米国は 21.1% にまで下がっている. 米国のように犯罪率の減少が見られているのは, 他にカナダ, オランダ, ポーランドである.

では, 日本の 2000 年以降の犯罪件数はどのようになっているのであろうか. 警察庁の報告では, 刑法犯の認知件数は 1996 年から 2002 年 (285 万 3,793 件) まで 7 年連続で戦後最多を記録していた. その後 2003 年は 2.2% 減少し, 以後 2004 年は 1.1%, 2005 年は 1.5%, 2006 年は 3.0% と微々たる減少を続けていた. しかし, 2007 年は再び 6.9% 上昇しており, 2008 年度の上半期調査では, 認知件数が前年同期に比べ 6 万 6,031 件 (10.0%) 上昇している. 2008 年は, 大幅に件数が増加することが示唆されている. 罪種別 (殺人, 強盗, 強姦, 暴行, 傷害, 恐喝, 脅迫, 窃盗, 詐欺, 強制わいせつ, 公然わいせつ, 逮捕・監禁, 略奪・誘拐) に見ると, 恐喝・脅迫を除く罪種全てにおいて認知件数が前年を越えていた.

刑法犯戦後最多記録の要因の一つに, 来日外国人による犯罪の増加があることは否めない. 来日外国人犯罪の検挙数は 1998 年から 2004 年まで急増しており, 2004 年から 2007 年までは増加基調のまま高まり状態にある. 警察庁によると, 2007 年の刑法犯検挙人員は 365,557 人であるが, このうち来日外国人によるものは 7,528 人である. 2008 年も検挙数が増加する可能性が示唆されている.

以前は, 先進国で最も安全な国と称せられていた日本であったのだが, 現在の日本は犯罪率が再び上昇傾向である. 他の先進国と変わらないほどの犯罪率をほこるような日は, 遠くはないのかもしれない.

システム非脅威条件では, 凶悪犯罪や若者犯罪が減少していること示し, 日本社会は先進国の中でもいまだ最も犯罪率も低く, 比較的安心して暮らすことのできる国であると主張する文章を読ませた. 具体的には以下の文章を読ませた.

OECD（経済協力開発機構）が2006年に出版した『OECD Factbook 2006』に掲載されている2000年のOECD諸国の犯罪被害者数の対人口比を比較したところ、日本は15.2%であり、先進国では最下位である（但し、ここでは英国のみ地域ごとの調査になっており、北アイルランドが15.0%と唯一日本より低いと報告されている）。8.9%であった1989年の犯罪率と比較すると、犯罪率は増加している。その日本を始め、ほとんどの先進諸国では犯罪率の増加が見られている。一方、1989年当時犯罪率は28.9%と最も高く、「犯罪大国」とまで称されていた米国は21.1%にまで下がっている。米国のように犯罪率の減少が見られているのは、他にカナダ、オランダ、ポーランドである。

では、日本の2000年以降の犯罪率はどのようになっているのであろうか。警察庁の報告では、刑法犯の認知件数は2002年（285万3,793件）まで7年連続で戦後最多を記録していた。その後2003年は2.2%減少し、以後2004年は8.1%、2005年は11.5%、2006年は9.6%、2007年は6.9%ずつ減少し続けている。2008年度上半期の調査でも、前年同期に比べ4万6,031件（5.0%）減少しており、2008年は更に件数が減少する可能性が示唆されている。また、罪種別（殺人、強盗、強姦、暴行、傷害、恐喝、脅迫、窃盗、詐欺、強制わいせつ、公然わいせつ、逮捕・監禁、略奪・誘拐）に見ると、窃盗・暴行を除く罪種全てにおいて認知件数が前年よりも減少していた。

2000年以降の推移を見ると、少年や60歳以上の犯罪人口比（国立社会保障・人口問題研究所の類型人口に基づく同年齢増人口1000人あたりの検挙人員をいう）が増加しているのが特徴であった。しかし、少年による刑法犯の検挙数は2005年より次第に減少しており、2007年度は10万3,224人で、前年に比べ9,593人（8.5%）減少している。罪種別でも、検挙人員はすべての包括罪種で減少していた。少年による犯罪人口比は、前年に比べ1.0ポイント下がり、13.8ポイントであった。

このように、総合的にいって、日本社会は先進国の中でもいまだ最も犯罪率も低く、比較的安心して暮らすことのできる国であると言ってよいだろう。

Table 1 システム正当性認知測定項目

- 
1. 一般的に、社会は公平である
  2. 一般的に、日本の政治はうまくやっている
  3. 日本社会は、根本的に再構築される必要がある(r)
  4. 日本は、世界で最も住みよい国である
  5. 我々の得る利益のほとんどは、国の政策のおかげである
  6. 皆、幸福と富を公平にあわせ持っている
  7. 我々の社会は、年々悪くなっている(r)
  8. 社会は、人それぞれが相応のものを得られるようにできている
- 

r：逆転項目，ゴシック体：信頼性の高い4項目版

次に、現システムの正当性を表明させるための8項目の尺度に7件法（7：非常にそう思う－1：全くそう思わない）で回答させた。この尺度はKay & Jost (2003)で使用された一般的なアメリカのシステムの正当性認知を日本のシステムの正当性認知を測定

できるように新たに作成したものであった (Table 1) . 最後にディブリーフィングをおこない実験を終了した.

## 結 果

**システム正当性認知** システム正当性の尺度の全体項目の信頼性を求めたところ高いとは言えなかった ( $\alpha = .47$ ) . そのため, 信頼性が高くなるように項目を選択した結果, Table 1 でゴシック体で示した 4 項目では信頼性は高くなった ( $\alpha = .70$ ) . 分析は全項目の平均値と 4 項目平均値の双方に対して行った.

**仮説の検証** 全項目の平均値に  $t$  検定をおこなったところ, 脅威群は非脅威群に比べ, 日本の現システムの正当性を高く評定していた ( $t(26) = 3.05, p < .01$ ; 脅威群  $M = 3.95$   $SD = 0.54$ , 非脅威群  $M = 3.22$   $SD = 0.73$ ) . また, 4 項目の平均値においても (Figure 1), 脅威群は非脅威群に比べ, 日本の現システムの正当性度を高く評定していた ( $t(26) = 2.75, p = .01$ ; 脅威群  $M = 4.00$   $SD = 1.07$ , 非脅威群  $M = 2.90$   $SD = 1.03$ ) . この結果は, 仮説を支持するものであった.

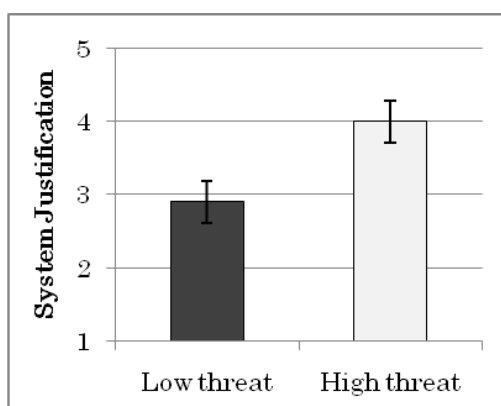


Figure 1. System justification as a function of threat

## 考 察

本研究の結果は, 日本において犯罪が増えているという情報に接した参加者は, その情報の意味することとは逆に, 日本の現システムがよいものであると回答していた.

この結果は, 仮説を支持するものであり, システムに対する脅威がシステム正当性の表明を高めることを示唆するものである. しかし, 別の説明可能性を検討する必要がある. 本研究は, 態度説得の文脈で言えば, 説得への反発と考えることができよう. 説得への反発の要因については, いくつかの心理プロセスが考えられている. これらの心理プロセスによって本研究の結果は説明できるであろうか. 説得への反発の要因として研究されているプロセスとして, まず, 心理的リアクタンスが挙げられよう (e.g., Brehm & Brehm, 1981; 今城, 2002) , しかし,



本研究の結果は、心理的リアクタンスでは説明できない。リアクタンスが生起するためには説得を受け入れることが自分の自由が侵害することが必要であると考えられているが、本研究で用いた文章は、参加者の自由を脅かすものではない。そのため、リアクタンスが働いていた可能性は低いであろう。

説得への反発の要因として、もう 1 つ考えられているのは、防衛的回避行動である (e.g., Janis & Feshbach, 1953; review として深田(2002), 木村(2002))。説得の受け手が恐怖や脅威を感じた時に、その脅威に対して適切な対処行動を取れる可能性が低い時には、恐怖や脅威自体に対して反発をする結果、説得に対して反発するというプロセスであり、実証的に検証されている (e.g., Mulilis & Lippa, 1990)。このプロセスは、本研究で問題としていたシステム脅威によるシステム正当化動機の強化というプロセスと似ている。しかし、説得の文脈で従来おこなわれている研究は、恐怖を生じさせるのは受け手自身に対する脅威、つまり自己に対する脅威 (自己脅威) であり、この点がシステム脅威とは異なっている。ただし、本研究で呈示した文章は、犯罪の悪化情報であり自己脅威とは完全に分離できていない。この点については、自己の脅威とならないがシステム脅威となる材料を用いて検討が必要であろう (Kay, Jost, & Young, 2005)。また、説得における防衛回避行動に関わる研究は、脅威に対する今後の研究に示唆を与えるであろう。対処行動を適切に取れるという認知がある時には反発をしないことが指摘されているが、システム脅威に対してもこの知見が適用できるかもしれない。また、近年の研究では、自己脅威に対しては、直接的に対処しなくても補償的対処行動で十分であるということが自己肯定化理論に基づいた研究の中で示されている (e.g., Steele, 1988; Sherman & Cohen, 2006)。説得の脅威喚起コミュニケーションの受容においても、自己肯定化が有効であることを示した研究もある (Sherman, Nelson, & Steele, 2000)。また、システム脅威においても、システム肯定化といった補償的対処行動が有効であることを示唆するデータが最近提出されている (Kay, Gaucher, Peach, Laurin, Friesen, Zanna, & Spencer, 2009)。

本研究は、システム脅威があるという情報を示されると、その情報が意味することとは逆に、システムは正当であるということを表明するようになることを示したが、今後は、システム脅威に対してシステム正当化の表明がなされる時となされない時の調整要因に関する研究が必要となろう。

## 引用文献

Brehm, S. S. & Brehm J. W. (1981). *Psychological reactance: A theory of freedom and control*. New York: Academic Press.

- 深田博己 (2002). 恐怖感情と説得 深田博己 (編著) 説得心理学ハンドブック : 説得コミュニケーション研究の最前線 北大路書房 pp. 278-328.
- Greenberg, J., Solomon, S., & Arndt, J. (2008). A basic but uniquely human motivation: Terror management. In J. Y. Shah & W. L. Gardner (Eds.), *Handbook of motivation science* (pp. 114-134). New York: Guilford.
- Greenberg, J., Solomon, S., & Pyszczynski, T. (1997). Terror management theory of self-esteem and cultural worldviews: Empirical assessments and conceptual refinements. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 29, pp. 61-139). San Diego, CA: Academic Press.
- 今城周造 (2002). 説得への反発 : 心理的リアクタンス理論 深田博己 (編著) 説得心理学ハンドブック : 説得コミュニケーション研究の最前線 北大路書房 pp. 329-371.
- Janis, I. L., & Feshbach, S. (1953). Effects of fear-arousing communications. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 48, 78-92.
- Jost, J. T., & Banaji, M. (1994). The role of stereotyping in system-justification and the production of false consciousness. *British Journal of Social Psychology*, 33, 1-27.
- Jost, J. T., Glaser, J., Kruglanski, A. W., & Sulloway, F. J. (2003). Political conservatism as motivated social cognition. *Psychological Bulletin*, 129, 339-375.
- Jost, J. T., Pelham, B. W., Sheldon, O., & Sullivan, B. N. (2003). Social inequality and the reduction of ideological dissonance on behalf of the system: Evidence of enhanced system justification among the disadvantaged. *European Journal of Social Psychology*, 33, 13-36.
- Jost, J. T., Pietrzak, J., Liviatan, I., Mandisodza, A. N., & Napier, J. L. (2008). System justification as conscious and nonconscious goal pursuit. In J. Y. Shah & W. L. Gardner (Eds.), *Handbook of motivation science* (pp. 591-605). New York: Guilford.
- Kay, A. C., Gaucher, D., Peach, J. M., Laurin, K., Friesen, J., Zanna, M. P., & Spencer, S. J. (2009). Inequality, discrimination, and the power of the status quo: Direct evidence for a motivation to see the way things are as the way they should be. *Journal of Personality and Social Psychology*, 97, 421-434.
- Kay, A. C., & Jost, J. T. (2003). Complementary justice: Effects of "poor but happy" and "poor but honest" stereotype exemplars on system justification and implicit activation of the justice motive. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 823-837.
- Kay, A. C., Jost, J. T., Mandisodza, A. N., Sherman, S. J., Petrocelli, J. V., & Johnson, A. L. (2007). Panglossian ideology in the service of system justification: How

- complementary stereotypes help us to rationalize inequality. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 39, pp. 305-358). San Diego, CA: Academic Press.
- Kay, A. C., Jost, J. T., & Young, S. (2005). Victim-derogation and victim-enhancement as alternate routes to system-justification. *Psychological Science, 16*, 240-246.
- 木村堅一 (2002). 脅威認知・対処認知と説得：防衛動機理論深田博己（編著） 説得心理学ハンドブック：説得コミュニケーション研究の最前線 北大路書房 pp. 374-417.
- Landau, M. J., Solomon, S., Greenberg, J., Cohen, F., Pyszczynski, T., Arndt, J., Miller, C. H., Ogilvie, D. M., & Cook, A. (2004). Deliver us from evil: The effects of mortality salience and reminders of 9/11 on support for President George W. Bush. *Personality and Social Psychology Bulletin, 30*, 1136-1150.
- Mulilis, J. P., & Lippa, R. (1990). Behavioral change in earthquake preparedness due to negative threat appeals: A test of protection motivation theory. *Journal of Applied Social Psychology, 20*, 619-638.
- Sherman, D. A. K., Nelson, L. D., & Steele, C. M. (2000). Do messages about health risks threaten the self? Increasing the acceptance of threatening health messages via self-affirmation. *Personality and Social Psychology Bulletin, 26*, 1046-1058.
- Sherman, D. K., & Cohen, G. L., (2006). The psychology of self-defense: Self-affirmation theory. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 38, pp. 183-242). New York: Academic Press.
- Steele, C. M., (1988). The psychology of self-affirmation: Sustaining the integrity of the self. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 21, pp. 261-302). New York: Academic Press.
- Ullrich, J., & Cohrs, J. C. (2007). Terrorism salience increases system justification: Experimental evidence. *Social Justice Research, 20*, 117-139.

## 6章 ジェンダー・ステレオタイプの表明が システムの正当性認知に及ぼす効果<sup>1</sup>

沼崎 誠<sup>1</sup> 石井 国雄<sup>1</sup> 佐々木 香織<sup>1</sup> 天野 陽一<sup>1</sup> 高林 久美子<sup>2</sup>

(<sup>1</sup> 首都大学東京大学院人文科学研究科) (<sup>2</sup> 一橋大学大学院社会学研究科)

本章では、ジェンダー・ステレオタイプへの接触や表明がジェンダーに関するシステムや一般的なシステムの正当性認知に及ぼす効果を検討した研究を報告する。

近年のステレオタイプ研究においては、相補的な両面価値的ステレオタイプに注目が集まっている (e.g., Cuddy, Fiske, & Glick, 2008; Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002; Glick, & Fiske, 2001)。相補的な両面価値的ステレオタイプとは、特定の集団成員のステレオタイプとして望ましい側面と望ましくない側面の双方が含まれるタイプのステレオタイプを指す。近年のステレオタイプでは、全ての側面が望ましいステレオタイプは内集団以外では少なく、また、全ての側面が望ましくないステレオタイプも少なくなっていることが指摘されている (e.g., Fiske, et al., 2002)。現実の集団ではなく、架空の集団を用いた研究においても、集団に対する印象が相補的になることが示されている。Judd, James-Hawkins, Yzerbyt, & Kashima (2005) は、有能さを示す行動を多く行う集団と無能さを示す行動を多く行う集団を示し、研究 2 では温かさを示す行動を多く行う集団と冷たさを示す行動を多く行う集団を示し、有能さと温かさについて印象を形成させた。結果として、無能な集団は有能な集団に比べ無能ではあるが温かいと評定され、冷たい集団は温かい集団に比べ冷たくはあるが有能であると評定されていた。

このような相補的な両面価値的ステレオタイプが生じる原因として、このようなステレオタイプがシステム正当化機能を持つことが指摘されている (e.g., Jost & Banaji, 1994; Jost & Kay, 2005; Jost, Pietrzak, Liviatan, Mandisodza, & Napier, 2008; Kay & Jost, 2003; Kay, Jost, Mandisodza, Sherman, Petrocelli, & Johnson, 2007)。ステレオタイプが両面価値であることは、社会の全ての集団が強みと弱みの両方を持つということであり、システムは全体として公正でバランスが取れていて正当であるという感覚を高めることになる。そして両面価値的なステレオタイプが相補的であることは、それぞれの集団が必要とされている役割を果たすことによりシステムが維持されているということであり、システムが全体として機能的で合理的なものであるという感覚を高めることになることが指摘されている。

この指摘を直接検証した研究として、Kay & Jost (2003) は、金持ちと貧乏人の相

---

<sup>1</sup> 本研究は、第 1 著者の指導の下、石井里奈 (首都大学東京 2008 年度卒業生) の卒業研究として行われたものである。

補的ステレオタイプに接触すると、現状の正当性認知が高まることを見いだしている。Kay & Jost (2003) は、「地位の低い貧しい人は地位の高い金持ちに比べて温かさの次元で望ましい特性を持ち幸せである」という相補的ステレオタイプがシステム正当化機能を果たしていることを検証した。研究 1 では、参加者に「金持ちだが不幸せな人物」、「貧乏だが幸せな人物」、「金持ちで幸せな人物」、「貧乏で不幸せな人物」のいずれかを見て印象評定を行わせ、研究 2 では「幸せ-不幸せ」を「正直-不正直」の性格特性に変えて印象評定を行わせ、その後、一般的なシステムの正当性認知を測定する尺度に回答させた。結果として、金持ちだが不正直で不幸せである人物/貧しいが正直で幸せである人物、といった相補的で両面価値的なステレオタイプに一致する人物に接触した場合、反ステレオタイプの人物に接触した場合に比べ、現状のシステムを正当であると見なすようになることが見いだされた。この結果は、このような相補的なステレオタイプが社会的地位の不平等を合理化する機能を持つことを示している。

ジェンダー・ステレオタイプは、相補的な両面価値的なステレオタイプの代表的なものであり、Jost & Kay (2005) は、ジェンダー・ステレオタイプに接触することによって現状のシステムの正当性認知が高まることを実証している。Jost & Kay (2005) の研究 1 では、「相補的だが平等」というジェンダーに関わる言説が性差別的システム、そしてそれを超えた現状のシステム全体を正当化する働きをしていることを実証した。男女大学生を参加者にして、独立変数として、女性的ポジティブ特性または男性的ポジティブ特性に男女がどれだけあてはまるかを回答させるか否かを操作した後、ジェンダー関連システム正当性認知の測度に回答させた。その結果、男性ではどの条件でもシステム正当性認知が高く、操作の効果は見られなかったが、女性では女性的ポジティブ特性に回答すると、回答しなかった場合に比べて正当性認知が高まり、男性参加者と同等のレベルまで高くなることを見いだしている。そして、この効果は、特性の評定の際にステレオタイプ的に表明したか否かには影響を受けないことを見いだしている。研究 2 においては、表明の機会を与えず接触するだけで効果が見られるかを、慈愛的偏見尺度項目と敵意的偏見尺度項目への回答条件と接触条件を設けて、これら尺度項目への接触が、ジェンダーを超えた一般的なシステムの正当性認知に影響を及ぼすかを検討した。その結果、慈愛的偏見尺度項目に回答しなくても接触するだけで女性参加者は、敵意的偏見尺度項目に接触/回答した条件や統制条件に比べて、一般的なシステム正当性認知が高まることを見いだしている。

本研究では、Jost & Kay (2005) の研究 1 とほぼ同様の手続きで独立変数を操作し、従属変数としてジェンダー関連システム正当性認知と一般システム正当性認知を測定し、日本においても相補的なジェンダー・ステレオタイプの接触と表明が現状のシステムの正当性認知を高めるかを検討した。先行研究から、「女性ポジティブ特性に回

答すると女性参加者のシステム正当性認知が高まるだろう」という仮説を設けた。

## 方法

**実験参加者** 事前調査と本調査において回答の不備のない首都大学東京大学生 108 名（男性 63 名，女性 45 名）。参加者の平均年齢は 19.8 歳であった（ $SD=1.55$ ）。

**実験計画** 参加者の性（男 vs. 女）×表明タイプ（女性ステレオタイプ vs. 男性ステレオタイプ vs. 統制）×正当タイプ（ジェンダー vs. 一般）の混合要因計画（前 2 者が参加者間，後 1 者が参加者内）で実施した。

**手続き** 事前調査においては，Kay & Jost（2003）および Jost & Kay（2005）を参考にして作成した，ジェンダー関連正当性認知 8 項目（ $\alpha = .59$ ）および一般正当性認知 8 項目（ $\alpha = .61$ ）をランダムに並べた質問紙に，他の複数の個人差尺度とともに回答させた（Appendix 1 を参照）。

本調査は予備調査から約 1 ヶ月半後に集団で授業中に実施した。実験参加者には，社会に対する意識についての質問紙に回答するよう求めた。質問紙は 2 部構成になっており，第 1 部で，ステレオタイプ接触と表明の操作を行った。女性ステレオタイプ条件では，予備調査から女性的と評定された 5 ポジティブ特性（優雅な，おっとりした，おしとやかな，かわいらしい，家庭的）を呈示し，男性ステレオタイプ条件では，男性的と評定された 5 ポジティブ特性（堂々とした，自信のある，勇敢な，指導力のある，統率力のある）を呈示し，男性と女性にどの程度あてはまるかを 7 件法で回答させた（かなり男性にあてはまる (-3) - かなり女性にあてはまる (+3)）。統制条件は感情を表す 5 項目（気持ちが引き締まっている・頭の中がすっきりしている・面倒くさい・集中できない・戸惑いを感じている）に 7 件法で回答させた。第 2 部では，ジェンダー関連正当性認知 8 項目（ $\alpha = .56$ ）および一般正当性認知 8 項目（ $\alpha = .64$ ）をランダムに並べた尺度に回答させた（事後評定）。最後にディブリーフィングを行い，研究の本当の目的を説明し，データの使用許可を得られた参加者からのみ質問紙を回収し，実験を終了した。

## 結果

**操作チェック** ステレオタイプの評定をおこなったかを検討するため，特性 5 語の評定の平均値を求め 0 からの  $t$  検定をおこなった。女性ステレオタイプ条件では有意に女性的であると評定され（ $M = 1.41, t(107) = 11.94, p < .001$ ），性差は見られなかった（ $t(33) = 0.57, ns$ ）。男性ステレオタイプ条件でも有意に男性的であると評定され（ $M = -.69, t(107) = 6.04, p < .001$ ）。性差は見られなかった（ $t(32) = 0.01, ns$ ）。これらの結果から操作は成功していたと考えられる。

**正当性認知** ジェンダー関連正当性認知と一般正当性認知の事前得点と事後得点の平

均値を求め、事後得点から事前得点を引き変化量を求めた。この2つの変化量に対して、参加者性×表明タイプ×正当タイプの分散分析を行ったところ、正当タイプの主効果のみが有意で ( $F(1, 102) = 10.67, p < .01$ )、仮説は支持されなかった。

**表明の程度との関係** ステレオタイプの的に評定した度合いを条件ごとに標準化し(統制群はポジティブな度合い)、変化量に対して、参加者性×表明タイプ×表明度×正当タイプの全ての交互作用項を含む一般線形分析を行った。正当タイプの主効果、表明タイプ×表明度×正当タイプが有意であった ( $F(1, 96) = 6.55, p < .01$ ;  $F(2, 96) = 3.98, p < .05$ )。後者の効果は、下位検定の結果は明確ではないものの、ジェンダー関連正当化では、男性にポジティブな男性的特性を付与するほど、正当化が弱まるのに対して、一般的正当化では、男性にポジティブな男性的特性を付与するほど、正当化が強まることによる効果である。もっと重要なことには、参加者性×表明度の交互作用効果に加え ( $F(1, 96) = 4.80, p < .01$ )、参加者性×表明タイプ×表明度の交互作用効果が有意で ( $F(2, 96) = 3.78, p < .05$ )、4要因の交互作用効果は有意ではなかった点である ( $F(2, 96) = 0.87, ns$ )。参加者性×表明タイプ×表明度の交互作用効果を検討するために、表明タイプごとに、参加者性×表明度×正当タイプの一般線形モデルによる分析を行ったところ、統制条件と男性ステレオタイプ条件では、参加者性×表明度の交互作用効果は有意ではなかったが ( $F(1, 35) = 0.50, ns$ ;  $F(1, 30) = 1.25, ns$ )。女性ステレオタイプ条件では参加者性×表明度の交互作用効果が有意であった ( $F(1, 31) = 9.47, p < .01$ )。ジェンダー正当性認知と一般正当性認知の変化量の平均値を取った上で、表明度の -1SD と 1SD の位置で、この効果をプロットしたのが Figure 1 である。男性参加者では、女性に対してポジティブな表明をするほどシステム正当化が高まるが ( $\beta = 0.34, p < .02$ )、女性参加者ではむしろ逆の傾向が見られた ( $\beta = -.21, p = .095$ )。

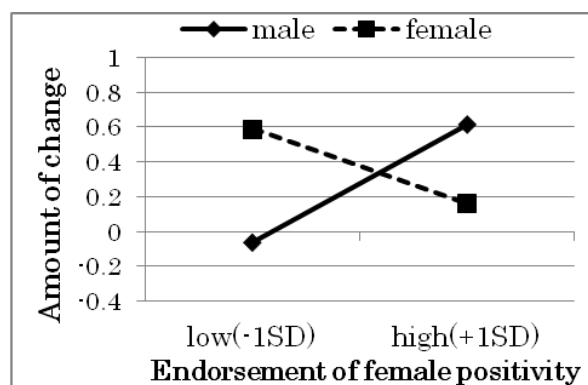


Figure 1. System justification as a function of sex and endorsement of female stereotypic positivity.

#### 考 察

女性ポジティブ特性に接触するだけで、女性参加者はシステム正当性認知を高める

であろうという仮説は支持されなかった。しかし、女性ポジティブ特性が女性にあてはまると表明すると、男性参加者においては、ジェンダー・システムにとどまらず一般システムに対しても、正当性認知が高まった。変化量を従属変数にしているため、もともと正当性認知が高いほど性別ステレオタイプの表明しやすいという可能性は排除でき、男性においては、性別ステレオタイプ表明がジェンダー・システムおよび一般システムの正当性を高く認知させる効果があることが示された。

本研究の先行研究である Jost & Kay (2005, Study 1) においては、女性においてのみステレオタイプに接触するだけで表明とは無関係に現状のシステムを正当と見なすようになるという結果が得られていた。女性のみで見られた理由として、女性の方が状況の影響を受けやすいこと、女性の方が現状に対してアンビバレントな態度を元々持っていることを挙げている。また、接触するだけで十分であった説明として、ステレオタイプが文化的に広まっているために、それを表明することとは無関係であると解釈している。

しかし、表明することが影響を与えることは、システム脅威があるほどシステムを正当化するステレオタイプを表明しやすくなるという先行研究 (e.g., Jost, Kivetz, Rubini, Guermandi, & Mosso, 2005; Kay, Jost, & Young, 2005) とはむしろ一貫する結果である。また、女性のみに見られたことの説明となっていた、ジェンダー・システムや一般的システムを正当と見る傾向に元々性差がある点は、本研究の事前の評定において、ジェンダー・システムの正当性の認知や一般システムの正当の認知に性差が見られていないことから本研究には適用できない<sup>2</sup>。この事前において性差がないことにより、男性においてのみ表明の効果が見られたことが説明できるかもしれない。

本研究においては、接触するだけで現状のシステムを正当と見なすかどうかに関しては、明確な結果が得られなかったため、7章で紹介する研究では、システムに対する脅威が顕現化した状態で、伝統的な女性ステレオタイプに合致した女性に接するとジェンダー・システムをどのような認知するかについて再度検討をおこなった。

## 引用文献

- Cuddy, A. J., Fiske, S. T., & Glick, P. (2008). Warmth and competence as universal dimensions of social perception: The stereotype content model and the BIAS Map. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 40, pp. 61-149). San Diego, CA: Academic Press.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed)

---

<sup>2</sup> 一般的システム正当性の認知の事前評定では男性 ( $M = 3.34, SD = 0.76$ ) と女性 ( $M = 3.23, SD = 0.55$ ) に性差は見られなかった ( $t(104) = 0.85, ns$ )。また、ジェンダー・システムの正当性認知の事前評定でも男性 ( $M = 3.77, SD = 0.69$ ) と女性 ( $M = 3.71, SD = 0.59$ ) に性差は見られなかった ( $t(104) = 0.52, ns$ )。



- stereotype content: Competent and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 878-902.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (2001). Ambivalent sexism. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 33, pp. 1150-188). San Diego, CA: Academic Press.
- Jost, J. T., & Banaji, M. (1994). The role of stereotyping in system-justification and the production of false consciousness. *British Journal of Social Psychology*, 33, 1-27.
- Jost, J. T., & Kay, A. C. (2005). Exposure to benevolent sexism and complementary gender stereotypes: Consequences for specific and diffuse forms of system justification. *Journal of Personality and Social Psychology*, 88, 498-509.
- Jost, J. T., Kivetz, Y., Rubini, M., Guermandi, G. & Mosso, C. (2005). System-justification functions of complementary regional and ethnic stereotypes: Cross-national evidence. *Social Justice Research*, 18, 305-333.
- Jost, J. T., Pietrzak, J., Liviatan, I., Mandisodza, A. N., & Napier, J. L. (2008). System justification as conscious and nonconscious goal pursuit. In J. Y. Shah & W. L. Gardner (Eds.), *Handbook of motivation science* (pp. 591-605). New York: Guilford.
- Judd, C. M., James-Hawkins, L., Yzerbyt, V., & Kashima, Y. (2005). Fundamental dimensions of social judgment: Understanding the relations between judgments of competence and warmth. *Journal of Personality and Social Psychology*, 89, 899-913.
- Kay, A. C., & Jost, J. T. (2003). Complementary justice: Effects of "poor but happy" and "poor but honest" stereotype exemplars on system justification and implicit activation of the justice motive. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 823-837.
- Kay, A. C., Jost, J. T., & Young, S. (2005). Victim-derogation and victim-enhancement as alternate routes to system-justification. *Psychological Science*, 16, 240-246.
- Kay, A. C., Jost, J. T., Mandisodza, A. N., Sherman, S. J., Petrocelli, J. V., & Johnson, A. L. (2007). Panglossian ideology in the service of system justification: How complementary stereotypes help us to rationalize inequality. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 39, pp. 305-358). San Diego, CA: Academic Press.
- 鈴木淳子 (1994). 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成 心理学研究, 65, 34-41.

## Appendix 1 正当化関連尺度

### 一般システム正当性認知尺度

社会は人々が通常受けるに値するものを得るように作られる。

日本社会は根本的に再構築される必要がある。(R)

日本の社会は年々悪くなっている。(R)

一般に、日本の政治システムは適切に作用している。

すべての人は健康と幸福において公平である。

たいていの政策はより大きな利益を与えている。

一般に、社会は公平であると思う。

日本は世界で一番住みやすい国である。

(R)は逆転項目である

### ジェンダー関連システム正当性認知尺度

社会は男性と女性が通常受けるに値するものを得るように作られる。

一般的に、家庭内での分業は行われるべくして行われている。

ジェンダーや性別での分業に関わるたいていの方針は、より大きな利益を与えている。

社会における性差別は年々ひどくなっている。(R)

一般に男性と女性の関係は公平である。

女性にとって、日本は世界で一番住みやすい。

性役割は根本的に再構築される必要がある。(R)

すべての人（男性か女性かにかかわらず）は、健康と幸福において公平である。

(R)は逆転項目である

## 7章 システムの脅威となる外集団の顕現化は 女性サブカテゴリーに対する偏見やステレオタイプ化を強めるか？

沼崎 誠<sup>1</sup> 石井 国雄<sup>1</sup> 佐々木 香織<sup>1</sup> 天野 陽一<sup>1</sup> 高林 久美子<sup>2</sup>

(<sup>1</sup> 首都大学東京大学院人文科学研究科) (<sup>2</sup> 一橋大学大学院社会学研究科)

本章では、システムの脅威となる外集団の顕現化がシステム正当化動機を高め、女性サブカテゴリー (i.e., 伝統的女性, 非伝統的女性) に対して偏見を示すようになるのか、また、相補的な女性サブカテゴリー・ステレオタイプ化を強化するのか、を検討した研究を報告する。研究1では男性を参加者にして、研究2では女性を参加者にして、検討をおこなった。本研究では、6章では明確には得られなかった伝統的女性ステレオタイプに合致した人に接触するとジェンダー・システムの正当性認知が高まるかもあわせて検討をおこなった。

システム正当化理論は、Jost とその共同研究者によって提唱された理論である (e.g., Jost & Banaji, 1994; Jost, Pietrzak, Liviatan, Mandisodza, & Napier, 2008; Kay, Jost, Mandisodza, Sherman, Petrocelli, & Johnson, 2007)。この理論によれば、人には現状を維持しようとする目標が存在し、あるシステムが確固たるものとなっていると、人はそのシステムの存在と安定を維持しようとする動機づけられる (システム正当化動機)。このような現状維持目標を持つ理由として、人が基本的に持つ、一貫性や確実性への認識論的欲求と脅威や苦悩に対処し人生に意味を見いだす存在論的欲求を想定する。今現在において実際に存在していない別のシステムに比べ、現状のシステムは、社会的地位の高い人にも低い人にとっても、馴染みがあり、予測可能で、確実であるため、認識論的欲求を満たせる。また、社会的地位の高い人にとって、不当に高い地位を占めていると考えることは罪悪感という苦悩を感じるため脅威となる。このとき、現状は正当で意味のあるものであるという認識をもてば、この脅威に対処することができる。一方、社会的地位の低い人は、フラストレーションや怒りといった苦悩を感じやすい。しかし、このとき地位の低さが正当なものであると認識できれば、フラストレーションを低減し幸福感を得ることができる。

システムを正当化する1つの手段として、ステレオタイプの使用が指摘されている (e.g., Kay et al., 2007)。その中でも特に研究が多くおこなわれているのが、ジェンダー・ステレオタイプに関する研究である。

### ジェンダー・ステレオタイプの記述的側面とシステム正当化

伝統的で相補的な「男性は有能であるが冷たい」「女性は温かいが無能である」という両面価値的な記述的ステレオタイプは、伝統的な性役割分業を基盤とした現状のシステムを正当化する。女性に対して「温かいが無能である」というステレオタイプ

を適用することは、女性が社会的に従属的な地位にいることを正当化する。そして、このようなステレオタイプを適用して保護の対象にすることは、女性にとっても一定の利益になるので、低い社会的立場に従わせる働きをする。一方、男性に対して「有能であるが冷たい」というステレオタイプを適用することは、男性が高地位にいることを有能さが説明するとともに、温かさに欠けるので、女性のサポートを必要とする相補的な役割を正当化する。また、このような相補的で両面価値的ステレオタイプは、システムにおいて高地位を占めている男性にもネガティブな特性を付与し、一方、低地位を占めている女性にもポジティブな特性を付与することになり、世の中はバランスが取れているという認知を生じさせ、このことが現状のシステムの正当性を高めることになる。Jost and Kay (2005, Study 1) は、このような記述的なジェンダー・ステレオタイプが、システム正当化手段として使用されることを、女性の望ましいステレオタイプである温かさ特性を意識化させると、ジェンダー・システムが正しいという信念が強まるかを検討することにより明らかにしている。実験参加者は男女大学生で、男女の特性に関する信念を測定するとして、質問紙に含まれた特性がどのくらい男性と女性に当てはまるか 10 点尺度で回答させた。質問紙に含まれた特性のパターンは 4 通りで (①5 つの温かさ特性, ②5 つの有能さ特性, ③両方の特性 10 個, ④統制群 (何も回答しない)), 実験参加者はいずれかの質問紙に回答した。次に、ジェンダー・システムの正当性を尋ねる質問に回答させた (項目例: 一般に、男女間の関係は公正である)。結果として、男性は女性に比べ、ジェンダー・システムは正当であると評定していたが、温かさに関するステレオタイプに接触した女性参加者は、男性と同程度にジェンダー・システムを正当だと見なすようになった。Jost and Kay (2005, Study 2) では、このような効果がジェンダー・システムばかりではなく一般的なシステムへの正当性認知 (項目例: 一般に社会は公正である) でも見られること示している。これらの結果は、通常は現在のジェンダー・ステレオタイプに満足していない女性であっても、女性の望ましいステレオタイプを回答することにより、ジェンダー構造を含む現状のシステムを正当なものとして認識するようになることを示しており、ジェンダーに関する記述的ステレオタイプがシステム正当化として使われうることを示している。

Jost and Kay (2005) は、男性と女性の記述的ステレオタイプがシステム正当化機能を果たすことを示しているが、ジェンダー・ステレオタイプの重要な特徴として、記述的側面だけではなく規範的側面があること、サブカテゴリー・ステレオタイプが顕著であること、が指摘されている。このような特徴はシステム正当化とどのように関わるであろうか。

#### ジェンダー・ステレオタイプの規範的側面とシステム正当化

ジェンダー・ステレオタイプの 1 つの重要な特徴として、このステレオタイプには

記述的な側面ばかりではなく、規範的側面があることが指摘されている (Burgess & Borgida, 1999) . 記述的ステレオタイプとは、「〇〇は××である」という信念であるが、規範的ステレオタイプは「〇〇は××であるべき」という信念である。ある集団の社会システムの中での立場がステレオタイプの記述的内容を決めるのならば、社会システムで特定の立場を占めている集団は、記述的ステレオタイプとほぼ同じ内容で、立場に合致した特性を持っているべきであるという信念 (規範的ステレオタイプ) も生じると考えられる。ジェンダーに関する記述的ステレオタイプは、男性や女性を特徴づける属性や役割や行動に関する信念であるのに対して、規範的ステレオタイプでは、男性や女性が従うように期待される属性や役割や行動に関する信念である。規範的ステレオタイプの機能として社会における権力の不平等を維持させるシステム正当化機能を果たすとされる (Burgess & Borgida, 1999) . 差別との関係で見ると、記述的ステレオタイプでは、ステレオタイプと一致している (ように見える) 人物が、差別待遇を受けやすくなるのに対して、規範的ステレオタイプでは、ステレオタイプと不一致な人物が差別待遇を受けやすい。具体的には、一般に女性は「温かいが無能である」という記述的ステレオタイプを持たれているので、このステレオタイプでカテゴリー化されると、保護や賞賛の対象とはなるものの高い地位などに就けないなどの慈愛的な偏見や差別を受けやすい。一方、キャリア女性やフェミニストといった女性は、「無能であっても温かくあるべき」という規範的女性ステレオタイプに一致しないので、敵意的偏見の対象となりやすい (Glick & Fiske, 2001a, b) .

規範的ステレオタイプの機能が主にシステム正当化機能にあるのならば、システム正当化動機が高まった時に規範的ステレオタイプが使用されやすいと予測できる。Lau, Kay, and Spencer (2008) は、カナダ人男子大学生を実験参加者にして、この予測を検証している。カナダの社会/経済/政治状況が悪化しているという記事か、状況は安定し望ましいという記事のいずれかを読んだ後に、実験参加者は複数の女性のプロフィールをみて、恋人にしたいかどうかを回答した。プロフィールには伝統的性役割に一致した女性と不一致な女性が複数含まれていた。システムに対する脅威を受けた男性参加者は、現状のシステム (男女の不平等) を正当化する伝統的性役割規範に一致したステレオタイプの女性に対して、好意を向けるようになっていた。このことは、規範的ステレオタイプに一致した人物に対して、ことさら好意を向けることにより、システムに対する脅威に対抗して、現システムを維持しようとしたと考えられる。本研究の第1の目的は、日本においてもこのような現象が見られるかを、Lau et al. (2008) の独立変数の操作を変えて概念的追試を行うことにある。ただし、Lau et al. (2008) においては、男性を参加者とした検討のみしかおこなわれていなかったが、本研究では、研究1での男性を参加者とした検討に加え、研究2では女性を参加者として検討した。

## サブカテゴリー・ステレオタイプとシステム正当化

ジェンダー・ステレオタイプのもう 1 つの重要な特徴として、サブカテゴリー・ステレオタイプが顕著であることが指摘されている。男性ステレオタイプや女性ステレオタイプといった単純なステレオタイプがあるのではなく、サブカテゴリー・ステレオタイプが広く、女性において特に顕著に、存在していることが指摘されている (e.g., Glick, Zion, & Nelson, 1988; Eagly, Mladinic, & Otto, 1991)。そして、女性のサブカテゴリー・ステレオタイプも、単純な男性ステレオタイプや女性ステレオタイプと同様に、「温かさ」と「有能さ」という次元で理解でき、かつ、ポジティブな側面とネガティブな側面の双方を含むアンビバレントなものであることが指摘されている (e.g., Glick & Fiske, 2001a, 2001b)。伝統的女性 (e.g., 専業主婦) は、女性ステレオタイプに合致しており、「温かいが無能である」というステレオタイプが持たれている。一方、非伝統的な社会進出型の女性 (e.g., キャリア女性) は、「有能であるが冷たい」というステレオタイプが持たれている。このような、女性のサブカテゴリー・ステレオタイプもシステム正当化機能を果たしているであろうか。この点を検討することが本研究の第 2 の目的である。

システムに対する脅威が高まった時に、特定の両面価値的なステレオタイプの適用が強まるのならば、この両面価値的なステレオタイプがシステム正当化機能を果たしていることを示すことができる。この方法で、両面価値的なステレオタイプがシステム正当化機能を果たしたことを示した研究として、Kay, Jost, and Young (2005, Study 1a) は、両面価値的な勢力者ステレオタイプと非勢力者ステレオタイプがシステム正当化機能を果たすことを示している。彼らは、アメリカ人を参加者にして、システム脅威条件ではアメリカ社会/経済/政治システムが危機に瀕しているという記事を読ませ、システム非脅威条件ではアメリカの社会/経済/政治システムは相対的によいものであるという記事を読ませた。その後、勢力者と非勢力者が有能さ関連次元 (知的/独立的) と温かさ関連次元 (幸福さ) で相対的にどのように異なるかを回答させた。社会的地位が高い勢力者は有能さ次元では高く、温かさ次元では低いと相補的に評定される傾向にあったが、この両面価値的傾向はシステムに脅威が与えられた時に強まっていた。また、Jost, Kivetz, Rubini, Guermandi, and Mosso (2005, Study 3) では、この方法を用いて、ユダヤ社会内での格差のある地位集団に関するステレオタイプが、システム正当化機能を果たしていることを示している。社会/経済的に地位の高いアッシュケナージ系は有能であるが冷たいというステレオタイプを持たれおり、社会/経済的に地位の低いセファルディ系は温かいが無能であるというステレオタイプが持たれているが、Kay et al. (2005) とほぼ同様のシステム脅威の操作を行った後では、この相補的な両面価値的ステレオタイプが、アッシュケナージ系の参加者でもセファルディ系の参加者でも、より強調されて表明されることを見いだしている。本研究においては、記述的な両面価

値的なジェンダー・サブカテゴリー・ステレオタイプがシステム正当化機能を果たしているかを明らかにするために、「温かいが無能である」という伝統的女性ステレオタイプと「有能であるが冷たい」という非伝統的女性ステレオタイプの適用が、システムに対する脅威が顕現化した時に、強まるかを検討した。

#### システム脅威としての脅威的外集団の顕現化

本研究においては、日本のシステムに対する脅威の顕現化として、現状の社会/経済/政治システムが危機的状況にあることを示す記事を読ませる操作 (e.g., Kay & Jost, 2003; Kay et al., 2005; Lau et al. 2008) ではなく、脅威的な外集団を顕現化する操作を用いた。関連する操作として、プライムによってテロリズムを顕現化させる操作があり、この操作によってシステム正当化動機が高まり、現状のシステムの正当性の表明が強まることが実証研究により示されている。Landau, Solomon, Greenberg, Cohen, Pyszczynski, Arndt, Miller, Ogilvie, and Cook (2004, Study 3) は、アメリカ人を実験参加者にして、2001年9月11日のアメリカ同時多発テロ事件について考えた時の情動などを記述しテロリズムを顕現化した参加者は、まもなく受けるテストについて記述した参加者に比べ、当時の Bush 大統領への支持が高まることを見いだしている。また、Ullrich and Cohrs (2007) は、スペイン列車爆破事件の直後にドイツ人を実験参加者にして、この事件について概要を見せられ質問を受けた参加者は、統制条件の参加者に比べて、ドイツの現状のシステムの正当性を表明する傾向が強いことを見いだしている。これらの結果は、現状のシステムに対する脅威となるテロリズム顕現化が、現状のシステムの正当化の表明に繋がることを示唆している。Landau et al. (2004) は、この効果を存在脅威管理理論 (e.g., Greenberg, Solomon, & Arndt, 2008; Greenberg, Solomon, & Pyszczynski, 1997) の観点から死すべき運命の顕現化として解釈しているが、Ullrich & Cohrs (2004) は、テロリズムの顕現化が、少なくともドイツ人参加者には死を顕現化させないことを示し、死すべき運命の顕現化がなくとも、テロリズムといった現システムへの脅威がシステム正当化に繋がることを示している。このように物理的な脅威となる事態が顕現化するとシステム正当化動機を高めるとするならば、現状の日本にとって軍事的脅威となる国や地域が顕現化するだけで、システム正当化動機が高まると考えられる。そこで、本研究では、研究実施時に近い調査において (Yomiuri Online, 2007) 、日本にとって最も軍事的な脅威となる国や地域に挙げられていた北朝鮮を顕現化させることの効果について検討をおこなった。

#### 本研究

ここまで議論をしてきた問題を検討するために、本研究においては、日本のシステムに対する脅威となる外集団 (北朝鮮) が顕現化した状況と顕現化しない状況で、伝統的性役割に一致した女性か一致しない女性のプロフィールを呈示して、その女性に対する偏見 (第1の目的) とステレオタイプの適用 (第2の目的) とを測定した。

さらに、従属変数として最後に慈愛的偏見尺度 (Glick & Fiske, 1996; 宇井・山本, 200) にも回答させた。慈愛的偏見とは、家父長的イデオロギーに基づく、伝統的性役割と属性のジェンダー差異の存在を肯定し伝統的性役割に従う女性に対して向ける親密さや好意を良いものと見なす信念である。家父長制のイデオロギーには、男性は女性よりも勢力を持つべきだという支配的温情主義 (dominant paternalism) とともに家父長的温情主義 (protective paternalism) があり、男性が男性支配を正当化するために、勢力に関わる作動性を女性に付与せず高い地位を与えない見返りとして、男性は自分に依存する女性を保護し養うという義務を負っていることを指す。この保護的温情主義が、女性に守られる立場を与え、そして、それに伴う望ましい特性 (作動性低ポジティブ特性: 可憐さ, 純真さ) を女性に付与し、女性の補助的役割および地位の低さを維持する装置となる。つまり、女性に対して一見すると望ましく見える保護的温情主義は、男性にとっても女性にとっても、社会的役割と属性のジェンダー差異を前提とした現存のシステムを維持する装置として機能することとなる (Jost & Kay, 2005; Jost & Hamilton, 2005)。そのため、慈愛的偏見の表明は伝統的ジェンダー・システムの正当性の表明と考えることができよう。そして、本研究では、慈愛的偏見を女性に対する評定のあとに測定し、日本のシステムに対する脅威となる外集団が顕現化した状況では伝統的ジェンダー・システムを肯定するかを検討し、さらに、6 章でも検討した、伝統的性役割に一致した女性に接した時には、伝統的ジェンダー・システムの正当性の認知が高まるかをあわせて検討した (第3の目的)。

## 研究 1

研究1では、Lau et al. (2008) にならい、男性を参加者にして、システムに対する脅威がある時に、伝統的性役割に一致した女性 (専業主婦) と不一致な女性 (キャリア女性) に対する評価を行わせた。また、最後に、伝統的ジェンダー・システムの正当性の表明と考えられる慈愛的偏見を測定した。日本のシステムに対する脅威の顕現化として、Lau et al. (2008) が用いた、現状の社会/経済/政治システムが危機的状況にあることを示す記事を読ませる操作ではなく、脅威的な外集団を顕現化する操作を用いて検討をおこなった。

本研究の目的は3つあった。第1の目的は、日本において Lau et al. (2008) の概念的追試を行うことであり、日本においても、システムに対する脅威を受けた男性参加者は、現状のジェンダー・システムを正当化する伝統的性役割規範に一致した女性に対して好意を向けるようになるかを検討することにあつた。この点に関する仮説1として、男性参加者は、脅威的な外集団が顕現化すると、専業主婦に対してより好意を向けるだろう、を設けた。



第 2 の目的は、男女ステレオタイプばかりではなく、女性のサブカテゴリー・ステレオタイプもシステム正当化機能を果たしているかを検討することにあつた。もしシステム正当化機能を果たしているならば、システムに対する脅威を受けた男性参加者は、女性のサブカテゴリーに対するステレオタイプ化が強まると考えられる。そこで、仮説 2 として、男性参加者は、脅威的外集団が顕現化すると、専業主婦はより温かく無能であり、キャリア女性はより有能で冷たいと評定するであろう、を設けた。

第 3 の目的は、6 章では明確に見られなかった、伝統的女性ステレオタイプに合致した女性に接すると、伝統的ジェンダー・システムの正当性を高く認知をするようになるかを検討することにあつた。そこで、仮説 3-1 として、男性参加者は、専業主婦を評定したときにはキャリア女性を評定したときに比べて、より慈愛的偏見を示すようになるだろう、を設けた。このような現象の背景にはシステム正当化動機が関わっていると考えられるため、このような傾向は、システムに対する脅威を受けた場合に強くなると考えられよう。そこで、仮説 3-2 として、脅威的外集団が顕現化した時に仮説 3-1 の傾向は強まるであろう、を設けた。

また、女性サブカテゴリーへのステレオタイプ化や偏見が平等主義的性役割観によって調整されることが先行研究から示されているため（沼崎, 2007; 沼崎他, 2006）, 平等主義的性役割観の効果についてもあわせて検討をおこなった。

## 方法

**実験参加者** 本実験の約 2 ヶ月前に授業時間に集団でバッテリー・テストとして平等主義的性役割観尺度短縮版（SESRA：鈴木, 1994）と日本語版慈愛的偏見尺度（宇井・山本 2001）に回答をしていた明星大学男子大学生 49 名。事前調査および本実験で回答に不備の多い参加者を除き 41 名を分析の対象とした<sup>1</sup>。

**実験計画** 脅威的外集団プライム（脅威プライム vs. 統制プライム）×評定対象女性（専業主婦 vs. キャリア女性）×平等主義的性役割観（SESRA 連続変量）の参加者間計画であつた。

**手続き** 事前のバッテリー・テストで平等主義的性役割観尺度短縮版と慈愛的偏見尺度日本語版に回答していた参加者に対して、授業中に集団で本実験を実施した。参加者には複数の予備的調査に参加するように依頼した。その際に、参加は自由であり質問紙に回答しなかったり、提出をしなかったりしても、不利益を受けないことを説明した。その後、ランダムに質問紙を配布した。

質問紙は 3 部構成になっており、第 1 部として、最近のニュースに関する知識を聞くと称し、脅威プライム条件の参加者には、「『北朝鮮』に関して知っていることを

---

<sup>1</sup> 女性も本実験では同時に実施したが、参加者が少なく分析に耐える人数がいなかったため、ここでは報告しない。

以下に自由に記述してください。特に日本との関係で知っていることをお書きください」と教示して 4 分間記述させた。統制プライム条件の参加者には、『北朝鮮』の部分、『EU 諸国』に変えて記述させた。

第 2 部として、印象形成に関する調査と称し、ある女性のプロフィールを読み印象を回答するように依頼した。参加者には専業主婦かキャリア女性のいずれかのプロフィールを提示した。専業主婦のプロフィールとして、32 歳既婚で 2 歳の子どもを持ち仕事を持たない女性のプロフィールを見せた。キャリア女性として 32 歳の未婚で子どもを持たない雑誌記者の女性のプロフィールを見せた。さらに、プロフィールには、予備調査により専業主婦またはキャリア女性に典型的とされた趣味や将来の希望などの情報を含めた。このプロフィールは、沼崎・高林・天野（2006）と同様のプロフィールを用いた（Appendix 1 参照）。実験参加者は、家庭女性かキャリア女性のいずれかのプロフィールを読んだ後、7 件法の印象評定尺度に回答した。好意を尋ねる質問項目として、「この女性に対してどの程度好感が持てますか?」、「この女性はどの程度魅力的な人だと思いますか?」、「将来、このようなタイプの女性と恋人として付き合いたいですか?」、「将来、このようなタイプの女性と結婚したいですか?」の 4 項目 ( $\alpha = .86$ ) に対して回答させた。仕事仲間としての好意を尋ねる質問項目として、「あなたが将来就職したとして、職場の同僚として、このようなタイプの女性と一緒に働きたいと思えますか?」、「このようなタイプの女性と一緒に作業を試みたいと思えますか?」、「あなたが将来就職したとして、職場の上司として、このようなタイプの女性と一緒に働きたいと思えますか?」、「あなたが将来就職したとして、職場の部下として、このようなタイプの女性と一緒に働きたいと思えますか?」の 4 項目 ( $\alpha = .85$ ) に回答させた。さらに、性格特性語 40 語に対して、「まったく当てはまらない (1)」から「非常に当てはまる (7)」の 7 件法で印象評定をさせた。性格特性語は、伝統的な意味での男性的ポジティブ特性 10 語 (e.g., 勇敢な, 分析的な), 伝統的な意味での男性的ネガティブ特性 10 語 (e.g., 傲慢な, 無愛想な), 伝統的な意味での女性的ポジティブ特性 10 語 (e.g., 親しみやすい, おしとやかな), 伝統的な意味での女性的ネガティブ特性 10 語 (e.g., おせっかいな, 頼りない) から構成されていた (Appendix 2 参照)。その他いくつかの質問項目にも回答させた後、最後に、操作チェックの項目として、「この女性はどの程度キャリア志向だと思いますか?」と「この女性はどの程度家庭志向だと思いますか?」の 2 つの項目に 7 件法で回答させた。

第 3 部として、個人差に関する調査と称し、いくつかの質問紙に回答させた。その中には、慈愛的偏見尺度と脅威の操作チェック項目が含まれていた。脅威の操作チェック項目として、「以下に挙げる国や地域は日本にとってどの程度脅威だと思いますか?」という質問に対して、「北朝鮮」および「EU 諸国」を含む 18 の国や地域に関

して、「非常に脅威である (7)」から「全く脅威ではない (1)」の 7 件法で回答させた。

最後に、ディブリーフィングを行い、研究の本当の目的を説明し、データの使用許可を得られた参加者からのみ質問紙を回収し、実験を終了した。

## 結果

**操作チェック** 脅威の操作が有効であったかを確認するために、北朝鮮と EU 諸国が日本にとって脅威になるかの評定に対して、対応のある  $t$  検定を行ったところ、北朝鮮の方が EU 諸国に比べ脅威であると評定されていた (北朝鮮  $M = 5.98$ , EU 諸国  $M = 3.93$ ;  $t(40) = 5.38, p < .001$ )。評定対象女性の操作が有効であったかを確認するために、家庭志向度とキャリア志向度への評定に対して、SESRA を標準化した上で、プライム×対象×SESRA の全ての効果を含む一般線形分析を行ったところ、それぞれ、対象の主効果のみが有意であり ( $F(1, 33) = 30.03, p < .001$ ;  $F(1, 33) = 48.42, p < .001$ )、専業主婦 ( $M = 6.10$ ) はキャリア女性 ( $M = 3.05$ ) に比べて家庭志向が高く、専業主婦 ( $M = 4.05$ ) はキャリア女性 ( $M = 6.10$ ) に比べキャリア志向が低いと評定されていた。これらの結果は、脅威の操作および評定対象の操作が成功したことを示している。

**好意** 好意の指標に対して、SESRA を標準化した上で、プライム×対象×SESRA の全ての効果を含む一般線形分析を行ったところ、対象の主効果に加え ( $F(1, 33) = 9.50, p < .05$ )、仮説 1 から予測されるプライム×対象の交互作用に有意に近い効果がみられた ( $F(1, 33) = 3.62, p = .066$ )。この効果は Figure 1 に示したとおりである。対象人物ごとにプライムの単純主効果を検討したところ、統制プライム条件ではキャリア女性と専業主婦の間に好意に差は見られなかったが ( $F < 1, ns$ )、脅威プライム条件では専業主婦の方がキャリア女性に比べて好意を持たれていた ( $F(1, 33) = 12.76, p < .01$ )。また、プライムごとに対象の単純主効果を検討したところ、キャリア女性に対する好意ではプライムの効果は見られなかったが ( $F(1, 33) < 1, ns$ )、家庭女性に対する好意では統制プライム条件に比べ脅威プライム条件で高かった ( $F(1, 33) = 4.82, p < .05$ )。この結果は仮説 1 を支持するものであった。

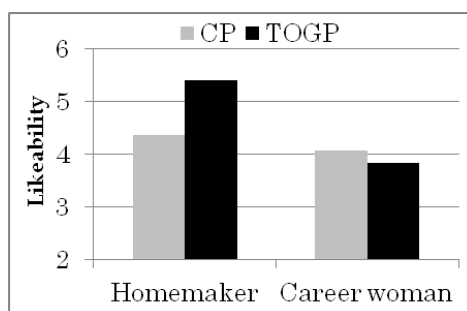


Figure 1. Likeability as a function of priming and target.

CP: Control Priming, TOGP: Threatening Out-Group Priming

**仕事仲間好意** 仕事仲間の指標に対して、SESRA を標準化した上で、プライム×対象×SESRA の全ての効果を含む一般線形分析を行ったところ、有意になった効果はなかった ( $F_s < 1.65, ns$ ) .

**性格評定** 男性的ポジティブ 10 特性 ( $\alpha = .96$ ) , 女性的ポジティブ 10 特性 ( $\alpha = .83$ ) , 男性的ネガティブ 10 特性 ( $\alpha = .90$ ) , 女性的ネガティブ 10 特性 ( $\alpha = .79$ ) に対する評定の平均値を求めた. この値に対して、SESRA を標準化した上で、SESRA×対象×プライム×特性語ジェンダー×特性語感情価の全ての交互作用効果を含む一般線形分析を行った (後 2 者は参加者内要因) . 対象の主効果、特性語感情価の主効果、対象×特性語ジェンダーの交互作用効果が有意であったが ( $F(1, 33) = 7.15, p < .05$ ;  $F(1, 33) = 48.01, p < .001$ ;  $F(1, 33) = 55.76, p < .001$ ) , プライムの含む効果で有意になったものはなく ( $F_s < 2.39, ns$ ) , 仮説 2 は支持されなかった.

**慈愛的偏見**<sup>2</sup> 本実験の慈愛的偏見尺度の得点に対して、事前の慈愛的偏見尺度の得点を共変量にして、プライム×対象×SESRA の全ての効果を含む一般線形分析を行った. プライムの主効果は有意にならなかったが ( $F(1, 29) = 0.11, ns$ ) , 共変量の効果に加えて ( $F(1, 29) = 37.86, p < .001$ ) , 対象×SESRA とプライム×対象との交互作用効果が有意であった ( $F(1, 29) = 4.4.3, p < .05$ ;  $F(1, 29) = 4.60, p < .05$ ) .

プライム×対象の効果を検討するために、プライムごとに対象の単純主効果を検討したところ、統制条件では差が見られなかったが ( $F(1, 29) = 2.79, ns$ ) , 脅威条件では、仮説 3-1 から予測されるように、キャリア女性条件に比べて専業主婦条件で、慈愛的偏見が高いという方向で有意に近い差が見られた ( $F(1, 29) = 3.26, p = .081$ ) (Figure 2) . また、対象ごとにプライムの単純主効果を検討したところ、キャリア女性条件では差が見られなかったが ( $F(1, 29) = 2.39, ns$ ) , 専業主婦条件では、統制条件に比べて脅威条件で、慈愛的偏見が高いという方向で有意に近い差が見られた ( $F(1, 29) = 3.66, p = .066$ ) . これらの結果は、システムに対する脅威が顕現化した時には、女性ステレオタイプに合致した女性に接すると、合致しない女性に接した時に比べて、伝統的ジェンダー・ステレオタイプの正当性を高く認知するようになることを示唆しており、仮説 3-2 を支持するものである.

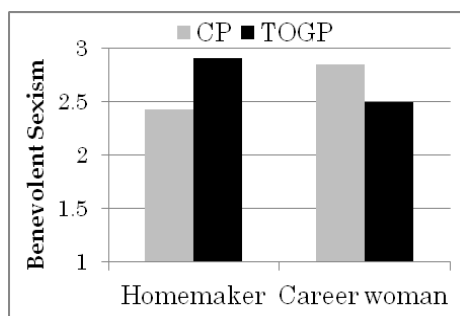


Figure 2. Benevolent Sexism as a function of priming and SESRA.

<sup>2</sup> 慈愛的偏見の分析においては、回答の不備のない 38 名を分析の対象とした.

対象×SESRAの交互作用効果は、下位検定では有意な効果は見られなかったものの、伝統的性役割観を持つとする参加者では専業主婦を評定した時に慈愛的偏見が高まる傾向があるのに対して、平等主義的性役割観を持つとする参加者ではキャリア女性を評定した時に慈愛的偏見が高くなる傾向があることによる効果であった (Figure 3)。

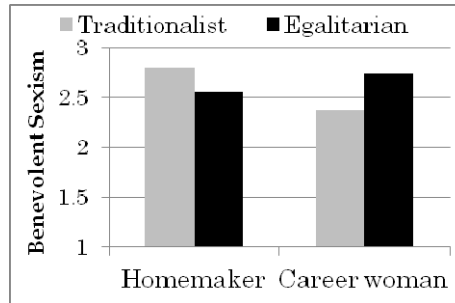


Figure 3. Benevolent Sexism as a function of priming and SESRA.

### 考察

本研究では、システムの脅威となる外集団の顕現化が男性のシステム正当化動機を高め、ステレオタイプに基づく偏見をどのように表出するか、また、女性および女性サブカテゴリーのステレオタイプをどのように使用するか、を検討した。また、女性ステレオタイプに一致した女性と接すると、ジェンダー・システムの正当性認知が高まるか、また、この傾向が脅威の存在によって調整されるかを検討した。

本研究の目的は3つあった。第1の目的は、ステレオタイプの規範的側面に関わるもので、女性の規範的ステレオタイプがシステム正当化機能を果たしているか検討することであった。もし正当化機能を果たしているとすれば、システムの脅威となる外集団が顕現化した時には、規範的ステレオタイプに合致した女性に対する好意が高まると考えられ、「男性参加者は、脅威的外集団が顕現化すると、専業主婦に対してより好意を向けるだろう」という仮説1を設けて検討した。好意の指標において、専業主婦は統制条件に比べ脅威条件において有意に好意を持たれていた。この結果は、恋愛対象としての好意を指標とした Lau et al.(2008)と対応する結果であり、脅威的外集団の顕現化がシステム脅威となり正当化動機を高め、システムの維持に貢献する規範的ステレオタイプに一致した人物に対して、ことさら好意を向けることを示唆する結果である。

第2の目的は、ステレオタイプの記述的側面に関わるもので、女性サブカテゴリー・ステレオタイプがシステム正当化機能を果たしているか検討することであった。もし正当化機能を果たしているとすれば、システムの脅威となる外集団が顕現化した時には、サブカテゴリー集団成員への、ステレオタイプの適用が強まると考えられ、「男性参加者は、脅威的外集団が顕現化すると、専業主婦はより温かく無能であり、キャリア女性はより有能で冷たいと評定されるであろう」という仮説2を設けて検討した。しかし、

性格評定の指標において、このような傾向は見られず、仮説 2 は支持されなかった。

第 3 の目的も、ステレオタイプの記述的側面に関わるものであり、伝統的女性ステレオタイプに合致した女性に接すると、伝統的ジェンダー・システムの正当性を高く認知するようになるかを検討することであり、「男性参加者は、専業主婦を評定したときにはキャリア女性を評定したときに比べて、より慈愛的偏見を示すようになるだろう」という仮説 3-1 と、「脅威的外集団が顕現化した時に仮説 3-1 の傾向は強まるであろう」という仮説 3-2 を設けて検討した。伝統的ジェンダー・システムの正当性の認知の指標とした慈愛的偏見尺度得点において、脅威的外集団が顕現化した時においてのみ、専業主婦を評定するとキャリア女性を評定した場合に比べて、慈愛的偏見尺度得点が高くなるという有意に近い効果が得られた。Jost & Kay (2005) では、女性ステレオタイプに接するだけでシステム正当の認知が高まることは女性参加者においてのみ見られ、男性参加者では見られていなかった。しかし、本研究の結果は、システム脅威がある時には、男性参加者においても、この現象が見られることを示しており、女性ステレオタイプがシステム正当化機能を果たすことをより強く示唆する結果といえよう。また、興味深い個人差が本研究では見られた。慈愛的偏見尺度得点を指標とした分析において、評定女性×SESRA の交互作用が有意で、単純主効果は有意ではないものの、伝統的性役割観を持つとする男性においてのみ、女性ステレオタイプに合致する専業主婦を評定すると合致しないキャリア女性を評定した時に比べて、慈愛的偏見尺度の得点が高まり、平等主義的性役割観を持つとする男性ではむしろ逆の傾向が見られた。この結果は、Jost & Kay (2005) の女性においてのみ見られた、女性ステレオタイプに接するだけでシステム正当の認知が高まる傾向が、ジェンダー・システムとして伝統的システムを信奉している男性にも見られることを示唆するものといえよう。

本研究では、男性の女性ステレオタイプと女性サブカテゴリーのシステム正当化機能を検討した。女性サブカテゴリー・ステレオタイプのシステム正当性機能に関しては明確にできなかったが、女性ステレオタイプの規範的側面がシステム正当化機能を果たしていることは示された。なぜ、女性ステレオタイプと女性サブカテゴリー・ステレオタイプでは機能が異なるのかについての考察は、女性を参加者とした研究 2 の結果とあわせて総合考察で行いたい。

## 研 究 2

研究 1 では男性を参加者として検討をおこなったが、研究 2 では女性を参加者として、女性において女性ステレオタイプの規範的側面と女性サブカテゴリー・ステレオタイプの記述的側面がシステム正当化機能を果たすかの検討をおこなった。実験参加

者を女性にすること以外は、研究 1 と同じ方法をとった。

本研究には 4 つの目的があった。第 1 の目的は、これまで検討されていない女性においても、システムに対する脅威を受けた場合に、現状のジェンダー・システムを正当化する伝統的性役割規範に一致した女性に対して好意を向けるようになるかを検討することにあつた。この点に関する仮説 1-1 として、女性参加者は、脅威的外集団が顕現化すると、専業主婦に対してより好意を向けるだろう、を設けた。

第 2 の目的は、女性において、女性のサブカテゴリー・ステレオタイプもシステム正当化機能を果たしているかを検討することにあつた。そこで、仮説 2 として、女性参加者は、脅威的外集団が顕現化すると、専業主婦はより温かく無能であり、キャリア女性はより有能で冷たいと評定するであろう、を設けた。

第 3 の目的は、伝統的女性ステレオタイプに合致した女性に接すると、伝統的ジェンダー・システムの正当性を高く認知するようになるかを検討することにあつた。そこで、仮説 3-1 として、女性参加者は、専業主婦を評定したときにはキャリア女性を評定したときに比べて、より慈愛的偏見を示すようになるだろう、を設けた。このような現象の背景にはシステム正当化動機が関わっていると考えられるため、このような傾向は、システムに対する脅威を受けた場合に強くなると考えられよう。そこで、仮説 3-2 として、脅威的外集団が顕現化した時に仮説 3-1 の傾向は強まるであろう、を設けた。

第 4 の目的は、性役割観の個人差を検討することにあつた。現状の性役割システムに対する依存が強い女性では、男性と同様の効果が見られると想定できるため、仮説 1-2 として、平等主義的性役割観を持つとする女性に比べて伝統的性役割観を持つとする女性では仮説 1-1 の傾向が強いであろう、を設けた。また、仮説 3-3 として、平等主義的性役割観を持つとする女性に比べて伝統的性役割観を持つとする女性では仮説 3-2 の傾向が強いであろう、を設けた。

## 方法

**実験参加者** 本実験の約 2 ヶ月前に授業時間に集団でバッテリー・テストとして平等主義的性役割観尺度短縮版 (SESRA: 鈴木, 1994) と日本語版慈愛的偏見尺度 (宇井・山本 2001) に回答をしていた首都大学東京女子大学生 85 名。一部の分析では欠損値がある参加者を除いて分析を行った。<sup>3</sup>

**実験計画** 研究 1 と同様で、脅威的外集団プライム (脅威プライム vs. 統制プライム) × 評定対象女性 (専業主婦 vs. キャリア女性) × 平等主義的性役割観 (SESRA 連続変量) の参加者間計画であった。

**手続き** 手続きは基本的には研究 1 と同じであった。授業中に集団で、複数の予備調

<sup>3</sup> 男性学生に対しても同時に実施したが、ここでは女性参加者の結果のみを報告する。

査に参加するよう依頼して、本実験を実施した。

質問紙は3部構成になっており、第1部では、最近のニュースに関する知識を聞くと称し、脅威的外集団のプライムの操作を行った。第2部では、印象形成に関する調査と称して、呈示するプロフィールにより評定対象女性の操作を行なった。実験参加者は、家庭女性かキャリア女性のいずれかのプロフィールを読んだ後、7件法の印象評定尺度に回答した。好意を尋ねる質問項目として、「この女性に対してどの程度好感が持てますか?」、「この女性はどの程度魅力的な人だと思いますか?」の2項目に ( $\alpha = .85$ )、仕事仲間は研究1と同じ4項目に ( $\alpha = .82$ )、性格特性評定は研究1と同じ40特性語に、回答させた。第3部として、個人差に関する調査と称し、慈愛的偏見尺度と脅威の操作チェック項目に回答させた。最後に、ディブリーフィングを行い、研究の本当の目的を説明し、データの使用許可を得られた参加者からのみ質問紙を回収し、実験を終了した。

## 結果

**操作チェック** 脅威の操作が有効であったかを確認するために、北朝鮮とEU諸国が日本にとって脅威になるかの評定に対して、対応のある  $t$  検定を行ったところ、北朝鮮の方がEU諸国に比べ脅威であると評定されていた (北朝鮮  $M = 5.81$ , EU諸国  $M = 4.30$ ;  $t(84) = 7.48, p < .001$ )。この効果は脅威の操作が成功していたことを意味する。評定対象女性の操作が有効であったかを確認するために、家庭志向度とキャリア志向度への評定に対して、SESRAを標準化した上で、プライム×対象×SESRAの全ての効果を含む一般線形分析を行った。キャリア志向度では、操作の意図通り対象の主効果が有意で ( $F(1, 77) = 124.98, p < .05$ ; 専業主婦 ( $M = 3.45$ ) はキャリア女性 ( $M = 6.41$ ) に比べてキャリア志向が低いと評定されていた。この効果に加え、SESRAの主効果とSESRA×対象の交互作用も有意であった ( $F(1, 77) = 5.84, p < .05$ ;  $F(1, 77) = 10.62, p < .01$ )。これらの効果は、平等主義的性役割観を持つとする女性で操作が相対的に強く働いたことによる。家庭志向度では、操作の意図通り対象の主効果が有意で ( $F(1, 77) = 365.04, p < .001$ )、専業主婦 ( $M = 6.41$ ) はキャリア女性 ( $M = 2.85$ ) に比べて家庭志向が高いと評定されていた。この効果に加え、対象×SESRAとプライム×対象×SESRAの交互作用が有意であった ( $F(1, 77) = 9.48, p < .01$ ;  $F(1, 77) = 5.86, p < .05$ )。これらの効果は、キャリア志向度と同様に、平等主義的性役割観を持つとする女性で操作が相対的に強く働き、また、この傾向が統制条件において強かったことによる。一部想定外の効果も見られたが、キャリア女性と専業主婦の家庭志向度とキャリア志向度の平均値は大きく異なっており、評定対象の操作もおおむね成功したと言えよう。

**好意** 好意の指標に対して、SESRAを標準化した上で、プライム×対象×SESRAの全



での効果を含む一般線形分析を行ったところ、仮説 1-1 から予測される、プライム×対象の交互作用が有意であった ( $F(1, 77) = 5.24, p < .05$ )。対象人物ごとにプライムの単純主効果を検討したところ、統制プライム条件ではキャリア女性 ( $M = 5.15$ ) と専業主婦 ( $M = 4.83$ ) の間に差は見られなかったが ( $F(1, 77) = 1.34, ns$ )、脅威プライム条件では専業主婦 ( $M = 5.66$ ) の方がキャリア女性 ( $M = 5.02$ ) に比べて好意を持たれていた ( $F(1, 77) = 5.15, p < .05$ )。また、プライムごとに対象の単純主効果を検討したところ、キャリア女性に対する好意ではプライムの効果は見られなかったが ( $F(1, 77) < 1, ns$ )、家庭女性に対する好意では統制プライム条件に比べ脅威プライム条件で高かった ( $F(1, 77) = 4.82, p < .05$ )。これらの結果は、仮説 1-1 を支持するものである。さらに、仮説 1-2 から予測されるプライム×対象×SESRA の交互作用効果が有意であった ( $F(1, 77) = 14.37, p < .001$ )。SESRA の -1SD を伝統的性役割観を持つ女性 (Traditionalist)、SESRA の +1SD を平等主義的性役割観を持つ女性 (Egalitarian) として、この効果を図示したのが Figure 4 である。伝統的性役割観を持つ女性では、統制プライム条件に比べて脅威プライム条件において、専業主婦に対する好意が高まっていた ( $t(77) = 4.58, p < .001$ )。また、伝統的性役割観を持つ女性では、統制プライム条件ではキャリア女性に対して専業主婦よりも好意を示していたものが ( $t(77) = 2.00, p = .05$ )、脅威プライム条件では専業主婦に対してキャリア女性よりも好意を示していた ( $t(77) = -2.91, p = .01$ )。平等主義的性役割観を持つ女性ではこのようなパターンは見られなかった。これらの結果は、仮説 1-2 を支持するものであった。

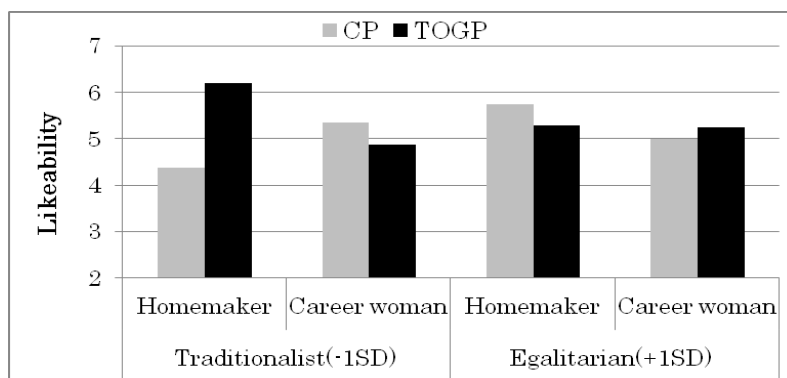


Figure 4. Likeability as a function of priming, target and SESRA

**仕事仲間好意** 仕事仲間の指標に対して、SESRA を標準化した上で、プライム×対象×SESRA の全ての効果を含む一般線形分析を行ったところ、仮説 2-2 から予測されるプライム×対象×SESRA の交互作用のみが有意であった ( $F(1, 77) = 4.64, p < .05$ )。この効果は、Figure 5 に示したとおりである。伝統的性役割観を持つ女性では、統制プライム条件ではキャリア女性に対して専業主婦よりも好意を示していたものが ( $t(77) = -2.05, p < .05$ )、脅威プライム条件では専業主婦に対してキャリア女性よりも好意を示していた ( $t(77) = 1.57, p = .12$ )。平等主義的性役割観を持つ女性ではこのよう

なパターンは見られなかった。これらの結果は、伝統的性役割観を持つとする女性においてのみ仮説 1-1 を支持する結果が得られることを示唆しており、仮説 1-2 を支持するものであった。

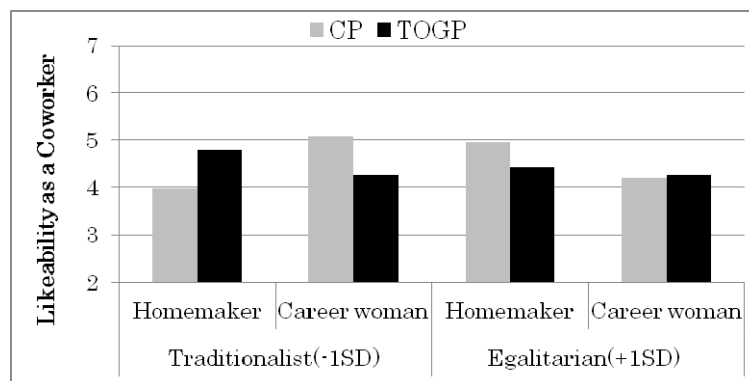


Figure 5. Likeability as a coworker as a function of priming, target and SESRA

性格評定<sup>4</sup> 男性的ポジティブ 10 特性 ( $\alpha = .96$ ), 女性的ポジティブ 10 特性 ( $\alpha = .91$ ), 男性的ネガティブ 10 特性 ( $\alpha = .94$ ), 女性的ネガティブ 10 特性 ( $\alpha = .74$ ) に対する評定の平均値を求めた。この値に対して, SESRA を標準化した上で, SESRA×対象×プライム×特性語ジェンダー×特性語感情価の全ての交互作用効果を含む一般線形分析を行った(後 2 者は参加者内要因)。対象の主効果と特性語感情価の主効果, プライム×SESRA とプライム×SESRA×特性語感情価の交互作用が有意であったが ( $F(1, 74) = 33.29, p < .001$ ;  $F(1, 74) = 122.06, p < .001$ ;  $F(1, 74) = 7.64, p < .01$ ;  $F(1, 74) = 8.98, p < .01$ ), プライム×対象×SESRA×特性語感情価の交互作用が有意であることから制限を受ける ( $F(1, 74) = 17.54, p < .001$ )。ポジティブ特性語への評定平均値からネガティブ語への評定平均値を引いた値を求め, SESRA の-1SD を伝統的性役割観を持つ女性 (Traditionalist)。SESRA の+1SD を平等主義的性役割観を持つ女性 (Egalitarian) として, プライム×対象ごとの推定平均値をプロットしたのが Figure 6 である。専業主婦に対する評定では, 伝統的性役割観を持った女性では, 統制プライム条件に比べ脅威プライム条件で望ましく評定されていたが ( $t(74) = 4.68, p < .01$ ), 平等主義的性役割観を持った女性では, 統制プライム条件に比べ脅威プライム条件で望ましくないと評定されていた ( $t(74) = -2.09, p < .05$ )。下位検定では有意な効果は見られなかったものの, キャリア女性に対する評定では, 専業主婦に対する評定と逆のパターンを示していた。また, 伝統的性役割観を持つ女性では, 統制プライム条件では専業主婦をキャリア女性に比べて望ましくないと評定していたが ( $t(74) = -2.47, p < .05$ ), 脅威プライム条件では専業主婦をキャリア女性に比べて望ましいと評定していた ( $t(74) = 1.87, p = .065$ )。一方, 平等主義的性役割観を持つ女性では, 統制プライム条件では専業主婦をキャリア女性に比べて望ましいと評定していたが ( $t(74) =$

<sup>4</sup> 性格評定の分析では, 欠損値のあった 3 名を除き, 82 名を分析の対象とした。

3.39,  $p < .01$ ) , 脅威プライム条件では, 有意ではないものの, 専業主婦をキャリア女性よりも望ましくないと評定していた ( $t(74) = -.84, p = .40$ ) . これらの結果は, 仮説 1-2 を支持するものであった.

上記の効果の他に, 特性語ジェンダーの主効果と対象×特性語ジェンダーと対象×特性語ジェンダー×特性語感情価の交互作用が有意であったが ( $F(1, 74) = 8.81, p < .01$ ;  $F(1, 74) = 216.21, p < .001$ ;  $F(1, 74) = 36.78, p < .001$ ) , プライム×対象×特性語ジェンダーを含む効果は見られず ( $F_s < 1.08, ns$ ) , ステレオタイプ化に関する仮説 2 は支持されなかった.

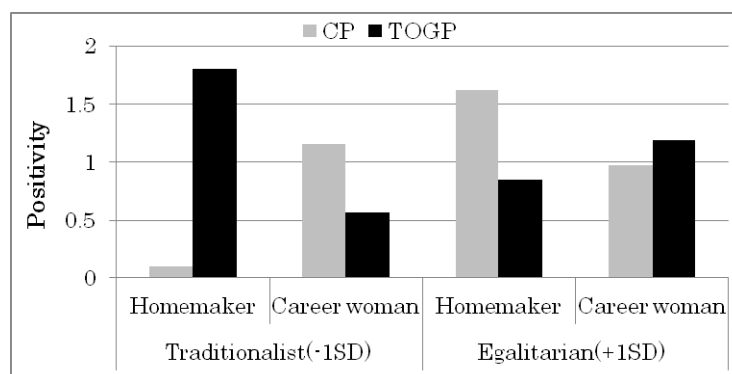


Figure 6. Positivity as a function of priming, target, and SESRA.

**慈愛的偏見**<sup>5</sup> 本実験の慈愛的偏見尺度の得点に対して, 事前の慈愛的偏見尺度の得点を共変量にして, プライム×対象×SESRA の全ての効果を含む一般線形分析を行った. 共変量の効果に加え ( $F(1, 71) = 55.44, p < .001$ ) , 仮説 3-2 から予測されるプライム×対象の交互作用に有意に近い効果がみられた ( $F(1, 71) = 3.82, p = .055$ ) . さらに, プライム×SESRA の交互作用が有意であった ( $F(1, 71) = 4.0.3, p < .05$ ) .

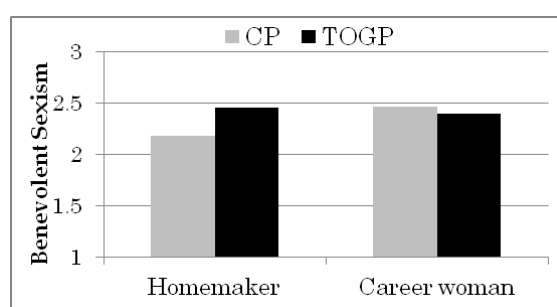


Figure 7. Benevolent Sexism as a function of priming and SESRA

プライム×対象の交互作用効果の各条件の平均値は Figure 7 に示した. 脅威の顕現化の有無ごとに対象の単純主効果を検討したところ, 統制条件ではキャリア女性を評定した場合の方が専業主婦を評定した場合に比べ慈愛的偏見が高かったが ( $F(1, 71) = 2.85, p = .096$ ) , 脅威条件では, 有意な効果は見られなかったものの ( $F(1, 71) = 0.93,$

<sup>5</sup> 慈愛的偏見の分析では, 欠損値のあった 5 名を除き, 80 名を分析の対象とした.

ns) , 専業主婦を評定した場合の方が慈愛的偏見が高くなっていた。また, 対象ごとにプライムの単純主効果を検討したところ, キャリア女性を評定した場合には, 脅威の顕現化の有無による差は見られなかったが ( $F(1, 71) = 0.61, ns$ ) , 専業主婦を評定した場合には, 脅威が顕現化すると有意に慈愛的偏見が高かった ( $F(1, 71) = 4.14, p < .05$ )。これらの結果は, 脅威があるときに, 女性ステレオタイプに合致した人物に接すると, ジェンダー・システムの正当性を高く認知するようになることを示唆しており, 仮説 3-2 を支持するものであった。プライム×対象×SESRA の交互作用は有意にならず, 仮説 3-3 は支持されなかった。

プライム×SESRA の交互作用に関して, SESRA の-1SD を伝統的性役割観を持つ女性 (Traditionalist) . SESRA の+1SD を平等主義的性役割観を持つ女性 (Egalitarian) として, 推定平均値をプロットしたのが Figure 8 である。ここからわかるように, 伝統的性役割観を持つとする女性においてのみ, 統制プライム条件に比べ脅威プライム条件において慈愛的偏見が強まることによるものであり, システムに脅威があると, 伝統的性役割観を持つ女性においては, ことさら伝統的なジェンダー・システムの正当性を高く認知するようになることを示唆している。

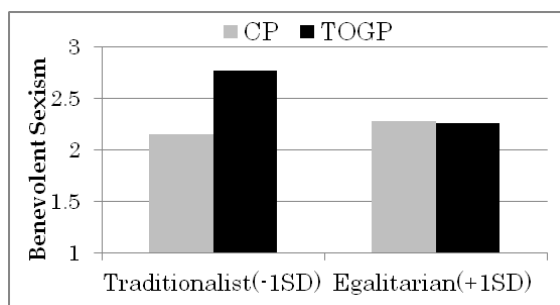


Figure 8. Benevolent Sexism as a function of priming and SESRA

## 考察

本研究では, システムの脅威となる外集団の顕現化が女性のシステム正当化動機を高め, ステレオタイプに基づく偏見をどのように表出するか, また, 女性および女性サブカテゴリーのステレオタイプをどのように使用するか, そしてこれらの傾向が性役割観によって調整されるかを検討した。また, 女性ステレオタイプに一致した女性と接すると, ジェンダー・システムの正当性認知が高まるか, また, この傾向が脅威の存在によって調整されるかも検討した。

本研究には 4 つの目的があった。第 4 の目的は性役割観によって調整効果が見られるかを検討するものであったので, 性役割観の調整効果については第 1 から第 3 の目的に関して議論をしていくなかで考察を加えていきたい。

第 1 の目的は, ステレオタイプの規範的側面に関わるもので, 女性の規範的ステレオタイプがシステム正当化機能を果たしているか検討することにあつた。もし正当化

機能を果たしているとするれば、システムの脅威となる外集団が顕現化した時には、規範的ステレオタイプに合致した女性に対する好意的が高まると考えられ、「女性参加者は、脅威的外集団が顕現化すると、専業主婦に対してより好意を向けるだろう」という仮説 1-1 を設けて検討した。また、現状の性役割システムに対する依存が強い女性においてこのような傾向が強くと見られると想定できるため、「平等主義的性役割観を持つとする女性に比べて伝統的性役割観を持つとする女性では仮説 1-1 の傾向が強であろう」という仮説 1-2 を設けて検討した。好意評定において、伝統的性役割観を持つとする女性においてのみ、統制条件に比べて脅威条件において、専業主婦への好意が上昇していた。また、性格評定に対する評定においても、専業主婦に対する評定では、伝統的性役割観を持った女性では、統制プライム条件に比べ脅威プライム条件で望ましく評定されていた。これらの結果は、女性においても、伝統的ジェンダー・システムに依存をしている場合には、男性と同様に、女性の規範的ステレオタイプがシステム正当化機能を果たすことを示唆するものである。平等主義的性役割観を持つとする女性では、性格評定では、脅威プライム条件では統制プライム条件に比べて専業主婦に対する評価が低下していた。このような結果は、死すべき運命を顕現化した研究や（沼崎, 2006, Study 2）、伝統的ジェンダー・システムの背後にある異性愛を顕現化した研究（沼崎他, 2006, Study 2; 沼崎・高林・天野, 2010）でも見られた結果であり、平等主義的性役割観を持つとする女性では、女性はもっと社会に進出すべきという規範を持っているため、システムに脅威がある時に、このような規範がより顕著に示された可能性が考えられよう。

第 2 の目的は、ステレオタイプの記述的側面に関わるもので、女性サブカテゴリー・ステレオタイプがシステム正当化機能を果たしているか検討することにあつた。もし正当化機能を果たしているとするれば、システムの脅威となる外集団が顕現化した時には、サブカテゴリー集団成員への、ステレオタイプの適用が強まると考えられ、「女性参加者は、脅威的外集団が顕現化すると、専業主婦はより温かく無能であり、キャリア女性はより有能で冷たいと評定するであろう」という仮説 2 を設けて検討した。しかし、性格評定の指標において、このような傾向は見られず、仮説 2 は支持されなかった。この結果は、男性を参加者とした研究 1 と同様の結果であった。この点については総合考察でより詳しく検討する。

第 3 の目的は、ステレオタイプの記述的側面に関わるものであり、伝統的女性ステレオタイプに合致した女性に接すると、伝統的ジェンダー・システムの正当性を高く認知をするようになるかを検討することであり、「女性参加者は、専業主婦を評定したときにはキャリア女性を評定したときに比べて、より慈愛的偏見を示すようになるだろう」という仮説 3-1 と、「脅威的外集団が顕現化した時に仮説 3-1 の傾向は強まるであろう」という仮説 3-2 を設けて検討した。さらに、現状の性役割システムに対する

依存が強い女性では、男性と同様の効果が見られると想定できるため、「平等主義的性役割観を持つとする女性に比べて伝統的性役割観を持つとする女性では仮説 3-2 の傾向が強であろう」という仮説 3-3 を設けた。まず、全体としては、専業主婦を評定した参加者で慈愛的偏見が強まるという結果は得られなかった。むしろ、統制条件では、キャリア女性を評定した参加者の方が専業主婦を評定した参加者に比べて慈愛的偏見が高まっていた。この結果は、女性の場合は、女性ステレオタイプに接するだけでシステム正当の認知が高まると主張する Jost and Kay (2005) とは異なる結果であった。しかし、キャリア女性を評定した場合には脅威の顕現化による差が見られないのに対して、専業主婦を評定した場合には、統制条件に比べて脅威的外集団が顕現化している時に慈愛的偏見が高まるという結果は得られた。この結果は男性でも見られた結果であり、システム脅威があるときにはステレオタイプの女性に接することにより、女性においてはジェンダー・システムの正当性認知が高まる可能性を示唆する結果といえよう。また、伝統的性役割観を持つ女性では、脅威的外集団が顕現化すると慈愛的偏見が高まり、ジェンダー・システムを正当化する傾向が見られた。システム正当化の手段として現状のシステムの正当性の表明が指摘されており (e.g., Ullrich, & Cohrs, 2007), 現状のジェンダー・システムへの依存が強い女性において、システム脅威が高まったときに、その正当性の表明性が高まったものとして考えることができよう。

## 総 合 考 察

本研究においては、男性と女性参加者を用いて、日本のシステムに対する脅威となる外集団が顕現化した状況としてない状況で、伝統的性役割に一致した女性と伝統的性役割に一致しない女性のプロフィールを見せ、偏見やステレオタイプ化やジェンダー・システムの正当性認知を測定し、日本において女性に関わる相補的ステレオタイプがシステム正当化機能を果たすかどうかを検討した。

規範的女性ステレオタイプがシステム正当化機能を果たしているかを検討するため、Lau et al. (2008) にならい、システム脅威が顕現化したときの規範的ステレオタイプに合致した女性と合致しない女性に対する好意を検討したところ、男性参加者と伝統的性役割観を持つ女性参加者において、システム脅威が顕現化したときには伝統的性役割に合致した女性への好意が上昇した。この結果は、男性参加者の結果は Lau et al. (2008) を追証するものであり、日本においても男性では規範的な女性ステレオタイプが、システム正当化機能を果たすことを示すと同時に、これまで検討されていなかった女性においても、伝統的性役割観を持つ場合には、システムの正当化機能を果たしていることを示唆する。

記述的女性ステレオタイプがシステム正当化機能を果たしているかを検討するために、システム脅威が顕現化したときに記述的女性ステレオタイプに一致した女性と一致しない女性に接触したときの、ジェンダー・システムの正当性認知として慈愛的偏見を測定することにより検討をおこなった。男性参加者でも女性参加者でも、脅威がある場合には、記述的女性ステレオタイプに一致した女性に接触したときには、一致しない女性に接触したときに比べて、慈愛的偏見が高く、ジェンダー・システムを正当と見なすようになっていた。この結果は、Jost and Kay (2005) の脅威がないときでも見られるという報告とは異なるものの、男性および女性の双方において、記述的女性ステレオタイプがシステム正当化機能を果たしていること示唆する。

記述的女性サブカテゴリー・ステレオタイプがシステム正当化機能を果たしているかを検討するために、システム脅威が顕現化したときに、伝統的女性と非伝統的女性の相補的ステレオタイプが強化するかどうかを検討した。男性参加者と女性参加者の双方において、相補的ステレオタイプが強化するという結果は得られず、女性サブカテゴリー・ステレオタイプがシステム正当化機能を果たしているという証拠は得られなかった。なぜこのような結果が得られたのであろうか。作動性は高いが共同性は低い、また、共同性は高いが作動性が低い、という相補的ステレオタイプがシステム正当化機能を果たすことを示した従来の研究では、このようなステレオタイプが持たれる背景として地位の格差がある集団成員を扱っていた (e.g., Kay et al., 2005; Jost et al., 2005)。つまり、このような相補的なステレオタイプが、システムの中の地位格差を正当化する手段として機能することを示してきたと言える。専業主婦（伝統的女性）とキャリア女性（非伝統的女性）のステレオタイプは、地位の低い女性集団は共同性は高いが作動性は低い、地位の高い男性は作動性は高いが共同性は低い、という男女の相補的ステレオタイプに対応するものである。しかし、現状の日本においては、専業主婦（伝統的女性）とキャリア女性（非伝統的女性）は、地位格差がある集団としては認識されていないであろう。両者のステレオタイプは地位の格差に基づくものとは言えないであろう。このような地位の格差に基づかない相補的ステレオタイプは、たとえ相補的であったとしても、現状のシステムを正当化する機能を果たさないと考えられよう。そのため、どのような性役割観を持った男性参加者においても女性参加者においても、システム脅威が顕現化しても、これら相補的ステレオタイプが強化されることはなかったであろう。

実証的研究から、相補的な男性-女性ステレオタイプはシステム正当化機能を果たすのに対して、女性サブカテゴリー・ステレオタイプは相補的であってもシステム正当化機能を果たさない可能性が示唆された。今後は、システム脅威の操作を変更して検討することや、別の相補的ステレオタイプ（偏差値に基づく大学ステレオタイプ、職業ステレオタイプ、社会的強者/弱者ステレオタイプ）を検討することによって、相補

的なステレオタイプがシステム正当化機能を果たすプロセスや調整要因をより明らかにしていく必要がある。

#### 引用文献

- Burgess, D. & Borgida, E. (1999). Who women are, who women should be: Descriptive and prescriptive gender stereotyping in sex discrimination. *Psychology, Public, Policy and Law*, 5, 665-692.
- Conway, M., Pizzamiglio, M. T., & Mount, L. (1996). Status, communality, and agency: Implications for stereotypes of gender and other groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 25-38.
- Eagly, A.H., Mladinic, A., & Otto, S. (1994). Cognitive and affective bases of attitudes toward social groups and social policies. *Journal of Experimental Social Psychology*, 30, 113-137.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (1996). The ambivalent sexism inventory: Differentiating hostile and benevolent sexism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 491-512.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (2001a). An ambivalent alliance: Hostile and benevolent sexism as complementary justifications for gender equality. *American Psychologist*, 56, 109-118.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (2001b). Ambivalent sexism. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 33, pp. 1150-188). San Diego, CA: Academic Press.
- Glick, P., Zion, C., & Nelson, C. (1988). What mediates sex discrimination in hiring decisions? *Journal of Personality and Social Psychology*, 55, 178-186.
- Greenberg, J., Solomon, S., & Arndt, J. (2008). A basic but uniquely human motivation: Terror management. In J. Y. Shah & W. L. Gardner (Eds.), *Handbook of motivation science* (pp. 114-134). New York: Guilford.
- Greenberg, J., Solomon, S., & Pyszczynski, T. (1997). Terror management theory of self-esteem and cultural worldviews: Empirical assessments and conceptual refinements. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 29, pp. 61-139). San Diego, CA: Academic Press.
- Jost, J. T., & Banaji, M. (1994). The role of stereotyping in system-justification and the production of false consciousness. *British Journal of Social Psychology*, 33, 1-27.
- Jost, J. T., & Burgess, D. (2000). Attitudinal ambivalence and the conflict between group and system justification motives in low status group. *Personality and Social Psychology*



*Psychology Bulletin*, 26, 293-305.

Jost, J. T., & Hamilton, D. L. (2005). Stereotypes in our culture. In J. F. Dovidio, P. Glick, & L. A. Rudman (Eds.), *On the nature of prejudice: Fifty years after Allport* (pp. 208-224). Malden, MA: Blackwell.

Jost, J. T., & Kay, A. C. (2005). Exposure to benevolent sexism and complementary gender stereotypes: Consequences for specific and diffuse forms of system justification. *Journal of Personality and Social Psychology*, 88, 498-509.

Jost, J. T., Kivetz, Y., Rubini, M., Guermendi, G. & Mosso, C. (2005). System-justification functions of complementary regional and ethnic stereotypes: Cross-national evidence. *Social Justice Research*, 18, 305-333.

Jost, J. T., Pietrzak, J., Liviatan, I., Mandisodza, A. N., & Napier, J. L. (2008). System justification as conscious and nonconscious goal pursuit. In J. Y. Shah & W. L. Gardner (Eds.), *Handbook of motivation science* (pp. 591-605). New York: Guilford.

Kay, A. C., & Jost, J. T. (2003). Complementary justice: Effects of "poor but happy" and "poor but honest" stereotype exemplars on system justification and implicit activation of the justice motive. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 823-837.

Kay, A. C., Jost, J. T., & Young, S. (2005). Victim-derogation and victim-enhancement as alternate routes to system-justification. *Psychological Science*, 16, 240-246.

Kay, A. C., Jost, J. T., Mandisodza, A. N., Sherman, S. J., Petrocelli, J. V., & Johnson, A. L. (2007). Panglossian ideology in the service of system justification: How complementary stereotypes help us to rationalize inequality. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 39, pp. 305-358). San Diego, CA: Academic Press.

Landau, M. J., Solomon, S., Greenberg, J., Cohen, F., Pyszczynski, T., Arndt, J., & Miller, C. H. Ogilvie, D. M., & Cook, A. (2004). Deliver us from evil: The effects of mortality salience and reminders of 9/11 on support for President George W. Bush. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 30, 1136-1150.

Lau, G. P., Kay, A. C., & Spencer, S. J. (2008). Loving those who justify inequality: The effects of system threat on attraction to women who embody benevolent sexist ideals. *Psychological Science*, 19, 20-21.

沼崎誠 (2006). 死すべき運命の顕現化が性役割的偏見に及ぼす効果 平成15~17年度 科学研究費補助金(基盤研究(C): 15530402) 研究成果報告書「潜在的性役割的偏見の発現とジェンダー・ステレオタイプを受容における心理過程の検討」 pp.63-93.

沼崎誠 (2007). 無能な人は温かいのか? 冷たい人は有能か? 首都大学東京 東京都立

大学 人文学報, 380, 65-85.

沼崎誠 (2010). ステレオタイプと社会システムの維持 村田光二 (編) 「認知心理学講座第6巻 社会と感情」 北大路書房 Pp. 272-297.

沼崎誠・高林久美子・天野陽一 (2006). 恋愛は女性に対するステレオタイプ化や偏見を強めるか? —異性愛プライムと平等主義的性役割観がキャリア女性と家庭女性に対する印象や評価に及ぼす効果— 平成 15~17 年度 科学研究費補助金 (基盤研究(C): 15530402) 研究成果報告書「潜在的性役割的偏見の発現とジェンダー・ステレオタイプ の受容における心理過程の検討」 pp.125-146.

沼崎誠・高林久美子・天野陽一 (2010). 異性愛プライムが女性における他者へのステレオタイプ化と自己ステレオタイプ化に及ぼす効果 平成 16~18 年度 科学研究費補助金 (基盤研究(B)(1): 17330136, 研究代表者: 安藤清志) 研究成果報告書「「関係性」が自己変容に及ぼす影響に関する心理学的研究」 pp.8-20.

鈴木淳子 (1994). 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成 心理学研究, 65, 34-41.

宇井美代子・山本真理子 (2001). Ambivalent Sexism Inventory (ASI) 日本語版の信頼性と妥当性の検討 日本社会心理学会第42回大会発表論文集, 300-301.

Ullrich, J., & Cohrs, J. C. (2007). Terrorism salience increases system justification: Experimental evidence. *Social Justice Research, 20*, 117-139.

Wakslak, C. J., Jost, J. T., Tyler, T. R., & Chen, E. S. (2007). Moral outrage mediates the dampening effect of system justification on support for redistributive social policies. *Psychological Science, 18*, 267-274.

Yomiuri Online (読売新聞) (2007). 日米共同世論調査 <http://www.yomiuri.co.jp/feature/fe6100/nenji/2007.htm>

## Appendix 1 評定対象人物

### ○専業主婦

現在の職業	専業主婦（30才）
家族構成	夫（32才） 娘（2才）
最終学歴	4年制大学
趣味	お菓子作り ガーデニング
よくみるTV番組	ドラマ ワイドショー
好きな時間	近所の人たちと集まってお茶をする時間
好きな本	推理小説
日々気をつけていること	バランスのよい食事をとること
パートナーに求めるもの	経済力、リーダーシップ、誠実さ、包容力 家族を大切に思っていてほしい。
パートナーに対する態度	最優先で考えたい。 大切な存在であり、どんなときでも助け合っていきたい。
将来	平凡でもいいから、心が安らげる家庭を築いていきたい。 子育てがおわったら、夫と旅行などして楽しくやっていきたい。
他者からの評価	周囲への配慮ができ、他の人からも信頼されている。古典的な家庭女性の良さをもっていると言える。

### ○キャリア女性

現在の職業	雑誌編集記者（30才）
家族構成	父（55才） 母（53才）
最終学歴	4年制大学
趣味	アウトドア 水泳
よくみるTV番組	教養番組 ドキュメンタリー
好きな時間	満足できる仕事をしている時間
好きな本	推理小説
日々気をつけていること	バランスのよい食事をとること
パートナーに求めるもの	全てにおいて理解のある人がよい。 自立心のある人がよい。
パートナーに対する態度	対等な関係 精神的な支えであってほしい。
将来	仕事でどんどん実績をあげて、最終的には編集長として活躍したい。 仕事は何があってもずっと続けていきたい。
他者からの評価	仕事の面においても優秀で、他の人から信頼されている。今後の仕事内容について多くの人から期待されている。

## Appendix 2 印象評定語一覧

### 男性的ポジティブ特性語

勇敢な  
指導力のある  
自信のある  
決断力のある  
有能な  
周りに流されない  
分析的な  
冷静な  
独立した  
自立した

### 男性的ネガティブ特性語

高圧的な  
頑固な  
強引な  
傲慢な  
威圧的な  
冷たい  
打ち解けない  
とっつきにくい  
そっけない  
無愛想な

### 女性的ポジティブ特性語

献身的な  
あたたかい  
面倒見の良い  
優しい  
親しみやすい  
繊細な  
おしとやかな  
可愛らしい  
純真な  
謙虚

### 女性的ネガティブ特性語

うわさ好き  
でしゃばりな  
うるさい  
口やかましい  
おせっかい  
頼りない  
なよなよした  
依存的な  
虚弱な  
臆病な

### Ⅲ 部

## 異性愛とジェンダー・ステレオタイプの適用と性役割偏見 －ジェンダー・システムの基盤－

## 8章 ジェンダー・ステレオタイプと性役割的偏見の基盤として異性愛

沼崎 誠

(首都大学東京大学院人文科学研究科)

Ⅲ部では、ジェンダー・ステレオタイプや性役割的偏見の基盤にあるとされている異性愛システムと、ジェンダー・ステレオタイプや性役割的偏見との関係について検討をおこなう。本章では、この関係についてレビューし、次章以降で実証的に扱う問題を整理する。

### ジェンダー・ステレオタイプと性役割的偏見の基盤としての異性愛

偏見やステレオタイプの研究においては、集団間の葛藤状況が偏見やステレオタイプの適用を強めることが古くから指摘されてきた (e.g., Esses, Jackson, Dovidio, & Hobson, 2005; Sherif, Harvey, White, Hodd, & Sherif, 1961; Stephan & Renfro, 2002)。Sherif 等による偏見の古典的研究においては、2つの集団を人為的に競争状況にすると相互の集団間関係が敵対的関係になること、その後、運命共同体的な状況の中で共同作業をすることにより敵対的関係が改善されることを見いだしている。沼崎・工藤 (1995) は、男性参加者が女性と競争をした後では、競争とは無関係な伝統的な規範的ジェンダー・ステレオタイプに不一致なキャリア志向女性に対する仕事仲間としての評価を低下させ、一致する家庭志向女性に対する評価を上昇させることを見いだしている。

しかし、近年の性役割的偏見の理論によれば (e.g., Glick & Fiske, 2001; Glick & Rudman, 2008)、集団間の競争関係や葛藤関係ばかりではなく、協力関係や依存関係もまたステレオタイプの適用や偏見を強める可能性を指摘している。

Glick and Fiske (2001) は、男性が女性に対しては男性に対するよりも好意的な態度を取ることに注目してアンビバレント・セクシズム理論を提出した (Glick & Fiske, 1996, 2001)。彼らは男性が女性に対して敵意的であると同時に好意的な態度を取ることを指摘し、従来の敵意的な偏見に加えて、好意を見せる慈愛的偏見があることも指摘した。この理論では、これらの偏見の背後にある男女間の構造的関係に注目をし、男女間の勢力差と相互依存関係とが共存することにより、敵意的偏見と慈愛的偏見の両方を生み出すとしている。この理論では、男女間の勢力差と相互依存関係を強調する特有の領域として、3つの領域—家父長制・ジェンダー差異・異性愛—を指摘している。

他の集団間関係とは異なり、男女の集団は異性愛という親密な関係を形成する。異性愛の男性は幸福や充実した人生を得るためには女性との関係が必要であり、女性に

対して親密な感情を持つ。その一方で、女性に依存していることは、女性によって男性の幸福や人生を支配されていることを意味し、女性に性的門衛 (sexual gatekeepers) としての優位性を与えることにもなる。そのため、親密な感情とともに女性に対して脅威を感じ敵意を持つようになる。この脅威や敵意のため、この親密な関係を対等な関係ではなく相補的かつ支配-被支配の関係とするのが、男女双方に別々の社会的役割を与えるジェンダー差異であり、役割の分化である。Egaly (1987) の社会的役割理論によれば、現在見られるジェンダー役割の違いは、それ自体が永続する社会的構造により、記述的期待と規範を生み出し、男性に対しては支配を正当化する勢力に密接に関係する作動的 (agentic) 属性を付与し、女性に対しては被支配を正当化するとともに相補的で補助的な役割に必要な共同的 (communal) 属性を付与することとなる。また逆に、この属性に従い「男は仕事、女は家庭」といった役割分化が正当化されることになり、女性が仕事に就く場合でも他者を支援することに関わる補助的な職業が女性的職業 (e.g., 看護師, 秘書) として推奨される。そして、この社会的役割と属性におけるジェンダー差を正当化する装置として家父長制というイデオロギーがあるとされる。家父長制のイデオロギーには、男性は女性よりも勢力を持つべきだという支配的温情主義 (dominant paternalism) とともに保護的温情主義 (protective paternalism) がある。保護的温情主義とは、男性が男性支配を正当化するために、勢力に関わる作動性を女性に付与せず高い地位を与えない見返りとして、男性は自分に依存する女性を保護し養うという義務を負っていることを指す。この保護的温情主義が、女性に守られる立場を与え、そして、それに伴う望ましい特性 (作動性低ポジティブ特性: 可憐さ, 純真さ) を女性に付与し、女性の補助的役割および地位の低さを維持する装置となる。つまり、女性に対して一見すると望ましく見える保護的温情主義は、男性にとっても女性にとっても、社会的役割と属性のジェンダー差異を前提とした現存のシステムを維持する装置として機能することとなる (Jost & Kay, 2005; Jost & Hamilton, 2005)。そして、社会的役割と属性のジェンダー差異が存在しているという前提に従う女性に対しては親密さや好意という慈愛的偏見を示し、この前提に従わず、不平等な地位を伴う相互依存関係を否定し、対等な関係を目指す女性や支配を否定しようとする女性に対しては敵意的偏見を向けさせることにつながる。

このように、異性愛という男女間の相補的な相互依存関係はジェンダーを再生産する装置となりうる。しかし、この異性愛と性役割的偏見の関係を扱った実証研究は、いくつかの例外を除いて、ほとんど行われていない (Rudman & Fairchild, 2007)。この例外の1つとして、Rudman & Heppen (2003) は、異性愛に関わる社会化によって生じる信念として、女性のロマンティック・ファンタジーを検討している。ロマンティック・ファンタジーとは、パートナーと騎士道やヒーローとを連合させる信念であり、恋愛と保護を連合させる信念である。彼らは、質問紙による顕在測定と Implicit

Association Test (IAT) による潜在測度を用いて、女性参加者のロマンティック・ファンタジーを測定し、高収入の職業・高学歴・リーダーの役割志向といった達成志向との関係を検討した。結果として、顕在尺度と潜在尺度で測定されたロマンティック・ファンタジーとは関係が見られなかった。もっと重要なことに、潜在尺度で測定されたロマンティック・ファンタジーが高いほど、達成志向が弱いことが見いだされた。その一方で、顕在尺度で測定されたロマンティック・ファンタジーと達成志向とは関係が見いだされなかった。この結果を受けて、Rudman and Heppen (2003) は、勢力は男性との親密な関係を通じて間接的に獲得するのが望ましいという潜在的意識によって、女性の自分自身の達成志向が阻害されていると指摘し、このような現象を「ガラスの靴効果」と名付けている。この現象は、幼い頃のおとぎ話を読むといった恋愛に関する社会化が無意識のうちに女性の社会的達成を阻害する可能性を示している。また、Rudman and Fairchild (2007) は、異性愛とフェミニズムの関係を検討している。彼らは、外見的に魅力的でない人はフェミニストと見られやすいこと、この関係がセックス・アピールに媒介されることを見いだしている。さらに、男性参加者においても女性参加者においても、フェミニストであることが恋愛において葛藤を生み出すという信念が強いほど、フェミニストに対する評価が低く、自己をフェミニストと表明せず、女性の権利意識が低いことを見いだしている。その一方で、Rudman and Phelan (2007) はフェミニストと結婚した男性は、より関係の安定性や性的満足 (sexual satisfaction) が高いことを見いだしている。これらの結果を受けて、彼らは、異性愛とフェミニズムが葛藤しているという間違った信念が、女性の権利拡大を阻害していると主張している。さらに、日本において赤澤 (1999) は、恋人を持ちその相手との結婚を意識している女性は、恋人がいない女性や恋人がいても結婚を意識していない女性に比べ、男性的行動をより男性にふさわしいものと認識し、女性的行動を実行していることを報告している。

#### 異性愛の顕現化と女性サブカテゴリー（前報告書での成果）

前節で紹介したように、理論的な検討ばかりではなく実証的研究においても、異性愛と性役割的偏見との密接な関係を示唆する結果が得られている。しかし、相関研究にとどまり実験的に因果関係を扱った研究はほとんど行われていなかった。そこで、前報告書（沼崎・高林・天野, 2006）では、異性愛の顕現化が女性のサブカテゴリーに対するステレオタイプ化や偏見に及ぼす効果を検討した。

アンビバレント・セクシズム理論から、異性愛という男女間の相補的な相互依存関係によって生じる慈愛的偏見の対象となるのは伝統的性役割に一致する女性に対してであること、そして、敵意的偏見の対象となるのは伝統的性役割に一致しない女性に対してあることが、予測される。



一方、近年のジェンダー・ステレオタイプ研究では、サブカテゴリーが（特に女性において）顕著であることが、ジェンダー・ステレオタイプが他のステレオタイプと異なる大きな特徴の1つとして指摘されている（e.g., Deaux, Winton, Crowley & Lewis, 1985; Six & Eckes, 1991）。女性のサブカテゴリーとしては、伝統的な性役割人物（e.g., 主婦, 母親）、性の対象としての役割人物（e.g., 娼婦）、非伝統的な性役割人物（e.g., キャリアウーマン, フェミニスト）の3つが主に見いだされ、アンビバレント・セクシズム理論と整合する形で、伝統的性役割に一致する女性と伝統的性役割に不一致な女性では異なったステレオタイプが持たれている（Glick & Fiske, 2001）。伝統的性役割に一致した女性では、地位格差のある相補的相互依存関係に適合するよう「共同性は高い（温かい）が、作動性は低い（無能である）」といったステレオタイプの内容になりやすく、伝統的性役割と不一致な人物は、このステレオタイプとは対照的な「作動性は高い（有能である）かもしれないが、共同性は低い（冷たい）」という内容になりやすことが実証的に示されている（Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002）。そして、Glick, Diebold, Bailey-Werner, and Zhu (1997) が示しているように、サブカテゴリーに対する偏見とステレオタイプ化は連動している可能性がある。

沼崎他（2006）は、性役割観を測定しておいた参加者に対して、異性愛に関わる対連語を学習させ異性愛を顕現化させる条件と無関連な対連語を学習させた統制条件を設け、伝統的性役割観に一致した家庭女性か伝統的性役割観に一致しないキャリア女性を、「温かさ」と「有能さ」の双方の次元で評価させた。結果として、平等主義的性役割観を持つとする男性では、統制条件では好意に差がなかった伝統的女性と非伝統的女性に対して、異性愛が顕現化すると、伝統的女性に対しては個人的好意や上司としての望ましさを高め、非伝統的女性に対しては個人的好意や上司としての望ましさを低下させ、家庭女性とキャリア女性のステレオタイプの評価（家庭女性を女性的に、キャリア女性を男性的とする評価）を弱めていた。一方、伝統的性役割観を持つとする男性では、統制条件では伝統的女性に対して好意的であったものが、異性愛が顕現化すると、非伝統的女性に対する個人的好意や上司としての望ましさを高め、伝統的女性をより女性的に非伝統的女性をより男性的に評価するという、サブカテゴリー・ステレオタイプの評価を強めた。

この興味深い結果は、死すべき運命の顕現化状況でも見られたもので、沼崎他（2006）は次のように解釈している。平等主義的性役割観を持つ男性では、通常時では、女性カテゴリーの中に伝統的女性カテゴリーと非伝統的女性カテゴリーというサブカテゴリー表象が形成されているため、単純な女性カテゴリーが活性化されず、それぞれのカテゴリーに含まれる女性を異なった基準で評価している。しかし、異性愛や死すべき運命が顕現化すると、このようなサブカテゴリー表象の活性化が低下し、単純な女性カテゴリーが活性化し、伝統的女性も非伝統的女性も女性カテゴリーに含め、同じ

基準—伝統的女性を評価する次元—で双方の女性を評価するようになる。一方、伝統的性役割観を持つ男性は、通常時でも伝統的女性カテゴリーや非伝統的女性カテゴリーといったサブカテゴリーの表象の形成が弱く、単純な女性カテゴリーが活性化しているため、伝統的女性も非伝統的女性も同じ基準で評価している。しかし、異性愛や死すべき運命が顕現化すると、非伝統的女性を女性カテゴリー表象から除外し、異なった基準で評価するようになる。このことにより、単純な女性カテゴリー表象を強化するとともに、伝統的女性や非伝統的女性に対してサブカテゴリー・ステレオタイプをより強め適用することとなる。

伝統的性役割観を持つ男性と平等主義的性役割観を持つ男性のこのような方略は、反ステレオタイプ事例のサブグループ化とサブタイプ化の観点から説明できるであろう。つまり、伝統的性役割観を持つ男性の方略は非伝統的女性のサブタイプ化と捉えることができ、平等主義的性役割観を持った男性の方略はサブグループ化の低下と捉えることができる。サブグループ化とサブタイプ化とは、反ステレオタイプ事例がステレオタイプの変容を促進する場合と抑制する場合があることを説明するために導入された2つの過程である (e.g., Maurer, Park, & Rothbart, 1995; Richards & Hewstone, 2001)。サブタイプ化とは、反証事例によるステレオタイプ変容を抑制する過程であり、特定の集団のステレオタイプを反証する集団成員を別のカテゴリーへと分離し、例外として特定の集団カテゴリーから排除するような表象を形成する過程である (e.g., Weber & Crocker, 1983)。この過程により、特定集団のステレオタイプを維持することができる。それに対して、サブグループ化とは、反証事例によるステレオタイプ変容を促進する過程であり、上位カテゴリーの中に、上位カテゴリーを確証するカテゴリーと反証するカテゴリーの複数のサブカテゴリーが表象されると、上位カテゴリーのステレオタイプが低減する過程である (e.g., Park, Ryan, & Judd, 1992)。この2つの過程を、女性関連カテゴリーに適用して、図示したのが Figure 1 である。

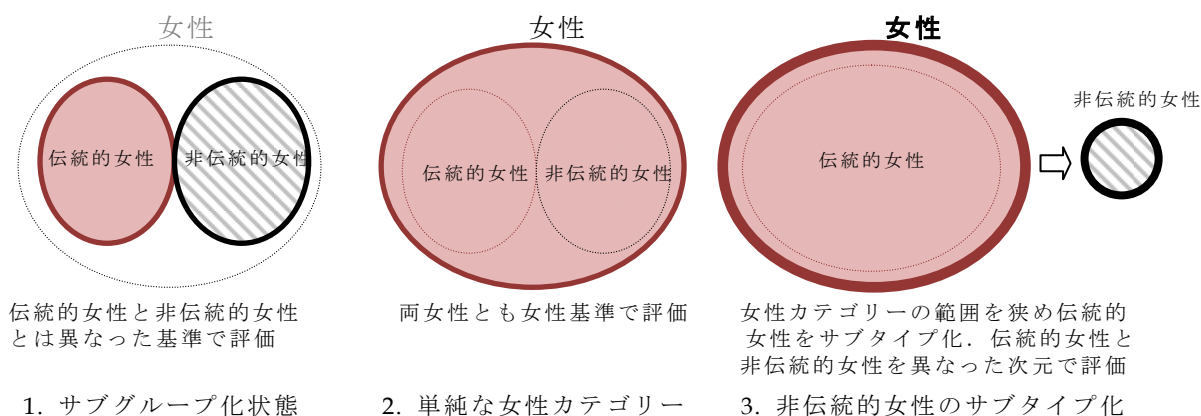


Figure 1 女性カテゴリーとサブカテゴリーのサブグループ化とサブタイプ化

つまり、平等主義的性役割観を持つ男性では、通常では伝統的女性カテゴリー表象と非伝統的女性カテゴリー表象がサブグループとして形成されているため、単純な女性カテゴリーの表象が優勢ではない。しかし、異性愛が顕現化すると、単純な女性カテゴリー表象が優勢となる。つまり、Figure 1-1 から Figure 1-2 へと変化する。一方、伝統的性役割観を持つ男性では、通常の状態ではサブグループ化が生じておらず、単純な女性カテゴリーが優勢である。しかし、死すべき運命や異性愛が顕現化すると、非伝統的女性カテゴリー表象がサブタイプ化され（非伝統的女性を女性として表象しない）、女性カテゴリーが伝統的女性カテゴリーのみが含まれるカテゴリー表象となり強化される。つまり、Figure 1-2 から Figure 1-3 へと変化する。このように、サブグループ化の低減と非伝統的女性のサブタイプ化は、どちらも単純な女性カテゴリーを強化する方略であるが、通常時に持っているジェンダーに関わる表象が、伝統的性役割観を持つ男性と平等主義的性役割観を持つ男性では異なるために、異なった方略がとられると考えられる。

#### 本報告書で実証的に扱う問題

前報告書では、異性愛が他者に対するジェンダー関連のステレオタイプの適用に及ぼす影響を扱っていた。この先行研究を受けて、本報告書で報告する研究では、自己に対するジェンダーに関連するステレオタイプの適用を中心に、異性愛がジェンダー・ステレオタイプの基盤にあり、ジェンダー・ステレオタイプの再生産に寄与する過程について検討をおこなった。

自己ステレオタイプ化とは、自己が所属する集団に持たれているステレオタイプ特性を自己に適用することを指し、自己カテゴリー化理論の中で主に取り上げられてきた現象である（Turner, 1987）。自己カテゴリー化理論によれば、集団関係において集団成員として他者をカテゴリー化するときには自己もそれと対応する集団成員としてカテゴリー化され、自己がカテゴリー化された集団に持たれているステレオタイプの特性が自己の属性として表象されると考えられる。このことから、前報告書で扱った異性愛が顕現化したときの他者に対するジェンダー関連のステレオタイプの適用が、自己に対しても対応する形で適用されることが考えられる。その結果、この自己に適用されたジェンダー関連ステレオタイプの特性に合致した外顯的行動が現れる可能性が高まるであろう。

異性愛が他者に対するジェンダー関連のステレオタイプの適用に及ぼす影響を扱った前報告書の研究では、異性愛が顕現化することによって単純な女性カテゴリーが使われやすくなっていた。このことから、異性愛が顕現化したときには自己に対しても、サブカテゴリーではなく、単純な男性カテゴリーおよび女性カテゴリーが適用されやすくなることが考えられよう。その結果、異性愛が顕現化したときには、単純な

男性ステレオタイプと女性ステレオタイプが自己に適用され、自己表象が変化するとともに、男性ステレオタイプの行動が男性に、女性ステレオタイプの行動が女性に、取られやすくなることが想定できる。そのため、異性愛が顕現化したときには、単純な男女ステレオタイプの行動がとられやすくなり、ジェンダー・ステレオタイプが再生産されていくのではないだろうか。

このような問題意識から、異性愛と自己ステレオタイプ化の関係を、9章では男性を参加者にして、10章では女性を参加者にして検討した。

9章では、異性愛が顕現化したときの男性の自己表象の変化を、潜在測度を用いて検討した研究を報告する。異性愛が顕現化したときには単純な男性カテゴリーが自己に適用されやすくなると予測される。また、他者へのステレオタイプの適用が、伝統的性役割観を持っている男性と平等主義的性役割観を持っている男性では異なっていたことから、性役割観の個人差についても検討をおこなった。異性愛が顕現化していないときでは、単純な女性カテゴリーを使用していなかった平等主義的性役割観を持った男性が、異性愛が顕現化すると単純な女性カテゴリーを用いるようになっていた。このことから、異性愛の顕現化によって、男性ステレオタイプを自己に適用するようになる効果は、平等主義的性役割観を持つとする男性において顕著であることが予測される。そこで、これらの予測を検証するために行った実験を9章で報告する。

10章では、異性愛が顕現化したときの女性の目標（理想的自己）の変化と、それに伴ったジェンダーに関わる行動の変化を検討した一連の研究を報告する。自己ステレオタイプ化は現実自己の表象が変化する現象を扱っているが、自己カテゴリー化の影響は現実自己ばかりではなく理想自己にも影響を与えられられる。目標は理想的自己として表象されており、理想的自己が変化することにより自己呈示目標も変化し、その目標に基づいた行動が生じやすくなることが考えられる。自己呈示行動として、自分の所属する性らしさ（男らしさ・女らしさ）を提示する行動があることが知られている。そのような自己呈示行動の1つとして摂食行動が指摘され、異性の前では女性が女性らしさを自己呈示するために摂食量を減らすことが実証的に示されている（e.g., Mori, Chaiken, & Pliner, 1987; 阪井, 2005）。そこで、異性愛が顕現化すると、女性らしさを提示するという目標が活性化し、摂食量が低下するという自己呈示行動が、自動的に生じるかを検討した。そのため、異性愛に関わる概念を閾下で提示して、女らしさ概念が活性化するか（研究2,3）、摂食量が低下するか（研究3）を検討した。また、他者にあわせた自己呈示行動には個人差があることが知られているので、自尊心によってこの効果が調整されるかを検討した（研究1,2,3）。

11章では、異性愛が顕現化したときの他者に対するステレオタイプ化と自己に対する自己ステレオタイプ化について検討をおこなった研究を報告する。異性愛プライム

または仕事プライムを受けたときの自己概念の変化と伝統的女性・非伝統的女性に対する印象評定を測定することにより、男女の関係性の異なる側面が活性化されることで作動性と共同性における自己と女性の相補性がどのように変化するのかを検討した。

12章では、自己ステレオタイプ化に関わる研究ではないが、異性愛と性役割的偏見を扱った先行研究として先に紹介した Rudman & Heppen (2003) が導入した「ガラスの靴効果—勢力は男性との親密な関係を通じて間接的に獲得するのが望ましいという潜在的意識によって女性の自分自身の達成志向が阻害されているという現象」が日本においても見られるかを、女子大学生(研究1) 既婚者女性(研究2) を参加者として検討をおこなった研究を報告する。

## 引用文献

- 赤澤淳子 (1999). 恋愛の進展に伴う行動および意識の変化—カップルの横断的比較を通して— 日本グループ・ダイナミクス学会第47回大会発表論文集, 104-105.
- Deaux, K., Winton, W., Crowley, M., & Lewis, L. L. (1985). Level of categorization and content of gender stereotypes. *Social Cognition, 3*, 145-167.
- Egaly, A. H. (1987). *Sex differences in social behavior: A social-role interpretation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Esses, V. M., Jackson, L. M., Dovidio, J. F., & Hodson, G., (2005). Instrumental relations among groups: Group competition, conflict, and prejudice. In J. F. Dovidio, P. Glick, & L. A. Rudman (Eds.) *On the nature of prejudice: Fifty years after Allport*. Malden, MA: Blackwell. pp. 227-243.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology, 82*, 878-902.
- Glick, P., Diebold, J., Bailey-Werner, B., & Zhu, L. (1997). The two faces of Adam: Ambivalent sexism and polarized attitudes toward women. *Personality and Social Psychology Bulletin, 23*, 1323-1324.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (1996). The ambivalent Sexism Inventory: Differentiating hostile and benevolent sexism. *Journal of Personality and Social Psychology, 70*, 491-512.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (2001). Ambivalent sexism. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*, (Vol. 33, pp. 115-112). San Diego, CA: Academic Press.
- Glick, P., & Rudman, (2008). *The social psychology of gender: How power and intimacy shape gender relations*. New York, NY: Guilford Press.
- Jost, J. T., & Kay, A. C. (2005). Exposure to benevolent sexism and complementary gender stereotypes: Consequences for specific and diffuse forms of system

- justification. *Journal of Personality and Social Psychology*, 88, 498-509.
- Jost, J. T., & Hamilton, D. L. (2005). Stereotypes in our culture. In J. F. Dovidio, P. Glick, & L. A. Rudman (Eds.) *On the nature of prejudice: Fifty years after Allport*. Malden, MA: Blackwell. pp. 208-224.
- Maurer K.L., Park B., Rothbart M. (1995). Subtyping versus subgrouping processes in stereotype representation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 812-824.
- Mori, D., Chaiken, S., & Pliner, P. (1987). "Eating lightly" and the self-presentation of femininity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 693-702.
- 沼崎誠・工藤恵理子 (1995). 女性との競争状況が男性の家庭志向型女性・キャリア志向型女性に対する好意に及ぼす効果 日本グループ・ダイナミックス学会第 43 回大会発表論文集, 246-247.
- 沼崎誠・高林久美子・天野陽一 (2006). 恋愛は女性に対するステレオタイプ化や偏見を強めるか? —異性愛プライムと平等主義的性役割観がキャリア女性と家庭女性に対する印象や評価に及ぼす効果— 平成 15~17 年度 科学研究費補助金 (基盤研究(C): 15530402) 研究成果報告書「潜在的性役割的偏見の発現とジェンダー・ステレオタイプの受容における心理過程の検討」 pp.125-146.
- Richards, Z., & Hewstone, M. (2001). Subtyping and subgrouping: Process for the prevention and promotion of stereotype change. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 5, 52-73.
- Rudman, L. A., & Fairchild, K. (2007). The F word: Is feminism incompatible with beauty and romance? *Psychology of Woman Quarterly*, 31, 125-136.
- Rudman, L. A., & Heppen, J. B. (2003). Implicit romantic fantasies and women's interest in personal power: A glass slipper effect. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 29, 1357-1370.
- Rudman, L. A., & Phelan, J. E., (2007). The interpersonal power of feminism: Is feminism good for romantic relationships. *Sex Roles*, 57, 787-799.
- 阪井俊文 (2005). 食べる量による女らしさ男らしさの自己呈示—女性は少なく, 男性は多く食べる? 日本グループ・ダイナミックス学会第 52 回大会発表論文集, 142-143
- Sherif, M., Harvey, O. J., White, B. J., Hood, W. R., & Sherif, C. W. (1961). *Intergroup conflict and cooperation: The Robbers Cave experiments*. Norman, OK: University of Oklahoma Book Exchange.
- Six, B., & Eckes, T. (1991). A closer look a the complex structure of gender stereotypes. *Sex Roles*, 24, 57-71.
- Stephan, W. G., & Renfro, C. F. (2002). The role of threat in intergroup relationships. In D.

- M. Mackie, & E. R. Smith (Eds.), *From prejudice to intergroup emotions: Differential reactions to social groups*. New York: Psychology Press. pp. 191-207.
- Turner, J. C. (1987). *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Cowley Road, Oxford, UK: Basil Blackwell.
- Weber, R., & Crocker, J. (1983). Cognitive processes in the revision of stereotypic beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology*, 45, 961-977.

## 9章 異性愛の顕現化が 男性のジェンダー関連自己ステレオタイプ化に及ぼす効果

沼崎 誠<sup>1</sup> 高林 久美子<sup>2</sup> 天野 陽一<sup>1</sup>

(<sup>1</sup> 首都大学東京大学院人文科学研究科) (<sup>2</sup> 一橋大学大学院社会学研究科)

近年の偏見やステレオタイプ化の研究では、統制された過程ばかりではなく自動的過程から生じる偏見やステレオタイプ化に関心が高まり、特にそれらの状況依存性が注目されている。一方、近年の自己研究でも、関係的自己研究をはじめとして (e.g., Andersen & Chen, 2002; Chen, Boucher, & Tapias, 2006), 自己の状況依存性が注目されている。本研究は、偏見やステレオタイプのシステム正当化機能に注目したジェンダー理論であるアンビバレント・セクシズム理論に基づき (e.g., Glick & Fiske, 2001), 異性愛という関係性が顕現化した状況での、男性のジェンダー関連自己ステレオタイプ化による、自動的な自己の変容について検討をおこなった。

### 自己ステレオタイプ化

ステレオタイプを自己に適用し、ステレオタイプ的な特性が自己の表象に取り込まれる現象は、自己ステレオタイプ化と呼ばれ、自己カテゴリー化理論の中で主に検討されてきた。自己カテゴリー化理論は、社会的アイデンティティ理論を、認知的色合いを強めて集団過程一般を扱うように拡張された理論である (Turner, 1987)。そのため、集団サイズや社会的地位 (e.g., Simon & Hamilton, 1994), 社会的アイデンティティの脅威 (e.g., Pickett, Bonner, & Coleman, 2002; Spears, Doosje, & Ellemers, 1997), といった集団関係に関わる文脈が自己ステレオタイプ化に及ぼす効果が主に検討されてきた。しかし、近年においては、自己ステレオタイプ化は、個人的自己への脅威 (Mussweiler, Gabriel, & Bodenhausen, 2000) やプライムによる認知的顕現性 (Sinclair, Hardin, & Lowery, 2006) といった集団関係に関わる文脈以外の状況においても検討されている。

ジェンダーに関わる領域でも、集団関係に直接関わらない文脈において自己ステレオタイプ化が生じていることを示す実証研究がおこなわれている。例えば, Gustafsson and Björklund (2008) は、男性領域で女性の遂行が低下するステレオタイプ脅威が生じる状況において、女性の自己表象にジェンダー・ステレオタイプが組み込まれる自己ステレオタイプ化が生じていることを実証的に示している。また, McCall and Dasgupta (2007) は、社会的地位とジェンダーの顕現性が現象的自己に及ぼす効果を実証的に検討し、低地位で女性とともに作業をするときに、顕在尺度ばかりではなく潜在尺度においても、自己と男性ステレオタイプ特性の連合が強まることを見いだしている。このようにジェンダーに関わる自己ステレオタイプ化が、集団関係といっ



た文脈を超えて、状況に応じて潜在尺度で測定される自己表象においても生じることが実証的に示されている。本研究では、これまで検討されていない異性愛顕現化状況における男性の自己ステレオタイプ化を、自己と男性ステレオタイプ的特性の連合を潜在連合テスト（Implicit Association Test：以下 IAT, Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998）によって測定することにより、検討をおこなった。

### 異性愛とステレオタイプ化

アンビバレント・セクシズム理論によれば、セクシズムやジェンダー・ステレオタイプの背後にある男女間の構造的関係に注目し、男女間の勢力差と相互依存関係の共存が、女性に対する敵意的偏見と慈愛的偏見の両方を生み出す。この理論からは、男女間の相互依存的協力状況といった一見望ましい状況においても偏見やステレオタイプ化が強まることが予測される。沼崎・高林・天野（2006）は、男女相補関係を示唆する異性愛の顕現化が、伝統的女性と非伝統的女性に対する男性の偏見やステレオタイプ化を強めるかを検討している。平等主義的性役割観の高い男性では、異性愛顕現化状況で単純なジェンダー・ステレオタイプの使用を強め、伝統的女性に対して好意を非伝統的女性に対しては非好意を向ける方向で偏見が強まっていた。この結果は通常の場合では伝統的女性と非伝統的女性をサブグループとして異なった評価基準で評価していたものが、異性愛が顕現化すると単純な女性カテゴリーを使用するようになることを示唆するものである。一方、伝統的性役割観の高い男性では、伝統的女性と非伝統的女性のサブカテゴリー・ステレオタイプ化が強まっていた。この結果は、非伝統的女性を女性カテゴリーから排除するサブタイプ化がおこなわれたことを示唆するものである。

### 本研究の目的と仮説

これらの先行研究を受けて、本研究では異性愛が顕現化した状況における、男性のジェンダー関連のステレオタイプ化を、IATを用いて検討した。沼崎他（2006）の結果は、異性愛顕現化状況において、平等主義的性役割観を持った男性が通常の場合では用いるサブカテゴリーを用いなくなり単純な男女カテゴリーを用いやすくなることを示唆するものである。このカテゴリー化が自己に対しても向けられるとするならば、平等主義的性役割観の高い男性が異性愛顕現化状況におかれると、単純な男性カテゴリーを自己に適用し自己ステレオタイプ化が生じると予測される。一方、伝統的性役割観を持った男性では、異性愛が顕現化した状況でも顕現化していない状況でも、単純な男女カテゴリーを用いることが示唆されている。このカテゴリー化が自己に対して向けられているとするならば、異性愛の顕現化の影響を受けづらいと予測される。ここから、異性愛が顕現化した状況では顕現化していない状況に比べ男性は自己と男性的特性の連合を強める傾向があり、この傾向は平等主義的性役割観を持つ男性において顕著であろう、という仮説を設けた。

## 方法

**実験参加者** 本実験の約2ヶ月前の授業時間にバッテリー・テストとして平等主義的性役割観尺度短縮版 (SESRA: 鈴木, 1994) に回答をしていた東京大学男子大学生49名<sup>1</sup>.

**実験計画** 平等主義的性役割観 (SESRA: 連続変量) × 異性愛プライム (有 vs. 無) × IAT のブロック (自己-作動ブロック vs. 自己-共同ブロック) の混合要因計画であった (後ろ1つが参加者内要因).

**自己ステレオタイプ化の測度** 自己ステレオタイプ化の測定のためにジェンダー関連自己概念 IAT を用いた. この IAT で用いたカテゴリーは【自分をあらかず語-自分以外をあらかず語】と【勢力志向的-対人志向的 (作動性-共同性に対応)】であった. 各カテゴリーでの提示語は以下の通りである. 自分をあらかず語として, 私は・私の・自分の・自分は・私と・自分と, の6語を用いた (自分と, はブロックの始めの練習課題で用いた). 自分以外をあらかず語として, 他人は・他人・他人の・他者・他者の・他者は, の6語を用いた (他者は, はブロックの始めの練習課題で用いた). 勢力志向的カテゴリーとして提示する語は, 高い作動性を示すポジティブ特性から, 有能な・決断力のある・自信のある・指導力のある・勇敢な・意志の強い, の6語を用いた (意志の強い, はブロックの始めの練習課題で用いた). 対人志向的カテゴリーとして提示する語は, 高い共同性を示すポジティブ特性から, 優しい・面倒見の良い・温かい・献身的な・親しみやすい・世話好き, の6語を用いた (世話好き, はブロックの始めの練習課題で用いた). 第1ブロック:【自己-他者】12試行, 第2ブロックでは【作動-共同】12試行, 第3ブロックでは【自己+作動-他者+共同 練習】14試行, 第4ブロックでは【自己+作動-他者+共同 本試行】44試行, 第5ブロックでは【共同-作動】12試行, 第6ブロックでは【自己+共同-他者+作動 練習】14試行, 第7ブロックでは【自己+共同-他者+作動 本試行】44試行であった. 半数の参加者はランダムに, 第2-4と第5-7ブロックの順序を入れ替えた.

**手続き** 本実験は4名~8名の集団実験でおこなった. カバー・ストーリーとして, 複数の認知課題をおこなうと教示した. 参加承諾書を取得した後, 第1課題として異性愛プライムの操作をおこなった. 後でテストをするので憶えておくように教示した後で, 記憶課題としてPC上に記憶すべき対連語リストを3分間表示した (Table 1). 異性愛群では, 異性愛関連語を含む7個の対連語と無関連語のみの7個の共通対連語を提示した. 統制群では, 異性愛関連語を含まない14個の対連語 (統制群の対連語と共通対連語) を提示した. 記憶課題の間の時間を取るために別の課題をおこなうと教示した後で複数の課題をおこなわせた. その中の2番目の課題としてジェンダー関連

---

<sup>1</sup> 本実験では, 49名以外に平等主義的性役割観尺度に回答をしていなかった2名も参加したが, 分析には含めなかった.

自己概念 IAT をおこなわせた。実験の制御は Inquisit 2.0 [Windows XP] を用いて行った。記憶の再生課題の実施後にディブリーフィングをおこない実験を終了した。

Table 1 異性愛プライミングに用いた対連語

○異性愛群の対連語	○統制群の対連語	○共通対連語
告白 — ラブレター	授業 — 休講	風景 — 絵画
観覧車 — デート	仲間 — サークル	ハマグリ — 砂浜
教会 — 結婚	ランチ — 学食	山脈 — アルプス
子犬 — 恋人	専門 — 先端	堤防 — 川岸
ケーキ — ウェディング	アルバイト — 夏休み	野球 — 矢印
長距離 — 恋愛	飲み会 — 居酒屋	サッカー — トロフィー
指輪 — 婚約	友人 — 旅行	漫画 — アニメ

## 結果

**分析の方針** 300ms 以下を 300ms, 3000ms 以上を 3000ms としたのち、反応時間を対数変換した上で組み合わせた本試行のブロックごとの平均値を求めた (Figure 1 や平均値は指数変換後の値を示した)。自己-作動ブロックと自己-共同ブロックの順序を要因に入れた分析も行ったが、主効果・交互作用とも有意になった効果はなかったため、この後の分析では順序を要因に含めず、SESRA×プライム×ブロックの全ての交互作用効果を含んだ回帰分析をおこなった。

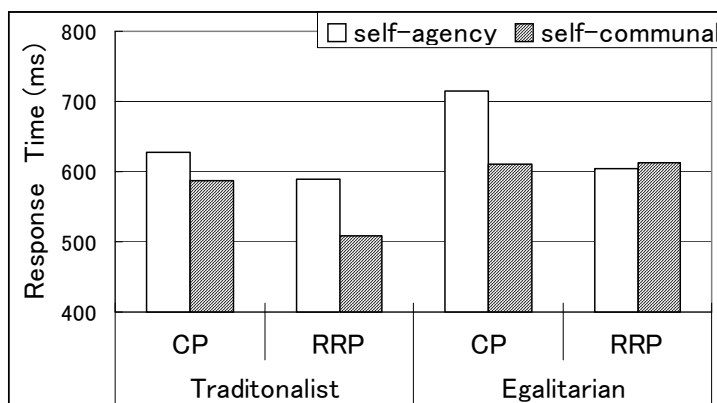


Figure 1. Gender-related self-stereotyping as a function of SESRA, priming, and block

NOTE: CP=Control Priming, RRP=Romantic Relationship Priming

**自己ステレオタイプ化** 回帰分析の結果、ブロックの主効果とプライムの主効果が有意であった ( $F(1, 45) = 11.11, p < .01$ ;  $F(1, 45) = 5.14, p < .05$ )。ブロックの主効果は自己-作動ブロックの反応時間が自己-共同ブロックの反応時間に比べ長いことによる効果であった (616ms vs. 568ms)。プライムの主効果は、統制群は異性愛群に比べて反応時間が長いこ

とによる効果であった (611ms vs. 572ms). これらの効果に加えて SESRA の主効果が有意であった ( $F(1, 45) = 4.88, p < .05$ ). この効果は平等主義的性役割観を持つほど反応時間が長いことによる効果であった. これらの効果に加えて, 仮説から予測される, SESRA×プライム×ブロックの交互作用効果も有意であった ( $F(1, 45) = 5.09, p < .05$ ). SESRA の得点 1SD を平等主義的性役割観者 (Egalitarian), -1SD を伝統主義的性役割観者 (Traditionalist) として回帰式から値を求めてプロットしたのが Figure 1 である. 平等主義的性役割観の高い男性においては, 統制群に比べ異性愛プライムを受けると自己-作動ブロックの反応が速くなっていた ( $t = -1.77, df = 45, p = .084$ ). この結果は, 平等主義的性役割観が強い人は, 通常の場合は自分と共同性との結びつきが作動性との結びつきに比べ強いものが, 異性愛プライムを受けると作動性との連合が共同性と同程度になることを示しており, 自分をより伝統的な意味での男性として自己ステレオタイプ化が強まったことを示唆する結果であった.

### 考 察

平等主義的性役割観の高い男性の場合には, 異性愛プライムを受けた参加者は統制群の参加者に比べ, 相対的に自己と作動性との潜在的な連合を強めた. この結果は, 平等主義的性役割観が高い男性において, 伝統的な意味でのジェンダー・ステレオタイプを自己に適用する自己ステレオタイプ化が生じたことを示唆するものであり, 仮説を支持するものであった. 一方, 伝統的性役割観が高い参加者では, 異性愛プライムによる自己とジェンダー関連概念との潜在的連合への影響は小さかった.

本研究の結果と沼崎・高林・天野(2006)の結果をあわせて考えてみると, 顕在尺度で平等主義的性役割観を持っていると主張する男性は, 通常の状態では, 自分を伝統的な意味で男性的に捉えず, 女性を恋愛対象という側面だけでなく多面的な次元で評価をしている. しかし, 異性愛が顕現化した状況になると, 自己も女性も単純な伝統的ジェンダーによってカテゴリー化するようになり, 男女ステレオタイプを適用するようになる. その結果, 自己と男性的属性との連合を高め, 女性のサブグループ化を低下させることになったと考えられよう. 一方, 顕在尺度で伝統的性役割観を持っていると主張する男性は, 通常の状態から自己も女性もジェンダーによってカテゴリー化し, 男女ステレオタイプを適用していると考えられよう.

これらの結果は, 他者に対してステレオタイプを適用しやすくなる異性愛状況では, 自己に対しても対応するステレオタイプを適用することを示しており, 集団に基づく自己と他者のカテゴリー化が同時に生じるという, 自己カテゴリー化理論の主張を (Turner, 1987), 異性愛状況においても確認できたと言えよう.

他者ばかりではなく自己に対しても, 異性愛状況においてはジェンダーによってカテゴリー化して, ジェンダーに関連するステレオタイプを適用するという結果は, ジェンダー

に関連する偏見やステレオタイプの背景には男女間の異性愛という相互依存関係があるという、アンビバレント・セクシズム理論 (e.g., Glick & Fiske, 2001) の主張を裏付けるものである。異性愛が顕現化すると、男性と女性そして男女間の関係の表象が変化し、異性や自己そして異性と自己の関係の表象が変化する。このことにより、伝統的な性役割観が妥当なものとして見なされるようになる。また、本研究において潜在測度においてみられたことから、このプロセスはある程度自動的に生じていると考えられる。このことは、人生にとって重要で不可欠だと多くの人に認識されている異性愛が、性役割やジェンダー・ステレオタイプを再生産する装置として機能していること示唆する。

本研究においては、異性愛状況における男性の潜在的自己表象の変容を扱った。今後の研究においては、異性愛状況における女性の自己ステレオタイプ化の検討が必要であろう。女性においても性役割観によって異性愛が顕現化した状況での性役割的偏見が異なっていたが、男性とは異なるパターンを示していた (沼崎他, 2006)。このことが、女性の自己へのジェンダー関連ステレオタイプの適用とどのように関わっているのか、実証的な研究によって明らかにしていく必要がある。また、他者へのジェンダー・ステレオタイプの適用が強まる異性愛以外の状況で (例えば、本報告書で報告する死すべき運命の顕現化状況やシステム脅威状況)、自己へのジェンダー・ステレオタイプの適用を検討する必要がある。このような実証研究によって、ジェンダー関連ステレオタイプの維持や性役割の再生産についてより理解が深まることになろう。

## 引用文献

- Andersen, S. M., & Chen, S. (2002). The relational self: An interpersonal social-cognitive theory. *Psychological Review*, 109, 619-645.
- Chen, S., Boucher, H. C., & Tapias, M. P. (2006). The relational self revealed: Integrative conceptualization and implication for interpersonal life. *Psychological Bulletin*, 132, 151-179.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (2001). Ambivalent sexism. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*, (Vol. 33, pp. 115-112). San Diego, CA: Academic Press.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1464-1480.
- Gustafsson, U., & Björklund, F. (2008). Women self-stereotype with feminine stereotypical traits under stereotype threat. *Current Research in Social Psychology*, 13, 219-231.
- Inquisit 2.0 [Windows XP] . (2003). Seattle, WA: Millisecond Software.
- McCall, C., & Dasgupta, N. (2007). The malleability of men's gender self-concept. *Self and Identity*, 6, 173-188.

- Mussweiler, T., Gabriel, S., & Bodenhausen, G. V. (2000). Shifting social identities as a strategy for deflecting threatening social comparisons *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 398-409.
- 沼崎誠・高林久美子・天野陽一 (2006). 恋愛は女性に対するステレオタイプ化や偏見を強めるか? —異性愛プライムと平等主義的性役割観がキャリア女性と家庭女性に対する印象や評価に及ぼす効果— 平成 15~17 年度 科学研究費補助金 (基盤研究(C) : 15530402) 研究成果報告書「潜在的性役割的偏見の発現とジェンダー・ステレオタイプ の受容における心理過程の検討」 pp.125-146.
- Park, B., Ryan, C. S., & Judd, C. M. (1992). Role of meaningful subgroups in explaining differences in perceived variability for in-groups and out-groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 553-567.
- Sinclair, S., Hardin, C. D., & Lowery, B. S. (2006). Self-stereotyping in the context of multiple social identities. *Journal of Personality and Social Psychology*, 90, 529-542.
- Simon, B., & Hamilton, D. L., (1994). Self-stereotyping and social context: The effects of relative in-group size and in-group status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 66, 699-711.
- Spears, R., Doosje, B., & Ellemers, N. (1997). Self-stereotyping in the face of threats to group status and distinctiveness: The role of group identification. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23, 538-553.
- 鈴木淳子 (1994). 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成 心理学研究, 65, 34-41.
- Turner, J. C. (1987). Rediscovering the social group: A self-categorization theory. Cowley Road, Oxford, UK: Basil Blackwell

## 10章 異性愛関係の閾下プライミングが女らしさ呈示目標の活性化と 摂食行動に及ぼす効果 — 自己呈示行動の自動性と自尊心による調整効果 —

沼崎 誠<sup>1</sup> 高林 久美子<sup>2</sup> 天野 陽一<sup>1</sup>

(<sup>1</sup> 首都大学東京大学院人文科学研究科) (<sup>2</sup> 一橋大学大学院社会学研究科)

自己表象には関係的自己と呼ばれる重要他者との関係に基づいた表象が存在し、多くの社会的行動に影響を与えている (e.g., Andersen & Chen, 2002; Chen, Boucher, & Tapias, 2006; Baldwin, 1992). 他者との重要な関係の1つとして異性愛関係があるが (e.g., Buss, 2005; Fehr, 2001; 松井, 1993), この異性愛関係はジェンダー・ステレオタイプや性役割的偏見の基盤であるとも指摘されている (e.g., Glick & Fiske, 2001; Glick & Rudman, 2008). そのため、ジェンダー・システムの再生産の理解のためには、異性愛関係における伝統的性役割観に沿った社会的行動を生み出す過程に、関係的自己がどのように関わっているかを明らかにすることが必要であろう。本研究では、この過程を明らかにするために、関係的自己と目標志向的行動の自動性の研究の知見を活かして、異性愛関係の閾下プライムによって、ジェンダーに関連する自己呈示目標が自動的に活性化し、伝統的性役割に沿った目標志向的自己呈示行動が自動的に生じるか、また、これらの効果を個人差(特性自尊心)が調整するかを検討した。

### 関係的自己と目標志向的行動の自動性

自己表象として少なくとも、個人的自己 (individual self) と関係的自己 (relational self) と集合的自己 (collective self) の3つのレベルの表象を考慮する必要があることが、近年の社会的自己に関する研究において主張されている (e.g., Sedikides & Brewer, 2001). 個人的自己は他者からの相違を基盤とした自分に独自の属性という観点からの自己の表象である。また、集合的自己は社会集団への同化を基盤とした集団成員の属性という観点からの自己の表象である。これらに対して、関係的自己とは重要他者との関係 (e.g., 親子関係/友人関係/恋愛関係) を基盤とした特定の関係における自己の表象である (e.g., Andersen & Chen, 2002; Chen, et al., 2006). 関係的自己に関する表象があるため、重要他者との関係が頭の中で活性化したときには、その重要他者が眼前に存在しない場合でも、その重要他者と一緒にいる時の自己が、そのときの現象的自己になり、自己評価や自己評定が変化し、他者に対する多くの行動や評価にも影響を与える (e.g., Baldwin, Carrell, & Lopez, 1990; Baldwin & Holmes, 1987; Berk & Andersen, 2000; Hinkley & Andersen, 1996). 例えば、重要他者と類似した特徴を持った初対面の人と相互作用をするときには、その重要他者といるときと類似した現象的自己となり (Hinkley & Andersen, 1996), その類似した重要他者が好きな人か嫌いな人かによって相互作用のパターンが異なってくる (Berk &

Andersen, 2000).

これらの研究に加えて、近年の社会的行動の自動性の研究では、重要他者をプライムすることにより、その重要他者と関連する目標が自動的に活性化し目標志向的行動が生じやすくなることが示されている (e.g., Fitzsimons & Bargh, 2003; Shah, 2003). 例えば, Shah (2003) は、父親概念 ("father" or "dad") を閾下プライムすると、父親が重要で参加者に論理思考能力を高く持って欲しいと考えている場合に、論理的思考能力を測定するといわれたアナグラム課題に対する動機づけが高まり、課題遂行が優れるようになることを見いだしている。本研究では、異性愛関係を示唆する恋人概念を閾下プライムすることによって、伝統的性役割に従った目標志向的行動が自動的に生じるかを検討した。

### ジェンダーに関わる目標志向的行動

ジェンダーに関わる目標志向的行動として、自己呈示行動については多くの研究がなされている (e.g., Gaudagno & Cialdini, 2007). 自己呈示行動にはしばしば性差が見られるが、この性差は社会的役割に伴う規範によって説明できることが指摘されている (e.g., Eagly, 1987). 異性愛に関係してジェンダーによる違いが見られる自己呈示行動の1つとして摂食行動が指摘されている (e.g., Herman, Roth, & Polivy, 2003). Pliner and Chaiken (1990) は、一緒にいる相手が同性のときよりも異性の時に、女性参加者の摂食量が減ることを見いだしている。日本においても、阪井 (2005) は、摂食量を実験者に知られることを強く意識させると、実験者が男性のときには女性のときに比べて、摂食量が少なくなることを見いだしている。さらに、異性愛が関係することの直接的な証拠として、Mori, Chaiken, and Pliner (1987, Study 1) は、趣味・関心・将来の職業などの情報を与えることによって一緒にいる男性の魅力を操作した上で、女性参加者の摂食量を測定している。結果として、魅力的な男性の前では魅力的でない男性の前にいるときに比べ、女性参加者の摂食量が減ることを見いだしている。また、Mori, et al. (1987, Study 2) では、自分の性格検査の結果が男性的であると魅力的な男性に知られたときに、女性的であるという結果が知らされたときに比べて、摂食量が減ることを見いだしている。これらの研究は、女性が異性愛の対象となりうる魅力的な男性に対して、自分が女らしいことを自己呈示するために、摂食量を低下させることを示唆する。

従来自己呈示行動は意識的で統制された資源を要する行動であると考えられてきたが、近年では、自己呈示行動も習慣化されると、資源を必要としない自動的な行動になると考えられている (e.g., Baumeister, Hutton, & Tice, 1989; Tice, Butler, Muraven, & Stillwell, 1995; Schlenker, 2003). 先に紹介したように、目標志向的行動が関係性に関する手がかりの活性化によって自動的に生じるとするならば、女性の自己呈示的な摂食行動もまた、目の前に呈示相手がない場合でも、関係性のプライムによって自動的に生じる可能性がある。このことから、異性愛関係をプライムすると女らしく見られたいという目標が自動的に活性化し、摂食量が減少することが予測することができよう。ただし、自己呈示行動の



研究では、他者に合わせた自己呈示が自尊心によって調整され、他者に合わせた自己呈示が自尊心の低い人に生じやすいことが指摘されている (e.g., Baumeister, Tice, & Hutton, 1989). ここから、異性愛関係をプライムすると女らしく見られたいという目標が自動的に活性化し摂食量が低下するという効果が全ての女性に見られるわけではなく、自尊心の低い女性に顕著にみられる可能性が考えられよう。

### 本研究の目的と概要

これまでの議論を受けて、本研究では以下の3つの概念的仮説を検証するため、3つの研究をおこなった。概念的仮説1として「女性において、異性愛関係の手がかりは「女らしさ」呈示目標を強めるであろう」を設けた。概念的仮説2として「女性において、異性愛関係の手がかりは「女らしさ」自己呈示を強めるであろう」を設けた。概念的仮説3として「仮説1と仮説2の傾向は自尊心の低い女性において顕著であろう」を設けた。

研究1では、相手にあわせた自己呈示が自尊心の低い人で顕著に見られるという指摘が、女性における重要他者からのジェンダーに関する期待でも当てはめるかを確認するための調査研究をおこなった。研究2では、異性愛関係の手がかりが自動的に「女らしさ」呈示目標を強めるかを検討するため、恋人概念をプライムしたときに女らしさ概念が活性化するかどうかを明らかにする実験研究をおこなった。研究3では、異性愛関係の手がかりが自動的に「女らしさ」自己呈示的行動を強めるかを検討するために、恋人概念を閾下プライムしたときには、女性参加者が摂食量を低下させるかどうかを明らかにする実験研究をおこなった。

## 研究 1<sup>1</sup>

研究1では、相手にあわせた自己呈示が自尊心の低い人で顕著に見られるという指摘が、女性の重要他者からのジェンダーに関する期待でも当てはまるかを確認するため、重要他者が持つジェンダーに関する期待が、その重要他者といるときの現象的自己に影響を及ぼすかを検討した。参加者には、約1ヶ月の間において2回の調査に協力をお願いした。1回目の調査では特性自尊心と、状況を限定せずにジェンダーに関する自己概念を測定した。2回目の調査では、特定の重要他者をひとり頭に思い浮かべて、その人が参加者に対して持つジェンダーに関する期待と、その人といるときのジェンダー関連の自己概念を測定した。操作的仮説としては、重要他者が持つジェンダー期待に沿う方向で、その人といるときの自己が変化するであろう、そして、この傾向は自尊心の低い女性参加者は高い女性参加者に比べて顕著であろう、を設けた。

### 方法

---

<sup>1</sup> 本研究で使用したデータセットは、19章の研究1と同一のデータセットである。

**参加者** 共通基礎科目「心理学」を受講している2回の調査に回答の不備のない東京都立大学/首都大学東京の女子大学生102名。

**手続き** 第2回目の授業時間におこなったバッテリー・テストにおいて、Rosenbergの自尊心尺度とジェンダー関連自己評定に回答させた。ジェンダー関連の自己評定項目には男性的ポジティブ特性・男性的ネガティブ特性・女性的ポジティブ特性・女性的ネガティブ特性が各々10項目含まれており（Appendix 1を参照）、「1:まったく当てはまらない-7:非常に当てはまる」の7件法で回答させた。

次に、バッテリー・テストから約1ヶ月後、授業中に対人関係に関する質問紙に回答させた。この質問紙では、あなたの重要な他者として、あなたが好きな人を1人思い浮かべた。その人の特徴とともに、その人と一緒にいるときの自分にどの程度当てはまるかを、バッテリー・テストと同じ40項目に7件法で回答させた。最後に、ジェンダー期待としてTable 1に示した6項目（男性的期待1,3,5:女性的期待2,4,6）に対して、その重要他者があなたにどの程度期待していると思うかを7件法で回答させた。

Table 1. 重要他者のジェンダー・ステレオタイプ期待の因子構造（研究1）

	因子1	因子2
1. あなたが男らしいこと	.09	.97
2. あなたが将来、家事育児を熱心にする	.77	.15
3. あなたが指導力のあること	.68	.11
4. あなたが世話好きであること	.71	.04
5. あなたが将来、仕事に熱心で打ち込むこと	.66	-.21
6. あなたが女らしいこと	.54	.11

## 結果

**ジェンダー期待の指標** 項目の整理のために期待の評定に対して因子分析（主成分・バリマックス回転<sup>2</sup>）をおこなった（Table 1）。第1因子として複数の男性的期待の項目と複数の女性的期待の項目の負荷が高い、一般的な期待の高さ因子が得られた。第2因子としては「男らしくあること」の1項目が含まれ、ジェンダー期待としては、一般的な期待の高さと独立したこの項目が妥当な指標であると判断した。

**変化量** 特性ごとに、重要他者といふときの自己評定からバッテリー・テストでの自己評定を引いた差を取り、男性的ポジティブ特性・男性的ネガティブ特性・女性的ポジティブ特性・女性的ネガティブ特性ごとに平均変化量を算出した。男らしさ期待と自尊尺度得点を標準化した上で、男らしさ期待×自尊心×特性ジェンダー×特性ヴェイレンスの全ての交互作用項を含む回帰分析をおこなった。結果として、特性ジェンダーの主効果 ( $F(1, 98) = 24.03, p < .001$ )、特性ヴェイレンスの主効果 ( $F(1, 98) = 42.89, p < .001$ )、特性ジェンダ

<sup>2</sup> 項目の整理のための因子分析であり、1項目でも因子とまとめることのできる主成分分析により初期解を求めた。

ー×特性ヴェイレンスの交互作用 ( $F(1, 98) = 22.96, p < .001$ ), 自尊心×特性ヴェイレンスの交互作用 ( $F(1, 98) = 5.84, p < .05$ ), 男らしさ期待×特性ジェンダーの交互作用 ( $F(1, 98) = 13.02, p < .001$ ), 男らしさ期待×自尊心×特性ジェンダーの交互作用 ( $F(1, 98) = 7.84, p < .001$ ), が有意であった。仮説に関連する, 男らしさ期待×特性ジェンダーと男らしさ期待×自尊心×特性ジェンダーの2つの効果を分かりやすくするために, 男性的に評定が変化したことを示すように男性度変化得点 ((男性ポジ変化得点+男性ネガ変化得点)/2 - (女性ポジ変化得点+女性ネガ変化得点)/2) を算出し, 自尊心得点が-1SD を低自尊心者, 自尊心得点が 1SD を高自尊心者として, 男らしさ期待と男性度変化得点の関係を図示したのが Figure 1 である。ここからわかるように, 重要他者の男らしさ期待が高いほど男性的に現象的自己が変化するが, 自尊心によってこの効果は調整されていた。自尊心の高い女性参加者においては, 重要他者の男らしさ期待と男性変化度得点の間には関係は見られなかったが ( $\beta = .03, t(98) = .22, ns$ ), 自尊心の低い女性参加者では, 関係が見られ, 重要他者の期待に応じて現象的自己が変化していた ( $\beta = .64, t(98) = 4.29, p < .001$ )。この結果は, 仮説は支持するものであった。

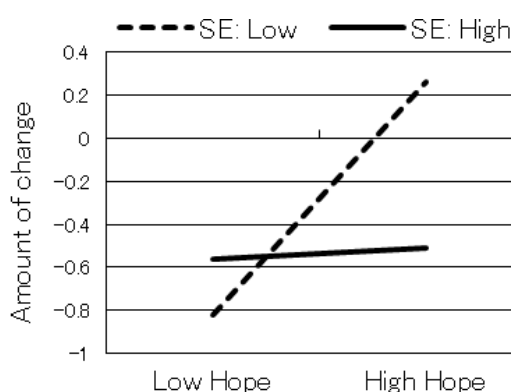


Figure 1. Amount of change for masculinity rating as a function of self-esteem and gender-related hope of a significant other.

Note SE:Low = Self-esteem  $-1\sigma$ , SE:High = Self-esteem  $1\sigma$

## 考 察

重要他者が持つジェンダーに関する期待が, その重要他者といるときの現象的自己に影響を及ぼすかを, 女性参加者を用いて検討した。自尊心の低い女性参加者においてのみ, 相手のジェンダーに関する期待に合うように, その人と一緒にいるときの自己が変化していた。この結果は, 相手にあわせた自己呈示が自尊心の低い人で顕著に見られるという指摘が, 女性の重要他者からのジェンダーに関する期待でも当てはまることを示唆している。ここから, 関係性のプライムの影響が自尊心の低い参加者で顕著である可能性が考えられ, 研究2以降では, 参加者の自尊心をあらかじめ測定しおき, 異性愛関係のプライムの効果が自尊心によって調整されるかを検討した。

## 研究 2

近年の目標志向的行動の自動性の研究では、環境手がかりが目標概念を活性化させ、意図を意識することなしに目標志向的行動が自動的に生じることが示されている (e.g., Dijksterhuis, Chartrand, & Aarts, 2007). 重要他者に関する手がかりは、重要他者といふときの目標も自動的に活性化させ、目標志向的行動を自動的に生じさせる (e.g., Chen, Fitzsimons, & Andersen, 2007; Fitzsimons, & Bargh, 2003; Shah, 2003). 一方、魅力的な男性の前では、女性は「女らしく」自己呈示するようになる (Mori et al., 1987). このような異性愛に関わる目標志向的な自己呈示行動も、社会的役割によるものであるため、ある程度習慣的になっている可能性が考えられよう。もしそうであるとするならば、このような行動が自動的に生じるために、異性愛に関する環境手がかりがあれば、自動的に「女らしさ」呈示目標が無意識のうちに活性化すると考えられる。

研究 2 では、恋人概念を閾下プライムしたときに、「女らしさ」呈示目標が活性化するかを検討するための実験を実施した。研究 1 から、他者にあわせた自己呈示が、自尊心が高い女性に比べて自尊心の低い女性で顕著であることから、恋人概念の閾下プライムが自己呈示目標の活性化に及ぼす効果においても自尊心による調整効果が見られると考えられる。この点を検討するために、あらかじめ自尊心を測定してあった女性参加者に対して、半数の参加者には恋人概念を閾下プライムした上で、「女らしさ」概念の活性化の指標として語彙判断課題での反応時間を測定した。語彙判断課題においては、恋人概念の活性化がダイエット目標を活性化させる可能性も考えられるため、「ダイエット」概念の活性化についてもあわせて検討した。操作的仮説として、以下の 2 つの仮説を設けて検討した。仮説 1 としては、恋人概念をプライムされた女性参加者は、されなかった参加者に比べて、「女らしさ」に関連する語彙判断が速くなるであろう、を設けた。仮説 2 として、仮説 1 の傾向は自尊心の低い参加者に顕著であろう、を設けた。

### 方法

**実験計画** プライム (恋人プライム vs. 統制) × 自尊心 (連続変量) × 関連 (女らしさ vs. ダイエット) の、後ろ 1 つが参加者内要因の混合要因計画。

**実験参加者** 共通基礎科目「心理学」の授業中においてあらかじめ Rosenberg の自尊心尺度に回答していた首都大学東京女子大学生 27 名。

**手続き** 自尊心尺度に回答してから約 1 ヶ月半後、2-6 名で本実験をおこなった。参加者のプライム条件を知らない 1 名の女性実験者が、実験参加者をそれぞれの画面が見えないように配置した PC の前に誘導した。語彙判断に関して説明をした後に参加承諾書を取得した。実験実施は PC 上での教示によっておこなった。刺激の提示および反応時間の測定は、Inquisit 2.0 [Windows XP] を用いて行った。

最初に第 1 課題と称して、表示された文字列に意味があるかどうかできるだけ速く正確

に判断するように教示した後, 24 試行をおこなわせた. この課題では注視点「+」を 1020ms 呈示した後, プライム刺激を 17ms 呈示し, 「XXXXXX」をマスク刺激として 17ms 呈示した. その後 34ms 空白を呈示した後に, ターゲット刺激を 255ms 呈示した. 恋人プライム群ではプライム刺激として「彼氏」または「恋人」を呈示し, 統制群では空白を呈示した. ターゲット刺激は, 女らしさ関連語やダイエット関連語を含まない有意味語 12 語, 無意味語 12 語をランダムに呈示した. 参加者が正答すると「○」誤答すると「×」が表示された.

次に第 2 課題として, 第 1 課題とほぼ同様の語彙判断課題をおこない, 活性化の指標として, ターゲット刺激に対する反応時間を測定した. 第 1 課題からの変更点として, 第 2 課題のターゲット刺激の有意味語 12 語に, 女らしさ関連 3 語とダイエット関連 3 語と, モーラ数/文字のならば/最初の音/文字単語親密度がほぼ等しくなるように対応させた無関連語 6 語を含めた (Table 2 参照), その他の変更点としては練習 4 試行を含めた. 課題終了後, 本研究とは無関連な課題を実施した後, ディブリーフィングをおこない, 再度データの使用許可を取り実験を終了した.

Table 2 ターゲット語

女らしさ関連語	対応無関連語
控えめ	等しさ
おしとやか	おおっぴら
かわいらしい	かたじけない
ダイエット関連語	対応無関連語
体重	太陽
スタイル	スタンプ
ダイエット	ダイビング

## 結果

閾下プライムに気付いている参加者はいなかった. 反応時間は誤反応を欠損値とした上で対数変換を行った (誤反応率 = 2.8%). 全体の平均値より 3SD 以上離れている反応 (999ms 以上) を欠損値 (1.0%) とした上で, 女らしさ関連語, 対応する無関連語, ダイエット関連語, 対応する無関連語ごとに平均値を求めた. 次に, それぞれの対応する無関連語の反応平均値から女らしさ関連語の反応平均値またはダイエット関連語の反応平均値を引き, 女らしさ関連語およびダイエット関連語の促進時間を算出した. この値に対して, プライム×関連×自尊心の全ての交互作用項を含む回帰分析をおこなった (Figure 2: 反応時間は指数変換して ms 単位で示した). その結果, 関連の主効果が有意で ( $F(1, 23) = 7.16, p < .05$ ), 仮説 2 から予測される 3 要因の交互作用効果に有意に近い効果が見られた ( $F(1, 23) = 2.87, p = .10$ ), 3 要因の交互作用を検討するため, 女らしさ関連語とダイエット関連語の促進時間ごとに, プライム×自尊心の全ての交互作用を含む回帰分析をおこなった. ダイエット関連語で有意になった効果はなかった ( $F_s < 1.71, ns$ ). 女らしさ関連語では, プライム×自尊心の交互作用に有意に近い効果が見られた ( $F(1, 23) = 3.63, p < .07$ ). 自尊心尺度の得点-1SD (低自尊心) と 1SD (高自尊心) でプライムの効果が見られるかを検討

したところ、自尊心の高い参加者ではプライム効果は見られなかったが ( $t(23) = .51, ns$ ), 自尊心の低い参加者においてプライムの効果が有意で ( $t(23) = 2.50, p < .05$ ), 統制群に比べ恋人プライム群では、女らしさ関連語に対する相対的反応時間が速くなっていた。

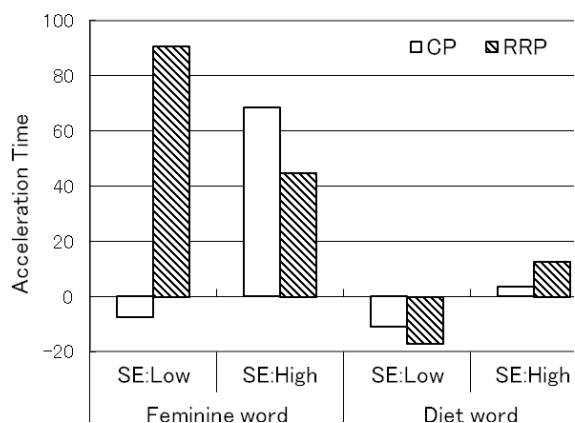


Figure 2. Response latency differences between related and non-related targets as a function of priming, self-esteem and target.

Note SE:Low = Self-esteem -1SD, SE:High = Self-esteem 1SD

RRP : Romantic Relationships Prime, CP: Control Prime

## 考 察

ダイエットに関わる語彙判断においては、恋人概念のプライムや自尊心の効果は見られなかったが、「女らしさ」に関わる語彙判断においては、統制条件に比べて恋人概念を閾下プライムすると、自尊心の低い参加者においてのみ有意に反応時間が速くなっていた。この結果は、仮説を支持するものであり、異性愛関係が活性化すると、「女らしさ」呈示目標が、自尊心の低い参加者においてのみ自動的に活性化することを示唆している。ただし、「女らしさ」に関わる反応時間に対する分析で、プライム×自尊心の交互作用は有意に近い効果であり、有意ではなかった。これは実験参加者が少なく検出力が弱かったためである可能性が考えられるが、研究3においても同様の手続きを用いて再度検討をおこなった。さらに、研究3ではこの活性化した目標が自己呈示行動に影響を与えるかを検討した。

## 研 究 3

目標概念が活性化すると、目標志向的行動が意図を意識しなくても自動的に生じる (e. g., Chen, et al., 2007)。例えば, Bargh, Gollwitzer, Lee-Chai, Barodollar, and Trötschel (2001) は、ランダムな文字列から単語を見つける課題を実施する際に、半数の参加者には達成関連語を見つけるようにさせ、そのうち、達成関連課題の遂行を測定している。結果として、参加者は最初の課題と後の課題の関連に気付いていないにも関わらず、最初の課題で達成関連語を見つけたときには、統制条件に比べて、後の達成関連課題の遂行が優れていた (実験 1)。また、乱文構成課題によって援助概念を活性化しておくとその後の援助行動が増えることも示されている (実験 2)。これらの結果は、達成や援助といった目標が活性化して

いると、その目標を達成するための達成行動や援助行動が自動的に生じることを示唆している。

研究 2 では、自尊心が低い参加者において、異性愛関係を示唆する恋人概念を閾下プライムすると、「女らしさ」呈示目標が活性化することが示された。この目標の活性化が自動的に目標関連行動を生じさせるのならば、「女らしさ」を自己呈示する目標志向的行動も自動的に生じると考えられる。研究 3 においては、先行研究 (e.g., Mori et al., 1987; Pliner & Chaiken, 1990; 阪井, 2005) で示されている、「女らしさ」の自己呈示として利用される摂食行動を測定して、この予測について検討をおこなった。

あらかじめ自尊心を測定してあった女性を参加者にして、半数の参加者には恋人概念を閾下プライムした上で、クラッカーを食べる機会を与えた。操作的仮説として、以下の 2 つの仮説を設けて検討した。仮説 1 としては、恋人概念をプライムされた女性参加者は、されなかった参加者に比べて、摂食量が少ないであろう、を設けた。仮説 2 として、仮説 1 の傾向は自尊心の低い参加者に顕著であろう、を設けた。

さらに、摂食量を測定した後で、研究 2 の第 2 課題と同じ課題を実施し、「女らしさ」概念の活性化の指標として語彙判断課題での反応時間を測定した。活性化に関する操作的仮説として、以下の 2 つの仮説を設けて検討した。仮説 3 としては、恋人概念をプライムされた女性参加者は、されなかった参加者に比べて、「女らしさ」に関連する語彙判断が速くなるであろう、を設けた。仮説 4 として、仮説 3 の傾向は自尊心の低い参加者に顕著であろう、を設けた。

## 方法

**実験計画** プライム (恋人プライム vs. 統制) × 自尊心 (連続変量) の参加者間要因計画。

**実験参加者** 共通基礎科目「心理学」の授業中においてあらかじめ Rosenberg の自尊尺度に回答していた、恋人のいない東京都立大/首都大学東京女子大学生 41 名<sup>3</sup>。プライムに気付いた参加者を除く 39 名を分析の対象とした。

**手続き** 自尊心尺度に回答してから約 1 ヶ月後、参加者のプライム条件を知らない 1 名の女性実験者が個別実験をおこなった。「空腹感と満腹感が課題遂行に及ぼす効果に関する調査」という名目で実験参加者を募った。実験の前日に実験参加者に「明日は 13 時までに昼食を取ってそれ以降は何も食べない」ように依頼した。実験は 15:00・16:30・18:00 からの開始で、時間帯による空腹感の影響を除くため、プライムと自尊心に関して開始時間をマッチングした。

実験室に来た参加者に、荷物やコートを鍵のかかるロッカーにしまわせた後で、実験の手続きの概要を説明して参加承諾書を取得した。最初に、当日の摂食行動やその時点での空腹感やムードについて 7 件法で回答させた。

---

<sup>3</sup> 恋人がいる参加者の場合、恋人といるときの現実の摂食行動が直接反映される可能性があるため、恋人のいない女性のみを参加者とした。

次に、空腹時の課題遂行を測定すると称して、研究2の第1課題と同一の語彙判断課題を Inquisit 2.0 [Windows XP] で制御した PC を用いておこない、プライムの操作をおこなった。表示された文字列に意味があるかどうかできるだけ速く正確に判断するように教示した後、24 試行をおこなわせた。この課題では注視点「+」を 1020ms 呈示した後、プライム刺激を 17ms 呈示し、「XXXXXX」をマスク刺激として 17ms 呈示した。その後 34ms 空白を呈示した後に、ターゲット刺激を 255ms 呈示した。恋人プライム群ではプライム刺激として「彼氏」または「恋人」を呈示し、統制群では空白を呈示した。ターゲット刺激は、女らしさ関連語やダイエット関連語を含まない有意味語 12 語、無意味語 12 語をランダムに呈示した。参加者が正答すると「○」誤答すると「×」が表示された。

この後、参加者にクラッカーを摂食する機会を与えた。満腹時の課題遂行を測定するために、これから実験者が 10 分ほど席を外す間、「その間に無理をしない程度に満腹感を感じるまでクラッカーを食べる」ように教示した。テーブルの上には、クラッカー40枚（ナビスコ Ritz 約 138g）を入れた皿を用意した。規定量のクラッカーを不規則に入れても縁よりも高くない程度の深皿を用い、その上にナプキンを掛けて、食べた量を実験者に知られるという意識をできるだけ持たれないようにした。また、水と烏龍茶のペットボトル（サントリー製で 750ml~1000ml）と紙コップを用意して自由に飲むように伝えた。また摂食セッションでの参加者の行動を制限するために、異性愛や性別を意識させない、「心理学」の授業内容と関連する知覚心理学を扱った本で、騙し絵や図が多く含まれる本を 4 冊テーブルにおき、「これらの本を眺めながら食べて下さい」と教示した。10 分後、実験者は部屋に戻り満腹感を感じるまで食べたかどうか確認し、まだ足りないと答えたら 2 分間さらに時間を取った。これを繰り返して、参加者が満腹まで食べたと回答したら、次の実験段階に進んだ。

満腹時の課題遂行を測定すると称して、研究2の第2課題と全く同じ語彙判断課題を実施し、Inquisit 2.0 [Windows XP] で制御した PC を用いて、活性化の指標として反応時間を測定した。第1課題からの変更点として、第2課題のターゲット刺激の有意味語 12 語に、女らしさ関連 3 語と、モーラ数/文字のならば/最初の音/文字単語親密度がほぼ等しくなるように対応させた無関連語 3 語を含めた (Table 2 参照)。課題終了後に、その時点での空腹感や普段の食習慣に関して 7 件法で回答する質問紙に回答させた。

質問紙を回答した後、ディブリーフィングをおこない、再度データの使用許可を取り実験を終了した。

## 結果

**事前の空腹感** 参加者の実験開始時の空腹感評定に対して、プライム×自尊心の交互作用項を含む回帰分析をおこなったところ、有意な効果は見られなかった ( $F_s < 1, ns$ )。

**摂食量** 参加者が食べたクラッカーの量 (g) に対して、プライム×自尊心の交互作用項を含む回帰分析をおこなったところ、仮説 1 から予測される、プライムの主効果が有意で



あった ( $F(1, 35) = 6.72, p < .05$ ). 恋人プライム群 ( $M = 39.0, SD = 16.01$ ) は統制群 ( $M = 52.6, SD = 17.83$ ) に比べ摂食量が少なかった. この結果は仮説 1 を支持するものであった. しかし, この効果は仮説 2 から予測されるプライム×自尊心の交互作用が有意であることから制限を受ける ( $F(1, 35) = 5.57, p < .05$ ). この効果を自尊心尺度-1SD を低自尊心, 1SD を高自尊心として図示したのが Figure 3 である. 自尊心の高低ごとにプライムの効果が見られるかを検討したところ, 自尊心の高い参加者ではプライムの効果は見られなかったが ( $t(35) = .11, ns$ ), 自尊心の低い参加者ではプライムの効果が有意であり ( $t(35) = 3.24, p < .01$ ), 統制群に比べ恋人プライム群では参加者の食べたクラッカーの量が少なかった. この結果は仮説 2 を支持するものであった.

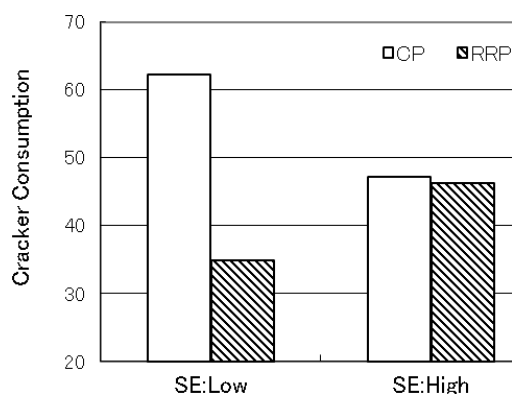


Figure 3. Amount of crackers eaten as a function of priming and self-esteem  
 Note SE:Low = Self-esteem -1SD, SE:High = Self-esteem 1SD  
 RRP : Romantic Relationships Prime CP: Control Prime

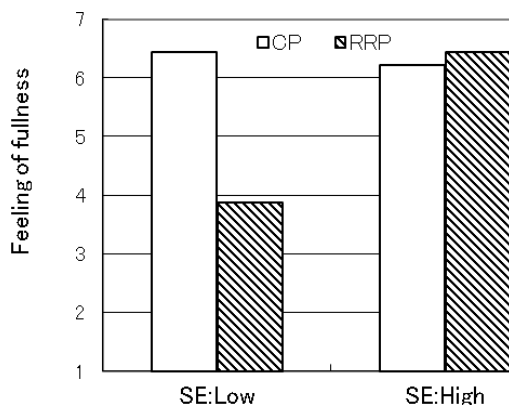


Figure 4. Feeling of fullness as a function of priming and self-esteem  
 Note SE:Low = Self-esteem -1SD, SE:High = Self-esteem 1SD  
 RRP : Romantic Relationships Prime, CP: Control Prime

**事後の評定** 参加者の実験終了時の空腹感評定に対して, プライム×自尊心の交互作用項を含む回帰分析をおこなったところ, 自尊心の主効果とプライムの主効果が有意であった ( $F(1, 35) = 19.54, p < .01; F(1, 35) = 13.01, p < .01$ ). しかし, この効果はプライム×自尊心の交互作用が有意であることから制限を受ける ( $F(1, 35) = 17.23, p < .01$ ). この効果を自尊

心尺度-1SD を低自尊心, 1SD を高自尊心として図示したのが Figure 4 である. 自尊心の高低ごとにプライムの効果が見られるかを検討したところ, 自尊心の高い参加者ではプライムの効果は見られなかったが ( $t(35) = .48, ns$ ), 自尊心の低い参加者ではプライムの効果が有意であり ( $t(35) = 5.37, p < .01$ ), 統制群に比べ恋人プライム群では参加者は満腹感を感じていなかった.

**女らしさ概念の活性化** 研究 2 と同様に, 誤反応を欠損値とした上で対数変換をおこなった (誤反応率 = 4.3%). 全体の平均値より 3SD 以上離れている反応 (1221ms 以上) を欠損値 (1.4%) とした上で, 女らしさ関連語, 対応する無関連語ごとに平均値を求めて差をとり, 女らしさ関連語の促進時間を算出した. この値に対して, プライム×自尊心の交互作用項を含む回帰分析をおこなったところ, 仮説 3 から予測されるプライムの主効果が有意であった ( $F(1, 35) = 4.27, p < .01$ ). 恋人プライム群は統制群に比べ, 関連語に対する相対的反応時間が速くなっていた. しかし, この効果は仮説 4 から予測されるプライム×自尊心の交互作用も有意であることから制限を受ける ( $F(1, 35) = 3.92, p = .05$ ). この効果を自尊心尺度-1SD を低自尊心, 1SD を高自尊心として図示したのが Figure 5 である (反応時間は指数変換して ms 単位で示した).

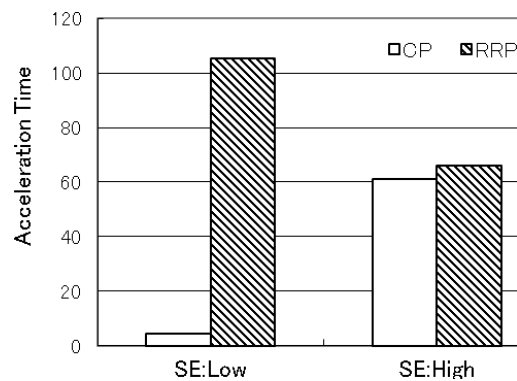


Figure 5. Response latency differences between related and non-related targets as a function of priming and self-esteem

Note SE:Low = Self-esteem -1SD, SE:High = Self-esteem 1SD

RRP : Romantic Relationships Prime, CP: Control Prime

自尊心の高低ごとにプライムの効果が見られるかを検討したところ, 自尊心の高い参加者ではプライムの効果は見られなかったが ( $t(35) = .17, ns$ ), 自尊心の低い参加者ではプライムの効果が有意であり ( $t(35) = 2.78, p < .01$ ), 統制群に比べ恋人プライム群では女らしさ関連語に対する相対的反応時間が速くなっていた. この結果は, 仮説 4 を支持するものであり, 研究 2 の結果を再現するものであった.

## 考察

自尊心の低い女性参加者においてのみ, 異性愛関係を示唆する恋人概念をプライムされ

ると、統制条件に比べて、クラッカーの摂食量が低下した。また、「女らしさ」概念の語彙判断課題を用いた活性化指標においても、自尊心の低い女性参加者のみ、恋人概念をプライムされると統制条件に比べて、反応時間が速くなっており、女らしさ概念が活性化していた。これらの結果は、異性愛関係の活性化が自動的に「女らしさ」呈示目標を活性化し、摂食量を少なくして「女らしく」見せるという自己呈示行動が自動的に生じたことを意味する。

興味深いことに、実験者に満腹なるまで食べるように教示され、接触セッション後に参加者は満腹であると報告をしたにも関わらず、語彙判断課題終了後の質問紙で満腹感を測定すると、恋人概念をプライムされて摂食量の低下した自尊心の低い女性の参加者は、満腹でないと報告していた。このことは、目の前にいる実験者の教示よりも閾下で呈示された恋人概念の活性化に影響を受けて、すぐに満腹感がなくなる程度しか食べられなかったことを意味する。また、本研究ではプライムを閾下で呈示しているため、理由が全くわからずに、食べる量をその程度に制限したことになる。この結果は、これまで相対的に意識的できあると考えられていた自己呈示的摂食行動も、環境手がかりによって自動的に生じることを示している。

## 総 合 考 察

研究 1 では、相手にあわせた自己呈示が自尊心の低い人で顕著に見られるという指摘が、女性における重要他者からのジェンダーに関する期待でも当てはまることを確認した。この結果を受けて、研究 2 と研究 3 では、恋人概念をプライムしたときに女らしさ概念が活性化するかどうかを明らかにする実験研究をおこない、自尊心の低い参加者においてのみ「女らしさ」呈示目標が強まることを見いだされた。さらに、研究 3 では、恋人概念を閾下プライムしたときには、女性が摂食量を低下させるかどうかを明らかにする実験研究をおこない、自尊心の低い女性においてのみ摂食量が低下することを見いだされた。これらの結果は、女性において、異性愛関係の手がかりは「女らしさ」呈示目標を自動的に活性化させ、「女らしさ」を自己呈示する行動が自動的に生じること、このような自己呈示は、相手にあわせて自己呈示をしやすい自尊心の低い女性において顕著であることを示している。総合考察では、本研究で得られた結果が持つ意味について、自己表象と社会的行動の研究に対してどのような意味を持つのか、次に、ジェンダー・システムの再生産にどのような意味を持つのか、順に検討していく。

### 自己表象と社会行動

異性愛関係が活性化すると伝統的女性ステレオタイプに沿った行動が生じることが示された。自己の中にステレオタイプが取り込まれる自己ステレオタイプ化の現象は、自己カテゴリー理論 (Turner, 1987; Turner & Reynolds, 2012) を背景に持つ個人的自己-集合的

自己の枠組みの中で主に研究されてきた。本研究の結果は、関係的自己の表象の形成においても、社会に共有されたステレオタイプが取り込まれる可能性を示唆している。特定の他者との関係が社会システムに基づく役割関係になっていると、関係的自己の表象の中に社会成員として共有されている表象が取り込まれることになる。つまり、関係的自己の表象の中に、集団を基盤とした集合的自己となる要素が取り込まれる。近年の研究では、自己ステレオタイプ化が生じるか否かは関係的自己の表象の持ち方により調整されることが実証的に示されている (Sinclair, Hardin, & Lowery, 2006)。また、自己呈示の内在化の研究においても、個人的自己の表象に呈示した自己が取り込まれるか否かは関係的自己の表象の持ち方によって調整されることが実証的に示されている (沼崎, 2001)。自己カテゴリー化理論では (e.g., Turner, 1987)、個人的自己-集合的自己が対立する連続体上にあることが想定されているが、個人的自己の表象と集合的自己の表象は、状況に応じて相互作用をおこし、相互規定的な関係にあることが指摘されている (e.g., Kampmeier & Simon, 2001; Mussiweller, Gabriel, & Bodenhausen, 2000; Swann, Gómez, Seyle, Morales, & Huici, 2009)。この相互規定的な関係は、個人的自己と集合的自己との関係にとどまらず、先に指摘したように、関係的自己においても、他2つの自己と相互規定的な関係にあると考えられる。今後は、個人的自己と関係的自己と集合的自己を単独で研究するのではなく、これらの相互規定性に明らかにする実証研究が必要であろう。

異性愛関係が活性化すると「女らしさ」呈示目標が活性化することが示された。これは重要他者や関係性と連合した関係的自己表象には目標が表象として含まれることを意味する (e.g., Fitzsimons, & Bargh, 2003; Shah, 2007)。セルフ・ディスクレパンシー理論によれば、自己に関わる目標は、理想自己や義務自己といった行動指針の表象として蓄えられていると考えられる (e.g., Higgins, 1987)。セルフ・ディスクレパンシー理論においても、他者が持つ理想自己や義務自己が社会的行動に影響を持ちうることが指摘されていたが、実証研究としては自分が持つ理想自己や義務自己をあつかったものが多く、重要他者との関係性の中での理想自己や義務自己の役割についての研究はあまりおこなわれていない。関係的自己の研究でも行動の自動性の研究をのぞくと、現実自己を主に扱ってきているように思われる (e.g., Andersen & Chen, 2002; Chen et al., 2006)。今後は、個人的自己における理想自己や義務自己だけでなく、関係的自己や集合的自己における現実自己以外の表象—理想自己/義務自己/未来自己/可能自己—が社会的行動に及ぼす効果についてより詳しく検討していく必要がある。

### ジェンダー・システムの再生産

異性愛関係が活性化すると、意識や意図がなくても伝統的女性ステレオタイプに沿った行動が生じやすくなることが示された。沼崎・高林・天野 (2006) は、異性愛関係のプライムによって、伝統的女性や非伝統的女性に対するステレオタイプの適用や性役割的偏見が、男女ともに高まることを示している。平等主義的性役割観を持つとする男性では、統

制条件では好意に差がなかった伝統的女性と非伝統的女性に対して、異性愛が顕現化すると、伝統的女性に対しては個人的好意や上司としての望ましさを高め、非伝統的女性に対しては個人的好意や上司としての望ましさを低下させ、家庭女性とキャリア女性のステレオタイプの評価(家庭女性を女性的に、キャリア女性を男性的とする評価)を弱めていた。一方、伝統的性役割観を持つとする男性では、統制条件では伝統的女性に対して好意的であったものが、異性愛が顕現化すると、非伝統的女性に対する個人的好意や上司としての望ましさを高め、伝統的女性をより女性的に非伝統的女性をより男性的に評価するという、サブカテゴリー・ステレオタイプの評価を強めた。女性では、異性愛が顕現化すると、自分が持つ性役割に合致する女性に対して望ましさを高く評定していた。また、本報告書の9章で示したように、男性においては、他者のカテゴリー化と自己カテゴリー化が対応するようになっていた。これらの結果は、自己に対するカテゴリー化と他者に対するカテゴリー化が対応する形で生じ、異性愛の基づいた性役割を再生産するように、そのカテゴリー化に基づいた評価や行動が顕現化することを示唆する。

男性にとっても女性にとっても異性愛は重要な意味を持っている。このことは、異性愛に基づく現在のジェンダー・システムの強固さを示すものである。しかしながら、本研究においては個人差も見られ、自尊心の高い女性参加者では、このようなシステムを再生産する行動を取らないこともまた示された。このことは、ジェンダー・システムを再生産しないようにどのように介入すべきかの手がかりとなるであろう。女性の自尊心の問題は、ジェンダー研究において重要なテーマとなっている(e.g., Major & Barr, 2011; Major, Kaiser, & McCoy, 2003)。他者から望ましくない期待に対抗する力をいかに付けるかは、女性ばかりではなく男性においても重要であり、自尊心に限らず、このような力をどのように付けていくかを明らかにすることにより、ジェンダー・システムの再生産過程を断ち切る手がかりが得られるであろう。

## 引用文献

- Andersen, S. M., & Chen, S. (2002). The relational self: An interpersonal social-cognitive theory. *Psychological Review*, 109, 619-645.
- Baldwin, M. W. (1992). Relational schemas and the processing of social information. *Psychological Bulletin*, 112, 461-484.
- Baldwin, M. W., Carrell, S. E., Lopez, D. F. (1990). Priming relationship schemas: My advisor and the pope are watching me from the back of my mind. *Journal of Experimental Social Psychology*, 26, 435-454.
- Baldwin, M. W., & Holmes, J. G. (1987). Salient private audiences and awareness of the self. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 1087-1098.
- Bargh, J. A., Gollwitzer, P. M., Lee-Chai, A., Barndollar, K., & Trötschel, R. (2001). The

- automated will: Nonconscious activation and pursuit of behavioral goals. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 1014-1027.
- Baumeister, R. F., Hutton, D. G., & Tice, D. M. (1989). Cognitive processes during deliberate self-presentation: How self-presenters alter and misinterpret the behavior of their interaction partners. *Journal of Experimental Social Psychology*, 25, 59-78.
- Baumeister, R. F., Tice, D. M., & Hutton, D. G. (1989). Self-presentational motivations and personality differences in self-esteem. *Journal of Personality*, 57, 547-579.
- Berk, M. S., & Andersen, S. M. (2000). The impact of past relationships on interpersonal behavior: Behavioral confirmation in the social-cognitive process of transference. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 546-562.
- Buss, D. M. (Ed.) (2005). *The handbook of evolutionary psychology*. Hoboken, N.J.: Wiley.
- Chen, S., Boucher, H. C., & Tapias, M. P. (2006). The relational self revealed: Integrative conceptualization and implication for interpersonal life. *Psychological Bulletin*, 132, 151-179.
- Chen, S., Fitzsimons, G. M., & Andersen, S. M. (2007) Automaticity in close relationships. In J. A. Bargh (Ed), *Social psychology and the unconscious: The automaticity of higher mental processes* (pp. 133-172). New York, NY: Psychology Press.
- Dijksterhuis, A., Chartrand, T. L., & Aarts, H. (2007). Effects of priming and perception on social behavior and goal pursuit. In J. A. Bargh (Ed), *Social psychology and the unconscious: The automaticity of higher mental processes* (pp. 51-131). New York, NY: Psychology Press.
- Eagly, A. H. (1987). *Sex differences in social behavior: A social-role interpretation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Fehr, B. (2001). The status of theory and research on love and commitment. In G. J. O. Flecher, & M. S. Clark (Eds.), *Blackwell handbook of social psychology: Interpersonal processes* (pp. 331-356). Malden, MA: Blackwell.
- Fitzsimons, G. M., & Bargh, J. A. (2003). Thinking of you: Nonconscious pursuit of interpersonal goals associated with relationship partners. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84, 148-164.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (2001). Ambivalent sexism. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*, (Vol. 33, pp. 115-112). San Diego, CA: Academic Press.
- Glick, P., & Rudman, (2008). *The social psychology of gender: How power and intimacy shape gender relations*. New York, NY: Guilford Press.
- Guadagno, R. E., & Cialdini, R. B. (2007). Gender differences in impression management in organizations: A qualitative review. *Sex Roles*, 56, 483-494.

- Herman, C. P., Roth, D. A., Polivy, J. (2003). Effects of the presence of others on food intake: A normative interpretation. *Psychological Bulletin*, 129, 873-886,
- Higgins, E. T. (1987). Self-discrepancy: A theory of relating self and affect. *Psychological Review*, 94, 319-338.
- Hinkley, K., & Andersen, S. M. (1996). The Working self-concept in transference: Significant-other activation and self change. *Journal of Personality and Social Psychology*, 71, 1279-1295.
- Inquisit 2.0 [Windows XP] . (2003). Seattle, WA: Millisecond Software.
- Kampmeier, C., & Simon, B. (2001). Individuality and group formation: The role of independence and differentiation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 448-462.
- Major, B. & Eliezer, D. (2011). Attributions to discrimination as a self-protective strategy: Evaluating the evidence. In M. D. Alicke & C. Sedikides (Eds.). *Handbook of self-enhancement and self-protection* (pp. 320-337). New York, NY: Guilford Press.
- Major, B., Kaiser, C. R., & McCoy, S. K. (2003). It's not my fault: When and why attributions to prejudice protect self-esteem. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 29, 772-781.
- 松井豊 (1993). 恋ごろの科学 サイエンス社
- Mori, D., Chaiken, S., & Pliner, P. (1987). "Eating lightly" and the self-presentation of femininity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 693-702.
- Mussweiler, T., Gabriel, S., & Bodenhausen, G. V. (2000). Shifting social identities as a strategy for deflecting threatening social comparisons *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 398-409.
- 沼崎誠 (2001). 自己呈示の内化の過程－パブリック・コミットメント仮説と他者の反応推測仮説－(ロング発表) 日本グループ・ダイナミクス学会第 49 回大会発表論文集, 38-41.
- 沼崎誠・高林久美子・天野陽一 (2006). 恋愛は女性に対するステレオタイプ化や偏見を強めるか? －異性愛プライムと平等主義的性役割観がキャリア女性と家庭女性に対する印象や評価に及ぼす効果－ 平成 15～17 年度 科学研究費補助金 (基盤研究(C) : 15530402) 研究成果報告書「潜在的性役割的偏見の発現とジェンダー・ステレオタイプ の受容における心理過程の検討」 pp.125-146.
- Pliner, P., & Chaiken, S. (1990). Eating, social motives, and self-presentation in women and men. *Journal of Experimental Social Psychology*, 26, 240-254.
- 阪井俊文 (2005). 食べる量による女らしさ男らしさの自己呈示－女性は少なく, 男性は多く食べる? 日本グループ・ダイナミクス学会第 52 回大会発表論文集, 142-143

- Schlenker, B. R. (2003). Self-presentation. In M. R. Leary & J. P. Tangney (Eds.), *Handbook of self and identity* (pp. 492-518). New York, NY: Guilford Press.
- Sedikides, C., & Brewer, M. B. (2001). *Individual self, relational Self, collective self*. Philadelphia, PA: Psychological Press.
- Shah, J. (2003). Automatic for the people: How representations of significant others implicitly affect goal pursuit. *Journal of Personality and Social Psychology, 84*, 661-681.
- Sinclair, S. Hardin, C. D., & Lowery, B. S. (2006). Self-stereotyping in the context of multiple social identities. *Journal of Personality and Social Psychology, 90*, 529-542.
- Swann Jr., W. B., Gómez, Á., Seyle, D. C., Morales, J. F., & Huici, C. (2009). Identity fusion: The interplay of personal and social identities in extreme group behavior. *Journal of Personality and Social Psychology, 96*, 995-1011.
- Tice, D. M., Butler, J. L., Muraven, M. B., & Stillwell, A. M. (1995). When modesty prevails: Differential favorability of self-presentation to friends and strangers. *Journal of Personality and Social Psychology, 69*, 1120-1138.
- Turner, J. C. (1987). *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Cowley Road, Oxford, UK: Basil Blackwell.
- Turner, J. C., & Reynolds, K. J. (2012). Self-categorization theory. In P. A. M. Van Lange, A. W. Kruglanski, & E. T. Higgins (Eds.) *Handbook of theories of social psychology*. (Vol 2 pp. 399-417). London, UK: Sage.



Appendix 1 ジェンダー関連評定特性語

男性的ポジティブ特性語

勇敢な  
指導力のある  
自信のある  
決断力のある  
有能な  
周りに流されない  
分析的な  
冷静な  
独立した  
自立した

女性的ポジティブ特性語

献身的な  
あたたかい  
面倒見の良い  
優しい  
親しみやすい  
繊細な  
おしとやかな  
可愛らしい  
純真な  
謙虚

男性的ネガティブ特性語

高圧的な  
頑固な  
強引な  
傲慢な  
威圧的な  
冷たい  
打ち解けない  
とっつきにくい  
そっけない  
無愛想な

女性的ネガティブ特性語

うわさ好き  
でしゃばりな  
うるさい  
口やかましい  
おせっかい  
頼りない  
なよなよした  
依存的な  
虚弱な  
臆病な

# 11章 恋愛は相補的なジェンダー・ステレオタイプ of 適用を強めるか？ —異性愛プライムが伝統的性役割観を持つ男性による 作動性と共同性における自己と女性の相補性認知に及ぼす効果—

天野 陽一<sup>1</sup> 沼崎 誠<sup>1</sup> 高林 久美子<sup>2</sup>

(<sup>1</sup> 首都大学東京大学院人文科学研究科) (<sup>2</sup> 一橋大学大学院社会学研究科)

## 問題

異性と親密な関係を築くことは、われわれの人生においてもっとも重要な事柄のひとつである。男性と女性のあいだには排他的で長期的な関係を形成するという他の関係性にはみられない特徴があり、そのことが親密な関係における相互依存性の高さに結びついていると考えられる (e.g., Kelley & Thibaut, 1978)。Glick & Fiske (1996, 2001a) は、男性と女性に支配・被支配の関係があると同時に相互依存的な関係でもあることによって女性に対するアンビバレントな態度が生み出されるとするアンビバレント・セクシズム理論を提唱した。アンビバレント・セクシズム理論では、男性による支配という社会構造があることによって従来から指摘されてきたような非好意 (敵意的偏見) が生じ、その一方で異性愛の対象として女性に依存していることによって好意 (慈愛的偏見) が生じると主張されている。

同一の対象にアンビバレントな態度を抱くことは大きな葛藤につながる。女性に対するアンビバレントな態度を制御し、葛藤を抑制するための方略のひとつとして、女性サブグループを利用することが考えられる (Glick, Diebold, Bailey-Werner, & Zhu, 1997)。つまり、女性を慈愛的偏見の対象となる「良い女性」と敵意的偏見の対象となる「悪い女性」に分割するのである。女性に対するステレオタイプを扱った研究では、女性が単一のジェンダー・グループとして理解されているのではなく、いくつかの女性サブグループによって捉えられていることが示されている (Deaux, Winton, Crowley, & Lewis, 1985; Fiske & Neuberg, 1990)。主な女性サブグループとしては、伝統的性役割の次元で分類される「伝統的女性 (e.g., 専業主婦, 母親)」と「非伝統的女性 (e.g., キャリアウーマン, フェミニスト)」, これらとは独立した次元にもとづいて分類される「性の対象としての女性 (e.g., 娼婦)」の 3 つが見出されている (Six & Eckes, 1991)。さらに、これらの女性サブグループには、それぞれ異なるステレオタイプが持たれていることも指摘されている。

多くのステレオタイプが「作動性 (有能さ)」と「共同性 (温かさ)」という互いに負の相関を持つ 2 つの次元から構成されているように、女性サブグループに対するサブカテゴリー・ステレオタイプも作動性と共同性に関してアンビバレントな内容となっていることが示されている (Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002; Fiske, Xu, Cuddy, & Glick, 1999; Glick, Diebold, Bailey-Werner, & Zhu, 1997)。伝統的女性に対するステレオタイプは共同性が高

く作動性は低いことをあらわす「温かいが無能である」という内容であり、非伝統的女性に対するステレオタイプは作動性が高く共同性は低いことをあらわす「有能だが冷たい」という内容である (Eckes, 1994, 2002; Wade & Brewer, 2006)。これらのサブカテゴリー・ステレオタイプは男性と女性に対する伝統的なジェンダー・ステレオタイプと対応しており、前者が伝統的な意味での女性ステレオタイプに一致するのに対して、後者は伝統的な意味での男性ステレオタイプに一致している。このことは、専業主婦や母親は伝統的性役割観に一致して女性的な特性を持っていると評価され、キャリアウーマンやフェミニストは伝統的性役割観に一致しておらず男性的な特性を持っていると評価されることを意味する。

ジェンダー・ステレオタイプにおいては、男性と作動性の高さ（共同性の低さ）が関連づけられ、女性と共同性の高さ（作動性の低さ）が関連づけられている (Deaux & Lewis, 1984)。こうした作動性と共同性における男女の相補性は、ジェンダー・システムが全体としては公平で、バランスがとれていて、正当なものであるという感覚を増大させるシステム正当化の機能を持つことが指摘されている (Glick & Fiske, 1996, 2001b; Jost & Kay, 2005; see also Kay & Jost, 2003; Kay, Jost, & Young, 2005)。現存のジェンダー・システムは、男性に勢力と関連する作動性を帰属することで支配を正当化する一方で、女性には被支配の立場に置く見返りとして社会的に望ましいとされる共同性を帰属している (cf., The "Women are wonderful" Effect; Eagly & Mladinic, 1989, 1993; Eagly, Mladinic, & Otto, 1994)。共同性という長所が帰属されることによって、作動性が欠けているという短所は相殺されることになる。また、男性にはない価値を女性に付与し、男性は女性によって補完されるという信念を提示することで、女性の側が支配・被支配の関係を受け入れやすくなっているのである (Jackman, 1994; Jost & Banaji, 1994)。

近年、このようなシステム正当化機能との関わりから、偏見やステレオタイプが状況要因の影響を受けることが議論されるようになってきている (e.g., Blair, 2002; Kunda & Spencer, 2003)。これまでの研究では、集団間競争、自己脅威、死の顕現化といったシステム正当化動機が高まる葛藤や脅威のある状況についての検討が多くなされてきた (e.g., 沼崎・工藤, 1995; Schimel, Simon, Greenberg, Pyszczynski, Solomon, Waxmonsky, & Arndt, 1999; Spencer, Fein, Zanna, Olson, 2003)。その一方で、アンビバレント・セクシズム理論の主張にもとづき、男女の協力関係や相互依存関係という望ましい側面によっても偏見やジェンダー・ステレオタイプが影響を受ける可能性も指摘されている (沼崎・高林・天野, 2006)。異性愛の顕現化により男女の相補性についての信念が活性化した状況では、その信念にもとづくジェンダー・システムに対する信頼が強化されるため、女性に対してよりジェンダー・ステレオタイプに沿った方向での評価をするようになると考えられる。また、男女の相補性を確認することによってジェンダー・システムは正当であるという感覚が得られるため、ジェンダー・ステレオタイプに一致する伝統的女性に対しては好意を向けるように

なり、ジェンダー・ステレオタイプから逸脱する非伝統的女性に対しては非好意を向けるようになると考えられる (Eagly & Karau, 2002)。こうした傾向は、現存のジェンダー・システムへの依存度が高い伝統的性役割観を持つ男性において顕著となるであろうと予測できる (cf., Rudman & Kilianski, 2000)。

沼崎ら (2006, 研究 1) は、異性愛概念が活性化した状況において、男性による伝統的性役割観に一致する女性 (家庭女性) と一致しない女性 (キャリア女性) に対する顕在的な偏見やステレオタイプが強化されるのかを検討している。単語記憶課題を用いて異性愛プライムを行ったところ、顕在尺度で伝統的性役割観の強い男性において、両方のタイプの女性に対するサブカテゴリー・ステレオタイプが強化されるという結果が得られた。異性愛プライムを受けた伝統的性役割観の強い男性は、家庭女性の男性性を低く評価するようになり、キャリア女性の男性性を高く評価するようになっていた。このとき、同時にキャリア女性に対する上司としての望ましさを上昇させていたことから、異性愛概念が活性化していない状況では家庭女性もキャリア女性も同じ「女性」として潜在的な恋愛対象という観点から評価していたが、異性愛概念が活性化した状況では通常とは異なる評価次元である作動性に注目してキャリア女性を評価するようになったものと考えられる。すなわち、キャリア女性を少数の例外としてサブタイプ化し、「女性」というカテゴリーから除外することで、男女の相補性にもとづくジェンダー・システムに対する信念を維持したと解釈することができる結果であった (cf., Maurer, Park, & Rothbart, 1995)。

本研究では、異性愛顕現時の伝統的性役割観の強い男性による女性に対するサブカテゴリー・ステレオタイプの強化について、自己概念との関連から検討する。沼崎ら (2006, 研究 1) では、異性愛概念が活性化した状況において伝統的性役割観の強い男性による家庭女性に対する評価とキャリア女性に対する評価に相対的な差があることが示された。しかし、女性に対する評価のみを測定していたため、男性である自己と相補的となるようにサブカテゴリー・ステレオタイプが強化されていたのかは明確ではなかった。たとえば、異性愛プライムを受けても女性性の評価において家庭女性とキャリア女性のあいだに差はみられなかったが、家庭女性に対しては自己の女性性を低下させることで相補性を増加させていた可能性が考えられる。また、異性愛プライムを受けるとキャリア女性の男性性をより高く評価するようになっていたが、自己の男性性は一定のままで相補性を減少させていたのか、自己の男性性も上昇させることで相補性を維持していたのかは明らかとなっていない。異性愛概念が活性化した状況における自己ステレオタイプ化について潜在指標を用いて検討した沼崎・高林・天野 (2007) は、伝統的性役割観が強い男性では異性愛プライムが自己と作動性・共同性との潜在的連合に及ぼす影響は小さいことを報告している。もし、同じ傾向が顕在指標でもみられるのであれば、異性愛顕現時には作動性の次元において家庭女性との相補性が増大し、キャリア女性との相補性は減少するであろうことが予想される。一方、共同性の次元においてはこのような相補性の変化はみられないであろうと

考えられる。そこで本研究では、異性愛顕現時の自己概念の変化と女性に対する印象の両方を測定することにより、作動性と共同性における自己と女性の相補性の変化について検討を行った。

また、上記のことに加え、活性化される男女の関係性の側面による違いを検討することを試みた。アンビバレント・セクシズム理論によれば、男性と女性の間には勢力差と相互依存性という 2 つの側面があり、そのことが女性に対するアンビバレントな態度を生み出しているとされる (Glick & Fiske, 1996, 2001a)。女性に対する偏見やステレオタイプを扱った先行研究の多くは男女の勢力差の側面を問題としており、雇用場面での女性応募者に対する評価や職業場面での女性管理職に対する評価が主に取り上げられてきた (e.g., Bosak & Sczesny, 2011; Parks-Stamm, Heilman, & Hearn, 2008; Rudman & Fairchild, 2004; Rudman & Glick, 1999, 2001)。異性愛の顕現化によって相補性や相互依存性という側面が活性化した場合には、先行研究のような勢力差や性役割分業という地位に関する側面が活性化している場合とは異なる影響がみられるのであろうか。恋愛と仕事という状況の違いにより、それぞれのタイプの女性に対する評価が異なってくる可能性は大いに考えられるであろう。そこで、活性化される男女の関係性の側面による相補性への影響の違いを検討するため、異性愛プライム条件と仕事プライム条件による対照実験を計画して比較を行った。

以上のことから本研究では、相対的に伝統的性役割観が強いと考えられる男性集団を対象として、異性愛プライムまたは仕事プライムを受けたときの自己概念の変化と伝統的・非伝統的女性に対する印象評定を測定することにより、男女の関係性の異なる側面が活性化されることで作動性と共同性における自己と女性の相補性がどのように変化するかを検討した。

## 方法

### 実験参加者

心理学関連の一般教養科目を受講している神奈川工科大学の学生 77 名 (男性 73 名, 女性 4 名) を対象に質問紙実験を行った。男性 73 名のうち、すべての項目が未記入であった 1 名と重要な項目の回答に不備のあった 3 名を分析から除外し、残りの 69 名を分析の対象とした。分析対象者の平均年齢は 18.49 歳 ( $SD = .82$ ) であった。なお、実験実施当時の神奈川工科大学の学部男女比は、4 学部中の 3 学部がおおよそ 9:1 であり、残り 1 学部がおおよそ 5:5 であった。

### 手続き

実験は講義時間を利用して集団で行った。講義の出席者に参加依頼書と質問紙を配布し、複数の無関連な調査から構成される研究への協力を依頼した。実験のインストラクションはスライドを用いて行った。

**自己評価の事前測定** はじめに、いくつかのデモグラフィック変数への回答とともに、ジェンダー関連の性格特性語 16 語を用いた自己評定を求めた。使用する性格特性語は、沼崎ら (2006, 研究 1) で用いた伝統的な意味での男性的ポジティブ特性 10 語 (e.g., 有能な, 自立した), 伝統的な意味での男性的ネガティブ特性 10 語 (e.g., 冷たい, 傲慢な), 伝統的な意味での女性的ポジティブ特性 10 語 (e.g., あたたかい, 純真な), 伝統的な意味での女性的ネガティブ特性 10 語 (e.g., おせっかい, 依存的) の中から選出した。カテゴリーごとに項目合計相関を算出し、内的整合性の高いものから順に 8 語を取り出して、その中からランダムに選び出した 4 語を事前測定の項目として使用した。事前測定で使用しなかった残りの 4 語は、後述する刺激女性の印象評定と自己評価の事後測定で用いた。

**プライミングの操作** 調査 1 として、感情移入についての調査という名目でプライミングの操作を行った。異性愛に関連した場面または仕事に関連した場面を写した写真画像を呈示し、その内容について自由記述させることで、異性愛と仕事の顕現化を操作した。異性愛プライム条件では結婚式の場面の写真を、仕事プライム条件は会議室の場面の写真を使用し、中央に写っている男性人物 (その場面で中心的な役割を果たしていると考えられる新郎または発表者) になりきって、その気持ちを記述するよう教示した。制限時間 3 分のあいだにできるだけ多く記述するよう求めた。

**女性のタイプの操作** 調査 2 として、印象形成についての調査という名目で評定対象となる女性のタイプを操作した。実験参加者には、ある女性のプロフィールを読んで質問に回答するよう教示した。女性のプロフィールは、沼崎 (2006) の家庭志向の女性プロフィールとキャリア志向の女性プロフィールを能力に関する記述を中心に若干の修正を施して用いた。プロフィールに含まれる恋人・配偶者に求めるもの、仕事に対する態度などの情報によって、家庭志向とキャリア志向の操作を行った。

**刺激女性の印象評定** 従属変数として、刺激女性に対する好意と魅力に関して複数の質問項目に回答させ、刺激女性の性格特性を評定させた。好意と魅力に関しては、一般的な好意を尋ねる項目として「あなたは、この女性にどの程度好感が持てますか？」という項目に、友人としての魅力を尋ねる項目として「あなたは、この女性に友人としてどの程度魅力を感じますか？」という項目に、恋人としての魅力を尋ねる項目として「あなたは、この女性に恋人としてどの程度魅力を感じますか？」という項目に、性の対象としての魅力を尋ねる項目として「あなたは、この女性に一夜限りの相手としてどの程度魅力を感じますか？」という項目に、さらに一般的な魅力を尋ねる項目として「一般的に見て、この女性はどの程度魅力的な人物だと思いますか？」という項目に、いずれも 7 件法で回答を求めた。性格特性については、自己評価の事前測定で使用しなかった残りの 16 語を用いて、「まったくあてはまらない (1)」から「非常にあてはまる (7)」までの 7 件法で印象評定を求めた。

その他、いくつかの質問項目に回答させた後、操作チェックの項目として、「この女性

は、どの程度キャリア志向だと思いますか？」と「この女性は、どの程度家庭志向だと思いますか？」の 2 つの項目に対して、それぞれ 7 件法で回答させた。

**自己評価の事後測定** 刺激女性の印象評定に使用したのと同じ性格特性語 16 語を用いて、再度、性格特性の自己評定を求めた。

**デブリーフィング** 全員が回答を終了した後、研究の本当の目的について説明し、データを使用することに同意するものに対してのみ質問紙の提出を求めた。

## 結果

### 操作チェック

「この女性はどの程度キャリア志向的だと思いますか？」という質問に対する評定値について、プライム×女性タイプの分散分析を行ったところ、女性タイプの主効果のみが有意であった ( $F(1, 65) = 28.93, p < .001$ )。キャリア志向の女性 ( $M = 6.05, SD = .98$ )のほうが、家庭志向の女性 ( $M = 4.23, SD = 1.76$ ) に比べて、よりキャリア志向的であると評価されていた。「この女性はどの程度家庭志向的だと思いますか？」という質問に対する評定値について同様の分析を行った結果、女性タイプの主効果のみが有意であった ( $F(1, 65) = 73.12, p < .001$ )。家庭志向の女性 ( $M = 5.61, SD = 1.3$ ) のほうが、キャリア志向の女性 ( $M = 2.71, SD = 1.41$ ) に比べて、より家庭志向的であると評価されていた。これらの結果から、女性タイプの操作は成功したと考えられる。

### 好意と魅力

刺激女性に対する好意と魅力に関する質問項目への回答について、それぞれ個別にプライム×女性タイプの分散分析を行った。その結果、恋人としての魅力の評定において女性タイプの主効果が有意であった ( $F(1, 65) = 7.52, p < .01$ )。家庭志向の女性 ( $M = 4.19, SD = 1.76$ ) のほうが、キャリア志向の女性 ( $M = 3.08, SD = 1.57$ ) に比べて、恋人としての魅力を高く評価されていた。また、一夜限りの相手としての魅力の評定において女性タイプの主効果に有意に近い効果がみられた ( $F(1, 65) = 2.88, p < .10$ )。キャリア志向の女性 ( $M = 4.34, SD = 1.85$ ) のほうが、家庭志向の女性 ( $M = 3.61, SD = 1.86$ ) に比べて、一夜限りの相手としての魅力を高く評価されていた。一般的な好意、友人としての魅力、一般的な魅力の評定については、いずれも有意な効果はみられなかった ( $F_s < .57, ns.; F_s < .93, ns.; F_s < .46, ns.$ )。

### 性格特性の指標

ジェンダー関連の性格特性語を用いた自己評価の事前測定、刺激女性の印象評定、自己評価の事後測定のそれぞれについて、性格特性語のジェンダーとベイレンスにもとづく 4 つのカテゴリー (i.e., 男性的ポジティブ特性, 男性的ネガティブ特性, 女性的ポジティブ特性, 女性的ネガティブ特性) ごとに評定平均値を算出し、それらを性格特性の指標とした。

## 自己概念の変化

性格特性のカテゴリーごとに自己評価の事後測定値から事前測定値を引き、自己評価の変化量を求めた。これらの変化量について、それぞれプライム×女性タイプの分散分析を行ったところ、いずれの分析においても有意な効果はみられなかった ( $F_s < 2.75, ns.$ )。

## 刺激女性の印象

性格特性のカテゴリーごとに刺激女性に対する印象評定値から自己評価の事後測定値を引き、値が高いほど「自分にくらべてその性格特性を有している」という評価を意味するよう得点化した。これらの差得点について、それぞれプライム×女性タイプの分散分析を行った。

**男性的ポジティブ特性** 女性タイプの主効果が有意であった ( $F(1, 65) = 65.31, p < .001$ )。しかし、この効果はプライム×女性タイプの交互作用効果が有意であったことから制限を受ける ( $F(1, 65) = 13.01, p < .001$ )。この効果を Figure 1 に示す。仕事プライム条件においては、キャリア志向の女性について評定した場合 ( $M = 1.53, SD = 1.10$ ) のほうが、家庭志向の女性について評定した場合 ( $M = .13, SD = 1.32$ ) にくらべて、相対的な男性的ポジティブ特性の程度を高く評価していた ( $F(1, 32) = 11.28, p < .01$ )。この結果は、キャリア志向の女性に対しては自分よりも男性的ポジティブ特性が高いと評価していたが ( $t(17) = 5.89, p < .001$ )、家庭志向の女性に対しては自己評価との差がみられないことによるものであった ( $t(15) = .39, ns.$ )。一方、異性愛プライム条件においては、女性タイプによる評価の差がより顕著となっていた ( $F(1, 33) = 61.68, p < .001$ )。キャリア志向の女性に対しては自分よりも男性的ポジティブ特性がさらに高いと評価するようになっていたが ( $M = 2.75, SD = 1.11; t(19) = 11.06, p < .001$ )、家庭志向の女性に対しては自分よりも男性的ポジティブ特性が低いと評価するようになっていた ( $M = -.90, SD = 1.64; t(14) = -2.13, p < .06$ )。

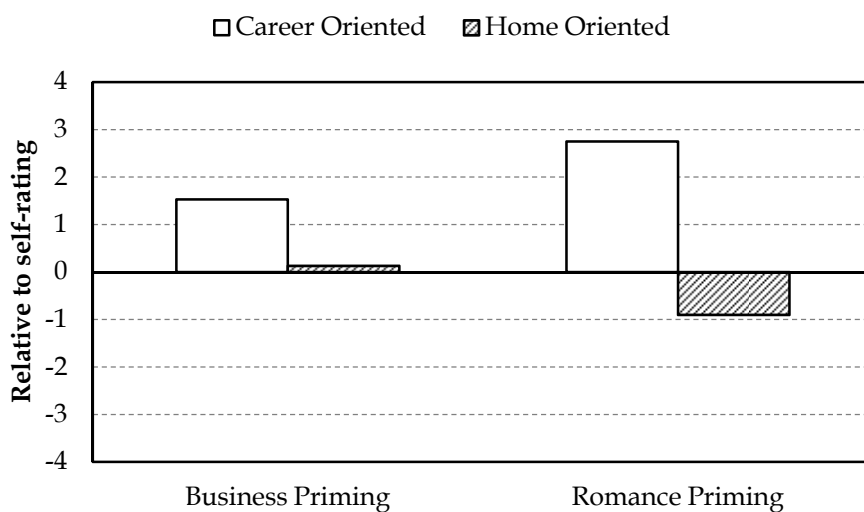


Figure 1. Masculine Positive traits as a function of priming and target

**男性的ネガティブ特性** 女性タイプの主効果が有意であった ( $F(1, 65) = 27.49, p < .001$ )。



しかし、この効果はプライム×女性タイプの交互作用効果が有意であったことから制限を受ける ( $F(1, 65) = 4.33, p < .05$ )。この効果を Figure 2 に示す。仕事プライム条件においては、キャリア志向の女性について評定した場合 ( $M = .56, SD = 1.35$ ) のほうが、家庭志向の女性について評定した場合 ( $M = -.34, SD = .70$ ) に比べて、相対的な男性的ネガティブ特性の程度を高く評価していた ( $F(1, 32) = 5.75, p < .05$ )。この結果は、キャリア志向の女性に対しては自分よりも男性的ネガティブ特性が高いと評価する傾向がみられ ( $t(17) = 1.76, p < .10$ )、家庭志向の女性に対しては自分よりも男性的ネガティブ特性が低いと評価する傾向がみられたことによるものであった ( $t(15) = -1.96, p < .07$ )。一方、異性愛プライム条件においては、女性タイプによる評価の差がより顕著となっていた ( $F(1, 33) = 23.84, p < .001$ )。キャリア志向の女性に対しては自分よりも男性的ネガティブ特性がさらに高いと評価するようになり ( $M = 1.24, SD = 1.11; t(19) = 5.00, p < .001$ )、家庭志向の女性に対しては自分よりも男性的ネガティブ特性がさらに低いと評価するようになっていた ( $M = -.86, SD = 1.43; t(14) = -2.32, p < .05$ )。

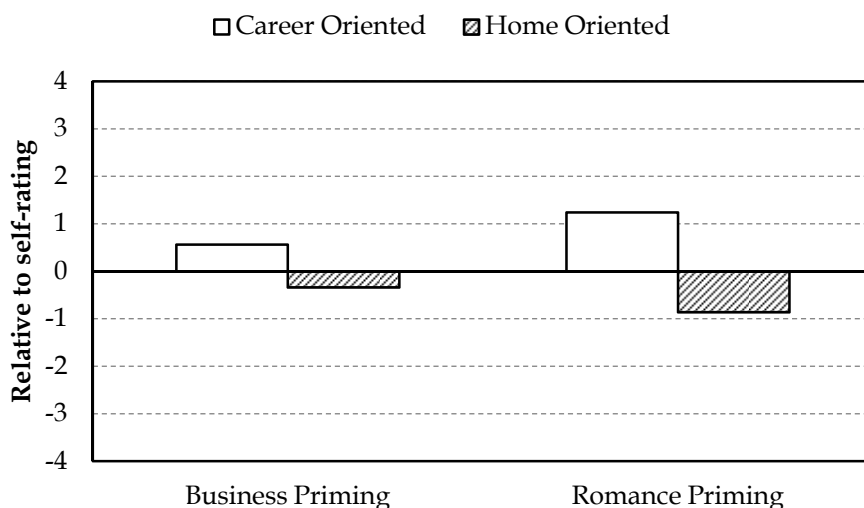


Figure 2. Masculine negative traits as a function of priming and target

**女性的ポジティブ特性** 有意な効果はみられなかった ( $F_s < 2.77$ )。

**女性的ネガティブ特性** プライムの主効果に有意に近い効果がみられた ( $F(1, 65) = 3.06, p < .10$ )。仕事プライム条件では刺激女性に対して自分よりも女性的ネガティブ特性の程度が低いと評価する傾向がみられたが ( $M = -.35, SD = 1.02; t(33) = -1.97, p < .06$ )、異性愛プライム条件では自己評価との差はみられなかった ( $M = .20, SD = 1.47; t(34) = .80, ns.$ )。

### 考察

本研究では、異性愛が顕現化した状況において、男性による伝統的性役割観に一致する家庭志向の女性と伝統的性役割観に一致しないキャリア志向の女性に対するサブカテゴリー・ステレオタイプがどのように強化されるのかを、自己概念との比較をとおして検討し

た。異性愛プライム条件では、性格特性の自己評価は影響されていなかったが、家庭志向の女性に対しては自分よりも男性的でないと評価し、キャリア志向の女性に対しては自分よりも男性的であると評価していた。好意と魅力については、家庭志向の女性のほうがキャリア志向の女性にくらべて恋人としての魅力を高く評価されていた。その一方で、一般的な好意や友人としての魅力の評価では女性のタイプによる差はみられなかった。

これらの結果は、異性愛概念が活性化した状況での女性に対する偏見とステレオタイプを扱った先行研究 (沼崎ら, 2006, 2007) において、伝統的性役割観の強い男性でみられた結果と一致するものである。異性愛プライムを受けても自己ステレオタイプ化は生じておらず、潜在指標においてみられた結果が顕在指標においても再現されたといえる。また、自己に関して一貫したイメージを維持する一方で、女性に対しては男性的特性についてサブカテゴリー・ステレオタイプを強化する方向で自己評価との差を拡大させていた。女性のタイプによって方向性は異なっているが、作動性の次元において自己とより相補的になるように変化したといえよう。先行研究の結果とあわせて考えれば、通常状況においては女性のタイプに関係なく異性愛という観点から評価していた伝統的性役割観の強い男性が、異性愛が顕現化すると家庭志向の女性のみを作動性の低い保護されるべき対象としての「女性」として評価するようになり、キャリア志向の女性は異性愛の枠組みから逸脱した例外的な存在として「女性」カテゴリーから除外するサブタイプ化を行うことが示されたといえよう。

相補性の増大は男性的特性のみでみられ、女性的特性については家庭志向の女性もキャリア志向の女性も自己評価との差がみられなかった。家庭志向の女性に対する評価と自己評価に差がみられなかったことから、本研究の男性参加者は共同性の次元で自己を女性と同程度に評価していたと考えられる。潜在指標を用いた研究において、ステレオタイプの属性に望ましさの評価が伴っている場合には、異性集団のステレオタイプに含まれる属性であっても同性集団や自己と関連づける傾向が示されている (Rudman, Greenwald, & McGhee, 2001)。現代では対人能力が高いことが非常に望ましいこととされるため、顕在指標においても共同性の自己評価が影響を受けていた可能性が考えられよう。一方、キャリア志向の女性に対する評価と自己評価にも差がみられなかったことについては別の説明が必要であろう。自己の共同性を女性並みに引き上げていたのだとすれば、キャリア志向の女性に対する評価が自己と同程度となっていたのはなぜであろうか。ひとつの可能性として、本研究で用いた女性プロフィールに対人能力に関する記述があまり含まれていなかったことが指摘できる。作動性についての情報は提供されていたが、共同性については与えられたプロフィールからは高いとも低いとも評価できず、同年代である自己や周囲の女性を基準として評価したのかもしれない。キャリア志向の女性が少なくとも自己と同程度に女性的特性を有していると評価されていたことに関しては、今後さらなる検討が必要であろう。

キャリア志向の女性に対する女性的特性の評価が比較的高かったことは、一般的好意や友人としての魅力が低下していないことも関連していると考えられる。非伝統的女性に対する偏見やステレオタイプを扱った研究では、作動性の高い女性に対する好意が低下することが繰り返し指摘されている (Backlash Effect; Rudman, 1998; Rudman & Fairchild, 2004; Rudman & Glick, 1999, 2001; for a review, see Rudman & Phelan, 2008)。本研究のキャリア志向の女性は、作動性と関連する男性的特性について自己よりも高いと評価されながら、一般的な好意や友人としての魅力については家庭志向の女性に対する評価と差がみられなかった。このような先行研究に反する結果が得られた理由について考察したい。まず考えられるのは、サブタイプ化によってキャリア志向の女性を評価する基準そのものが変わっていた可能性である。作動性が高い女性に対する好意が低下するのは、作動性の高さを示すことにより、作動性と相補的な関係にある共同性が低いと知覚されてしまうためである (Eagly, Makhijani, & Klonsky, 1992; MacDonald & Zanna, 1998; Rudman & Glick, 2001)。共同性のステレオタイプは女性が従うべき規範となっており (Rudman & Glick, 1999)、この規範に抵触することが女性に対するネガティブな評価に結びつくことが示されている (Burgess & Borgida, 1999)。本研究の結果は、サブタイプ化によって「女性」カテゴリーから除外されることで、キャリア志向の女性に対して共同性の規範が適用されなくなった可能性を示唆しているといえる。あるいは別の可能性として、共同性に関連する女性的特性が高く評価されたことによる補償効果が生じていたことも考えられる (see Rudman & Glick, 1999)。先に述べたように、本研究のキャリア志向の女性は作動性が非常に高いと評価されていたが、少なくとも自己と同程度の共同性があると評価されていた。作動性と共同性を両方示すことで偏見が抑えられた可能性が考えられよう (see Rudman & Glick, 2001)。

女性に対するサブカテゴリー・ステレオタイプは、異性愛が顕現化した状況でより顕著であったが、仕事が活性化した状況においても同じ傾向がみられた。異性愛プライム条件と仕事プライム条件で同じパターンがみられた理由としては、刺激として用いた写真画像の内容がプライムの操作として不適切であった可能性が考えられる。仕事プライム条件では、会議室で男性がプレゼンテーションをしている場面の写真画像を呈示した。比較的若い年齢層の男女数名がテーブルを囲んで集まっている場面であったため、男女の勢力差や性役割分業という側面ではなく、むしろ男女の協力関係をプライムしてしまっていたのかもしれない。この可能性を検討するため、刺激をより適切なものに変更した上で同様の実験を行い、結果を比較する必要があるだろう。しかし、その一方で、仕事プライム条件における結果は、職業場面においても関係性の示し方によっては非伝統的女性に対する偏見を抑制することができる可能性を示唆しているともいえる。男女共同参画社会を実現するためには、キャリアを目指す女性に対する偏見が大きな障害となる。上で述べた女性の共同性に関する規範の問題とあわせて、非伝統的女性に対する偏見を抑制する方法を明らか

にしていく必要があると考えられる。

また、異性愛プライム条件においても仕事プライム条件においても、恋人としての魅力についてはキャリア志向の女性は家庭志向の女性よりも低く評価されていたが、一夜限りの相手としての魅力についてはむしろ家庭志向の女性よりも高く評価されていたことにも注意が必要であろう。これらの結果は、キャリア志向の女性が長期的な関係のパートナーとしてはみなされないが、性の対象としては認識されやすいことを意味する。異性愛が顕現化した状況だけでなく、勢力差や性役割分業が顕現化した状況においても性の対象としての評価が低下しないということは、キャリア志向の女性に対する態度がセクシャル・ハラスメントの問題に結びつきやすい可能性を示唆しているといえよう (cf., Bargh & Raymond, 1995)。ポジティブ・ネガティブどちらの意味であっても、伝統的女性と非伝統的女性が異性としての魅力をどのように評価されるのかという問題を取り上げた研究は少ない (e.g., Lau, Kay, Spencer, 2008)。先行研究でこれまで問題として取り上げられてきた職業場面における評価だけでなく、異性愛の対象としての評価も検討に値する興味深い問題であろう。

本研究は、男性的特性と女性的特性について自己評価の変化と女性に対する評価を測定することで、男女の相補性を確認するような認知が、自己のステレオタイプ化によってではなく、他者のステレオタイプ化によって行われることを示した。異性愛が顕現化した状況において自己概念と他者への偏見やステレオタイプがどのように関連しているのかを明らかにした点でこの分野の研究に貢献するものであるが、研究デザインに関してはいくつかの問題点が指摘できる。

第一に、本研究は異性愛プライム条件と仕事プライム条件を比較した対照実験であり、統制条件を設定していない点が挙げられる。異性愛プライム条件と仕事プライム条件の両方において女性に対するサブカテゴリー・ステレオタイプがみられ、プライムによってその効果には差がみられたが、通常の状態とくらべてどう変化していたのかに関しては本研究の結果から明確なことはいえない。先行研究では伝統的性役割観の強い男性が普段から自己と女性をジェンダー・ステレオタイプの観点で捉えていることが示されているため、とくにこれまでに知見の蓄積がない仕事プライム条件においては、それぞれのタイプの女性に対するサブカテゴリー・ステレオタイプが強化されたといえるのかは疑問である。

第二に、性役割観の個人差を考慮にいれていない点が挙げられる。本研究では相対的に伝統的性役割観の強いと考えられる神奈川工科大学の男子大学生を対象に実験を行い、先行研究で伝統的性役割観の強い男性においてみられた結果が再現された。しかし、性役割観には個人差が大きいと考えられ、伝統的に男性的な分野とされてきた学部所属する男子学生の中でも一様ではないであろう。最近の社会情勢を受けて比較的平等主義的な性役割観を持つものが多い可能性も考えられる。平等主義的な性役割観の強い男性においても先行研究の結果が再現されるかを確かめるためにも、性役割観の個人差を統制できるような

研究デザインを設定した上で、より一般的なサンプルを対象に追試を行う必要があるだろう。

今後は、これら研究デザイン上の問題点を改善した上で、男性と女性の相補的で相互依存的な関係性が自己と他者の認知に及ぼす影響をさらに詳しく検討していく必要があるだろう。

#### 引用文献

- Bargh, J. A., & Raymond, P. (1995). The naive misuse of power: Nonconscious sources of sexual harassment. *Journal of Social Issues, 51*, 85-96.
- Blair, I. V. (2002). The malleability of automatic stereotypes and prejudice. *Personality and Social Psychology Review, 6*, 242-261.
- Bosak, J., & Sczesny, S. (2011). Gender bias in leader selection? Evidence from a hiring simulation study. *Sex Roles, 65*, 234-242.
- Burgess, D., & Borgida, E. (1999). Who women are, who women should be: Descriptive and prescriptive gender stereotyping in sex discrimination. *Psychology, Public Policy, and Law, 5*, 665-692.
- Deaux, K., & Lewis, L. L. (1984). Structure of gender stereotypes: Interrelationships among components and gender label. *Journal of Personality and Social Psychology, 46*, 991-1004.
- Deaux, K., Winton, W., Crowley, M., & Lewis, L. L. (1985). Level of categorization and content of gender stereotypes. *Social Cognition, 3*, 145-167.
- Eagly, A. H. (1987). *Sex differences in social behavior: A social-role interpretation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Eagly, A. H., & Karau, S. J. (2002). Role congruity theory of prejudice toward female leaders. *Psychological Review, 109*, 573-598.
- Eagly, A. H., Makhijani, M. G., & Klonsky, B. G. (1992). Gender and the evaluation of leaders: A meta-analysis. *Psychological Bulletin, 111*, 3-22.
- Eagly, A. H. & Mladinic, A. (1989). Gender stereotypes and attitudes toward women and men. *Personality and Social Psychology Bulletin, 15*, 543-558.
- Eagly, A. H., & Mladinic, A. (1993). Are people prejudiced against women? Some answers from research on attitudes, gender stereotypes, and judgments of competence. In W. Strobe & M. Hewstone (Eds.), *European review of social psychology* (pp.1-35). New York: John Wiley.
- Eagly, A. H., Mladinic, A., & Otto, S. (1994). Cognitive and affective bases of attitudes toward social groups and social policies. *Journal of Experimental Social Psychology, 30*,

113-137.

- Eckes, T. (1994). Features of men, features of women: Assessing stereotypic beliefs about gender subtypes. *British Journal of Social Psychology*, 33, 107-123.
- Eckes, T. (2002). Paternalistic and envious gender stereotypes: Testing predictions from the stereotype content model. *Sex Roles*, 47, 99-114.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 878-902.
- Fiske, S. T., & Neuberg, S. L. (1990). A continuum of impression formation, from category-based to individuating processes: Influences of information and motivation on attention and interpretation. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*, Vol.23 (pp.1-74). New York: Academic Press.
- Fiske, S. T., Xu, J., Cuddy, A. J. C., & Glick, P. (1999). (Dis)respecting versus (dis)liking: Status and interdependence predict ambivalent stereotypes of competence and warmth. *Journal of Social Issues*, 55, 473-491.
- Glick, P., Diebold, J., Bailey-Werner, B., & Zhu, L. (1997). The two faces of Adam: Ambivalent sexism and polarized attitudes toward women. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23, 1323-1334.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (1996). The ambivalent sexism inventory: Differentiating hostile and benevolent sexism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 491-512.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (2001a). Ambivalent sexism. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*, Vol.33 (pp.115-112). New York: Academic Press.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (2001b). An ambivalent alliance: Hostile and benevolent sexism as complementary justifications for gender inequality. *The American Psychologist*, 56, 109-118.
- Jackman, M. R. (1994). *The velvet glove: Paternalism and conflict in gender, class, and race relations*. Berkeley: University of California Press.
- Jost, J. T., & Banaji, M. R. (1994). The role of stereotyping in system-justification and the production of false-consciousness. *British Journal of Social Psychology*, 33, 1-27.
- Jost, J. T., & Kay, A. C. (2005). Exposure to benevolent sexism and complementary gender stereotypes: Consequences for specific and diffuse forms of system justification. *Journal of Personality and Social Psychology*, 88, 498-509.
- Kay, A. C., & Jost, J. T. (2003). Complementary justice: Effects of "poor but happy" and "poor but honest" stereotype exemplars on system justification and implicit activation of the justice motive. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 823-837.

- Kay, A. C., Jost, J. T., & Young, S. (2005). Victim-derogation and victim-enhancement as alternate routes to system justification. *Psychological Science*, 16, 204-246.
- Kelley, H. H. & Thibaut, J. W. (1978). *Interpersonal relations: A theory of interdependence*. New York: Wiley-Interscience.
- Kunda, Z., & Spencer, S. J. (2003). When do stereotypes come to mind and when do they color judgment? A goal-based theoretical framework for stereotype activation and application. *Psychological Review*, 129, 522-544.
- Lau, G. P., Kay, A. C., & Spencer, S. J. (2008). Loving those who justify inequality: The effects of system threat on attraction to women who embody benevolent sexist ideals. *Psychological Science*, 19, 20-21.
- MacDonald, T. K., & Zanna, M. P. (1998). Cross-dimensions ambivalence toward social groups: Can ambivalence affect intentions to hire feminists? *Personality and Social Psychology Bulletin*, 24, 427-441.
- Maurer, K. L., Park, B., & Rothbart, M. (1995). Subtyping versus subgrouping processes in stereotype representation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 812-824.
- 沼崎誠 (2006). 死すべき運命の顕現化が性役割的偏見に及ぼす効果 平成 15-17 年度科学研究費補助金研究成果報告書「潜在的性役割的偏見の発現とジェンダー・ステレオタイプの受容における心理過程の検討(研究代表者:沼崎誠, 研究課題番号:15530402)」, pp.63-94.
- 沼崎誠・工藤恵理子 (1995). 女性との競争状況が男性の家庭志向型女性・キャリア志向型女性に対する好意に及ぼす効果 日本グループダイナミクス学会第 43 回大会発表論文集, 246-247.
- 沼崎誠・高林久美子・天野陽一 (2006). 恋愛は女性に対するステレオタイプ化や偏見を強めるか?—異性愛プライムと平等主義的性役割観がキャリア女性と家庭女性に対する印象や評価に及ぼす効果— 平成 15-17 年度科学研究費補助金研究成果報告書「潜在的性役割的偏見の発現とジェンダー・ステレオタイプの受容における心理過程の検討(研究代表者:沼崎誠, 研究課題番号:15530402)」, pp.125-146.
- 沼崎誠・高林久美子・天野陽一 (2007). 異性愛の顕現化が男性のジェンダー関連自己ステレオタイプ化に及ぼす効果 日本社会心理学会第 48 回大会発表論文集, 94-95.
- Parks-Stamm, E. J., Heilman, M. E., & Hearn, K. A. (2008). Motivated to penalize: women's strategic rejection of successful women. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 34, 237-247.
- Rudman, L. A. (1998). Self-promotion as a risk factor for women: The costs and benefits of counterstereotypical impression management. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 629-645.

- Rudman, L. A., & Fairchild, K. (2004). Reactions to counterstereotypic behavior: The role of backlash in cultural stereotype maintenance. *Journal of Personality and Social Psychology, 87*, 157-176.
- Rudman, L. A., & Glick, P. (1999). Feminized management and backlash toward agentic women: The hidden costs to women of a kinder, gentler image of middle managers. *Journal of Personality and Social Psychology, 77*, 1004-1010.
- Rudman, L. A., & Glick, P. (2001). Prescriptive gender stereotypes and backlash toward agentic women. *Journal of Social Issues, 57*, 732-762.
- Rudman, L. A., Greenwald, A. G., & McGhee, D. E. (2001). Implicit self-concept and evaluative implicit gender stereotypes: Self and ingroup share desirable traits. *Personality and Social Psychology Bulletin, 27*, 1164-1178.
- Rudman, L. A., & Kilianski, S. E. (2000). Implicit and explicit attitude toward female authority. *Personality and Social Psychology Bulletin, 26*, 1315-1328.
- Rudman, L. A., & Phelan, J. E. (2008). Backlash effects for disconfirming gender stereotypes in organizations. *Research in Organizational Behavior, 28*, 61-79.
- Schimmel, J., Simon, L., Greenberg, J., Pyszczynski, T., Solomon, S., Waxmonsky, J., & Arndt, J. (1999). Stereotypes and terror management: Evidence that mortality salience enhances stereotypic thinking and preferences. *Journal of Personality and Social Psychology, 77*, 905-926.
- Six, B., & Eckes, T. (1991). A closer look at the complex structure of gender stereotypes. *Sex Roles, 24*, 57-71.
- Spencer, S. J., Fein, S., Zanna, M. P., & Olson, J. M. (2003). *Motivated Social Perception: The Ontario Symposium*, Vol.9. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Wade, M. L., & Brewer, M. B. (2006). The structure of female subgroups: An exploration of ambivalent stereotypes. *Sex Roles, 54*, 753-765.



## 12章 潜在・顕在的なロマンティック幻想と女性の世界観

麻生 奈央子

沼崎 誠

(お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科) (首都大学東京人文科学研究科)

女性の社会的進出や経済的自立を促す社会的雰囲気の中で、女性が依存志向を依然として内面に持ち、しかもそれを表面に出せない状態を指摘した「シンデレラ・コンプレックス」(Dowling,1981)は、日本社会でも大きな反響を呼んだ。そして、いつかは王子様のような男性に出会って守られていたいという「心理的依存状態」(落合,1984)は、青年期を特徴づける症候群の一つとして認識されるようになった。その後、女性の社会経済的地位は徐々に向上しつつあるかに見えるが、女性の心理的依存状態は、潜在的に依然として根強いことが実証的に示されている。例えば Rudman & Heppen (2003) は、王子様などファンタジー物語の登場人物と現実のパートナーとを重ね合わせる傾向をロマンティック幻想 (romantic fantasy;以下 RF とする) と定義し、アメリカの女子学部学生は、恋人と現実的な特性語と連合させる傾向に比べて、潜在的に恋人とファンタジーの登場人物とを連合させる傾向(潜在的な RF;以下潜在 RF とする) が強いことを示した。さらに潜在 RF は、社会経済的地位の達成動機と負の関連があり、潜在 RF が高い女性ほど、将来王子様のような理想的なパートナーと出会って結婚し、自らの力ではなく夫の社会経済的地位の達成を通じて自己実現することを思い描くと主張した。潜在 RF と達成動機との関連を見いだすことで、女性の社会進出が進んだと思われる現在に至ってもなお、パートナーの地位を通じて自己実現し、パートナーに庇護されたいという他律的・依存的な態度・信念を抱く女性が依然として存在する可能性を示したものと言える。

本研究では、潜在測度と顕在測度で女性の RF を測定し、女性の態度・信念や世界観にかかる影響を及ぼす可能性があるのかを検討した。そのために、研究 1 で青年期の女性を対象とし、研究 2 では成人期の既婚女性を対象に研究を行った。

### 研究 1

Rudman & Heppen (2003) は、潜在 RF の効果を女性の社会進出における「目に見えない足かせ」(Glass Slippers' Effects)だと主張した。これは、潜在 RF が「パートナーの社会経済的地位を通じて自己実現し、パートナーに守られたい」という心理的依存状態と関連する可能性を示唆するものであると言える。

本研究は、青年期女子の潜在 RF と心理的依存状態との関連をより明確化することを目的とした。Rudman & Heppen (2003)は、参加者自身の将来の年収や職業に対する動機付けとの関連を検討したが、「パートナーを通じて達成動機を満足させたい」という他律的・依存的な態度・信念との関係は検討していない。そこで、本研究では、自分自身の力ではなく、結

婚相手の社会的地位や収入を通じて達成動機を満足させたいと考える間接的達成動機との関連を検討することとした。そして女子学生の潜在 RF は、自らの力ではなく、パートナーを通じて社会経済的地位を達成しようとする間接的な達成動機と正の関連があるだろうと予測した。

## 方法

### 参加者

2006年12月に調査を実施し、東京都内の女子学部学生73名（平均年齢19.0歳）が参加した。

### 手続き

参加者に、参加は自由であることを説明し、調査を開始した。調査では、質問紙先群と IAT 先群をランダムに決め、質問紙先群(36名)は最初に質問紙①（顕在 RF 尺度）に回答を求め、次に IAT を実施し、最後に質問紙②（達成動機尺度）に回答させた。IAT 先群(37名)は、IAT を最初に実施し、次に質問紙①と②の順に回答を求めた。最後にディブリーフィングを受け終了した。

### 材料

説明変数となる、潜在 RF と顕在 RF をそれぞれ IAT (Implicit Association Test, Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998) と質問紙で測定した。基準変数となる達成動機については、質問紙で測定した。

**IAT** Rudman & Heppen (2003)に倣い、IAT の一致試行は、「ファンタジー」（ファンタジーに登場する人物）と「恋人」の連合、及び「現実（人を形容するポジティブな一般的特性語）」と「恋人以外」の連合で、不一致試行は「現実」と「恋人」及び「ファンタジー」と「恋人以外」の連合とした<sup>1</sup>。

**顕在 RF** Rudman & Heppen (2003) に倣い、5項目の顕在 RF 尺度を作成した。恋人について「白馬にのった王子様のような」などの項目について、それぞれ6件法で回答させた。<sup>2</sup>

**達成動機尺度** 社会経済的地位の達成動機とパートナーに依存する傾向を測定するた

---

<sup>1</sup> 「ファンタジー」のカテゴリーには、2006年5月に実施した予備調査で「ファンタジー」を連想する男性を表す言葉として多かった語句を刺激語として採用した。ファンタジー：「ヒーロー」「王子様」「白馬の王子」「プリンス」「ナイト」「お城 (F)」。現実：「親切な」「陽気な」「誠実な」「思慮深い」「ユーモアがある」「信頼できる (F)」。恋人：「彼」「恋人」「カレンシ (F)」。恋人以外：「友達」「級友」「いところ」「友人」「隣人」「弟 (F)」。 (F) は分析の対象としないフィラー語。

<sup>2</sup> 顕在 RF の質問紙項目は、予備調査の結果「ファンタジー」を連想する男性を表す語句として多かった言葉を使用した。恋人は①白馬にのった王子様の様だ②私を守ってくれる③ごく普通の人だ（逆転項目）④ヒーローである⑤王子様のような存在だ、の5項目で、6件法（1.「まったくそう思わない」2.「そう思わない」3.「どちらかといえばそう思わない」4.「どちらかといえばそう思う」5.「そう思う」6.「非常にそう思う」）で回答させた。

め,質問紙を本研究で独自に作成した。将来のキャリアや結婚後の家事・仕事に対する考え方について 17 項目,7 件法で回答をもとめた。逆転項目を変換したうえで因子分析を行った(プロマックス回転,最尤法)。どの項目にも低い因子負荷,または複数の因子に負荷が高い項目をのぞき,再度因子分析を行った結果,3 因子,F1: キャリア志向, F2: 家庭志向, F3: 依存志向が抽出された (Table 1)。以降の分析では,因子ごとに項目の合計得点の平均値を算出し,基準変数として扱うこととする。

Table 1. 達成動機の因子分析結果

項目	F1	F2	F3
仕事で成功することが人生で重要	<b>0.83</b>	-0.01	0.16
キャリアを積んで社会的に認められたい	<b>0.92</b>	0.14	0.06
現在の優先事項は将来の職業のための準備	<b>0.49</b>	-0.11	0.05
仕事を続けることはそれほど重要でない (R)	<b>0.66</b>	0.33	-0.05
男性と対等に働くのはいやだ (R)	<b>0.81</b>	-0.23	0.25
結婚後は良き妻良き母になることを目指す	0.07	<b>0.92</b>	0.02
自分の仕事より夫の仕事の成功が第一	-0.08	<b>0.75</b>	-0.05
結婚こそが自分の人生の幸せ	0.16	<b>0.63</b>	0.06
結婚相手は社会的に高地位で高収入望む	0.10	-0.08	<b>0.79</b>
将来性ある男性に会うため一流企業を目指す	-0.04	-0.06	<b>0.58</b>
結婚相手の仕事の成功が自分の価値を高める	0.07	0.12	<b>0.69</b>
女性の評価は結婚相手によって決まる	-0.27	0.25	<b>0.56</b>

注: R は逆転項目, F1-F2;-.41, F1-F3;.27, F2-F3;.13

## 結果

### 各尺度の分析

**潜在 RF** データの外れ値を除外し (>3000ms,<300ms),対数変換し,不一致試行と一致試行の平均値の差を潜在 RF の指標とした( $n=73$ ,  $M=.06$ ,  $SD=.14$ )。数値が高いほど「潜在 RF」が高い。一致志向 ( $M=611.16ms$ ,  $SD=84.33$ ) と不一致試行 ( $M=843.34ms$ ,  $SD=150.37$ ) の反応時間を比較するため,  $t$  検定を行ったところ,一致志向の方が,反応時間が有意に短かった ( $t(72)=16.68$ ,  $p<.001$ )。参加者は,潜在的に恋人と王子様を連合させる傾向が強いという結果だった。

**顕在 RF** 質問紙の 5 項目について信頼性分析した結果,「ごく普通の人」「守ってくれる」の 2 項目を除くと  $\alpha$  係数は高くなり,また項目間相関も高くなった。2 項目を除いた 3 項目による  $\alpha$  係数は高く, $\alpha=.87$  だった。そこで,3 項目の合計得点の平均値を顕在 RF とした ( $n=73$ ,  $M=2.50$ ,  $SD=1.07$ )。顕在 RF の得点は,「恋人を王子様のようなと思うか」という問

いに対し、理論的中央値である3.5未満の回答が83.6%で、全体の8割以上が、恋人を王子様とは思わない、という方向に回答した。潜在・顕在RFの相関分析を行った結果、潜在RFと顕在RFとの間には有意な相関はなかった( $r=.10$ , ns.)。

**仮説の検証** 潜在・顕在RFの達成動機に対する効果について重回帰分析(強制投入法)を行った(Table 2)。その結果、仮説を支持する方向で、「依存志向」に対する潜在RFが、正の方向で有意な効果があった。また、「家庭志向」に対する顕在RFの正の効果があった。キャリア志向については、潜在・顕在指標ともに、有意な効果はなかった。

Table 2: 潜在・顕在RFと達成動機,重回帰分析結果

基準変数	説明変数	R <sup>2</sup>	$\beta$	T
キャリア志向	潜在RF	0.01	-0.09	-0.66
	顕在RF		-0.06	-0.43
家庭志向	潜在RF	0.08 <sup>+</sup>	-0.01	-0.03
	顕在RF		0.36 <sup>*</sup>	2.46 <sup>*</sup>
依存志向	潜在RF	0.08 <sup>+</sup>	0.28 <sup>*</sup>	2.42 <sup>*</sup>
	顕在RF		-0.05	-0.46

+<.10, \*<.05,  $\beta$ は標準偏回帰係数

## 考察

分析の結果、潜在RFが高いほど結婚相手に対する依存志向が強い、すなわち結婚相手には高地位・高収入を望み、結婚相手の仕事の成功が自分の価値を高め、女性の評価は結婚相手によって決まると考える傾向にあるとわかった。恋人を潜在的に「王子様」や「ヒーロー」などのファンタジー物語の登場人物と連合させるほど、「王子様のような男性に守られたい」、「王子様のような男性と結婚して幸せになりたい」という、結婚相手の社会経済的地位を通じて自己実現し、パートナーに頼りたいと考える他律的・依存的な態度・信念が強いという可能性が示された。また、仮説にはなかったが、顕在RFは家庭志向と正の関連がみられ、結婚後は良き妻良き母になり、夫の仕事の成功を第一に考え、結婚こそが自分の幸せと考える傾向にあるとわかった。これは、恋人を「王子様のような男性」と意識的に表明する女性は、現在の恋人に対してポジティブな幻想を抱いていると言え、そうした男性と結婚したらパートナーの成功を第一に考え、その男性に尽くしたいと考える傾向が示されたと言える。また、RFの潜在・顕在指標とも、キャリア志向とは有意な関連はなかった。一般的に社会経済的地位の高い女性は、パートナーにも自分自身と同程度か、もしくは自分以上のキャリアや年収を望む傾向がある。本研究の結果でも、キャリア志向は依存志向と正の弱い相関を示した( $r=.27$ , Table 1)。こうした点から「RFが低いほど、キャリア志向が高い(従って、相手の社会的地位や経済力を期待しない)」という関係にならなかった可能性がある。

以上の結果から、潜在 RF は女性がパートナーの地位や経済力に依存する傾向「間接的達成動機」を予測する効果がある可能性を示唆したと言える。そして青年期女子の潜在的なロマンティック幻想は、「王子様のような男性に守られ、パートナーの社会的地位や経済力によって幸福になりたい」という、パートナーに対する心理的依存状態を強める可能性が示唆された。こうした心理的依存状態については、これまで主に青年期女子を対象として検討されてきており、女性が成人期を迎え結婚した後についてはほとんど検討されていない。そこで研究 2 では成人期の既婚女性を対象に、潜在 RF の効果について更なる検討を進めることとした。

## 研究 2

潜在的態度が「内省的に識別できない過去の経験の痕跡」(Greenwald & Banaji, 1995, p.5) とすれば、潜在 RF は女性の過去から現在までの多様な経験の痕跡であり、幼児期から成人期に至るまでの発達に応じて、また生活環境の変化に応じて多様に変化していくものだと言える。とくに未婚の恋人関係である時期と、結婚後の夫婦関係にある時期とは、大きな社会心理的变化が起きる。未婚の恋人関係とは異なり、生活を共にする婚姻関係では、ファンタジーというバラ色の幻想を通して結婚生活を見続けることは現実には難しい。むしろ現実の結婚生活は、失望、落胆、怒りなど危機的な心理状態を生み出すことも少なくない。危機的な状況でパートナーが自分を救出し、保護し、幸せを運んでくれることを期待しては、それは現実生活に対しての失望や不満を生む可能性がある。結婚とは、夫婦がそれぞれの生育環境の文脈から脱却し、結婚後の社会的文脈や人間関係の文脈の変化に応じて柔軟に発達・変化し、「より成熟した段階へと成長を遂げる」(亀口, 2001, p257) 過程と考えれば、女性が成人期に達して生涯の伴侶を得た後も、青年期女子に見られるような潜在的な心理的依存状態にあるとしたら、真の幸福感を得ることは難しいであろう。

近年中高年の離婚が増加しており、日本の夫婦では結婚満足感に性差があり、妻の満足感が夫よりも低いことが指摘されている(柏木, 2003)。また、離婚申し立てにおける約7割が妻からの申し出であり(最高裁判所, 2007)、妻からの申し出による離婚が大半を占めている現状について、柏木(2003)は「夫と妻の分裂した心理が離婚の温床となっている」と指摘した。妻の申し立てが多いのは、女性が依然として男性と比べて社会経済的に不利な状況にあることを考慮すべきであり、また統計資料だけでは離婚申し立てに至る個別の事情や理由は具体的には明らかではない。しかし、こうした現状を踏まえ、妻の結婚満足感が低いことの一つの要因として、妻の心理的状态について着目し、より詳細な検討を進めることは、意義があろう。

そこで、本研究では、仮に成人期の女性が青年期女子に見られるような潜在的な心理的依存状態に依然としてあるとすれば、その潜在的態度と現実生活との乖離が心理的葛藤となり、現実生活への不満となるであろうと予測した。そして、既婚女性の潜在 RF を青年期女子

と同じ方法で測定し、幸福感との関連を検討することとし、潜在RFは幸福感と負の関連があると予測した。また、Rudman & Heppen (2003)に倣い、顕在測度でもRFを測定し、潜在指標との関係をあわせて検討することとした。

## 方法

### 参加者

東京都内の育児中の既婚女性、44名が参加し、2007年8～10月に実施した。参加者の年齢は30代が47.7%、40代が52.3%。結婚年数は4～10年が34.1%、11～15年が65.9%だった<sup>3</sup>。

### 手続き

参加者に、参加は自由であること、謝礼として1,500円を支払うことを説明し、調査を開始した。参加者はRFを測定するため、IATと質問紙に回答した。最後に幸福感尺度の質問紙に回答し、ディブリーフィングを受け終了した。RFの測定にあたり、IAT先群(24名)と質問紙先群(20名)はランダムに決定した。

### 材料

**IAT** IATで潜在RFを測定した。Rudman & Heppen (2003)に倣い、「夫」と「ファンタジー」及び「夫以外」と「現実」の連合を一致試行、「夫」と「現実」及び「夫以外」と「ファンタジー」の連合を不一致試行とした。研究1と同様に、「ファンタジー」のカテゴリーには、ファンタジーを連想する語句を、「現実」のカテゴリーにはポジティブな特性語を刺激語として使用した。「夫」のカテゴリーには参加者の夫の実名をひらがな表記で使用した<sup>4</sup>。

**質問紙** Rudman & Heppen (2003)に倣い、5項目の顕在RF尺度を作成した。質問項目は研究1と同様で、夫について「白馬に乗った王子様のような」などの項目に6件法で回答を求めた。基準変数となる幸福感尺度については、育児や結婚生活、仕事など既婚女性の多面的な役割に配慮し、本研究で独自に9項目(5件法)の質問紙を作成した(Table 3)。

## 結果

### 各尺度の分析

**潜在RF** 分析にあたり、データのはずれ値を除外して(>3000ms, <300ms), 対数変換し、不一致試行と一致試行の平均値の差を潜在RFの指標とした( $n=42$ ,  $M=.06$ ,  $SD=.11$ )。夫とファンタジーを連合させる程度が強いほど「潜在RF」の数値が高い。一致試行( $M=724.2$ ,  $SD=139.3$ )と不一致試行( $M=841.6$ ,  $SD=200.0$ )の反応時間を比較すると、一致試行の方が、反応時間が有意に短かった( $t(41)=3.52$ ,  $p<.01$ )<sup>7</sup>。

**顕在RF** 質問紙の5項目について信頼性分析した結果、「ごく普通の人」「守ってくれる」の2項目を除くと $\alpha$ 係数は高くなり、また項目間相関も高くなった。2項目を除いた3項目

<sup>3</sup> 分析にあたり、IATが正常に遂行されなかった場合(2名)と、質問紙に欠損値がある回答(幸福感尺度、3名)を分析から除外した。そのため、参加者数44名のうち各変数で分析対象者が異なる。分析対象者の人数は、結果の項で変数ごとに明示した。

<sup>4</sup> 夫の刺激語は以下の通り。「夫」「主人」「実名(例: いちろうさん)」「ご主人(F)」。

による  $\alpha$  係数は高く,  $\alpha = .89$  だった。そこで, 3 項目の合計得点の平均値を顕在 RF とした ( $n=44, M=2.33, SD=1.16$ )。顕在 RF の得点は, 「夫を王子様のようなと思うか」という問いに対し, 理論的中心値である 3.5 未満の累積度数は 35 名で, 全体の 79.5% が, そうは思わない, という方向に回答した。また, 潜在 RF と顕在 RF の相関分析を行った結果, 2 変数間に有意な相関はなかった ( $r = -.12, ns$ )。

**幸福感尺度** 幸福感が高いと得点が高くなるように逆転項目の得点を変換した上で, 因子分析 (主成分分解, プロマックス回転) を行った ( $n=41$ )。その結果 3 因子が抽出された (Table 3)。3 因子はそれぞれ負荷の高い項目の内容から, F1 は仕事満足感, F2 は結婚生活満足感, F3 は育児幸福感とした。3 因子による分散説明率は 72.73% だった。以降の分析では, 3 因子ごとの因子得点を参加者ごとに求め, 3 つの変数を基準変数として扱い, 分析することとした。

Table 3: 幸福感の因子分析結果

項目	F1	F2	F3	M	SD
私は、今の仕事が、自分にあっていると思う。	.92	-.01	-.11	3.39	1.05
できれば、仕事を続けたい。	.89	-.19	.05	3.34	1.12
私は、現在の仕事に不満がある。R	.69	.16	.08	3.31	.95
自分の結婚生活は、幸せだ。	.22	.82	-.00	3.93	1.04
今の生活で、経済的には余裕があるほうだ。	-.33	.85	.11	3.09	1.05
私は、今、幸せだ。	.30	.71	.06	4.05	.91
子育ては自分にとって自己犠牲だと感じる。R	-.08	.17	.84	3.82	.99
子育ては楽しい。	.05	.17	.81	3.98	.85
私は、一日を有効に使っていない気がする。	-.08	.55	-.64	3.05	1.33
因子寄与 (回転後)	2.87	2.74	2.20		

F1=仕事満足感 F2=結婚生活満足感 F3=育児幸福感, (R)は逆転項目

因子間相関 : F1-F2:.35, F1-F3:.31, F2-F3:.24

### 仮説の検証

**RF と幸福感の関連** 仮説を検証するため, 潜在 RF と顕在 RF を説明変数, 幸福感の 3 変数を基準変数として, 強制投入法による重回帰分析を行った ( $n=39$ )。その結果, 2 つの説明変数による, F2 (結婚生活満足感) に対する効果が有意だった (Table 4)。予測した通り, 潜在 RF が高いほど結婚生活満足感は低いという結果だった。また, 顕在 RF が高いほど, 結婚生活満足感が高いという結果も得た (Table 4)。また, F1 (仕事満足感) と F3 (育児幸福感) に対しては, 重回帰分析の結果, 説明変数による有意な効果はなかった。

Table 4:潜在・顕在 RF の幸福感に対する重回帰分析結果

基準変数	潜在 RF			顕在 RF	
	R <sup>2</sup>	$\beta$	t	$\beta$	t
結婚生活満足感	.41***	-.28	-2.18*	.55	4.23***
仕事満足感	.08	.17	1.08	.23	1.44
育児幸福感	.03	.00	.01	.17	1.01

注) \* $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$ ,  $\beta$  は標準偏回帰係数

### 考察

仮説の通り,潜在 RF はネガティブに結婚生活満足感を予測するという結果だった。また,RF の潜在指標と顕在指標の間に有意な関連はなかった。さらに,一致志向は不一致試行より反応時間が短く,参加者は夫を現実的でポジティブな特性語ではなく,ファンタジーの登場人物と連合させる傾向が相対的に高いことが示された。女性が自分自身で必ずしも意識しないうちに数年の婚姻生活を経てもなお,心理的依存状態の傾向にあり,さらにその潜在的態度が現実に対する不満や失望を生む可能性が示された。逆に言えば,現実のパートナーに即して,夫をファンタジーではなく,「現実」すなわちポジティブな特性語と連合させる程度が比較的高いほど,結婚生活の満足感が高いとも言え,女性が潜在的に抱え持つ心理的依存状態と現実との乖離が,結婚満足感に負の効果をもたらす可能性が示された。これまでの研究では,妻の結婚満足感が夫に比べて低い要因として,夫が伝統的性役割観をもち,妻はより革新的な性役割観に傾いており,夫婦間の性役割観に乖離があることが指摘されてきた(柏木,2003)。本研究の結果は,こうした先行研究の知見を否定するものではない。むしろ,そうした革新的な性役割観を促す社会的意識の中で,女性自身が抱える,必ずしも自分自身が意識していない潜在的な心理的依存状態の可能性をも,妻の満足感が低いことの一つの要因として検討する必要性を示唆するものである。

また,顕在 RF が結婚生活満足感をポジティブに予測するという結果を得た。この顕在 RF の予測力については,Rudman & Heppen(2003)では見られなかった結果であるが,本研究の顕在 RF の結果は,パートナーに対して顕在的にポジティブな錯覚を知覚するほど関係満足感が高いという報告(Murray,1996)など,先行研究の知見と矛盾しない。潜在 RF と顕在 RF との関連性については,未だ議論の余地があり,それらが何を予測し得るのか,またその予測の妥当性はどちらが高いのかなどについては,今後縦断研究や行動観察研究などを通してさらなる検討の必要性があるだろう。

### 総合考察

本研究の結果,潜在 RF は女性の心理的依存状態を予測する効果があり,心理的依存状態は,女性の長いライフスパンの中で,パートナーとの関係満足感をネガティブに予測することが示唆された。これまで幸福感に関しては多くの研究が行われており,異性愛の関係



満足感や結婚満足感に関する研究も多い(柏木,2003 参照)。しかし潜在測度を使って,女性の過去からの長いライフスパンの中で培われ、多様に変化してきた(あるいは変化しなかった)潜在的なパートナーに対する態度または信念が,現在の幸福感や満足感を予測する可能性を検討した研究は,これまでのところほとんどない。本研究の結果をふまえ,今後は,RF の形成要因も含め,RF が女性の幸福感や人生観に及ぼす影響について更なる検討を進める必要がある。

#### 引用文献

- Dowling, C. (1981). *The Cinderella complex. Women's hidden fear of independence*. New York: Summit Books. (コレット・ダウリング 柳瀬尚紀(訳)(1985). 全訳版シンデレラ・コンプレックス 三笠書房)
- Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (1995) Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, **102**, 4-27.
- Greenwald, A. G., McGhee, D.E., & Schwartz, J.L.K. (1998) Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1464-1480.
- 柏木恵子(2003) 結婚生活と夫婦関係 家族心理学 社会変動・発達・ジェンダーの視点 東京大学出版会 pp.103-154.
- 亀口憲治(2001) 夫婦関係の発達 下山晴彦・丹野義彦(編) 講座臨床心理学5 発達臨床心理学 東京大学出版会 pp.255-274.
- Murray, S. L., Holmes, J. G., & Griffin, D.W. (1996). The self-fulfilling nature of positive illusions in romantic relationships: Love is not blind, but prescient. *Journal of personality and social psychology*, **71**. 1155-1180.
- 落合幸子 (1984) 人生の転換期の心理IV 女性の中のシンデレラ・コンプレックス 常葉学園大学研究紀要 **5**, 117-125.
- Rudman, L.A., & Heppen, J. B. (2003) Implicit romantic fantasies and women's interest in personal power: A glass slipper effect? *Personality and Social Psychology Bulletin*, **29**, 1357-1370.
- 最高裁判所 (2007) 司法統計年報



#### IV 部

自己に対する脅威と男性が女性に向ける偏見  
— 自我正当化機能 —

## 13章 自己価値への脅威下における偏見<sup>1</sup>

石井 国雄 沼崎 誠

(首都大学東京大学院人文科学研究科)

人には自己価値が脅かされたときに、外集団あるいはその成員をネガティブに評価する傾向がある。外集団を蔑視するということは、自分がネガティブな外集団よりも価値が高いという認知を生み出す行為であり、そうして得られた自己の肯定的なアイデンティティは、自己価値の高揚感を与える。人は偏見を用いて、脅かされた自己価値を肯定化することがあり、そのために脅威下では偏見が生じやすくなるとされている。とくに近年の研究では、そうした影響は非意識的な評価過程にも影響を及ぼしていることを示している。

第5部では、こうした自己価値への脅威状況における非意識的な評価の活性化(潜在的偏見)について検討する。とくに本章では、自己価値への脅威状況において、外集団に対するネガティブな評価(偏見)についてレビューする。まず、自己高揚動機と偏見とのかわりについて説明する。この際、背景となる理論として自己肯定化理論を説明する。次に、脅威下における潜在的偏見について近年の研究を概説する。次に、調整要因について説明する。そして本章の最後には、現在明らかになっていない問題について概括し、次章(13~16章)における問題について述べる。

### 自己高揚動機と偏見

**自己高揚傾向** 人は自身の自己概念についてのポジティブ性を維持・増加し、ネガティブさを低減・回避する願望、すなわち自己高揚動機を持つ(Leary, 2007)。人が高い自己評価を持つことは、ポジティブな結果(低い不安、強い自信、低いストレス、大きな成功)と関わり、一方で低い自己評価を持つことはネガティブな結果(強い不安、抑うつ)と関わる(Taylor & Brown, 1988, 1994; Taylor, Lerner, Sherman, Sage, & McDowell, 2003a, b)。このため、人は自己評価が高く維持されることを求める。自己高揚動機は、高い自己評価を達成するために、判断や行動におけるさまざまなバイアスを生じさせる。このようなバイアスを、自己奉仕バイアスとよぶ。自己奉仕バイアスとは、課題遂行などの結果を自己にとって好ましい意味を持つように、解釈、説明する傾向をさす(Campbell & Sedikides, 1999; 藤島, 2001)。人が示す自己奉仕バイアスとして、自尊心を満足させる情報を収集する傾向(Ditto & Lopez, 1992)、ポジティブな点から自分の特徴を定義しようとする傾向(Dunning & Cohen, 1992)、自分の関わっている人・場所・事物を過大評価する傾向(Pelham, Mirenberg, & Jones, 2002)、実際よりも自分が優れていると信じる傾向(Alicke,

---

<sup>1</sup> 本論文は、平成22年度に首都大学東京大学院人文科学研究科に提出された博士論文の一部を加筆修正したものである。

Vredenburg, Hiatt, & Govorun, 2001)、自分より評価の低い他者と比較する傾向 (Wood, Giordano-Beech, & Ducharme, 1999)、など多くの傾向が示されている。

**偏見の自己高揚機能** 人が外集団に対して偏見をむけることには、こうした自己奉仕的な認知を生じさせるという意味合いがある。人は他者を貶めることによって、自己価値を得ることがある (Crocker, Thompson, McGraw, & Ingerman, 1987; Taylor & Lobel, 1989)。偏見は、外集団とネガティブさを結びつけることであり、外集団の評価を貶めることと関わる。そのため集団間状況では、自己価値を高揚させるために、偏見を利用することが生じうる (Fein, Hoshino-Browne, Davies, & Spencer, 2003; Fein & Spencer, 1997)。

偏見が自己価値を高める理由として、内集団の価値の高揚と、外集団への下方比較の 2 つが考えられる。まず、偏見は内集団の価値の高揚につながる。人は好ましい集団に所属したいという欲求を持っているために、自らの所属する集団 (内集団) の価値を高めるように動機づけられる (Hogg & Abram, 1988; Tajfel & Turner, 1979)。内外集団が比較される状況においては、外集団に対して偏見を向けることは、内集団の相対的な価値を生み出すことにつながる。そのため、内集団の価値を高めるために、外集団の価値を貶めるといふことが生じる。とくに、重要なこととして、Hogg and Abram (1988) は、人の持つ内集団の価値を高揚させようとする背景には、自尊心を高めたいという欲求があることを主張している。偏見は内集団の肯定的な価値を生じさせるが、肯定的となった内集団の価値は、自己価値に反映される。つまり人が偏見を用いて内集団の価値を高めるのは、自尊心や自己価値を高めるためなのだと考えられるのである。

ただし、内集団と外集団の評価が相対的に比較される状況ではなくても、偏見を用いることによって自己価値が高まることがある。偏見が自己価値を高めるもう一つのルートとしては、自己と外集団の評価を比較することによる、外集団への下方比較が考えられる。人は自己の価値を他者との社会的比較によって参照している (Festinger, 1954)。もし、他者が自己よりもネガティブな価値を持っていた場合には、他者との相対的な比較によって、自己の価値が肯定的であると知覚されることがある (下方比較)。いくつかの研究は、他者のネガティブな評価は自尊心を増加させることを示している (Brickman & Bulman, 1977; Taylor & Lobel, 1989; Wills, 1981, 1991; Wood & Taylor, 1991)。外集団に対する偏見は、集団間状況においては、利用しやすい下方比較の材料である。そのため、偏見を用いた下方比較が生じやすいのだと考えられる。こうしたように、外集団の他者を下方比較の対象に用いることで、肯定的な自己価値を生じさせることができると考えられる。

**自己価値への脅威と偏見** 偏見が自己高揚的な機能を持つ証拠として、自己価値への脅威状況において、偏見が強く生じるということがある。人は自己高揚動機を持つために、自己価値が高く維持されることを望むが、場合によっては、自己価値が脅かされ、高い自己価値の維持が困難な場合もある (e.g., テストで上手くいかなかった、他者から拒絶された、自分の魅力がないと感じた)。自己価値への脅威にさらされると、強い不快感が生じるため、

人は脅威を対処し、自己価値を回復させるための行動に動機づけられる。

Katz (1960) は偏見の機能の一つには、自我防衛機能があり、心理的な脅威から個人を守る役割を持つことがあるとしている。自己価値が脅かされたときに、自己奉仕的な行為をより行うことによって、脅かされた自己価値を守ろうとする(メタ研究として、Campbell & Sedikides, 1999)。自己価値への脅威状況において、外集団の偏見をより生じるようになり、偏見を用いることで自己高揚しているならば、偏見の利用が自己高揚機能を持っている証拠になるだろう。

Fein and Spencer (1997) は、自己価値への脅威状況において、マイノリティ外集団に対する偏見が、顕在的態度の傾向として生じることを示している。参加者は、知能テストのネガティブな結果のフィードバックが与えられることによって自己価値への脅威を受け、その後、マイノリティ外集団(ゲイ男性、ユダヤ人)の成員の特性に対する評価を行わせることで、顕在的態度を測定した。その結果、脅威にさらされた参加者において、脅威にさらされていない参加者と比べて、外集団成員への特性がよりネガティブに評価される傾向が見られた。また、脅威を受けた参加者においては、外集団へのネガティブな特性評価の度合いと状態自尊心の程度とに関係があり、外集団成員の特性をよりネガティブに評価した人において状態自尊心が回復することが見られた(研究3)。こうした結果は、脅威下においては、外集団へのネガティブな顕在的態度、すなわち顕在的偏見が強まること、そして、外集団への顕在的偏見を用いることで脅かされた自己価値を回復させることを示している。こうしたことから、偏見が自己高揚機能を持っていることがわかる。

**偏見と自己肯定化** Fein and Spencer (1997) の実験結果において重要なことは、脅威にさらされた自己価値領域(知能テストの遂行)と外集団への評価は、本質的には無関連であるということである。知能テストにおけるネガティブな結果はマイノリティ外集団の成員によってもたらされたわけではないし、また、外集団の成員をネガティブに評価したところで知能テストにおける遂行の自己評価が高まるわけではない。そうしたことにもかかわらず、偏見が自己価値の高揚に寄与することには、偏見が全体的な自己統合(global self-integrity)に寄与しているということが関わる。

自己肯定化理論は、自己価値への脅威に対する心的な反応を統合的に説明する理論である(Sherman & Cohen, 2006; Steele, 1988; Steele, Spencer, & Lynch, 1993)。自己肯定化理論では、人は全般的なモラル、適応的な適切さである全体的自己統合を維持しようと動機づけられることが想定されている。自己のシステムは、全体的自己統合を中心に構成され、全体的自己統合はさまざまな自己価値領域(役割、価値観、社会的アイデンティティ、信念システム、目標)によって維持されていると仮定している。

自己肯定化理論は、人の自己システムの目標は、全体的自己統合を維持することにあるとしている。全体的自己統合は、個別の価値領域の肯定的な価値によって維持される。人はさまざまな個別の自己価値領域について、自己価値を高揚させようとするが、それは個

別の領域の自己価値が全体的自己統合に寄与するためである。自己肯定化理論における想定は、全体的自己統合に寄与する自己価値領域はさまざま存在し、価値を得られる領域は代替可能であるということである。そのため、ある領域で自己価値が補填できない場合には、代替的に異なる領域で自己価値を補うことができると考えられるのである (e.g., Brown & Smart, 1991)。自己の重要な価値のひとつが脅威にさらされたときには、全体的自己統合に対しても脅威が生じる。自己価値への脅威は、自己高揚の動機づけを生じさせるが、自己肯定化理論の枠組みでは、自己高揚動機が目標とするのは、個々の自己価値領域における脅威を解決することではなく、全体的自己統合を肯定化することである。つまり、ある特定の領域の自己価値が脅かされたとき (数学の悪い成績)、当該の脅威を受けた領域の自己価値を防衛する目標が生じるというよりは (数学を頑張る)、自己の全体的自己統合を肯定化する目標が生じるのである。自己肯定化理論の考えでは、全体的自己統合は、さまざまな自己価値によって維持され、それぞれの領域の自己価値は別の領域の自己価値によって代替可能である。そのため、ある特定の領域における自己価値が脅かされたとき (数学の悪い成績)、別の領域における自己価値を追求することが生じうるし (スポーツに打ち込む)、代替的な価値領域における自己価値を高揚することで全体的自己統合が維持できるのである。こうした、失敗によって自己価値が脅威にさらされたときに、失敗とは全く無関連な領域で自己価値を高めることで、代償的に脅威に対して適応しようとすることを間接的自己高揚と呼ぶ (Sherman & Cohen, 2006)。

Fein *et al.* (2003) は、他者へのネガティブな評価を行うことが全体的自己統合に寄与していることを指摘している。そのため、自己価値への脅威下においては、他者へのネガティブな評価が生じることが考えられる。そして、他者へのネガティブな評価は、その時点で最もアクセスの可能な形態をとることを指摘している (他者への下方比較や、集団間バイアス、偏見やステレオタイプ)。とくに、外集団に関する手がかりがアクセス可能な状況であれば、偏見を使った自己高揚が生じやすくなると考えられる。Fein and Spencer (1997) は、自己価値への脅威状況において、マイノリティ外集団を呈示することで、偏見の手がかりを呈示している。結果として、自己価値への脅威下では偏見が生じ、偏見が状態自尊心の高揚に寄与しているということは、偏見が、自己高揚の手段としてみなされ、間接的自己高揚として機能したことを示唆している。

### 自己価値への脅威下における潜在的偏見

ここまで偏見が自己高揚機能を持ち、自己価値への脅威下において外集団に対する顕在的偏見が強く生じることを説明した。近年の研究は、自己価値への脅威下では、そうした偏見は非意識的に生じることを示している。Spencer, Fein, Wolfe, Fong, and Dunn (1998) は、自己価値への脅威状況においては、脅威にさらされていない状況よりも、外集団との接触がネガティブなステレオタイプの活性化を促進されることを示している。研究1では、

まず、参加者は知的テストのネガティブな結果をフィードバックされることによって、自己価値への脅威にさらされた。その後、アジア人女性に対するネガティブなステレオタイプの活性化の程度が測定された。ステレオタイプの活性化は、単語完成課題によって測定された。アジア系アメリカ人女性またはヨーロッパ系アメリカ人女性が語幹の書かれたカードを持っているビデオテープが呈示され、参加者はそのカードから連想される単語を記述した。語幹には、アジア人のステレオタイプが連想できるものが含まれていた (s\_y (shy), n\_p (nip), poli\_e (polite))。重要なことに、活性化が測定される際、参加者に認知負荷がかけていた。脅威にさらされていない参加者においては、女性の人種によるステレオタイプ関連語の完成数の違いはみられなかったが、脅威にさらされた参加者においては、アジア系アメリカ人がカードを持っていた場合に、ステレオタイプ関連語の完成が有意に多かった。認知負荷の状況においては、概念の活性化が生じにくいことが示されている (Gilbert & Hixon, 1991)。そうしたステレオタイプが生じにくい状況であるにもかかわらず、脅威を受けた参加者においてステレオタイプ関連語の完成が多かった。この結果は、自己価値への脅威下では、ステレオタイプの活性化が促進されることを示している。また、この研究では完成されたステレオタイプ語のバイレンス (ポジティブ、ネガティブ) の違いによる効果の違いについても検討しており、ポジティブなステレオタイプ関連語 (polite) には条件間の違いは見られなかったが、ネガティブなステレオタイプ関連語 (shy, nip) は、脅威を受けアジア系アメリカ人がプライムされた条件において他の条件よりも完成が多かった。このことは、自己価値への脅威下では、外集団と接触がステレオタイプに関連したネガティブ概念の活性化を促進させたことを示している。

また、Sinclair & Kunda (1999) では、参加者は、黒人医師からネガティブなフィードバックを受けた場合に、ポジティブな医師ステレオタイプの活性化を抑制し (知的、思いやり)、ネガティブな黒人ステレオタイプを活性化させることを示している (犯罪、暴力)。Sinclair & Kunda (1999)の研究は間接的自己高揚ではなく、直接的な自己高揚を扱ったものであるものの、自己価値の脅威下において、自動的に外集団へのネガティブな評価が活性化することを示す証拠の一つと言える。

外集団との接触が、自動的にネガティブな評価を活性化させたということは重要である。自動的に評価が活性化したということは、動機づけによって意識的に外集団のネガティブさを探すのではなく、非意識的な段階で外集団のネガティブさに注目がされやすいことを示唆している。Spencer *et al.* (1998) は、自己価値への脅威下において、外集団をネガティブに評価することは自動化しているとしている。人々は、ステレオタイプ化された集団の成員をネガティブに評価することを頻繁に行っている。そして、そのたびに自己高揚感を感じるために外集団へのネガティブな評価は強化され、その結果として、日常化され、自動化される。とくに、自己高揚感と蔑視が対呈示されることによって、蔑視が自己高揚感を与えるものと認識されるようになる。そのため、自己価値への脅威下のような、自己高



場に動機づけられる状況では、外集団への蔑視を用いて、自己高揚感を感じるようになると考えられるのである。

Spencer *et al.* (1998) は、自己価値への脅威下において外集団への偏見と自己高揚目標との間に自動的なリンクが生じることを、自動動機モデルから説明している (Bargh, 1997; Bargh & Gollwitzer, 1994)。自動動機モデルは、ある状況の手がかりとともに繰り返し対呈示された目標は、状況的な手がかりとの接触によって自動的に活性化するようになっている。自動的に活性化した目標は、意識的な目標と同様に、目標の達成に関連した行動を生じさせる (Bargh & Gollwitzer, 1994; Bargh, Gollwitzer, Lee-Chai, Barndollar, & Troetschel, 2001; Chartrand & Bargh, 1996; for a review, see Moskowitz, Li, & Kirk, 2004)。人々は外集団を蔑視することによって、自己価値を高揚させる経験を頻繁に行っており、その結果として、外集団へのネガティブな評価が自己高揚目標と結びつくようになっていく。とくに、自己価値への脅威は、自己高揚を強く動機づけ、自己高揚目標が強く活性化されやすくなると考えられる。そのため、自己価値への脅威状況では、外集団との接触が自己高揚目標を活性化させ、そして自己高揚目標と関連づけられた外集団への偏見も同時に活性化されやすくなると考えられるのである。このことは、自己価値への脅威状況においては、自己高揚目標を達成するための手段としてみなされるという考えにつながるものである。

自己価値への脅威状況において潜在的偏見が生じることは社会的に問題となりうると考えられる。その一つの理由はその抑制が困難であると考えられることである。潜在的偏見は、十分な機会と十分な動機があれば意識的な過程において修正される (Bodenhausen & Macrae, 1998; Monteith, 1993)。しかし、こうした意識的な過程における修正は、場合によっては困難となる。現実的な場面においては外集団との接触は、意図せぬときに不意に生じうる。自己価値への脅威下において、不意に外集団との接触があればネガティブな評価の活性化が生じうる。人は自動的な偏見の活性化に気づきにくい (e.g., Bargh, 1990)、そうした活性化は外集団への差別的な行動を生じさせてしまうと考えられる。

また、たとえ偏見を抑制することに動機づけられていたとしても、自己価値への脅威下においては、偏見の抑制は困難かもしれない。ある目標の活性化は当該の目標の追求に関わる知識の活性化および行動を促進させ、当該の目標と葛藤する目標の活性化を抑制する (Bargh & Chartrand, 1999; Kruglanski, Shah, Fishbach, Friedman, Chun, & Sleeth-Keppler, 2002)。偏見を用いて自己価値を高揚させる目標は、偏見抑制の目標と葛藤し、偏見抑制を行わせない可能性がある。目標のいずれの活性化が優勢となるかは、状況あるいは個人によって異なると考えられるが、とくに、自己価値への脅威が強く感じられた場合には、偏見は抑制できなくなることは考えられるだろう。

**潜在的偏見と判断への適用** 人の評価過程において、非意識的な評価過程が注目されてきたのは、後続の社会的判断が、評価の活性化によって影響を受けうることが想定される

ためである。活性化した概念は、後続の社会的判断に用いられやすくなる (Higgins, Rholes, & Jones, 1977)。また、対象との接触によって活性化した評価は、活性化した評価と対応した行動を生じさせやすくする (Chen & Bargh, 1999)。脅威下において、ある対象との接触が、ネガティブな評価を活性化させたならば、対象へのネガティブな行動 (e.g, 回避、攻撃) が生じやすくなると考えられる。

ただし、概念の活性化は、行動に直結するわけではない。自身の思考において不適切な思考が生じていることに気づく場合もあり、その場合はそうした思考を修正しようとするプロセスが働く。たとえば、人は偏見的になることを避けようとする動機づけをもち、不適切なステレオタイプを抑制することがある (Plant & Devine, 1998)。活性化と差別的行動の相違が生じる例として、Spencer Fein, Straham, and Zanna (2004) は、偏見を表出すべきではないという規範によって、自己価値への脅威下における、ステレオタイプの活性化とステレオタイプの適用の関係性が異なることを示している。参加者は、ゲイの権利についてディスカッションされているビデオを見た。そのビデオにおいて、聴衆はゲイの権利について肯定的/否定的かどうかを操作された。この操作は、その場にゲイの権利に賛成か反対かという規範を作り出すためであった。その後、参加者は知的テストのネガティブ・フィードバックを受けた。測定されたのは、ゲイ・ステレオタイプ活性化と、最後にゲイまたはストレートのターゲットへの評価であった。その結果、聴衆がゲイ権利に賛成であった場合、反対だった場合より、ゲイへの評価はポジティブであった。おそらく、向ゲイ規範の下では、意識的には偏見を抑制することが自己肯定化とみなされたのだと考えられる。しかし、向ゲイ規範の下では、ゲイ・ステレオタイプ活性化が抑制されたわけではない。逆に、向ゲイ規範条件では、活性化が強まるほど評価がポジティブになっていたのである。つまり、ステレオタイプ対象を受容する規範の下では、活性化は対象へのポジティブ反応を導くのである。

こうしたように、活性化と適用との関係は一様ではない。規範などによって、活性化した潜在的態度を、意識的に抑制するような働きかけをすれば、偏見の適用は避けられるのかもしれない。今後の研究では、潜在的認知の役割について詳細に検討し、活性化と適用の複雑な関係について明らかにしていく必要がある。

### 脅威下における偏見の調整要因

自己価値への脅威状況では偏見が増加する傾向にある。ならばどのようにそうした影響は低減できるだろうか。ここでは自己価値への脅威による偏見への影響についての調整要因について説明する。とくに脅威への緩衝アプローチと社会的カテゴリーの顕現性について取り上げる。

#### 自己のリソース増加による脅威への緩衝

脅威が偏見を生じさせる原因は、脅かされた自己価値を肯定化するための手段として偏

見が利用可能であるためである。ならば、もし自己のリソースを強くもち、脅威への緩衝となっているならば、全体的自己統合に対するダメージが抑えられ、その結果として、自己高揚的に偏見を用いる必要がなくなると考えられる。ここでは、自己のリソースを増加させる手段として、自己肯定化と潜在的自尊心について説明する。

**自己肯定化** 自己のリソースをもつための一つの方法は、自己肯定化操作である。自己肯定化操作とは、自己価値への脅威が生じる前に、自己の重要な価値について考えるという方法である。自己価値への脅威下において偏見が生じるのは、偏見が自己肯定化の手段とみなされているためである。ならば、他の自己肯定化手段によって、全体的自己統合への脅威を取り除くことができれば、自己価値への脅威下においても偏見は生じなくなると考えられる（関連して、Brown & Smart, 1991）。自己肯定化操作は、自己の重要な質やアイデンティティの源を顕在化することによって、全体的自己統合を補強する材料となる。とくに、脅威状況では、自己肯定化操作は、自己の重要な側面を知覚させることを通して、自己統合の感覚を維持させやすくする。そして、それが当該の脅威におよぼす自己統合への影響を減少させるようはたらくと考えられる。自己肯定化操作は、さまざまな防衛的なバイアスが生じなくなることが多くの研究によって示されている（Steele, 1988; Sherman & Cohen, 2006）。自己肯定化は、顕在的偏見の低減に効果を持つことが示されており、Fein and Spencer (1997, study 1) は、自己肯定化操作を行った場合には自己肯定化操作を行わなかった場合よりも、マイノリティ外集団への顕在的なネガティブ評価が生じなくなること示している。

**潜在的自尊心** 自己のリソースを持つことに関するもう一つの考えとして、高い潜在的自尊心を持つことがある（Greenwald & Banaji, 1995）。潜在的自尊心とは、自己とポジティブさを非意識的に結びつける傾向である。これは、意識的に自分がポジティブな価値を持つと評価する傾向である顕在的自尊心とは異なる。偏見研究においては、顕在的自尊心が高い場合に、脅威による影響を受けやすいことが示されている。Crocker et al.(1987)は、ネガティブ・フィードバックを受けた後の顕在的偏見に顕在的自尊心の高さによる違いがあるかを検討しており、自尊心の高い参加者においては、ネガティブ・フィードバックを受けることで顕在的態の内集団バイアスが強まるが、自尊心の低い参加者においては強まらないことを示している。しかし、高い顕在的自尊心を持つ人の中でも、潜在的自尊心の傾向が異なれば脅威による影響は異なることが指摘されており（Jordan, Spencer, Zanna, Hoshino-Browne, Correll, 2003; Jordan, Spencer, Zanna, 2005）、とくに、顕在的自尊心と潜在的自尊心がともに高かった場合（安定的な自尊心）には、自己価値への脅威にさらされたとしても自己防衛的なバイアスが生じなくなるということが指摘されている（Jordan et al., 2003）。安定的自尊心を持つ人は、自己のリソースを多く持っているために、脅威に対して適応することは容易であると考えられる。一方で、顕在測度では自尊心が高いが、潜在測度では低い自尊心がみられることを、防衛的自尊心とよぶ。防衛的自尊心を持ってい

る場合、意識的には自分をポジティブに考えているが、非意識のレベルでは自己に対する疑いを持っているとされる。防衛的自尊心を持つ人が脅威に直面した際には、引き出す自己のリソースが少ないためにより強い防衛的なバイアスを生じさせてしまうとされる (Jordan *et al.*, 2003)。Jordan, Spencer, Zanna (2005) は、脅威下における顕在的偏見のあらわれかたに、安定的自尊心者と防衛的自尊心者の違いがあることを示しており、防衛的自尊心を持つ人において、安定的な自尊心を持つ人よりも、マイノリティ外集団への顕在的偏見が高い強まることを示している。このことは、高い潜在的自尊心を持つことができれば、自己価値への脅威下における偏見を低減できることを示唆している。

こうしたように、自己価値への脅威下における偏見を低減する方法として、自己肯定化操作や、安定的な自尊心など、自己のリソースを高める方法を紹介した。こうした方法は主に顕在的偏見への影響を検討しており、潜在的偏見への影響は検討されていないが、自己のリソースの増加によって全体的自己統合へのダメージが低減されれば、顕在的偏見と同様に潜在的偏見も生じなくなることは考えられるだろう。今後の研究においては、潜在的偏見への影響についても検討されるべきである。

**脅威への緩衝の制限** ただし、脅威への緩衝を目的としたアプローチは有効な手段ではあるが、実施にはいくつか問題点が考えられる。潜在的自尊心は、他の潜在的認知と同様に、学習によって形成された記憶表象における連合と考えられる。そのため、その形成には多大な労力と時間が必要と考えられる。防衛的なバイアスを防ぐために、高い潜在的自尊心を持つことは効果的と考えられるが、すぐに有効な手段というわけではないだろう。また、自己肯定化操作は効果的な方法であるが、現実において常に利用可能ではないのかもしれない。現実にはさまざまな脅威状況があふれかえっており、ときに思いもよらぬ形で自己価値が脅威にさらされる。そうした予測不能な脅威状況に対して、常に自己肯定化操作を行うことで対処するという事は非現実的であろう。

また、脅威への緩衝を目的としたアプローチは、脅威が生じないこと、あるいは脅威による全体的自己統合へのダメージを抑えることを目的としているが、すでに起こってしまった脅威に対する対処にはならないことがある。自己肯定化操作は、基本的に脅威を受ける前に行われるものであるが、脅威を受けた事後になされた自己肯定化操作は、逆に防衛的バイアスを増加させうることを示す研究もある (Critcher, Dunning, & Armor, 2010)。つまり自己肯定化操作を使えば、必ず防衛的なバイアスが低減するというわけではなく、ある領域における脅威によって全体的自己統合へのポジティブティが維持できなくなったときには、必ずしも有効ではないことが考えられる。

ゆえに、脅威への緩衝を目的としたアプローチは、脅威が生じる以前に実行されれば、偏見の増加を避けることが可能と考えられるが、脅威が生じた以後に用いることは問題を生じさせうる。自己価値が脅威にさらされたときに、偏見が生じることを避ける必要がある場合、そのほかの対処を考える必要があるだろう。

## 社会的カテゴリーの顕現性

人々のある集団に対する思考や注目の強さはいつも同じ水準というわけではない。たとえば国家に関連したシンボル（e.g., 国旗）がある状況に存在しているとき、国旗を見ている人は普段よりも当該の国家について注目し、より多く思考すると考えられる。こうしたように、状況において特定の社会的カテゴリーが活性化し、注意をひきつける程度のことを社会的カテゴリーの顕現性と呼ぶ（Gaertner, Mann, Murrell, & Dovidio, 1989）。ある社会的集団に関するカテゴリーの顕現性が高まったときには、当該のカテゴリーに関連した思考が活性化しやすくなると考えられる。

こうしたことを考えると、偏見に関わる当該のカテゴリーが顕現的とならない場合には、偏見の増加は生じなくなることが考えられる。この可能性を示唆する知見として、内集団アイデンティティの強さが脅威下における顕在的偏見を調整したという Florack, Scarabis, and Gosejohann (2005) の研究がある。彼らは、脅威下における外集団（ポーランド人）への偏見の強さと内集団（ドイツ人）アイデンティティの強さとの関係を検討した。ドイツ人参加者は、困難なテスト（vs. 容易なテスト）を受けることによって自己価値への脅威を受け、その後、ドイツ人に対するアイデンティティの強さを評定し、外集団ターゲットに対する顕在的態度を測定した。その結果、内集団アイデンティティの弱い参加者は内集団アイデンティティの強い参加者と比べて、脅威下において外集団成員へのネガティブな顕在的態度が弱かった。内集団アイデンティティの強い人は内集団・外集団の違いに注目しやすいという点から考えると（Crisp, Hewstone, & Rubin, 2001; Crisp, Hewstone, & Cairns, 2001）、内集団アイデンティティの高さは、慢性的な内外集団カテゴリーの顕現性の高さの一つのあらわれと考えられる。Florack *et al.* (2005) の研究において、内集団アイデンティティが高い人は、内外集団カテゴリーの顕現性が高いために、脅威下において顕在的偏見が強く、一方で、内集団アイデンティティが低い人は、顕現性が低いために、脅威下において顕在的偏見が低いと考えられる。ただし、Florack *et al.* (2005) の研究は、個人差としての内集団アイデンティティの高さを検討している。そのため、内集団アイデンティティによる影響が必ずしも顕現性によって生じたものなのかはわからない。また、彼らの研究は、顕在的態度への影響を検討しており、潜在的態度に対する影響は検討されていない。こうした社会的カテゴリーの顕現性と脅威下における偏見との関わりについては、16章において議論する。

## IV部において取り上げた問題

ここまで、脅威下における偏見に関する研究をレビューした。こうした研究を踏まえ、IV部の以後の章ではこれまで取り上げられていなかった問題点について議論し、実証的検討を行った。大きな注目点は、脅威による潜在的偏見への影響である。先行研究は、脅威による顕在的偏見への影響について多く検討してきたが、潜在的偏見への影響については

まだまだ研究が少ない。とくに、以後に取り上げる問題についてはまだまだ議論が精緻化されていない。ここでは争点として、脅威下ではどのような潜在的偏見が生じるか、どのように影響を低減できるかを取り上げる。

#### どのような潜在的偏見が生じるか？

ここでは、外集団への偏見が自己高揚の手段としての機能を持ちうることを説明した。しかし、より具体的な現象のレベルとして、どのような集団に対するネガティブな評価が自己高揚の手段としてみなされるのか、どのような形態の潜在的偏見が生じるのかなどについては説明していない。

**対象集団に関する問題** 外集団へのネガティブな評価と一括りにしてきたが、外集団といっても社会にはさまざまな外集団が存在する。嫌悪的な態度が向けられやすい外集団もあれば、好意的な態度が向けられやすい外集団もあると考えられる。過去において頻繁に蔑視してきた外集団は、自己高揚とより結びつけられる可能性がある。自己価値への脅威による外集団のネガティブな概念の活性化の促進は、どのような外集団に対して見られる現象なのだろうか。

マイノリティ外集団のような、あからさまな蔑視を受けやすい集団に対する偏見が (e.g., 黒人、ゲイ男性、ユダヤ人女性)、自己価値への脅威下において強く生じることはよく示されてきた (Fein & Spencer, 1997; Sinclair & Kunda, 1999; Spencer *et al.*, 1998)。マイノリティ外集団は、歴史的に蔑視の対象であり、社会的に否定的な価値を付与される集団であった。マイノリティ集団は、脅威にさらされていない状況においても、潜在的態度として、ネガティブな評価が結びつけられやすい集団である (Jost, Pelha,, & Carvalho, 2002; Nosek, Banaji, & Greenwald, 2002; Rudman, Feinberg & Fairchild, 2002)。マイノリティはネガティブな評価を付与しやすい集団であるがゆえに、人々はマイノリティ集団を否定的に評価することを頻繁に行っていると考えられる。そして、マイノリティの価値を否定することによって、自己価値の高揚感を覚えることも多いと考えられる。そうした経験が繰り返されることによって、記憶表象において、自己高揚目標とマイノリティへの偏見が関連付けられるのだと考えられる。

ならば、マイノリティ集団以外の外集団に対する偏見は、自己価値への脅威状況において強まるのだろうか。たとえば、男性にとって女性という外集団は、マイノリティのように、あからさまな嫌悪的な態度を向けるような集団ではない。男女関係は数的には対等な集団関係である。また男性にとってむしろ好意的態度がもたれる外集団である。女性は男性にとって、異性愛の対象であり、伝統的性役割におけるパートナーであり、母性の象徴でもありうる。男性は女性に対して好意的な態度を持つ傾向が顕在的 (e.g., Eagly & Mladinic, 1989)、潜在的に見られる (Rudman & Goodwin, 2004)。顕在的態度については、自己価値への脅威と女性に対するネガティブな評価との関係が検討されている。Sinclair and Kunda (2000) は、女性に対する顕在的態度が、自己価値への脅威下においてネガティブと

なることを示している。男性参加者は、女性実験者から能力に関するネガティブ・フィードバックを受けた場合に、当該の女性実験者の評価能力を低く推定することを示している。一方で、男性実験者に対する評価能力の推定には影響は見られなかった。これは、女性から受けたネガティブ・フィードバックを、女性の評価能力を否定することによって無価値なものとしようとする防衛反応と考えられる。この研究においては、女性に対して評価能力が低いとするような、女性に対するネガティブな評価を扱っているが、これは女性に結びつけられている作動的能力が低いというステレオタイプを利用した評価と考えられる。このため、この研究では、女性のステレオタイプに関わる評価として、女性をよりネガティブに評価するという、顕在的なステレオタイプの偏見が脅威下で生じることを示したものと考えられる。この研究における自己高揚的な女性への偏見は、脅威を受けた領域（自己の能力）を、女性へのネガティブ評価によって直接的に守る反応であり、間接的な自己高揚ではない。そのため、この研究では女性に対する偏見を用いることが、全体的自己統合を肯定化することにつながるかはわからない。しかし、自己価値への脅威下において女性への評価が低まりうることを示唆するものであろう。

こうしたように、顕在的態度の傾向としては、自己価値への脅威にさらされていない場合には、男性は女性を否定的に評価しないが、脅威にさらされたときには、女性を否定的に評価するということが検討されているが、潜在的態度との関わりについて実証的に検討した研究はない。この点については本報告書 14 章、15 章において議論する。

**潜在的偏見のタイプに関する問題** ここまで自己価値への脅威下において、外集団への潜在的偏見が生じると大まかな説明をしてきた。ただし、潜在的偏見には一般的潜在的偏見と潜在的ステレオタイプの偏見という 2 つのタイプがあることが指摘されている (Wittenbrink, Judd, & Park, 1997, 2001)。それぞれの潜在的偏見は、外集団とネガティブな概念との結びつきという点では同じだが、ステレオタイプとの関連性において異なる。潜在的偏見はより一般的なネガティブ属性の結びつきであり (e.g., 悪い)、好ましいー好ましくないといった単純な評価的な意味合いを持つ。それに対して、潜在的ネガティブ・ステレオタイプ化は、結びつけられるネガティブ属性にステレオタイプの意味合いがあり (e.g., 黒人に“暴力的”を結びつける)、知識的な意味合いをより強く持つ。Wittenbrink *et al.* (1997) は、逐次プライミング課題において、外集団に関連するプライム刺激を呈示した場合には (i.e. 黒人)、ステレオタイプと関わるネガティブ属性への反応のほうが (i.e. 暴力、貧困)、関わらないネガティブ属性への反応よりも促進されることを示している (i.e. 嫌な、不穏な)。このことは、ステレオタイプと関わるネガティブ属性が、外集団にとって顕現的で目立ちやすく、外集団との接触によって容易に引き出されやすいネガティブ属性であることを示唆している。

自己価値への脅威において、いずれのタイプの潜在的態度が生じるのだろうか。Spencer *et al.* (1998) や Sinclair and Kunda (1999) は、外集団へのステレオタイプ化を問題として

いる。彼らは、自己価値の脅威下においては、外集団のステレオタイプが活性化し、その結果としてステレオタイプに沿った差別行動が生じると議論している。とくに、脅威下で活性化するステレオタイプは、ネガティブなステレオタイプであるとされている (Spencer *et al.*, 1998)。Spencer *et al.* (1998, study 3) は、単語完成課題において、ポジティブなステレオタイプ語と、ネガティブなステレオタイプ語のいずれの完成が多いかを検討し、自己価値への脅威下では、ポジティブなステレオタイプの完成は増加しないが、ネガティブなステレオタイプの完成は多くなることを示している。こうしたことから、自己価値への脅威は、外集団のネガティブ・ステレオタイプ活性化を促進させることが示唆される。一方で、一般的潜在的偏見に影響が生じるのかについては検討されていない。こうした潜在的偏見のタイプの議論については、13章、14章、15章において議論する。

#### 内外手段カテゴリの顕現性と脅威下における潜在的偏見

脅威下において偏見が増加するならば、どのようにその影響を低減することができるだろうか。先に述べたように、多くの研究は、脅威下における偏見の低減方略として、自己のリソースを増加させるアプローチを扱ってきた。しかし、そうしたアプローチは一定の制限を持つために (e.g., Critcher *et al.*, 2010)、代替の低減方略を検討することは意義がある。先行研究から、脅威下における偏見に関わる調整要因として、内外集団カテゴリの顕現性が考えられる (Florack *et al.*, 2005)。そこで、16章では、自己価値への脅威下における潜在的偏見の低減方略として、内外集団カテゴリの顕現性低減方略を取り上げ実証的検討を行った。

#### 引用文献

- Alicke, M. D., Vredenburg, D. S., Hiatt, M., Govorun, O. (2001). The "better than myself effect." *Motivation and Emotion*, **25**, 7-22.
- Bargh, J. A. (1997). The automaticity of everyday life. In R. S. Wyer, Jr. (Ed.), *The automaticity of everyday life: Advances in social cognition* (Vol. 10, pp. 1-61). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Bargh, J. A., & Chartrand, T. L. (1999). The unbearable automaticity of being. *American Psychologist*, **54**, 462-479.
- Bargh, J. A., & Gollwitzer, P. M. (1994). Environmental control of goal-directed action: Automatic and strategic contingencies between situations and behavior. In W. D. Spaulding (Ed.), *Integrative views of motivation, cognition, and emotion. Nebraska symposium on motivation* (Vol. 41) (pp. 71-124). Lincoln, NE: University of Nebraska Press.
- Bargh, J. A., Gollwitzer, P. M., Lee-Chai, A. Y., Barndollar, K., & Trötschel, R. (2001). The automated will: Nonconscious activation and pursuit of behavioral goals. *Journal of*



- Personality and Social Psychology*, **81**, 1014-1027.
- Bodenhausen, G. V., & Macrae, C. N. (1998). Stereotype activation and inhibition. In R. S. Wyer, Jr. (Ed.), *Stereotype activation and inhibition: Advances in social cognition* (Vol. 11, pp. 1-52). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Brickman, P., & Bulman, R. (1977). Pleasure and pain in social comparison. In J. M. Suls & R.L. Miller (Eds.), *Social comparison processes: Theoretical and empirical perspectives* ( pp. 149 - 186 ). Washington DC: Hemisphere.
- Brown, J. D. & Smart, S. A. (1991). The self and social conduct: Linking self-representations to prosocial behavior, *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 368-375.
- Campbell, W. K., & Sedikides, C. (1999). Self-threat magnifies the self-serving bias: A meta-analytic integration. *Review of General Psychology*, **3**, 23-43.
- Chartrand, T. L., & Bargh, J. A. (1996). Automatic activation of social information processing goals: Nonconscious priming reproduces effects of explicit conscious instructions. *Journal of Personality and Social Psychology*, **71**, 464-478.
- Chen, M., & Bargh, J. A. (1999). Consequences of automatic evaluation: Immediate behavioral predispositions to approach or avoid the stimulus. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **25**, 215-224.
- Crisp, R. J., Hewstone, M., & Cairns, E. (2001). Multiple identities in Northern Ireland: Hierarchical ordering in the representation of group membership. *British Journal of Social Psychology*, **40**, 501-514.
- Crisp, R. J., Hewstone, M., & Rubin, M. (2001). Does multiple categorization reduce intergroup bias? *Personality and Social Psychology Bulletin*, **27**, 76-89.
- Critcher, C. R., Dunning, D, & Armor, D. A. (2010). When self-affirmations reduce defensiveness: Timing is key. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **36**, 947-959.
- Crocker, J., Thompson, L.L., McGraw, K.M., & Ingerman, C. (1987). Downward comparison, prejudice, and evaluations of others: Effects of self-esteem and threat. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 907-916.
- Ditto, P. H., & Lopez, D. F. (1992). Motivated skepticism: Use of differential decision criteria for preferred and nonpreferred conclusions. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 568-584.
- Dunning, D., & Cohen, G. L. (1992). Egocentric definitions of traits and abilities in social judgment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 341-355.
- Eagly, A. H., & Mladinic, A. (1989). Gender stereotypes and attitudes toward women and men. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **15**, 543-558.

- Fein, S., Hoshino-Browne, E., Davies, P. G., & Spencer, S. J. (2003). Self-image maintenance goals and sociocultural norms in motivated social perception. In S. J. Spencer, S. Fein, M. Zanna, & J. M. Olson (Eds.), *Motivated social perception: The Ontario symposium* (Vol. 9), pp. 21-44. Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Fein, S. & Spencer, S. J. (1997). Prejudice as self-image maintenance: Affirming the self through negative evaluation of others. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 31-44.
- Festinger, L. (1954). A theory of social comparison processes. *Human Relations*, **7**, 117-140.
- 藤島喜嗣 (2001). セルフ・サービング・バイアス 山本真理子・外山みどり・池上知子・遠藤由美・北村英哉・宮本聡介 (編) 社会的認知ハンドブック (pp.198). 北大路書房
- Florack, A., Scarabis, M. & Gosejohann, S. (2005). The Effects of self-image threat on the judgment of out-group targets. *Swiss Journal of Psychology*, **64**, 87-101.
- Gaertner, S. L., Mann, J., Murrell, A., & Dovidio, J. F. (1989). Reducing intergroup bias: The benefits of recategorization. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 239-249.
- Gilbert, D. T., & Hixon, J. G. (1991). The trouble of thinking: Activation and application of stereotypic beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 509-517.
- Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (1995). Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, **102**, 4-27.
- Higgins, E. T., Rholes, W. S., & Jones, C. R. (1977). Category Accessibility and Impression Formation. *Journal of Experimental Social Psychology*, **13**, 141-154.
- Hogg, M. A., & Abrams, D. (1988). *Social identifications: A social psychology of intergroup relations and group processes*. London: Routledge.
- Jordan, C. H., Spencer, S. J., & Zanna, M. P. (2005). Types of high self-esteem and prejudice: How implicit self-esteem relates to racial discrimination among high explicit self-esteem individuals. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **31**, 693-702.
- Jordan, C. H., Spencer, S. J., Zanna, M. P., Hoshino-Browne, E., & Correll, J. (2003). Secure and defensive high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 969-978.
- Jost, J.T., Pelham, B.W., & Carvallo, M. (2002). Non-conscious forms of system justification: Cognitive, affective, and behavioral preferences for higher status groups. *Journal of Experimental Social Psychology*, **38**, 586-602.
- Katz, D. (1960). *The functional approach to the study of attitudes*. *Public Opinion Quarterly*, **24**, 163-204.
- Kruglanski, A. W., Shah, J. Y., Fishbach, A., Friedman, R., Chun, W. & Sleeth-Keppler, D.

- (2002). A theory of goal-systems. In Zanna, M. P. (Ed.), *Advances in experimental social psychology*, (Vol 34, pp. 331-378 ). New York: Academic Press.
- Leary, M. R. (2007). Motivational and emotional aspects of the self. *Annual Review of Psychology*, **58**, 317-344.
- Monteith, M. J. (1993). Self-regulation of prejudiced responses Implications for progress in prejudice reduction efforts. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 469-485.
- Moskowitz, G. B., Li, P., & Kirk, E. R. (2004). The implicit volition model: On the preconscious regulation of temporarily adopted goals. In M. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology* (Vol. 34, pp. 317-414). San Diego, CA: Academic Press.
- Nosek, B. A., Banaji, M. R., & Greenwald, A. G. (2002). Harvesting implicit group attitudes and beliefs from a demonstration website. *Group Dynamics*, **6**, 101-115.
- Pelham, B. W., Mirenberg, M. C., & Jones, J. K. (2002). Why Susie sells seashells by the seashore: Implicit egotism and major life decisions. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 469-487.
- Plant, E. A., & Devine, P. G. (1998). Internal and external sources of motivation to respond without prejudice. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 811- 832.
- Rudman, L. A., Feinberg, J. M., & Fairchild, K. (2002). Minority members' implicit attitudes: Automatic ingroup bias as a function of group status. *Social Cognition*, **20**, 294-320.
- Rudman, L. A. & Goodwin, S. A. (2004). Gender differences in automatic ingroup bias: Why do women like women more than men like men? *Journal of Personality and Social Psychology*, **87**, 494-509.
- Sherman, D. K., & Cohen, G. L. (2006). The psychology of self-defense: Self-affirmation theory. In M. P. Zanna (Ed.) *Advances in experimental social psychology* (Vol. 38, pp. 183-242). San Diego, CA: Academic Press.
- Sinclair, L., & Kunda, Z. (1999). Reaction to a black professional: Motivated inhibition and activation of conflicting stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **77**, 885-904.
- Sinclair, L., & Kunda, Z. (2000). Motivated stereotyping of women: She's fine if she praised me but incompetent if she criticized me. *Personality & Social Psychology Bulletin*, **26**, 1329-1342.
- Spencer, S. J., Fein, S., Straham, E., & Zanna, M. P. (2004). The Role of Motivation in the Unconscious: How Our Motives Control the Activation of Our Thoughts and Shape Our Actions. In Joseph P.Fogas, Kipling D.Williams, Simon M. Laham(Eds.) *Social motivation: Conscious and unconscious process* (pp. 113-129). Cambridge University

Press.

- Spencer, S. J., Fein, S., Wolf, C., Fong, C., & Dunn, M. (1998). Stereotype activation under cognitive load: The moderating role of self-image threat. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **24**, 1139-1152.
- Steele, C. M. (1988). The psychology of self-affirmation: Sustaining the integrity of the self. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 21, pp. 261-302). San Diego, CA: Academic Press.
- Steele, C. M., Spencer, S. J., & Lynch, M. (1993). Self-image resilience and dissonance: The role of affirmational resources. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 885-896.
- Tajfel, H. & Turner, J. C. (1979). An Integrative Theory of Intergroup Conflict. In W. G. Austin & S. Worchel (Eds.), *The Social Psychology of Intergroup Relations*, (pp. 33-47). Monterey, CA: Brooks-Cole .
- Taylor, S. E., & Brown, J. (1988). Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, **103**, 193-210.
- Taylor, S. E., & Brown, J.D. (1994). Positive illusions and well-being revisited: Separating fact from fiction. *Psychological Bulletin*, **116**, 21-27.
- Taylor, S. E., Lerner, J. S., Sherman, D. K., Sage, R. M., & McDowell, N. K. (2003a). Portrait of the self-enhancer: Well-adjusted and well-liked or maladjusted and friendless? *Journal of Personality and Social Psychology*, **84**, 165-176.
- Taylor, S. E., Lerner, J.S., Sherman, D.K., Sage, R.M., & McDowell, N.K. (2003b). Are self-enhancing cognitions associated with healthy or unhealthy biological profiles? *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 605-615.
- Taylor, S. E. & Lobel, M. (1989). Social comparison activity under threat: Downward evaluation and upward contacts. *Psychological Review*, **96**, 569-575.
- Wills, T. A. (1981). Downward comparison principles in social psychology. *Psychological Bulletin*, **90**, 245-271.
- Wills, T. A. (1991). Similarity and self-esteem in downward comparison. In Sulus, J. And Wills, T. A. (Eds.), *Social Comparison: Contemporary Theory and Research*, (pp. 51-78). Lawrence Erlbaum Associates, Hillsdale, NJ.
- Wittenbrink, B., Judd, C. M., & Park, B. (1997). Evidence for racial prejudice at the implicit level and its relationship with questionnaire measures. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 262-274.
- Wittenbrink, B., Judd, C.M., & Park, B. (2001). Evaluative versus conceptual judgments in automatic stereotyping and prejudice. *Journal of Experimental Social Psychology*, **37**, 244-252.

- Wood, J. V., Giordano-Beech, M., & Ducharme, M. J. (1999). Compensating for failure through social comparison. *Personality and Social Psychology Bulletin* , **25**, 1370-1386.
- Wood, J. V., & Taylor, K. L. (1991). Serving self relevant goals through social comparison. In J. M. Suls & T. A. Wills (Eds.), *Social comparison: Contemporary theory and research* (pp. 23-49). Hillsdale, NJ: Erlbaum.

## 14章 ジェンダー態度 IAT におけるステレオタイプの刺激項目の影響<sup>1</sup>

石井 国雄 沼崎 誠

(首都大学東京大学院人文科学研究科)

Implicit Association Test (IAT) はその登場から (Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998)、社会的認知研究において非常に強い注目を集めてきた。IAT が測定するのは潜在的認知であり (Greenwald & Banaji, 1995)、参加者の意図や意識によって影響の受けにくい認知的反応を測定できるとされている。IAT は態度・自尊心・ステレオタイプ化など多くの概念に応用され、その信頼性と妥当性は多くの研究に確証されている (最近のレビューとして Nosek, Greenwald, & Banaji, 2007)。その一方で、多くの研究により IAT における反応がさまざまな要因によって影響されることも明らかになっている (レビューとして Lane, Banaji, Nosek, & Greenwald, 2007)。本研究では IAT を取り巻くひとつの議論となっている (De Houwer, 2001; Bluemskne & Friese, 2006; Govan & Williams, 2004)、IAT 効果に刺激項目の影響はあるのかという問題を、ジェンダー態度と関連づけて検討した。

IAT IAT は態度対象 (例: 男性・女性) と属性 (例: ポジティブ・ネガティブ) との連合強度を測定するための測度である。課題では画面上に 4 つのカテゴリ (男性、女性、ポジティブ、ネガティブ) のイグゼンプラがひとつずつ提示され、参加者は 2 つのキー (例: "F"、"J") を用いて判断する。4 つのカテゴリは 2 つのキーに 2 カテゴリずつ割り当てられており、その割り当て方には 2 通りある。たとえばジェンダー態度 IAT では、(a) 男性とポジティブを "F" キー、女性とネガティブを "J" キーで判断するブロックと、(b) 女性とポジティブを "F" キー、男性とネガティブを "J" キーで判断するブロックがある。その 2 つのブロックの平均反応潜時の差がその人のもつ連合の強さを示す IAT 得点となる。もし参加者の反応が、女性とポジティブが同一のキーのブロックにおいて速かったならば、その人は女性の概念とポジティブな属性とを心的に結び付けていることになり、逆に女性とネガティブが同一キーの場合に反応が速かった場合は、女性概念とネガティブな属性を結び付けていることになる。

**刺激項目による IAT 効果への影響** IAT においてもっとも重要とされるのは判断を求める 4 つのカテゴリ・ラベルの組み合わせである。同じキーに割り当てられた 2 つのカテゴリの間に強い連合がある場合には判断は容易となる。これは記憶における結びつきがあることにより、判断をする際に干渉が生じないためと考えられる。逆に 2 つのカテゴリの間に連合がなかったり、2 つのカテゴリが意味的に反している場合には、判断時に干渉が生

---

<sup>1</sup>本研究は平成 18 年度に東京都立大学大学院人文科学研究科に提出された修士論文の一部を加筆修正したものである。社会心理学研究第 25 号 (Pp.53-60) に掲載された。成果の一部は日本心理学会第 71 回大会において発表した。

じ反応時間が遅くなる。従来の視点ではこうしたカテゴリ・ラベルの組み合わせが注目されてきた。

それに対して、カテゴリ・ラベル以外の要因が、IAT 効果に影響するかについては一貫した答えが得られていない。たとえば刺激項目による影響については研究間で一致していない。De Houwer (2001) は IAT 効果には刺激項目による影響はなく、カテゴリ・ラベルのみが効果を規定するとしている。彼は 1 つの態度 IAT において複数のタイプの刺激項目を提示し、刺激項目ごとに反応が異なるかを検討した。この研究における IAT は態度対象の判断として「英国」と「外国」の 2 カテゴリを用いたが、提示される刺激項目はこれらの 2 カテゴリにベイレンスを組み合わせた 4 カテゴリだった（たとえばポジティブな英国関連語、ネガティブな英国関連語）。刺激項目の性質による判断への影響があるならば、それぞれの刺激項目ごとに反応時間が異なると考えられるが、同一のブロックにおいてそれら 4 カテゴリによる反応時間の違いは見られなかった。このことから彼は 1 つの IAT の課題の中で異なる刺激項目を用いても、それらの刺激項目に応じた反応の違いは生じないとしている。

一方で刺激項目による影響を示す研究もある (Bluemske & Friese, 2006; Govan & Williams, 2004)。例えば、Bluemske & Friese (2006) は、西ドイツ人の潜在的態度を測定する際、判断するカテゴリは同じだが (対象 (West, East) と属性 (ポジティブ、ネガティブ))、使用される刺激項目の異なる複数の IAT を用いた。その中のひとつの IAT は、ポジティブ語として東ドイツ関連ポジティブ語 (e.g. 寛容)、ネガティブ語として西ドイツ関連ネガティブ語 (e.g. 自己満足) を用い、もうひとつの IAT ではポジティブ語として西ドイツ関連ポジティブ語 (e.g. 個人主義) ネガティブ語として東ドイツ関連ネガティブ語 (e.g. 依存) を用いた。このような IAT のタイプの要因は IAT 効果に影響を与えていた。全体的に効果として West とポジティブを結び付ける態度の内集団バイアス傾向が見られたが、その効果は IAT のタイプによって調整され、前者の IAT よりも後者の IAT において内集団バイアスは強く見られていた。

この内集団バイアス効果の違いは刺激項目のステレオタイプ性による影響と考えられる。前者の IAT ではポジティブ語として東ドイツ関連語、ネガティブ語として西ドイツ関連語が提示された。そのため West とポジティブ語を同一キーで判断するブロックは、刺激項目の組み合わせという点でみると、West と東ドイツ関連語が提示されるステレオタイプ一致の組み合わせとなっていた。対して後者の IAT では、West とポジティブ語を同一キーで判断するブロックのときに、ステレオタイプ不一致の組み合わせとなっていた。こうした刺激項目のステレオタイプ一致不一致という組み合わせが判断に影響を及ぼしたと考えられる。つまり刺激項目の組み合わせがステレオタイプ一致の場合に反応が促進され、対して不一致の場合には抑制されたのである。その結果として IAT タイプによる差が生じたと考えられる。こうした結果は、IAT 効果がカテゴリ・ラベルの組み合わせによってつ

くられた連合とは別に、刺激項目の組み合わせがステレオタイプ一致か不一致であるかによっても影響されうることを示している。

本研究では Bluemske & Friese (2006) の手法を使い、刺激項目のステレオタイプ性が異なる複数の IAT を用いて、カテゴリ・ラベルと刺激項目による両方の影響が IAT 効果に反映されるかを、これまで検討されていない男女参加者の潜在的ジェンダー態度に適用して検討した。

**ジェンダーに関する態度・ステレオタイプ** 本研究ではカテゴリ・ラベルと刺激項目のそれぞれに反映させる潜在的連合として、ジェンダーに関する態度とジェンダー・ステレオタイプを用いた。

まず、ジェンダーに関する潜在的態度としては、ジェンダー態度の内集団バイアスの性差が指摘されている (Rudman & Goodwin, 2004)。潜在的態度のあらわれ方はさまざまな集団において違いが見られることが指摘されている (Jost, Pelham, & Carvallo, 2002; Rudman, Feinberg, & Fairchild, 2002)。少なくとも欧米で行われている研究においては、ジェンダーに関しては内集団バイアスのあらわれ方に性差があり、女性が自分の性別と好ましい属性を結び付けやすいのに対して、男性はそのような傾向はほとんど見られず、逆に自分の性別とネガティブな属性を結び付けることもある (Rudman & Goodwin, 2004)。Rudman & Goodwin (2004) は、こうしたジェンダーに関する態度の性差について、発達段階における主たる養育者となることが多い母親との関係性が、母性への好意を生じさせ、それが女性への好意につながることを実証的に示している。欧米においてジェンダー態度の性差の原因とされるこうした要因は、日本においても同様に存在すると考えられる。たとえば、現在の日本においては育児に関わる時間は女性のほうが長く (総務省統計局, 2008)、子供と主に関わる養育者は母親であることが多いため、こうした主たる養育者としての母親への好意が生じている可能性がある。こうしたように、日本においても欧米同様にジェンダー態度の性差があらわれることは十分に考えられる。本研究はもうひとつの目的とし、欧米で見られるこのような傾向が日本においても見られるかについても検討した。

そしてこのような態度のあらわれ方は、日本でもジェンダー・ステレオタイプが存在していることにより (伊藤, 1978)、刺激項目がジェンダー・ステレオタイプ的であることによって変わる可能性がある。ジェンダーに関するステレオタイプとして、男性は高い作動性 (e.g. 有能さ) をもつが共同性 (e.g. あたたかさ) が低く、逆に女性は高い共同性をもつが作動性が低いという伝統的ステレオタイプがあるとされている。このような作動性・共同性に関するジェンダー・ステレオタイプは顕在的だけでなく、潜在的にももたれていることが示されている (沼崎・高林・小野・石井, 2006; Rudman, Greenwald, & McGhee, 2001)。本研究ではジェンダー態度 IAT において刺激項目のステレオタイプ性の影響を検討するために複数のジェンダー態度 IAT による検討を行った。本研究で用いたのは 3 タイプのジェンダー態度 IAT だった。3 つの IAT は判断に用いるカテゴリ・ラベルは同一 (男



性、女性、ポジティブ、ネガティブ) であるが、好ましき関連判断のために提示される刺激項目が異なっていた。ひとつの IAT は従来のジェンダー態度 IAT であり、ジェンダー・ステレオタイプとは関連のないポジティブ・ネガティブ刺激項目が提示された (研究 1)。残り 2 つの IAT はステレオタイプのなポジティブ・ネガティブ刺激項目が提示されるものであった (研究 2)。2 つのうち的一方は、ポジティブ語として作動性ポジティブ語、ネガティブ語として共同性ネガティブ語を用いるもので、内集団ポジティブ・ブロックが、男性においては刺激項目の点でステレオタイプ一致ブロックとなり、女性においては不一致ブロックとなるものであった。この IAT は男性概念と男性に関わるポジティブ属性を結び付けやすい課題と考えられるため、向男性的 IAT とした。2 つのうちもう一方は、ポジティブ語として共同性ポジティブ語、ネガティブ語として作動性ネガティブ語を用いるもので、内集団ポジティブ・ブロックが、男性においては刺激項目の点でステレオタイプ不一致ブロックとなり、女性においては一致ブロックとなるものであった。この IAT は女性概念と女性に関連するポジティブ属性を結び付けやすい課題と考えられるため、向女性的 IAT とした。

このような 3 つの IAT を用いた場合、ジェンダー態度の性差と刺激項目のステレオタイプ性による効果が生じることが予測される。まずジェンダー態度の効果として、カテゴリ・ラベルが自分の性別とポジティブ語が同一キーの場合に、自分の性別がネガティブ語と同一の場合よりも促進されるという内集団バイアスが生じると考えられるが、この内集団バイアスは、男性よりも女性において強く生じるだろう。そして、刺激項目のステレオタイプ性による効果として、刺激項目の点でステレオタイプ一致となるブロック (男性と作動性、女性と共同性が同じキー) には、逆に不一致となるブロック (男性と共同性、女性と作動性が同じキー) より反応が速くなることが予測される。これらの予測をそれぞれの IAT と対応させて考えると、まずステレオタイプのな刺激項目を用いない従来の IAT では、内集団バイアスと内集団バイアスの性差のみがあらわれることが予測される (研究 1)。それに対して、ステレオタイプのな刺激項目を用いた IAT では、上記効果に加えて、ステレオタイプ性による効果があらわれることが予測される (研究 2)。つまり自分の性別とポジティブな属性を結びつける傾向は、自分の性別とポジティブな属性を同一のキーで判断するブロックがステレオタイプ一致ブロックとなる IAT のほうが (男性でいえば向男性的 IAT、女性でいえば向女性的 IAT)、不一致となる IAT (男性でいえば向女性的 IAT、女性でいえば向男性的 IAT) よりも強くなるだろう。

## 研究 1

研究 1 では従来のジェンダー態度 IAT を男女参加者に実施して、ジェンダーに関する潜在的態度においても内集団バイアスが見られるか、また、内集団バイアスの性差があらわれるかを検討した。自分の性別とポジティブな語が同一キーでの判断となる試行で反応が

速くなった場合、潜在的態度の内集団バイアスが現れたことになる。

## 方 法

**実験参加者** 平成 19 年度首都大学東京のオープンキャンパスにおいて開催した心理学実験室オープンラボに参加し、参加および参加承諾が得られた受験生世代（高校生および浪人生）の 61 名（男性 19 名、女性 42 名）<sup>2</sup>。

**装置** 実験に使用した装置は、TOSHIBA 製のノートパソコン dynabook AX/650LS であり、実験手続きに関する制御には Inquisit を用いた。

**刺激項目** IAT において、男性名、女性名、ポジティブ語、ネガティブ語という 4 タイプの文字刺激項目を使用した。文字のフォントは 50 ピクセルの白字で、背景が黒の画面の中心に提示された。男性名には、本試行用の項目として、たかし、あつし、ひろき、こうた、まさお、の 5 語、練習用の項目として、けんた、を用いた。女性名には、本試行用の項目として、ようこ、はるか、あゆみ、さちこ、ゆうこ、の 5 語、練習用の項目に、さとこ、を用いた。ポジティブ語とネガティブ語については、事前に大学生または大学院生 13 名（男性 3 名、女性 10 名）に対する単語の一般的な好ましさについて調査を行い、その結果に基づいて選定をおこなった。調査では、いくつかの語について好ましさを 7 件法（1：非常に好ましくない－7：非常に好ましい）で回答させた。好ましきの極に近かった、輝かしい、元気、笑い、見事な、平和、の 5 語をポジティブ語（ $M=5.90$ ）、好ましくなさの極に近かった、痛ましい、ひどい、恐ろしい、苦悩、失敗、の 5 語をネガティブ語（ $M=2.33$ ）として使用した<sup>3</sup>。

**IAT** IAT は画面上に提示された単語が指定されたカテゴリのうちどれに含まれるかを判断し、対応するキー（「J」、「F」キー）を押し回答する課題であった。正解の場合にはそのまま課題が続き、不正解の場合は画面に“×”が表示された後、課題が続行された。キー押しをすると、800ms の試行間隔をおいて次の試行となった。ブロックは 7 つのブロックに分かれ、①好ましき練習ブロック、②性別判断ブロック a、③男性ポジティブ・ブロック a-1、④男性ポジティブ・ブロック a-2、⑤性別判断ブロック b、⑥女性ポジティブ・ブロック b-1、⑦女性ポジティブ・ブロック b-2 であった。②～④と⑤～⑦のそれぞれ 3 ブロックのいずれを先に行うかについては、参加者間でカウンター・バランスをとった。

それぞれのブロックで行われた課題は以下のとおりであった。①好ましき練習ブロックではポジティブ語、ネガティブ語が提示され、参加者はポジティブ語であった場合は「F」キー、ネガティブ語であった場合は「J」キーを押すことで判断した。②性別判断ブロック a では、男性名と女性名が提示され、男性名だった場合に「F」キー、女性名だった場合に「J」キーを押すことで判断した。このブロックの開始時には練習試行として男性名が提示

<sup>2</sup>親の世代にも希望者には実施したが、人数が少なかったため本研究では報告しない。

<sup>3</sup>予備調査においては、ポジティブ語とネガティブ語のそれぞれにおいて、好ましき評定に有意な性差は見られなかった。

される試行が挿入された。③男性ポジティブ・ブロック a-1 では 4 カテゴリの項目が提示された。参加者は、ポジティブ語または男性名であった場合は「F」キー、ネガティブ語または女性名だった場合は「J」キーを押すことで判断した。④男性ポジティブ・ブロック a-2 では、③と同様の課題を行った。ただし 1 試行目には練習用の項目が提示される 1 試行が挿入された。このブロックでは、練習用の項目以外の刺激項目は 2 回ずつ呈示されたため、トータルで 41 試行が行われた。⑤性別判断ブロック b では、②と同様の課題がキーの位置は入れ替えて行われた。参加者は女性名だった場合は「F」キー、男性名だった場合は「J」キーを押すことで判断した。また練習刺激として女性名が提示された。⑥女性ポジティブ・ブロック b-1 では、③ブロックと同様の課題をキーの位置は入れ替えて行った。ポジティブ語または女性名であった場合は「F」キー、ネガティブ語または男性名だった場合は「J」キーを押すことで判断した。⑦女性ポジティブ・ブロック b-2 は、⑥と同様の課題を行った。刺激項目はすべてのブロックにおいてランダムな順序で呈示された。

**手続き** 会場にはパーティションで区切られたブースが作られ、ブース内で最大で 8 人が同時に課題を行うことが出来るように座席が設置されていた。実験参加に希望する人はノート PC の置かれている席に座り、実験に関する説明を受けた。参加者は説明を聞いた後に実験参加承諾書に署名をした。参加者は署名を行った後 IAT を行った。実験内容に関する教示はすべて画面に表示され、参加者はその表示を見て課題を行った。実験終了後、参加者は別室でデブリーフィングを受け、データの使用承諾に関する依頼を受けた。

### 結果と考察

従属変数として、IAT のブロック間の反応の差を示す値である  $D$  値を用いた (Greenwald, Nosek, & Banaji, 2003)。 $D$  値の算出は、Greenwald *et al.* (2003) に従い、次の手順で行った。まず、③と⑥ブロックの平均反応時間の差の値と、④と⑦ブロックの平均反応時間の差の値を算出した。次に、それら 2 つの差の値を平均した。そして、その平均値を、③・④・⑥・⑦の 4 つのブロックをプールした標準偏差で割り、算出された値を  $D$  とした。ただし本研究では潜在的態度の内集団バイアスに関心があるため、算出の仕方を男女ごと変えた。男性の場合は女性ポジティブ・ブロック (⑥、⑦ブロック) から男性ポジティブ・ブロック (③、④ブロック) の反応時間を引き、逆に女性は男性ポジティブ・ブロックから女性ポジティブ・ブロックを引いた。これらの手順によって算出された  $D$  値をジェンダーに関する態度の内集団バイアスを示す値とした。

まず男女を分けずに  $D$  値を見てみると、 $D$  値は正の値を有意に示しており ( $M = .54$ ,  $t(60) = 7.31$ ,  $p < .001$ )<sup>4)</sup>、男女を込みにしてみると自分の性とポジティブ語が同一のキーのときに反応が速いというパターンが見られた。しかし、重要なことにこの効果は参加者の性別によって差が見られた ( $t(59) = 32.52$ ,  $p < .001$ )。この反応パターンについて Figure 1

---

<sup>4)</sup>内集団バイアスの効果を見るために、 $D$  値に対して 0 からの  $t$  検定を行った。

に示した（ただし Figure 1 では  $D$  値ではなく、本試行における反応時間を記載した）。女性においては大きな内集団バイアスが見られたのに対して ( $M = .77, t(41) = 12.43, p < .001$ )、男性においては内集団バイアスを示す結果は得られなかった ( $M = .03, t(18) = .24, ns$ )。これは女性が自分の性別とポジティブな属性と結び付けやすいが、男性は自分の性別とポジティブな属性を結び付けにくいということを示している。このようにステレオタイプの刺激を用いない IAT では、内集団バイアスは女性に強く見られることが示された。潜在的態度の内集団バイアス傾向の性差は欧米の先行研究の知見を再現したパターンであり、これは養育者である母親への好意が女性への好意を生じさせ、そのことにより男性における外集団好意が生じたためと考えられる。

## 研究 2

研究 2 では好ましさ判断に用いる刺激項目が異なる 2 つの IAT（向男性的 IAT、向女性的 IAT）を用い、ジェンダー態度 IAT の効果が刺激項目のステレオタイプ性によって影響を受けるかを検討した。これら 2 つのジェンダー態度 IAT においては、研究 1 と同様に内集団バイアスに性差があらわれることが予測されるが、もし IAT への反応が刺激項目の要因によって影響を受けるならば、ステレオタイプ一致ブロックの場合に、不一致ブロックに比べ、反応が速くなることも予測される。つまり内集団ポジティブ・ブロックとステレオタイプ一致ブロックが重なる IAT においては内集団バイアスがより強まり、逆に不一致ブロックと重なる IAT では内集団バイアスが弱まるだろう。

## 方 法

**実験参加者** 平成 18 年度首都大学東京のオープンキャンパスにおいて開催した心理学実験室オープンラボに参加し、参加およびデータ使用承諾の得られた受験生世代の 100 名（男性 38 名、女性 62 名）を分析対象とした。参加者は向男性的 IAT と向女性的 IAT いずれかの条件にランダムに割り当てられた。

**IAT** IAT には 2 タイプあり（向男性的 IAT、向女性的 IAT）、用いられる刺激項目がそれぞれ異なっていた。向男性的 IAT では、ポジティブ語として作動性ポジティブ語、ネガティブ語として共同性ネガティブ語が用いられた。向女性的 IAT では、ポジティブ語として共同性ポジティブ語、ネガティブ語として作動性ネガティブ語が用いられた。

**刺激項目** IAT においては、男性名、女性名、作動性ポジティブ語、作動性ネガティブ語、共同性ポジティブ語、共同性ネガティブ語の 6 タイプの文字刺激が用いられた。男性名、女性名は研究 1 と同じであった。作動性・共同性関連語は沼崎・高林・小野・石井 (2006) で用いられた語を使用した。作動性・共同性関連語については、研究 1 の予備調査と同時に行った一般的な好ましさについての調査によって、ポジティブ語は好ましさの極に近いこと、ネガティブ語は好ましくなさの極に近いことを確認した。作動性関連語のうち、好ましさの極に近かった有能、決断力のある、自信のある、指導力のある、勇敢な、の 5 語

を作動性ポジティブ語 ( $M=5.60$ ) とし、好ましくなさの極に近かった、ごうまん、強引、威圧的、頑固な、高圧的、の 5 語を作動性ネガティブ語 ( $M=2.30$ ) とした。共同性関連語のうち、好ましさを極に近かった、優しい、面倒見のよい、献身的、温かい、親しみやすいの 5 語を共同性ポジティブ語 ( $M=5.94$ )、好ましさを極に近かった、うるさい、うわさ好き、でしゃばり、おせっかい、おしゃべりの 5 語を共同性ネガティブ語 ( $M=2.70$ ) とした<sup>5</sup>。

**手続き** 実施する IAT を変更した以外、実験 1 と同様であった。

### 結果と考察

研究 1 と同様に算出された  $D$  値を内集団バイアスの指標とした。

まず男女を分けずに  $D$  値を見てみると、 $D$  値は正の値を有意に示しており ( $M = .28$ ,  $t(99) = 4.39$ ,  $p < .001$ )、男女を込みにしてみると自分の性とポジティブ語が同一のキーのときに反応が速いというパターンがみられていた。このパターンに性別・IAT タイプによる違いが見られるかを検討するために、 $D$  値を従属変数とした  $2 \times 2$  (参加者性別 (男性 vs. 女性)  $\times$  IAT タイプ (向男性的 IAT vs. 向女性的 IAT)) の分散分析を行った。まず、性別の主効果が有意であり ( $F(1, 96) = 8.42$ ,  $p < .01$ )、2 つの IAT タイプを平均した効果として、女性においては内集団バイアスが見られたのに対して ( $M = .40$ ,  $t(60) = 5.13$ ,  $p < .001$ )、男性においては内集団バイアスを示す結果は得られなかった ( $M = .09$ ,  $t(38) = .85$ , ns)。この結果は、研究 1 と同様に潜在的態度の内集団バイアスに性差があることを示している。

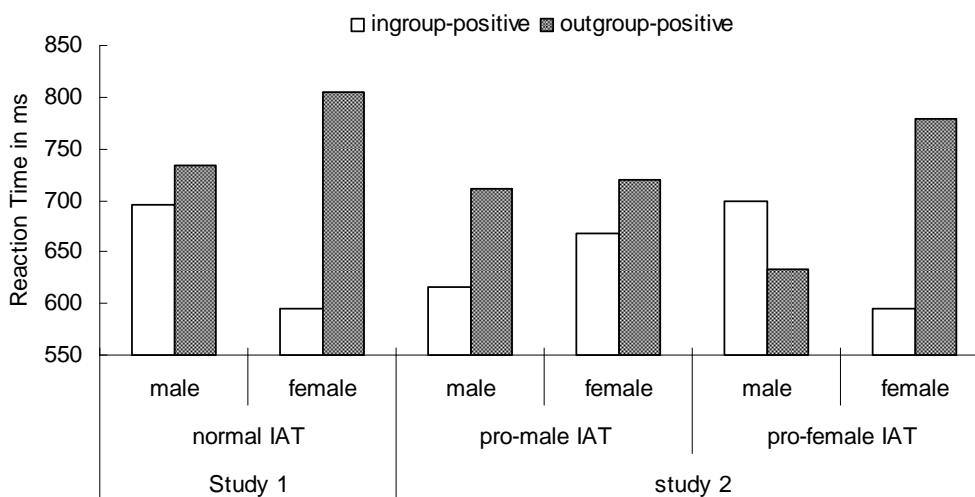


Figure 1. Mean Reaction Time of Study 1 (left side) and Study 2 (right side) as a function of blocks and participant sex.

<sup>5</sup>予備調査においては、作動性ポジティブ語・作動性ネガティブ語・共同性ポジティブ語・共同性ネガティブ語のいずれにおいても、好ましさを有意に示す性差は見られなかった。

しかしこの効果は、性別×IAT タイプの交互作用効果が有意であることによって制限を受けた ( $F(1, 96) = 34.11, p < .001$ )。この効果を詳しく検討するため、性別・IAT タイプ・試行ごとに分けた反応時間を Figure 1 に示し、また、男女ごとに IAT タイプの差をみるための独立したサンプルの  $t$  検定をおこなった。女性においては IAT タイプの間に有意な差が見られ ( $t(59) = -3.86, p < .001$ )、向男性的 IAT では内集団バイアスを示す結果が得られないのに対して ( $M = .15, t(32) = 1.43, ns$ )、向女性的 IAT では内集団バイアスが見られた ( $M = .70, t(27) = 7.71, p < .001$ )。これは女性が、女性概念と作動的なポジティブな属性の結びつきを見る IAT では、女性概念とポジティブな属性を結び付けないが、女性概念と共同的なポジティブな属性との結びつきをみる IAT においては、女性概念とポジティブな属性を結びつけたことを示している。一方、男性でも IAT タイプの差が見られ ( $t(37) = 4.52, p < .001$ )、向男性的 IAT では男性概念をポジティブ属性と結びつける内集団バイアスが見られたのに対し ( $M = .48, t(17) = 4.06, p < .01$ )、向女性的 IAT では内集団とネガティブ属性を結びつけるような傾向が見られた ( $M = -.26, t(20) = -2.29, p < .05$ )。これは男性が、男性概念と作動的なポジティブ属性との結びつきを見る IAT では態度の内集団バイアスを見せるが、共同性ポジティブ属性との結びつきを見る IAT では外集団に対してポジティブ属性を結びつけたことを示している。男女におけるこれらのパターンは、刺激項目の組み合わせがステレオタイプ一致の場合に不一致の場合より反応が速くなり、内集団バイアスを調整するという予測と一致するパターンであった。

### 総合考察

本研究は複数の種類のジェンダー態度 IAT を用い、刺激項目のステレオタイプ性によって態度に関する IAT 効果が影響を受けるかを検討した。まずジェンダー態度の内集団バイアスには性差が確認され、女性のほうが内集団バイアスが強いという欧米での傾向が、日本においても見られるということが示された。そして重要なことに、この内集団バイアスは刺激項目のステレオタイプ性によって調整された。研究 2 における 2 つの IAT では一貫して、刺激項目の組み合わせが女性と共同性・男性と作動性の場合(ステレオタイプ一致)、逆の組み合わせ(ステレオタイプ不一致)よりも反応が速くなっていた。このような傾向はどちらの性別においても見られていた<sup>6</sup>。これは IAT 効果には判断に用いるカテゴリ・ラベルによる効果のみではなく、刺激項目の性質による効果を反映するという先行研究

---

<sup>6</sup>研究 2 の IAT 効果は、ステレオタイプ一致ブロック・不一致ブロックという刺激項目の組み合わせによっても算出することができる。この方法で算出された IAT 効果は刺激項目のステレオタイプ性によって影響された効果を直接的に反映する値となる。この IAT 効果 ( $D$  値) について 2 (性別) × 2 (タイプ) の分散分析を行うと、タイプの主効果 ( $F(1, 96) = 15.86, p < .001$ ) と交互作用効果 ( $F(1, 96) = 23.80, p < .001$ ) が有意となる。しかしこれらの効果より重要なことは性別の主効果が見られないことであり ( $F < 1$ )、男性 ( $M = .37$ ) も女性 ( $M = .27$ ) も刺激項目のステレオタイプ性によって同程度に影響を受けていたことがこの分析によってわかる。

(Govan & Williams, 2004; Bluemske & Friese, 2006) の主張を支持するものであった。

IAT 効果がステレオタイプの刺激項目によって影響を受けたことは研究 1 と 2 の結果を比較するとよりはっきりとわかる。男性のジェンダー態度に関しては、通常の IAT (研究 1) では内集団をポジティブ属性と結びつける傾向は見られないが ( $M = .03$ )、ポジティブ語として作動性関連語が提示された向男性的 IAT では男性概念とポジティブ属性を結びつける傾向が強まり ( $M = .48$ )、逆にポジティブ語として共同性関連語が提示された向女性的 IAT においては弱まった ( $M = -.26$ )。このように男性においては内集団ひいき傾向が、刺激項目のステレオタイプ性の組み合わせに応じて変わっていたことがわかる<sup>7</sup>。女性の結果においては通常の IAT (研究 1:  $M = .77$ ) のほうが向女性的 IAT より  $D$  値が大きいものの ( $M = .70$ ; ただしこの 2 タイプに有意差はなかった ( $t(68) = .71, ns$ ))、向男性的 IAT の  $D$  値はこれら 2 つの IAT よりも低かったため ( $M = .15$ )、同様に刺激項目のステレオタイプ性による影響があったことが示唆される。このように本研究の結果は IAT が、刺激項目のステレオタイプ性によって影響を受けることを明確に示したといえるだろう。

しかし一方で、このような結果は刺激項目による影響がないとする De Houwer (2001) の主張と反するものである。どうしてこのような結果の違いが現れたのだろうか。結果の違いが現れた原因として、De Houwer (2001) の実験においては 1 つの IAT の中で刺激項目の性質を操作していたことが考えられる。Govan & Williams (2004) は刺激項目の性質によってカテゴリ・ラベルの再定義が生じるとしている。つまり何らかの一貫した性質を持った刺激項目が呈示され続けることによって、カテゴリの概念が最初のもので変わってしまうかもしれないということである。この考えから今回の結果を説明すると、たとえば男性のジェンダー態度に関しては、通常は内集団をポジティブ概念と結びつける傾向は見られないが (研究 1)、ステレオタイプに関連した刺激項目が呈示され続けると (研究 2)、カテゴリ・ラベルの定義がステレオタイプのとなり、結果として反応がステレオタイプによる影響を受けたといえる。この点から考えると、De Houwer (2001) で刺激項目による影響が現れなかったのは、ひとつの IAT におけるひとつのカテゴリ (e.g. 英国) に、二つの方向性 (e.g. 英国関連ポジティブ、英国関連ネガティブ) が混在していたことで、カテゴリ・

---

<sup>7</sup> 単語にステレオタイプの意味合いが加わることによって、一般的な望ましさと各性別にとっての望ましさが変化してしまったことにより、このような結果が得られた可能性も考えられよう。つまり、作動性ネガティブ属性として設定した属性が男性にとってはポジティブに捉えられ、共同性ポジティブ属性として設定した属性が男性にとってはネガティブに捉えられたため、男性において内集団ひいきとは逆の結果が得られた可能性である。しかし今回の IAT 課題における誤答数に対して 2 (性別) × 2 (IAT タイプ) の ANOVA を行い、性別と IAT タイプによって誤答数が変わっているかを検討したところ、交互作用効果は見られなかった ( $F(1, 96) = 1.83, ns$ ; 男性群-向男性的 IAT:  $M=7.67$ ; 男性群-向女性的 IAT:  $M=6.52$ ; 女性群-向男性的 IAT:  $M=5.39$ ; 女性群-向女性的 IAT:  $M=6.96$ )。つまり、誤反応においてそうした単語カテゴリによる違いは見られず、いずれのカテゴリに関しても、こちらの想定した単語の基準のとおり正しくポジティブ・ネガティブという判断をされていたと言える。ここから、このような要因によって男性が内集団ひいきとは逆の結果を出した可能性は低いと考えられる。

ラベルを再定義するための方向性が一貫しなかったためと考えることができる。こうした点からすれば、刺激項目は判断に直接影響するというより、カテゴリ・ラベルの再定義により間接的に判断に影響すると考えるべきかもしれない。

本研究は IAT の効果に、判断するカテゴリ・ラベルによる態度の内集団バイアスと、刺激項目によるステレオタイプ性が反映されることを示した。もしこれらのカテゴリ・ラベルと刺激項目の効果が、内集団バイアスとステレオタイプを正しく反映したのならば、刺激項目を同一にしたままで、カテゴリ・ラベルをステレオタイプ一致不一致とした場合には（男性－女性・作動性－共同性）、カテゴリ・ラベルによってステレオタイプに関する効果が変われ、刺激項目によって内集団バイアスの効果が変われると考えられる。今後の研究においては、このようなカテゴリ・ラベルの違いについても検討することで、カテゴリ・ラベルと刺激項目が IAT 効果に及ぼす影響について、より明確にしていく必要がある。

#### 引用文献

- Bluemke, M., & Friesen, M. (2006) Do features of stimuli influence IAT effects? *Journal of Experimental Social Psychology*, **42**, 163-176.
- De Houwer, J., (2001). A structural and process analysis of the Implicit Association Test. *Journal of Experimental Social Psychology*, **37**, 443-451.
- Govan, C. L., & Williams, K. D. (2004) Changing the affective valence of the stimulus items influences the IAT by re-defining the category labels. *Journal of Experimental Social Psychology*, **40**, 357-365.
- Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (1995). Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, **102**, 4-27.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1464-1480.
- Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003). Understanding and using the Implicit Association Test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 197-216.
- 伊藤裕子 (1978) 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究, **26**, 1-11.
- Jost, J.T., Pelham, B.W., & Carvallo, M. (2002). Non-conscious forms of system justification: Cognitive, affective, and behavioral preferences for higher status groups. *Journal of Experimental Social Psychology*, **38**, 586-602.
- Lane, K. A., Banaji, M. R., Nosek, B. A., & Greenwald, A. G. (2007). Understanding and



- using the Implicit Association Test: IV. What we know (so far) about the method. In B. Wittenbrink & N. S. Schwarz (Eds.). *Implicit measures of attitudes* (pp. 59-102). New York: Guilford Press.
- Nosek, B. A., Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (2007). The Implicit Association Test at age 7: A methodological and conceptual review. In J. A. Bargh (Ed.). *Social psychology and the unconscious: The automaticity of higher mental processes* (pp. 265-292). New York: Psychology Press.
- 沼崎誠・小野滋・高林久美子・石井国雄(2006) Sequential Priming によるジェンダー・ステレオタイプの活性化の研究 東京都立大学人文学報, **369**, 21-52.
- Rudman, L. A., Feinberg, J. M., & Fairchild, K. (2002). Minority members' implicit attitudes: Automatic ingroup bias as a function of group status. *Social Cognition*, **20**, 294-320.
- Rudman, L. A., & Goodwin, S. A. (2004). Gender differences in automatic in-group bias: Why do women like women more than men like men? *Journal of Personality and Social Psychology*, **87**, 494-509.
- Rudman, L. A., Greenwald, A. G., & McGhee, D. E. (2001). Implicit self-concept and evaluative implicit gender stereotypes: Self and ingroup share desirable traits. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **27**, 1164-1178.
- 総務省統計局 (2008) 平成 19 年度社会生活基本調査.

## 15章 自己価値への脅威が 男性のジェンダーに関する潜在的な偏見に及ぼす効果<sup>1</sup>

石井 国雄 沼崎 誠

(首都大学東京大学院人文科学研究科)

人は外集団を蔑視したり、ネガティブに評価したりすることによって、自己の価値を肯定化することがある (Fein, Hoshino-Browne, Davies, & Spencer, 2003)。外集団を蔑視するということは、自分がネガティブな外集団よりも価値が高いという認知を生み出す行為であり、そうして得られた自己の肯定的なアイデンティティは、自己価値の高揚感を与える。自己価値が脅かされたときには、自己防衛的に外集団を蔑視する傾向は強くなる (Crocker, Thompson, McGraw, & Ingerman, 1987; Taylor & Lobel, 1989)。たとえば、Fein & Spencer (1997) は、テストのネガティブな結果をフィードバックされた後には、外集団成員に対する顕在的評価がよりネガティブになることを示している。

本研究は、自己価値への脅威下における偏見の背後にある心理過程として潜在的態度に注目した。とくに男性のジェンダーに関する潜在的態度に注目し、脅威下では男性とポジティブ概念、女性とネガティブ概念を結びつける内集団バイアスが生じるかを検討した。

**潜在的態度への注目** 近年の研究では、差別や顕在的な偏見の背後にある、潜在的態度が非常に注目されている。潜在的態度とは、記憶における態度対象と評価的な概念との結びつきをさす (Greenwald & Banaji, 1995)。近年の研究では、外集団とネガティブな評価概念との結びつき、すなわち外集団へのネガティブな潜在的態度の存在が、差別的な行動が生じる背景にあることが指摘されている (Petty, Fazio, & Briñol, 2009)。

潜在的態度の特徴で近年わかってきたことの一つとして、潜在的態度は固定されたものではなく、状況や動機付けに応じて変化しうるということがある (Blair, 2002; Kunda & Spencer, 2003)。さきに挙げた、自己価値への脅威下では、外集団へのネガティブな潜在的態度が生じることが示されている。Spencer, Fein, Wolfe, Fong, & Dunn (1998) は、脅威を受けた参加者に、人種的マイノリティの外集団 (アジア人女性、黒人) をプライムし、その後単語完成課題において外集団のステレオタイプがどの程度完成するかを測定した。その結果、脅威を受けた参加者において、ネガティブなステレオタイプに関連した単語を多く完成し、ネガティブなステレオタイプの活性化が強まることを示した。また、Sinclair & Kunda (1999) では、参加者は、黒人医師からネガティブなフィードバックを受けた場合に、ポジティブな医師ステレオタイプの活性化を抑制し (知的、思いやり)、ネガティブな

---

<sup>1</sup>本研究は平成 18 年度に東京都立大学大学院人文科学研究科に提出された修士論文の一部を加筆修正したものである。社会心理学研究第 27 号 (Pp.24-30) に掲載された。成果の一部は日本社会心理学会第 48 回大会において発表した。

黒人ステレオタイプを活性化させることを示している（犯罪、暴力）。こうしたことは、自己価値の脅威下において、外集団へのネガティブな潜在的態度が生じることを示している。

本研究は IAT (Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998) を用い、脅威下において、潜在的態度の内集団バイアスが生じるかを検討した。ここでいう潜在的態度の内集団バイアスは、内集団よりも外集団をネガティブさと結びつける傾向をさす。先行研究は、潜在測度として単語完成課題 (Spencer *et al.*, 1998) や語彙判断課題 (Sinclair & Kunda, 1999) を用い、脅威下での外集団との接触がネガティブな概念の活性化を生じさせることを示している。本研究は、IAT を用いることで、脅威にさらされたときには、記憶における内集団への態度と外集団への態度との相対的な差異として、内集団バイアスが生じるかを検討した。

**ジェンダーに関する潜在的態度** とくに本研究では、男性のジェンダーに関する潜在的態度を取り上げ、脅威にさらされた男性において、男性よりも女性をネガティブさと結びつける傾向が生じるか検討した。これまで脅威と潜在的態度を検討した研究では、人種的マイノリティ（アメリカ社会における黒人）など、勢力的に弱く、歴史的に蔑視の対象であった集団が主に扱われてきた (Sinclair & Kunda, 1999; Spencer *et al.*, 1998)。マイノリティ集団に対して潜在的態度の内集団バイアスが生じやすいことから (Jost, Pelham, & Carvallo, 2002; Nosek, Banaji, & Greenwald, 2002)、先行研究はもともと潜在的態度がネガティブで蔑視されやすい集団を扱い、内集団バイアスが生じやすい集団関係において、外集団へのネガティブな潜在的態度が強まることを検討してきたと考えられる。

それでは、内集団バイアスがもともとそれほど生じていない集団関係において、脅威下において内集団バイアスが生じるだろうか。たとえば、男性におけるジェンダーに関する潜在的態度には、内集団バイアスがそれほど生じないことが指摘されている (Rudman & Goodwin, 2004)。ジェンダーに関する潜在的態度の特徴として、男性は女性よりも内集団バイアスが弱く、内集団バイアスがみられないことがしばしば生じることがある (Aidman & Carroll, 2003)。Rudman & Goodwin (2004) は、男女を参加者とし、IAT を用い男女カテゴリと一般的なポジティブ・ネガティブ概念との結びつきを検討した。その結果、同性よりも異性をネガティブ概念を結びつける内集団バイアスは、男性参加者のほうが女性参加者より弱いことが一貫した結果として示された。また重要なことに、内集団バイアスを示す IAT 効果の効果量は、男性において概して小さく、有意な効果がみられないこともあった。石井・沼崎 (2009、研究 1) は、日本においても同様に男性は女性よりも内集団バイアスの傾向が弱いこと、男性において内集団バイアスを示す有意な効果は見られないことを示している。このように、男性は男女と一般的な評価概念との結びつきとして、潜在的態度の内集団バイアスが比較的弱い。内集団バイアスが弱い理由はいくつか考えられる。男性にとっての女性は数的には対等な集団である。また、女性にはさまざまなポジティブなステレオタイプが結び付けられているため、好意の対象とみなされやすい (Eagly & Mladinic, 1989)。Rudman & Goodwin (2004) は、男性は記憶において、女性を母親イメー

ジや異性と結び付け、また同性である男性を脅威と結び付けているために、ジェンダーに関する潜在的態度の内集団バイアスが生じにくいことを示している。

こうした内集団バイアスが生じにくい潜在的態度であっても、脅威にさらされたときには内集団バイアスが生じるのだろうか。顕在的態度においては、脅威にさらされた男性において女性への偏見が生じることが示されている。Sinclair & Kunda (2000) は、男性は女性から能力に関するネガティブ・フィードバックを受けた場合に、当該の女性の評価能力を低く推定することを示している。これは、男性が脅威下において女性のステレオタイプ次元に対してよりネガティブに評価することを示しており、顕在的偏見のあらわれである。潜在的態度も同様に、脅威によって影響を受けるだろうか。本研究は、男性におけるジェンダーに関する潜在的態度を検討することで、もともと内集団バイアスの弱い潜在的態度が、脅威の影響により内集団バイアスを示すように変化するか検討した。

**一般的潜在的態度と潜在的ステレオタイプの態度** ここまで男性においてジェンダーに関する潜在的態度に内集団バイアスが弱いとしたが、それは男女と一般的なポジティブ概念（輝かしい、など）やネガティブ概念（ひどい、など）との連合のことである。一般的な評価概念との連合と異なり、女性と女性ステレオタイプと関連したネガティブ語（うわさ好き、など）を結びつけるときのように、評価概念が男女のステレオタイプと関わる時には、内集団バイアスが生じることがある<sup>2</sup>。石井・沼崎 (2009) は、IAT 効果は刺激の性質によって影響を受けるという知見に基づき (Bluemke & Friese, 2006)、態度 IAT において、男女のステレオタイプに関連した評価関連語を用いた場合には、男性においても潜在的態度の内集団バイアスが生じることを示している。彼らは、用いる刺激が異なる 2 つの態度 IAT を用いた。一つの IAT には (以後、一般的態度 IAT)、男女のステレオタイプと関連しない一般的な評価概念が評価関連刺激として用いられ(輝かしい、ひどい、など)、もう一つの IAT は (以後、ステレオタイプの態度 IAT)、評価関連刺激として男性ステレオタイプに関連したポジティブ語 (有能、など)、女性ステレオタイプと関連したネガティブ語 (うわさ好き、など) を用いた。その結果、一般的態度 IAT では男性において内集団バイアスは生じないが (研究 1)、ステレオタイプの態度 IAT では内集団バイアスが生じた (研究 2)。これは、男性は、男女と一般的な評価との連合としては (以後、一般的潜在的態度)、ジェンダーに関する潜在的態度に内集団バイアスを示さないが、男性と男性ステレオタイプのなポジティブ概念、女性と女性ステレオタイプのなネガティブ概念との連合としては (以後、潜在的ステレオタイプの態度)、内集団バイアスを示すことを意味している。

脅威と潜在的態度を検討した先行研究では、主に外集団によるネガティブ・ステレオタイプの活性化を論じており (Spencer *et al.*, 1998; Sinclair & Kunda, 1999)、潜在的ステレ

---

<sup>2</sup>本研究では、ステレオタイプに関わる評価概念も、広い意味での評価概念として扱った。そのため、集団とステレオタイプに関わる評価概念 (ネガティブ・ステレオタイプ) との結びつきも潜在的態度として扱った。

オタイプの態度を検討してきたといえる。ならば、一般的潜在的態度は影響を受けないの  
だろうか。本研究は、脅威による影響が一般的潜在的態度においても生じるかを検討した。

**本研究の目的** 本研究は、脅威にさらされた男性のジェンダーに関する潜在的態度にお  
いて、内集団バイアスが生じるか検討した。自己価値への脅威は、テストのネガティブな  
結果をフィードバックすることによって操作した。ネガティブ・フィードバックを受ける  
条件（脅威あり条件）と受けない条件（脅威なし条件）とに分け、潜在的態度を比較した。

本研究は、潜在測度として IAT を用いた。IAT では男性関連語、ポジティブ語、女性関  
連語、ネガティブ語を画面に呈示し、2 つのキーを使って判断させる。判断のしかたは 2  
つのブロックで異なっており、男性関連語とポジティブ語、女性関連語とネガティブ語を  
同キーで判断させるブロック（男性ポジティブ・ブロック）と、女性関連語とポジティブ  
語、男性関連語とネガティブ語を同キーで判断させるブロック（女性ポジティブ・ブロッ  
ク）を行わせた。2 つのブロックそれぞれの反応時間を測定し、平均反応時間の差からジ  
ェンダー態度の強さを算出する。もし男性ポジティブ・ブロックのほうが女性ポジティブ・  
ブロックより反応時間が速かったならば、男性よりも女性とネガティブな概念を結び付け  
る記憶の連合がもたれていることになる。本研究ではこの連合を潜在的態度の内集団バイ  
アスとした。脅威なし条件より脅威あり条件のほうが内集団バイアスが強まると予測した。

本研究は、一般的潜在的態度と潜在的ステレオタイプの態度の違いも検討した。この測  
定のために、石井・沼崎（2009）で用いられた一般的態度 IAT とステレオタイプの態度 IAT  
を用いた。前者は評価関連語としてステレオタイプに関連のない一般的な評価関連語を用  
い、後者はポジティブ語として男性ステレオタイプに関連したポジティブ語、ネガティブ  
語として女性ステレオタイプに関連したネガティブ語を用いた。

また本研究では、IAT の反応に影響を与える個人差要因として平等主義的性役割観（鈴  
木, 1994; Scale of Egalitarian Sex Role Attitude、以後 SESRA）を考慮した。SESRA とはジ  
ェンダー間の性役割に関する平等志向に関わる尺度であるが、沼崎・高林・天野（2007）  
は、SESRA の得点が高く、平等志向の強い男性は、自己・他者とジェンダー・ステレオタ  
イプに関わる概念（作動性、共同性）との連合を測定する IAT において、全体的な反応が  
遅くなることを示している。ジェンダーに関する平等志向の強い人は、IAT のようなジ  
ェンダーに関する判断を行う際に、判断をやや慎重に行う傾向があり、その結果として IAT  
における反応が遅くなる可能性がある。本研究は、このような影響を統制するため、SESRA  
の得点を共変量として考慮した分析を行った。

## 方 法

**分析対象者** 首都大学東京または東京都立大学の男子大学生 25 名が実験に参加した。  
実験に参加し、実験参加レポートを提出することで一般教養科目「心理学」の成績に加点  
されることが予告されていた。参加者は、本実験の約 2 ヶ月前の講義において、集団で

SESRA に回答していた。参加者を脅威なし条件、脅威あり条件にランダムに割り当てた。

**装置** 実験に使用した装置は、TOSHIBA 製のノート PC、dynabook AX/650LS であり、実験手続きに関する制御には Millisecond Software 社の Inquisit を用いた。

**刺激項目** IAT において、男性名、女性名、ポジティブ語、ネガティブ語、男性関連ポジティブ語、女性関連ネガティブ語の 6 タイプの文字刺激項目を使用した<sup>3</sup>。単語の文字のフォントは 50 ピクセルの白字で、単語は背景が黒の画面の中心に呈示された。男性名には、本試行用の項目として、たかし、あつし、ひろき、こうた、まさお、の 5 語、練習用の項目として、けんた、を用いた。女性名には、本試行用の項目として、ようこ、はるか、あゆみ、さちこ、ゆうこ、の 5 語、練習用の項目に、さところ、を用いた。ポジティブ語には、輝かしい、元気、笑い、見事な、平和、の 5 語、ネガティブ語には、痛ましい、ひどい、恐ろしい、苦悩、失敗、の 5 語、男性関連ポジティブ語には、有能、決断力のある、自信のある、指導力のある、勇敢な、の 5 語、女性関連ネガティブ語には、うるさい、うわさ好き、でしゃばり、おせっかい、おしゃべり、の 5 語を用いた。

**IAT タイプ** IAT には 2 タイプあり（一般的態度 IAT、ステレオタイプの態度 IAT）、判断するカテゴリ・ラベルと実施の手順は同じだが、用いられる刺激項目がそれぞれ異なっていた。一般的偏見 IAT では、男性名、女性名、ポジティブ語、ネガティブ語を刺激項目として用いた。ステレオタイプの偏見 IAT では、男性名と女性名、ポジティブ語として男性関連ポジティブ語、ネガティブ語として女性関連ネガティブ語を用いた。

**手続き** 実験は 1 人ずつ個別に行った。まず、実験の概要の説明を行い、参加承諾書を取得した。カバーストーリーとして、性格検査と思考能力テストを検討する実験と、認知判断に関連する実験の 2 つを行うと説明した。

**脅威の操作** まず、PC 上で性格検査と思考能力テストという 2 つのテストを行った。性格検査は、文章を呈示し、5 件法での回答を求めるものであり、一方で、思考能力テストは、図形に関する判断を求めるものであった。思考能力テストについては、条件ごとに難易度は異なっており、脅威なし条件では、参加者は、難易度の易しい問題を、比較的長時

---

<sup>3</sup> ポジティブ語、ネガティブ語、男性関連ポジティブ語、女性関連ネガティブ語については、石井・沼崎（2009）で用いられた単語を用いた。石井・沼崎（2009）は、それら 4 つの単語カテゴリについて、一般的好ましさの調査を行っており（7 件法、1：非常に好ましくない～7：非常に好ましい）、ポジティブ語（ $M=5.90$ ）、ネガティブ語（ $M=2.33$ ）、男性関連ポジティブ語（ $M=5.60$ ）、女性関連ネガティブ語（ $M=2.70$ ）であった。また、一般的好ましさの調査のほかに、これらの語の男女との関連性についても、男性 10 名（平均年齢 27.6 歳）を対象に調査を行った（7 件法、1：男性に関連する～7：女性に関連する）。一要因四水準の ANOVA の結果、有意な差が得られた（ $F(3, 27) = 37.56, p < .001$ ）。Bonferroni の検定により、女性関連ネガティブ語（ $M=5.50$ ）と 3 つの単語カテゴリの評定値を比較したところ、ポジティブ語（ $M=3.94, p < .001$ ）、ネガティブ語（ $M=3.90, p < .001$ ）、男性関連ポジティブ語（ $M=2.92, p < .001$ ）のすべての単語カテゴリとの間に差が見られ、最も女性と関連すると評定された。また男性関連ポジティブ語は、ポジティブ語（ $p < .05$ ）と差が見られ、ネガティブ語（ $p < .10$ ）とも有意に近い差がみられ、より男性と関連する単語として評定された。ポジティブ語とネガティブ語との間に有意な差はみられなかった。

間をかけて行うことができたが（1問ごとの制限時間を30秒）、脅威あり条件では、難易度の高い問題を、短い時間で解かなければならなかった（1問ごとの制限時間を10秒）。

2つのテストが終了した後、「性格検査は対人的な特性、思考能力テストは仕事に関連した特性を測定しており、これらは将来の成功に関連する」と説明した。これは自己にとって重要な特性が測定されるという認識を促すためであった。その後、脅威あり条件の参加者には、PCの画面上に2つのテストの成績を表示することで結果をフィードバックした。表示された結果は偽のネガティブな結果であり、E評価(A～Fの間の評価で下から2番目)であり、これまでテストを受けた男性大学生「110人中85位～104位」に位置するものであった。対して、脅威なし条件には、成績は次の実験後に返すと説明し、フィードバックを行わなかった。フィードバックの操作を行った後に、1つ目の実験は終わりと告げた。

**IATの実施** IAT実施の直前に、自身のジェンダーを顕現化させる目的で、性別のチェックを挿入した。「あなたは男性ですね」という文章を呈示し、はい・いいえで回答させた。

次に、認知判断テストと称して、一般的態度IATとステレオタイプの態度IATを行った。参加者は2つのIATを両方行った。2つのIATの実施順序はカウンター・バランスをとった。IATは、画面に単語が呈示され、その単語が指定されたカテゴリのうちどれに含まれるかをキー押しで判断する課題であった。正解の場合にはそのまま課題が続き、不正解の場合は画面に“×”が表示された後、課題が続行された。キー押しをすると、800msの試行間隔をおいて次の試行となった。IATは7つのブロックによって構成されていた。①好ましさ練習ブロックではポジティブ語、ネガティブ語が呈示され、参加者はポジティブ語であった場合はFキー、ネガティブ語であった場合はJキーを押すことで判断した。②性別判断ブロックaでは、男性名と女性名が呈示され、男性名だった場合にFキー、女性名だった場合にJキーを押すことで判断した。③男性ポジティブ・練習ブロックでは4カテゴリの項目が呈示され、ポジティブ語または男性名であった場合はFキー、ネガティブ語または女性名だった場合はJキーを押すことで判断した。④男性ポジティブ・本番ブロックでは、③と同様の課題を行った。ただし1試行目には練習用の項目が呈示される1試行が挿入され、その試行を含め、トータルで21試行が行われた。⑤性別判断ブロックbでは、②と同様の課題がカテゴリの位置を入れ替えて行われた。参加者は女性名だった場合はFキー、男性名だった場合はJキーを押すことで判断した。⑥女性ポジティブ・練習ブロックでは、③ブロックと同様の課題をキーの位置は入れ替え、ポジティブ語または女性名であった場合はFキー、ネガティブ語または男性名だった場合はJキーを押すことで判断した。⑦女性ポジティブ・本番ブロックは、⑥と同様の課題を行った。②～④と⑤～⑦のそれぞれ3ブロックのいずれを先に行うかについては、参加者間でカウンター・バランスをとった。刺激項目はすべてのブロックにおいてランダムな順序で呈示された。

**操作チェックおよび質問項目** 2つ目のIATが終了した後、実験参加者は操作チェックを含むいくつかの質問項目に回答した。操作チェック項目は「結果のフィードバックを受

けましたか」という項目に2段階（はい、いいえ）で回答を求めるものと、その項目に「はい」と答えた場合に回答する「フィードバックされた結果はどのようなものでしたか？」という質問（7件法、1：悪かった～7：よかった）が対応していた。そのほかに、操作の妥当性の確認のため、「思考能力テストはどれくらいできましたか？」（7件法、1：ほとんどできなかった～7：ほとんどできた）といった質問に回答させた。質問紙への回答後、参加者に本当の目的を告げ、デブリーフィングを行った。最後に再度データの使用を承諾するかどうかの確認を行い実験を終了した。

## 結 果

**操作チェックおよび質問項目** 「結果のフィードバックを受けましたか」という項目では、脅威あり条件のすべての参加者が「はい」、脅威なし条件のすべての参加者が「いいえ」と回答していた。そして、この設問で「はい」と回答した場合には、「フィードバックされた結果はどのようなものでしたか？」という設問に回答していたが、その平均値は1.69点であり（ $SD=.75$ ）、「悪かった」という極に近く、この項目で中点以上をつけた参加者はいなかった。また、「思考能力テストはどれくらいできましたか？」という設問では、脅威なし条件よりも脅威あり条件のほうが出来ていないと答えていた（ $M_s=4.67, 1.83; t(22)=34.93, p<.001$ ）<sup>4</sup>。これらは、脅威が正しく認識されていたことを示すものである。

**潜在的態度の効果** 本番ブロック（④、⑦ブロック）の平均反応時間を従属変数とした。平均反応時間の算出は Greenwald *et al.* (1998) を参考にした。まず 300ms 以下の反応と、3000ms 以上の反応時間を示した反応を外れ値として除外し、反応時間に対数変換を施した。また、正反応に加えて、誤反応も分析に加えた。そして、それぞれの参加者ごとに④、⑦ブロックの平均反応時間を算出した。

平均反応時間を従属変数とし、標準化した SESRA 得点を共変量とした、2（脅威；脅威あり vs. 脅威なし、参加者間要因）×2（IAT タイプ；一般的態度 IAT vs. ステレオタイプの態度 IAT、参加者内要因）×2（ブロック；男性ポジティブ vs. 女性ポジティブ、参加者内要因）の混合 ANCOVA を行った<sup>5</sup>。まず SESRA の主効果が有意となった（ $F(1, 22) = 4.67, p<.05$ ）。この効果は、SESRA 得点が高い場合のほうが（1SD の期待値：2.79）、低い場合よりも反応が遅かったことを示すものであった（-1SD の期待値：2.75）。次に、ブロックの主効果がみられ（ $F(1, 22) = 12.50, p<.01$ ）、反応時間は、女性ポジティブ・ブロックよりも（ $M=2.78$ ）、男性ポジティブ・ブロックのほうが速い傾向がみられた（ $M=2.76$ ）。しかし、この効果は IAT タイプ×ブロックの交互作用効果に有意に近い効果がみられたことによっ

<sup>4</sup> SESRA の個人差を加えた分析も行ったが、SESRA と関連した効果はみられなかったため報告しない。

<sup>5</sup> IAT タイプの順序、ブロックの順序による要因を加えた分析も行ったが、脅威と関連した効果はなかったため報告しない。また、SESRA を共変量ではなく、要因として投入した分析も行ったが、他の要因と関連した効果はみられなかった。



て制限を受ける ( $F(1, 22) = 3.56, p=.07$ )。この効果を詳しく見るため、Bonferroni の検定を用いて、IAT タイプごとのブロックの効果を見たところ、一般的態度 IAT においては、ブロック間に差は見られなかったが ( $M_s=2.78, 2.77; ns.$ )、ステレオタイプの態度 IAT においては、女性ポジティブ・ブロックよりも男性ポジティブ・ブロックにおいて反応時間が速くなる傾向が見られた ( $M_s=2.79, 2.76; p<.001$ )。これらの効果は、潜在的ステレオタイプの態度のほうが一般的潜在的態度よりも内集団バイアスが強いこと、そして一般的潜在的態度においては内集団バイアスがみられないことを示している。

脅威が関連する効果として、脅威×ブロックの交互作用効果が有意であった ( $F(1, 22) = 4.48, p<.05$ )。この効果を詳しく見るため、Bonferroni 法を用いて、脅威なし条件と脅威あり条件ごとにブロックの効果を見たところ、脅威なし条件においては、ブロック間の差は見られなかったが ( $M_s=2.78, 2.77; ns.$ )、脅威あり条件においては、女性ポジティブ・ブロックよりも男性ポジティブ・ブロックにおいて反応時間が速くなる傾向が見られた ( $M_s=2.79, 2.75; p=.001$ )。そして、IAT タイプ×脅威×ブロックの交互作用効果はみられず ( $F<1, ns$ )、脅威なし条件よりも脅威あり条件において内集団バイアスが強まる効果に、IAT タイプによる違いはみられなかった。この効果をわかりやすくするために、⑦ブロックの平均反応時間から④ブロックの平均反応時間を減算することによって、内集団バイアスの強さをあらわす IAT 量を算出し、IAT タイプと脅威の条件ごとの平均値を Figure 1 に示した。この図からもわかるとおり、脅威なし条件よりも脅威あり条件のほうで、内集団バイアスが強くなる傾向は、一般的態度 IAT とステレオタイプの態度 IAT のいずれにも同程度見られていた。また、それぞれの IAT タイプに分けて、条件ごとに IAT 量の大きさをみてみると、一般的態度 IAT では、脅威なし条件においては、内集団バイアスはみられなかったが ( $M = .00, t(11) = 79, ns.$ )<sup>6</sup>、脅威状況においては内集団バイアスが生じていた ( $M = .03, t(12) = 1.80, p < .10$ )。それに対して、ステレオタイプの態度 IAT では、統制条件においても、内集団バイアスがみられたが ( $M = .03, t(12) = 3.06, p < .05$ )、脅威状況においてその結びつきはさらに強まっていた ( $M = .05, t(12) = 4.32, p = .001$ )。これらの効果は、もともと内集団バイアスが生じていた潜在的ステレオタイプの態度だけではなく、もともと内集団バイアスが生じていなかった一般的潜在的態度にも、脅威下においては内集団バイアスが生じることを示している。

---

<sup>6</sup>内集団バイアスの効果をみるため IAT 量の平均値に対して 0 からの  $t$  検定を行った。

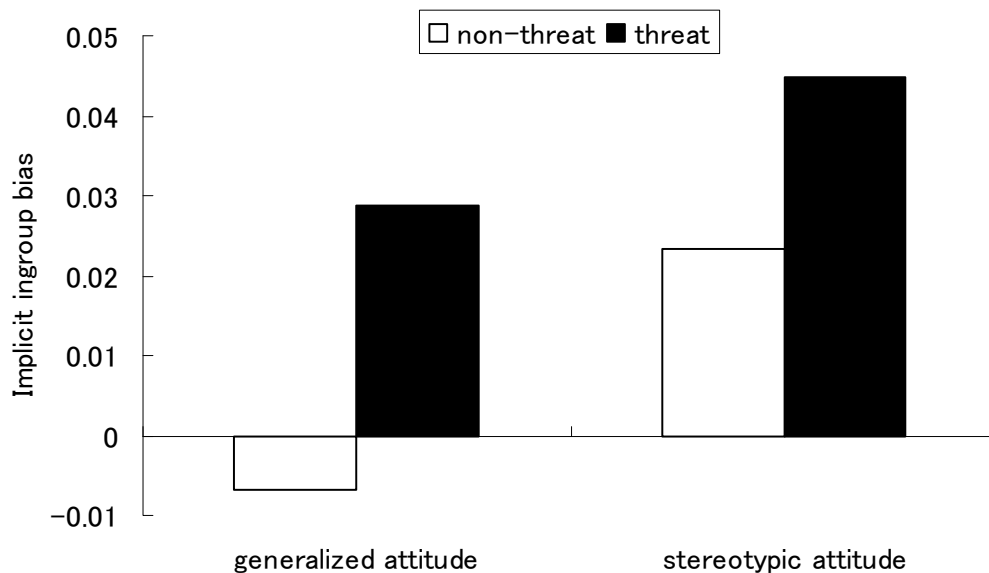


Figure 1 Implicit ingroup bias related to gender as a function of threat and type of IAT. Implicit ingroup bias means the association between opposite gender category (women) and negative attributes.

#### 考 察

自己価値への脅威を受けた男性は、ジェンダーに関する潜在的態度の内集団バイアスを生じさせた。また、その効果に IAT タイプによる違いは見られず、脅威なし条件においてすでに内集団バイアスが見られていたステレオタイプの態度 IAT のみでなく、脅威なし条件では内集団バイアスが見られなかった一般的態度 IAT においても、脅威あり条件において内集団バイアスが生じる傾向が見られた。こうしたことから、脅威にさらされた男性において、ジェンダーに関する潜在的態度の内集団バイアスが生じることが示された。

この結果は、脅威下における外集団に対する潜在的態度についての一つの視座を与える。それは、もともと外集団にネガティブさが結び付けられていない場合にも、自己価値への脅威下ではネガティブな概念を結びつけるようになりうることである。先行研究は、人種的マイノリティに対する潜在的態度など、もともとネガティブとなりやすい潜在的態度が、脅威下においてさらにネガティブとなることを示してきた。しかし本研究の結果では、もともと内集団バイアスの見られなかった一般的態度 IAT において、脅威下において内集団バイアスが見られるようになった。このことから、自己価値への脅威下で内集団バイアスが生じることが、ネガティブな外集団との関係を越え、さまざまな集団関係においても生じることが示唆される。しかし、社会的通念として男尊女卑という考えがあるように、男性にとって女性は蔑視しやすい対象なのかもしれない。そのため、脅威にさらされた場合にネガティブな態度を向けやすいのかもしれない。今後の研究では、男女以外の内集団バイアスが生じにくい集団関係についても検討する必要がある。

ただし、本研究の結果の解釈における重要な注意点として、潜在的態度を IAT を用い測

定したという点がある。IAT は対立する概念を用いることによって態度を測定する（女性と男性、好ましいと好ましくない）。それゆえ潜在的態度には、女性に対する潜在的態度だけではなく、男性に対する潜在的態度も反映される。そのため脅威が女性とネガティブ概念との連合を強めたのか、男性とポジティブ概念との連合を強めたのかわからない。今後の研究では、単一の対象への態度を測定する測度を用い、この件を確かめる必要がある。

## 引用文献

- Aidman, E. & Carroll, S. (2003). Implicit Individual Differences: Relationships between Implicit Self-Esteem, Gender Identity and Gender Attitudes. *European Journal of Personality*, **17**, 19-37.
- Blair, I. V. (2002). The malleability of automatic stereotypes and prejudice. *Personality and Social Psychology Review*, **6**, 242-261.
- Bluemke, M., & Friese, M. (2006). Do features of stimuli influence IAT effects? *Journal of Experimental Social Psychology*, **42**, 163-176.
- Crocker, J., Thompson, L. L., McGraw, K. M., & Ingerman, C. (1987). Downward comparison, prejudice, and evaluations of others: Effects of self-esteem and threat. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 907-916.
- Eagly, A. H., & Mladinic, A. (1989). Gender stereotypes and attitudes toward women and men. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **15**, 543-558.
- Fein, S., Hoshino-Browne, E., Davies, P. G., & Spencer, S. J. (2003). Self-image maintenance goals and sociocultural norms in motivated social perception. In S. J. Spencer, S. Fein, M. Zanna, & J. M. Olson (Eds.), *Motivated social perception: The Ontario symposium* (Vol. 9), pp. 21-44. Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Fein, S. & Spencer, S. J. (1997). Prejudice as self-image maintenance: Affirming the self through negative evaluation of others. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 31-44.
- Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (1995). Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, **102**, 4-27.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1464-1480.
- Inquisit 2.0.61004.3 [Computer software]. (2006). Seattle, WA: Millisecond Software.
- 石井国雄・沼崎誠 (2009). ジェンダー態度 IAT におけるステレオタイプの刺激項目の影響 社会心理学研究, **25**, 53-60.
- Jost, J.T., Pelham, B.W., & Carvallo, M. (2002). Non-conscious forms of system

- justification: Cognitive, affective, and behavioral preferences for higher status groups. *Journal of Experimental Social Psychology*, **38**, 586-602.
- Kunda, Z. & Spencer, S. J. (2003). When do stereotypes come to mind and when do they color judgment? A goal based theoretical framework for understanding stereotype activation and application. *Psychological Bulletin*, **129**, 522-544.
- Nosek, B. A., Banaji, M. R., & Greenwald, A. G. (2002). Harvesting implicit group attitudes and beliefs from a demonstration website. *Group Dynamics*, **6**, 101-115.
- 沼崎誠・高林久美子・天野陽一 (2007). 異性愛の顕現化が男性のジェンダー関連自己ステレオタイプ化に及ぼす効果 日本社会心理学会第48回大会発表論文集, 94-95.
- Petty, R. E., Fazio, R. H., & Briñol, P. (Eds.). (2009). *Attitudes: Insights from the new implicit measures*. New York: Psychology Press.
- Rudman, L. A. & Goodwin, S. A. (2004). Gender differences in automatic ingroup bias: Why do women like women more than men like men? *Journal of Personality and Social Psychology*, **87**, 494-509.
- Sinclair, L., & Kunda, Z. (1999). Reaction to a black professional: Motivated inhibition and activation of conflicting stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **77**, 885-904.
- Sinclair, L., & Kunda, Z. (2000). Motivated stereotyping of women: She's fine if she praised me but incompetent if she criticized me. *Personality & Social Psychology Bulletin*, **26**, 1329-1342.
- Spencer, S. J., Fein, S., Wolf, C., Fong, C., & Dunn, M. (1998). Stereotype activation under cognitive load: The moderating role of self-image threat. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **24**, 1139-1152.
- 鈴木淳子 (1994). 平等主義的性役割態度スケール短縮版(SESRA-S)の作成 心理学研究, **65**, 34-41.
- Taylor, S. E. & Lobel, M. (1989). Social comparison activity under threat: Downward evaluation and upward contacts. *Psychological Review*, **96**, 569-575.

## 16章 自己価値への脅威が男性の女性に対する潜在的偏見に及ぼす影響<sup>1</sup>

石井 国雄 沼崎 誠

(首都大学東京大学院人文科学研究科)

近年の平等主義的な風潮から、男女間の偏見や差別は以前より強くは感じられなくなり、あからさまな形では表明されることは少なくなってきた。しかし、依然として男女間の偏見や差別の問題は根深いと考えられる。本研究は、男性は自らの価値が脅かされた場合に、女性を否定的に評価し得ることを示そうとするものである。特に潜在的偏見に注目し、自己価値が脅威にさらされた男性において、非意識的に女性とネガティブ評価概念を結びつける反応が強まるかを検討した。

### 偏見の自己高揚機能

集団間態度の文脈においては、偏見は外集団に向けられた否定的な態度のことをさす(Dovidio & Gaertner, 1986)。偏見は外集団の価値を貶めることであるが、そればかりでなく外集団の価値と比較して内集団の価値を高揚させることにもつながる。このように偏見は集団の価値に関わるものであるが、偏見は当該の集団と関わる人にとっては自己価値の高揚感をもたらず(Fein, Hoshino-Browne, Davies, & Spencer, 2003)。例えば、自分が所属している内集団が外集団よりも優れていると感じたり、価値が劣る外集団が存在していると感じたりすれば、その集団の価値を自己に反映させることで、自己価値が高いと感ずることができる。

偏見が自己高揚的な機能をもつ証拠として、自己価値への脅威状況において、偏見が強く生じるということがある。人は自己高揚動機をもつために、自己価値が高く維持されることを望むが、場合によっては、自己価値が脅かされ、高い自己価値の維持が困難な場合もある(テストで上手くいかなかった、他者から拒絶された、自分の魅力がないと感じた)。自己価値への脅威にさらされると、強い不快感が生じるため、人は脅威に対処し、自己価値を回復させるための行動に動機づけられる。自己価値への脅威状況において、外集団の偏見がより生じるようになり、そして偏見を用いることが自己価値の回復につながるならば、偏見は自己高揚機能をもっているといえるだろう。実際に、先行研究は脅威下において偏見が強まることを示している(Crocker, Thompson, McGraw, & Ingerman, 1987; Taylor & Lobel, 1989)。Fein & Spencer (1997)は、参加者にテストのネガティブな結果をフィードバックすることで自己価値に脅威を与え、その後マイノリティ外集団(ゲイ男性、ユダヤ人)の成員に対する顕在的評価をさせた。結果として、脅威にさらされた参加者にお

---

<sup>1</sup>本研究は平成18年度に東京都立大学大学院人文科学研究科に提出された修士論文の一部を加筆修正したものである。成果の一部は、The 9th annual meeting of Society for Personality and Social Psychologyにおいて発表した。成果の一部は、対人社会心理学研究第12号への掲載が決定した。

いて、脅威にさらされていない参加者と比べて、それらマイノリティ外集団成員への評価がより否定的となる傾向がみられた。そして重要なことに、脅威を受けた参加者においては、外集団への偏見の度合いと状態自尊心の程度とに関係があり、外集団成員をより否定的に評価した人において状態自尊心が回復することがみられた。こうした結果は、外集団を否定的に評価することが脅威下においては、自己価値の高揚につながることを示している。

### 脅威下における潜在的偏見

先行研究では主に意識的にあらわされる 偏見、すなわち顕在的偏見が扱われることが多かったが、近年では、顕在的偏見の背景に生じる潜在的偏見が注目されている (Greenwald & Banaji, 1995)。潜在的偏見とは、質問紙測度などの顕在測度では捉えにくい、評価概念の活性化などのような非意識的な偏見反応のことをさす。特にここでは、外集団とネガティブ評価概念が結びつけられる反応を潜在的偏見として議論する。潜在的偏見が注目されてきている理由としては、潜在的偏見の発生が顕在的偏見に先立ち、かつ顕在的偏見に重要な影響を与えていると考えられることからくる。ある事物との接触は、記憶において当該の事物と結びつけられた評価的概念を自動的に活性化させる (Bargh, Chaiken, Govender, & Pratto, 1992; Fazio, Sanbonmatsu, Powell, & Kardes, 1986)。もしある外集団が記憶においてネガティブ評価概念と結びつけられているならば、外集団成員との接触は、ネガティブ評価概念を自動的に活性化させる (Devine, 1989)。活性化は外集団との接触によって自動的かつ急速に生じるものであり、後続に生じる顕在的偏見や差別的行動の発生に強く関わる (Amodio & Devine, 2006; Petty, Fazio, & Briñol, 2009)。このように顕在的偏見が生じるプロセスを考える上で、潜在的偏見は重要な役割を果たすといえる。

いくつかの研究は、自己価値への脅威下においては、潜在的偏見が強まることを示している (石井・沼崎, 2011; Sinclair & Kunda, 1999; Spencer, Fein, Wolf, Fong, & Dunn, 1998)。Spencer *et al.* (1998) は、脅威を受けた参加者に、マイノリティの外集団 (アジア人女性、黒人) をプライムし、その後の単語完成課題において外集団のネガティブなステレオタイプ関連語がどの程度作られたかを測定した。その結果、脅威を受けた参加者においてネガティブなステレオタイプ関連語がより多く作られていた。これは、脅威下において、外集団に関連した刺激の呈示によって、ステレオタイプのネガティブ評価概念が活性化したためだと考えられる。こうして脅威下において潜在的偏見が強まることによって、外集団に対する否定的な顕在的評価が生じやすくなるのだと考えられる。

本研究は、潜在測度としてシングルカテゴリ IAT (Karpinski & Steinman, 2006: シングルカテゴリ IAT の説明については後述) を用い、自己価値への脅威下において潜在的偏見が強く生じるかを検討した。

### 脅威下における女性に対する潜在的偏見

本研究は、自己価値が脅威にさらされた男性において、女性に対する潜在的偏見が生じ

るかを検討した。男性における女性に対する偏見を扱ったのは、自己価値が脅威にさらされていない状況においては否定的な潜在的態度が生じない外集団に対しても、脅威下においては否定的な潜在的態度が生じるようになるかを明らかにするためである。ここまでの議論では外集団と一括りにしてきたが、さまざまな集団関係においては、嫌悪的な評価が向けられやすい外集団もあれば、好意的な評価が向けられやすい外集団もある。脅威と潜在的偏見を扱った先行研究においては、マイノリティ集団のような、歴史的に蔑視の対象であり、社会的に否定的な価値を付与される集団（黒人、ゲイ男性、ユダヤ人女性）が扱われてきた(Sinclair & Kunda, 1999; Spencer *et al.*, 1998)。そうしたマイノリティ集団に対しては、脅威にさらされていない状況においても潜在的偏見が生じやすいことが示されている(Jost, Pelham, & Carvallo, 2002; Nosek, Banaji, & Greenwald, 2002)。この点を考えると、先行研究はもともと潜在的偏見が生じやすい外集団を扱い、そうした外集団への潜在的偏見が脅威下においてさらに強まることを示してきたといえる。

ならば、もともと潜在的偏見がそれほど強く生じにくい外集団に対しても、脅威下においては強い潜在的偏見が生じるようになるのだろうか。潜在的偏見がそれほど強くもたれない外集団として、男性における女性という外集団が考えられる。男女に関する潜在的偏見を扱ったいくつかの研究は、少なくとも自己価値が脅威にさらされていない男性において、女性をネガティブ評価概念と結びつける潜在的偏見が生じにくいことを指摘している(石井・沼崎, 2009; Rudman & Goodwin, 2004)。Rudman & Goodwin(2004)は、男女を参加者とし、IAT(Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998)を用い男女カテゴリと一般的なポジティブ、ネガティブ評価概念との結びつきを検討した。その結果、同性よりも異性とネガティブ評価概念を結びつける内集団バイアスは、男性参加者のほうが女性参加者より弱いことが一貫した結果として示された。また重要なことに、内集団バイアスを示す IAT 効果の効果量は、男性において概して小さく、有意な効果がみられないこともあった。石井・沼崎(2009, 研究 1)は、日本においても同様に男性は女性よりも内集団バイアスの傾向が弱いこと、男性において内集団バイアスを示す有意な効果はみられないことを示している。このように内集団バイアスが弱い理由として、Rudman & Goodwin(2004)は、男性は記憶において、女性を母親イメージや異性と結びつけ、また同性である男性を脅威と結びつけているために、男女に関する潜在的態度の内集団バイアスが生じにくいことを示している。これらの結果は、あくまで男性への評価と女性への評価との相対的な差として、女性にネガティブ評価概念を結びつけにくいということを示すものである。しかし、マイノリティ外集団への潜在的偏見と比べると、脅威にさらされていないとき、男性は女性に対してはそれほど強い潜在的偏見をもたないことを示唆する結果であるといえよう。

ならば、自己価値への脅威下においては、女性に対する潜在的偏見はどのようなになるだろうか。石井・沼崎(2011)は、男性を参加者とし、自己価値への脅威下における、男女に関する潜在的態度の内集団バイアスを検討している。彼らは、参加者にテスト結果のネガ

タイプ・フィードバックを与えることによって脅威を操作し、その後、IATによって潜在的態度を測定した。その結果、脅威下におかれた男性において、男性をポジティブ評価概念と結びつけ、女性をネガティブ評価概念と結びつける内集団バイアスがみられた。また、石井・沼崎(2011)は、脅威下における男女に関する潜在的態度の内容として、一般的潜在的態度とステレオタイプと関連した潜在的態度を考慮し(Wittenbrink, Judd, & Park, 1997, 2001)、それらのうちいずれの内集団バイアスが生じるかを検討している。一般的潜在的態度の内集団バイアスとは、内外集団に対してステレオタイプとは関連のない一般的なポジティブ評価概念やネガティブ評価概念(良い、悪い)を結びつけることをさす。特にここでは男性に一般的なポジティブ評価概念を結びつけ(男性は良い)、女性に一般的なネガティブ評価概念を結びつけることをさす(女性は悪い)。対して、ステレオタイプと関連した潜在的態度の内集団バイアスの本研究での定義は、内集団に対して内集団ステレオタイプに関連したポジティブ評価概念を結びつけ(e.g., 男性は有能)、外集団に対して外集団ステレオタイプに関連したネガティブ評価概念を結びつけることをさす(e.g., 女性はうるさい)。一般的潜在的態度もステレオタイプと関連した潜在的態度もともに潜在的態度であることには変わらないが、内集団バイアスの現れかたが異なることがいくつかの研究で示されている。例えば内集団バイアスはステレオタイプに関連付けた潜在的態度のほうが一般的潜在的態度と比べて強くあらわれ やすいことが示されている(石井・沼崎, 2009; Wittenbrink et al., 1997, 2001)。特に男女に関する潜在的態度として、石井・沼崎(2009)は、男性は脅威を受けていない場合には、ステレオタイプと関連付けた潜在的態度においては内集団バイアスをみせるが、一般的潜在的態度としては内集団バイアスをみせないことを示している。石井・沼崎(2011)は、こうした 2 つの潜在的態度の内集団バイアスのタイプについて考慮し、脅威下ではステレオタイプと関連した潜在的態度と一般的潜在的態度の両方において内集団バイアスが強まることを示している。これらをまとめると、自己価値の脅威下におかれた男性において、男性とポジティブ評価概念を結びつけ、女性とネガティブ評価概念を結びつける潜在的態度の内集団バイアスが生じ、かつそれはステレオタイプの関連の有無に関わらず生じるということになる。

それでは、脅威下におかれた男性において、女性とネガティブ評価概念を結びつける潜在的偏見が生じると言っているのだろうか。石井・沼崎(2011)の結果では、必ずしもそれを断言はできない。それは石井・沼崎(2011)が、IAT を用いて潜在的偏見を測定したことが関わっている。IAT は、概念間の連合を測定する測度であるが、単一の対象に対する態度ではなく、2 つの対象への態度の相対的な差を測定する測度である。IAT では、①男性関連語とポジティブ語、女性関連語とネガティブ語を同キーで判断させるブロック(男性ポジティブ・ブロック)と、②女性関連語とポジティブ語、男性関連語とネガティブ語を同キーで判断させるブロック(女性ポジティブ・ブロック)の 2 つのブロックのそれぞれの反応時間を測定し、その平均反応時間の差から男女に関する潜在的態度の強さを算出する。そ



して、もし男性ポジティブ・ブロックのほうが女性ポジティブ・ブロックよりも反応時間が速かったならば、その人は男性とポジティブ評価概念を結びつけ、女性とネガティブ評価概念を非意識的に結びつけたということになる。IATにおいて注意すべき点は、男性と女性それぞれに対する個々の潜在的態度が測定できるわけではなく、男性への態度と女性への態度の相対的な差として男女に関する潜在的態度が測定されるという点である。すなわち IAT によって男女に関する潜在的態度を測定した場合には、男性と女性のそれぞれの態度が混入していることになり、いずれの対象への態度が反映されているかはわからないのである。

このように IAT を用いた研究では、男女に関する潜在的態度に内集団バイアスが生じたからといって、必ずしも女性に対する否定的な態度が強まっているとはいえない。Brewer(1999)は内集団バイアスの成分には、内集団に対する好意的態度と外集団に対する敵意的な否定的態度があり、それぞれは独立に生じ得ることを指摘している。つまり、態度に内集団バイアスが生じたときには、外集団に対して否定的な態度が生じたとも考えられるし、内集団に好意的な態度が生じたとも考えられ、必ずしも両方が生じているとは限らないのである。石井・沼崎(2011)において示された内集団バイアスも、女性に対してネガティブ評価概念を結びつけたため生じたのではなく、男性に対してポジティブ評価概念を結びつけたため生じたのかもしれない。

自己価値への脅威が生じたときに、女性という単一の対象概念に対してネガティブ評価概念を結びつける潜在的偏見が生じるのだろうか。このことを明確に示すためには、男性に対する潜在的態度を反映しない形で、女性に対する潜在的態度を測定する必要がある。

## 本研究の概要

本研究は女性という単一の態度対象への潜在的偏見に注目し、自己価値への脅威状況におかれた男性が、非意識的に女性とネガティブ評価概念を結びつけるかを検討した。男性への潜在的態度を反映しない形で、女性への潜在的偏見を測定するために、単一の対象への態度を測定する測度であるシングルカテゴリ IAT(Karpinski & Steinman, 2006: 以下 SC-IAT と略記)を用いた。SC-IAT は基本的な手続きとしては IAT とほぼ同じであるが、態度対象に関する判断は IAT のように 2 つではなく(男性、女性)、1 つのみである(女性)。IAT は、2 つの態度対象への判断を行わせることで、1 つの対象に対する評価概念の結びつきではなく、2 つの対象に関する評価概念の結びつきの相対的な差を測定していたが、SC-IAT は 1 つの対象に対する評価概念の結びつきを測定することを目的とする。Karpinski & Steinman(2006)は、SC-IAT のような単一の対象への判断のみを行う IAT についての信頼性と妥当性を検討しており、こうした手続きで単一の対象に対する評価概念の結びつきが測定できることを確認している。具体的には、参加者に①ポジティブ語を F キー、女性関連語とネガティブ語を J キーで判断させるブロック(女性ネガティブ・ブロック)と、②女性関連語とポジティブ語を F キー、ネガティブ語を J キーで判断させるブ

ック(女性ポジティブ・ブロック)という 2 つの課題を行わせる。本研究では、女性ポジティブ・ブロックよりも女性ネガティブ・ブロックのほうで反応時間が速くなることを、女性に対する潜在的偏見のあらわれとした。

本研究では、このように測定される女性に対する潜在的偏見が、脅威下において増加するかを検討した。自己価値への脅威は、テストのネガティブな結果のフィードバックを与えることによって操作した。具体的には、参加者に対する対人的な特性と仕事に関する能力を測定するとされるテストを受けさせ、それらについてのネガティブな結果のフィードバックを与えるか否かによって操作した。

本研究は、脅威による潜在的偏見への影響の調整要因として、顕在的自尊心の高さの個人差を考慮した。顕在的自尊心の高い人はポジティブな自己イメージの一貫性を保つために自己を脅かす情報に敏感に反応しやすいことが指摘されている(Baumeister, Smart, & Boden, 1996; Crocker & Park, 2004)。この議論と関連し、少なくとも偏見研究においては、顕在的自尊心が高い場合に、脅威による影響を受けやすいことが示されている。Crocker *et al.*(1987)は、ネガティブ・フィードバックを受けた後の顕在的偏見に顕在的自尊心の高さによる違いがあるかを検討しており、自尊心の高い参加者においては、ネガティブ・フィードバックを受けることで顕在的態度の内集団バイアスが強まるが、自尊心の低い参加者においては強まらないことを示している。このように先行研究では、顕在的自尊心の高さが脅威下における顕在的偏見の増加と関わることを示している。本研究は、潜在的偏見についても、顕在的偏見への影響と同様な、顕在的自尊心による調整効果が生じるかを検討した。仮説として、顕在的自尊心の高い人は、顕在的自尊心の低い人と比べて、ネガティブ・フィードバックによる潜在的偏見の増加効果がより強いことを予測した。

また、女性に対する潜在的偏見を測定するにあたり、石井・沼崎(2011)と同様に、一般的潜在的偏見と潜在的ステレオタイプの偏見という潜在的偏見のタイプについても考慮した。ここでの定義として、一般的潜在的態度は、女性と女性ステレオタイプと関連しないネガティブ評価概念とを結びつけることであり、潜在的ステレオタイプの偏見は、女性と女性ステレオタイプに関連したネガティブ評価概念とを結びつけることである。こうした 2 つのタイプを区別して測定するために、石井・沼崎(2011)と同様に、判断するカテゴリ・ラベルは同じだが、異なる刺激項目を用いた 2 つの SC-IAT を使用した。IAT では、判断するカテゴリ・ラベルが同じであっても呈示される刺激の性質が異なる場合には、異なる連合が測定されることが指摘されている(詳細なプロセスについては、Govorun & Williams, 2004; 石井・沼崎, 2009)。例えば石井・沼崎(2009)は、ジェンダー態度 IAT において、ネガティブ刺激項目として女性のステレオタイプに関連した刺激項目が呈示された場合、女性と一般的なネガティブ評価概念との結びつきではなく、女性とステレオタイプに関連したネガティブ評価概念との結びつきが測定されるとしている。本研究では、女性のステレオタイプと関連しないネガティブ語を刺激として用いることで女性への一般的潜

在的偏見を測定する SC-IAT(一般的偏見 SC-IAT)と、ステレオタイプと関連したネガティブ語を刺激として用いることで女性への潜在的ステレオタイプの偏見を測定する SC-IAT(ステレオタイプの偏見 SC-IAT)の2つを用意し、脅威による影響の違いが現れるかを検討した。

本研究の仮説は以下のとおりである。ネガティブ・フィードバックを受けた男性において、フィードバックを受けていない男性よりも、女性に対する潜在的偏見が強くみられるだろう。このフィードバックによる潜在的偏見への影響は、顕在的自尊心の高さによって調整を受け、自尊心の高い男性においてより強くみられるだろう。また、潜在的態度のタイプの違いに関して、全体的な傾向としては一般的偏見 SC-IAT よりもステレオタイプの偏見 SC-IAT のほうが潜在的偏見は強くみられるが、石井・沼崎(2011)と同様に、脅威を受けることによる影響については、SC-IAT タイプによる違いはみられないことを予測した。

## 実験1 女性に対する潜在的態度の検討

### 方法

**実験参加者** 首都大学東京または東京都立大学の男子大学生 39 名が実験に参加した。回答に欠損のなかった 37 名を分析の対象とした。参加者にはレポートを提出することにより一般教養科目「心理学」の授業の加点されることを予告していた。参加者には、本実験の約 2 ヶ月前の講義において集団でローゼンバーグの自尊心尺度の日本語版(星野, 1970)に回答させ、顕在的自尊心の個人差を測定していた( $M = 2.79, SD = .71$ )。参加者を、フィードバックなし条件、フィードバックあり条件にランダムに割り当てた。

**装置** 実験に使用した装置は、TOSHIBA 製のノート PC、dynabook AX/650LS であった。実験手続きに関する制御には Millisecond Software 社の Inquisit を用いた。

**刺激項目** SC-IAT においては、女性名、ポジティブ語、ネガティブ語、男性関連ポジティブ語、女性関連ネガティブ語という 5 タイプの文字刺激項目を使用した。すべての刺激は、石井・沼崎(2011)で用いられた刺激と同じであった<sup>2</sup>。女性名には、本試行用の項目

---

<sup>2</sup>単語の感情価については、石井・沼崎(2009)において、一般的好ましさの調査が行われており(7 件法、1: 非常に好ましくない~7: 非常に好ましい)、ポジティブ語( $M = 5.90$ )、ネガティブ語( $M = 2.33$ )、男性関連ポジティブ語( $M = 5.60$ )、女性関連ネガティブ語( $M = 2.70$ )であった。また石井・沼崎(2011)は、これらの語の男女との関連性についても、男性 10 名を対象に調査を行った(7 件法、1: 男性に関連する~7: 女性に関連する)。一要因四水準の ANOVA の結果、有意な差が得られた( $F(3, 27) = 37.56, p < .001$ )。Bonferroni の検定により、女性関連ネガティブ語( $M = 5.50$ )と 3 つの単語カテゴリーの評定値を比較したところ、ポジティブ語( $M = 3.94, p < .001$ )、ネガティブ語( $M = 3.90, p < .001$ )、男性関連ポジティブ語( $M = 2.92, p < .001$ )のすべての単語カテゴリーとの間に差がみられ、最も女性と関連すると評定された。また男性関連ポジティブ語は、ポジティブ語( $p < .05$ )と差がみられ、ネガティブ語( $p < .10$ )とも有意に近い差がみられ、より男性と関連する単語として評定さ

として、ようこ、はるか、あゆみ、さちこ、ゆうこ、の 5 語を用いた。ポジティブ語には、輝かしい、元気、笑い、見事な、平和、の 5 語、ネガティブ語には、痛ましい、ひどい、恐ろしい、苦悩、失敗、の 5 語、男性関連ポジティブ語には、有能、決断力のある、自信のある、指導力のある、勇敢な、の 5 語、女性関連ネガティブ語には、うるさい、うわさ好き、でしゃばり、おせっかい、おしゃべり、の 5 語を用いた。

**SC-IAT タイプ** SC-IAT には 2 タイプあり(一般的偏見 SC-IAT、ステレオタイプの偏見 SC-IAT)、判断するカテゴリ・ラベルと実施の手順は同じだが、用いられる刺激項目がそれぞれ異なっていた。一般的偏見 SC-IAT では、女性名、ポジティブ語、ネガティブ語を刺激項目として用いた。ステレオタイプの偏見 SC-IAT では、女性名、男性関連ポジティブ語、女性関連ネガティブ語を用いた。

**手続き** 実験は 1 人ずつ個別に行った。まず、実験の参加承諾に関する説明を受けた後に実験の説明に入った。性格検査と思考能力テストを検討する実験と、認知判断に関連する実験の 2 つを行うと説明した。

**脅威の操作** 本実験の操作および手続きは、石井・沼崎(2011)とほぼ同様に行った。まず、PC 上で性格検査と思考能力テストという 2 つのテストを行った。性格検査は、文章を呈示し、5 件法での回答を求めるものであり、一方で、思考能力テストは、図形に関する判断を求めるものであった。思考能力テストについては、条件ごとに難易度は異なっており、フィードバックなし条件では、参加者は、難易度の易しい問題を、比較的長時間をかけて行うことができたが(1 問ごとの制限時間を 30 秒)、フィードバックあり条件では、難易度の高い問題を、短い時間で解かなければならなかった(1 問ごとの制限時間を 10 秒)。

2 つのテストが終了した後、「性格検査は対人的な特性、思考能力テストは仕事に関連した特性を測定しており、これらは将来の成功に関連する」とテストで測定される特性についての概説を行った。これは自己にとって重要な特性が測定されるという認識を促すためのものであった。その説明が終わった後、結果のフィードバックの操作を行った。フィードバックあり条件の参加者には、PC の画面上に 2 つのテストの成績を表示することでフィードバックした。表示された結果は偽のネガティブな結果であり、E 評価(A~F の間の評価で下から 2 番目)であり、これまでテストを受けた男性大学生「110 人中 85 位~104 位」に位置するというものであった。対して、フィードバックなし条件には、成績は次の実験後に返すと説明し、フィードバックを行わなかった。フィードバックに関する操作を行った後に、1 つ目の実験は終わりと告げた。

**SC-IAT の実施** SC-IAT を実施する直前に、自身のジェンダーについて顕現化をさせる目的で、簡単な性別のチェックを挿入した。「あなたは男性ですね」という単純な確認の文章を呈示し、はい・いいえで回答させた。

---

れた。ポジティブ語とネガティブ語との間に有意な差はみられなかった。

次に、認知判断のテストと称して、SC-IAT を行わせた。参加者に 2 つの SC-IAT を両方行わせた。いずれの参加者にも、ステレオタイプの偏見 SC-IAT を先に行わせ、次に一般的偏見 SC-IAT を行わせた。SC-IAT は、Karpinski & Steinman(2006)を参考にして作成した。SC-IAT では、画面に単語を呈示し、その単語が指定されたカテゴリのうちどれに含まれるかをキー押しで判断させた。正解の場合にはそのまま課題が続いたが、不正解の場合は画面に“×”が表示された。キー押しをすると、800ms の試行間隔をおいて次の試行となった。ブロックは、①女性ネガティブ・ブロック、②女性ポジティブ・ブロックの 2 ブロックに分かれていた。①と②のブロックのいずれを先に行うかについては、参加者間でカウンター・バランスをとった。

それぞれのブロックで行われた課題は以下のとおりであった。①女性ネガティブ・ブロックでは、女性名・ポジティブ語・ネガティブ語を呈示し、好ましい単語であった場合は「F」キー、好ましくない言葉または女性名だった場合は「J」キーを押すことで判断させた。試行は全部で 72 試行であった。それぞれの単語カテゴリへの反応数が同じだったり、左右のキーに割り当てられる単語の数が均等であったりした場合、反応バイアスが生じる可能性がある。そのため左右のキーに割り当てられる単語の比率を不釣り合いにすることで反応バイアスを回避しようとした(Karpinski & Steinman, 2006)。女性ネガティブ・ブロックでは、女性名・ポジティブ語・ネガティブ語の出現比率を、5: 8: 5 とした。②女性ポジティブ・ブロックでは、①と女性名を判断する際のキーの位置を入れ替え、好ましい単語または女性名であった場合は「F」キー、好ましくない言葉の場合は「J」キーを押すことで判断させた。女性名・ポジティブ語・ネガティブ語は、5: 5: 8 の出現比率で呈示した。刺激項目はすべてのブロックにおいてランダムな順序で呈示した。

操作チェックを含む質問項目への回答 2 つの SC-IAT が終了した後、操作チェックおよび、操作の妥当性を確認するためのいくつかの質問項目に回答させた。操作チェック項目は「結果のフィードバックを受けましたか」という項目に 2 段階(1: はい・2: いいえ)で回答を求めるものと、その項目に「はい」と答えた場合に回答する「フィードバックされた結果はどのようなものでしたか?」という質問への 7 件法(1: 悪かった~7: よかった)での回答が対応していた。そのほかに、操作の妥当性を確認するため項目として、「思考能力テストはどれくらいできましたか?」(7 件法、1: ほとんどできなかった~7: ほとんどできた)といった質問に回答させた。質問紙への回答後、参加者に本当の目的を告げ、デブリーフィングを行った。最後に再度データの使用を承諾するかどうかを確認し、実験を終了した。

## 結 果

**操作チェックおよび質問項目** 操作チェックのため、脅威状況においてフィードバックされた結果が悪かったと認識されていたかの確認を行った。まず、「結果のフィードバック

を受けましたか」という項目には、フィードバックあり条件のすべての参加者が「はい」、フィードバックなし条件のすべての参加者が「いいえ」と回答しており、この設問で「はい」と回答した場合には、フィードバックされた結果を悪かったと評定しており ( $M = 1.60$ )、この項目で中点以上をつけた参加者はいなかった。また、この評定と自尊心の高さとの相関関係はみられなかった ( $r = .06, ns$ )。その他の項目として、「思考能力テストはどれくらいできましたか?」の項目の得点について、自尊心(連続量) × フィードバック(あり vs. なし; 参加者間)を要因とした一般線形モデルを用いた分析をおこなった。その際、自尊心は標準化した値を投入した。フィードバックの主効果のみがみられ ( $F(1, 33) = 38.60, p < .001$ )、フィードバックなし条件よりもフィードバックあり条件のほうができていないと答える傾向にあった ( $M_s = 4.21, 1.61$ )。これらの結果は脅威の操作の妥当性を示しているといえよう。

**潜在的偏見への効果** 次に潜在的偏見への効果を検討した。潜在的偏見の指標として、SC-IAT のブロック間の反応の差を示す値である  $D$  値を用いた (Greenwald, Nosek, & Banaji, 2003)。SC-IAT における  $D$  値の算出は、Karpinski & Steinman (2006) に従い次の手順で行った。まず、それぞれのブロックの 72 試行のうち、始めの 18 試行は練習試行として分析から除外した。300ms 以下、10000ms 以上の反応を外れ値として設定したが、そうした反応はなかったため、すべての反応を分析に用いた。また、誤反応も分析に用いた。次に、②ブロックの平均反応時間から①ブロックの平均反応時間を減算した。その平均反応時間の差を、①、②ブロックをプールした標準偏差で割り、算出された値を女性への否定的態度を示す  $D$  値とした<sup>3</sup>。この  $D$  値が大きいほど、女性とネガティブ評価概念を結びつける潜在的偏見が強いことになる。

$D$  値を従属変数として、自尊心 × フィードバック × SC-IAT タイプを要因とした一般線形モデルを用いた分析を行った。また、有意な効果がみられた場合には、それぞれの期待値に対して 0 からの  $t$  検定を行い、有意な潜在的偏見の効果がみられるかを示した。まず SC-IAT タイプの主効果がみられ ( $F(1, 33) = 21.91, p < .001$ )、全体的な傾向として一般的偏見 SC-IAT よりも ( $M = -.14, t(33) = -2.55, p < .05$ )、ステレオタイプの偏見 SC-IAT のほうが潜在的偏見が強くみられた ( $M = .28, t(33) = 3.91, p < .001$ )。この効果は、女性とネガティブ評価概念を結びつける傾向は、一般的潜在的偏見よりもステレオタイプの偏見のほうが強いことを示している。

自己価値への脅威が関わる効果として自尊心 × フィードバックの交互作用効果が有意であった ( $F(1, 33) = 5.17, p < .05$ )。この結果を詳しくみるため、自尊心が高い場合と低い場合それぞれに分けて、フィードバックなし条件とフィードバックあり条件の  $D$  値の期待

---

<sup>3</sup> IAT 得点は一般に一致ブロックと不一致ブロックの反応潜時の差から算出されるが、反応潜時は個人差によって影響を受けやすい。そのため、 $D$  値では個人差の変動を調整するために、反応潜時の差を全体の標準偏差で割る (詳細は、Greenwald et al., 2003)

値を算出した。期待値の算出にあたり、自尊心が高い場合は自尊心が 1SD の期待値、自尊心が低い場合は -1SD の期待値を用いた。Figure 1 には *D* 値の期待値を示した。また、自尊心の水準によってフィードバックによる効果が異なるかをみるために、一般的偏見 SC-IAT とステレオタイプの偏見 SC-IAT の *D* 値を平均化した値を算出し、Simple Slope 検定によって、自尊心の高い参加者(1SD)と低い参加者(-1SD)それぞれにおけるフィードバックの効果を検定した。また、この分析についても有意な効果がみられた場合には、それぞれの期待値に対して 0 からの *t* 検定を行い、有意な潜在的偏見の効果がみられるかを示した。すると、自尊心の低い参加者においてはフィードバックなし条件 ( $M = .17, t(33) = 1.73, p = .09$ ) とフィードバックあり条件 ( $M = .04, t(33) = .04, ns$ ) との間に有意な差はみられなかったが ( $t(33) = -1.00, ns$ )、それに対して、自尊心の高い参加者においては、脅威による効果がみられ、自尊心の高い参加者は、フィードバックなし条件 ( $M = -.12, t(33) = -1.18, ns$ ) よりもフィードバックあり条件 ( $M = .19, t(33) = 2.05, p < .05$ ) 脅威を受けることによって *D* 値が増加していた ( $t(33) = 2.27, p < .05$ )。また、それぞれのフィードバック条件ごとに自尊心 × SC-IAT タイプを要因とした一般線形モデルを用いた分析をおこない、自尊心の高さによる効果を検定したところ、各フィードバック条件において自尊心による有意な効果はみられなかった(脅威あり条件:  $F(1, 17) = 2.48, ns$ ; 脅威なし条件:  $F(1, 16) = 3.36, ns$ )。また、フィードバックと関連した効果に、SC-IAT タイプによる調整効果はみられなかった( $F_s < 1$ )。

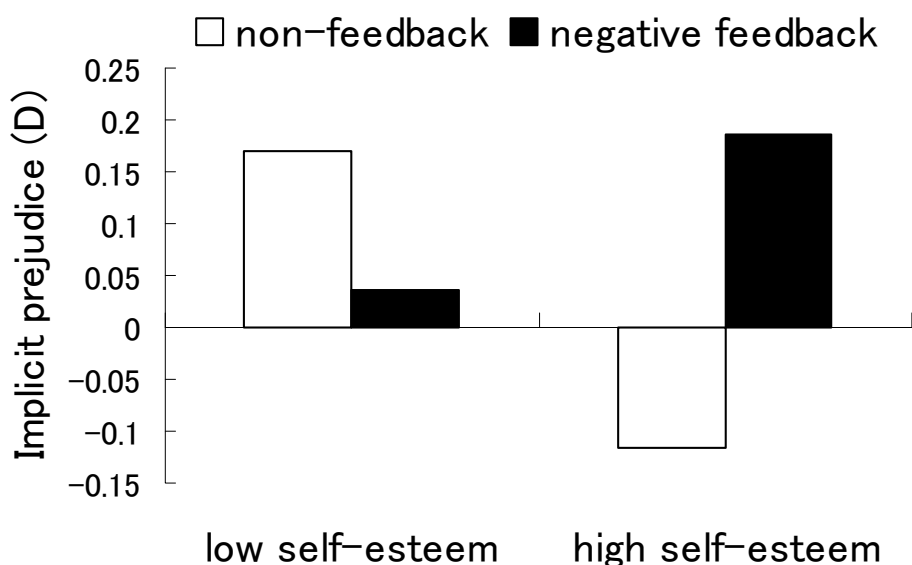


Figure 1 Implicit prejudice to women as a function of feedback and trait self-esteem (low self-esteem: -1SD, high self-esteem: 1SD). Implicit prejudice to women means the association between women and negative attributes.

## 考 察

実験1は、自己価値が脅威にさらされた男性において、女性という単一の対象にネガティブな属性を結びつけるという潜在的偏見が生じるかを検討するものであった。とくに実験1では、自尊心の高さを考慮し、自己価値への脅威による潜在的偏見への効果が、自尊心の高い男性において強く見られることについても検討した。

結果として、自尊心の高い男性において、ネガティブなフィードバックを受けた場合に、女性概念とネガティブ属性を結びつけるという潜在的偏見が生じることが示された。自尊心の高い人は、自己価値を脅かす情報に対する感度が高く (Baumeister *et al.*, 1996; Crocker & Park, 2004)、脅威状況において外集団への差別的行動を行いやすくなる (Crocker *et al.*, 1987)。自尊心の高い男性は、ネガティブ・フィードバックを、自己価値を脅かすものと感じやすく、結果として、自己価値を防衛するための女性への潜在的偏見が生じたのだと考えられる。とくに自尊心の高い男性における潜在的態度のパターンは、男性が女性に対して、状況に応じた異なる潜在的態度を向けうることを明確に示す結果であるといえるだろう。自尊心の高い参加者の結果を詳しく見てみると、脅威なし条件では女性とネガティブ属性概念とを結びつける傾向が見られていなかった。そうした傾向が、脅威あり条件では一転し、女性とネガティブ属性概念を結びつける潜在的偏見が生じるようになっていた。こうした結果は、通常ではネガティブではなく、ポジティブでもありうる女性に対する潜在的態度が、自己価値への脅威下ではネガティブとなってしまうことを示している。こうしたことから、男性は、普段は好意的な女性という対象に、自己価値が脅かされたときには自己価値を回復させるための手段として、非意識的にネガティブな評価しうることを示している。

一方で、自尊心の低い男性において、フィードバックによる潜在的偏見への影響は見られなかった。また、脅威あり条件において、自尊心が高い人のよりも、低い人のほうが潜在的偏見の傾向が弱かった。自尊心の低い男性は、ネガティブ・フィードバックを受けても自己価値への脅威と感じにくく、その結果として、自己防衛のための潜在的偏見を生じさせなかったと考えられる。

脅威による効果には、石井・沼崎(2011)と同様に、一般的潜在的偏見と潜在的ステレオタイプの偏見の違いは見られなかった。このことから脅威にさらされた男性において、女性概念と一般的な意味でのネガティブ属性とを結びつける潜在的偏見が強まることがさらに強い証拠として示された。

実験1においては、脅威にさらされた男性において、男性概念とポジティブな属性、女性概念とネガティブな属性を結びつける集団間バイアス傾向が生じることを示していたが、強まった集団間バイアスが、女性概念とネガティブ属性との結びつきという潜在的態度の高まりを反映していることは明らかではなかった。実験1は、女性という単一の態度対象



への潜在的態度のみに焦点を絞り、脅威にさらされた男性の情報処理過程において、女性概念とネガティブ属性との結びつきが強まることを明らかにした。

ならば一方で、内集団である男性に対する潜在的態度はどうだろうか。実験4は、ジェンダーに関する集団間バイアスの成分として、男性にとっての外集団である、女性に対するネガティブな潜在的態度に注目したが、ジェンダーに関する集団間バイアスには内集団である男性に対するポジティブな潜在的態度もある。人が好ましい内集団への所属によって自尊心を得るならば (Hogg & Abram, 1988; Tajfel & Turner, 1979), 内集団である男性に対してポジティブさを結びつける潜在的態度が脅威状況において生じることは考えられる。自己価値への脅威は内集団である男性に対するポジティブな潜在的態度にも影響を与えるかもしれない。これまでの研究で、自己価値への脅威が内集団に対するポジティブな潜在的態度を生じさせるかどうかについてはほとんど検討されていない。実験2では、実験1のフォローアップとして、男性が脅威下において男性へのポジティブな潜在的態度が生じるのかを検討した。

## 実験2 男性に対する潜在的態度の検討

男性という単一の態度対象への潜在的態度に注目し、自己価値への脅威状況におかれた男性に、男性概念とポジティブ属性を結びつける潜在的態度が生じるのかを検討した。基本的な方法としては、実験1と同様に行った。異なる点は、SC-IATの実施内容のみであった。潜在的態度の測定には、実験1と同様にSC-IATを用いた。参加者に①ポジティブ語をFキー、男性関連語とネガティブ語をJキーで判断させるブロック (男性ネガティブ・ブロック) と、②男性関連語とポジティブ語をFキー、ネガティブ語をJキーで判断させるブロック (男性ポジティブ・ブロック) という2つの課題を行わせる。男性ポジティブ・ブロックよりも男性ネガティブ・ブロックのほうで反応時間が遅くなることを、男性に対するポジティブな潜在的態度のあらわれとした。実験2でも、一般的潜在的態度と潜在的ステレオタイプの態度について考慮した。男性のステレオタイプと関連しないポジティブ語を刺激を用いたSC-IAT (一般的態度SC-IAT) と、男性のステレオタイプと関連したポジティブ語を刺激として用いたSC-IAT (ステレオタイプの態度SC-IAT) を用いた。

実験2の仮説として、脅威を受けた男性において、脅威を受けていない男性よりも、男性に対するポジティブな潜在的態度が強く見られることが考えられる。この脅威による効果は、自尊心の高さによって調整を受け、自尊心の高い男性においてより強く見られることが考えられる。また、潜在的態度のタイプの違いとしては、全体的な傾向としては一般的偏見SC-IATよりもステレオタイプの態度SC-IATのほうが潜在的態度は強くみられるが、脅威を受けることによる影響についてはIATタイプによる違いは見られないことを予

測した。

## 方 法

**分析対象者** 首都大学東京または東京都立大学の男子大学生 40 名が実験に参加した。レポートを提出することにより一般教養科目「心理学」の授業の加点されることが予告されていた。参加者は、本実験の約 2 ヶ月前の講義において、集団でローゼンバーグの自尊心尺度の日本語版に回答していた。参加者は、脅威なし条件、脅威あり条件にランダムに割り当てられた。

**刺激項目** SC-IAT においては、男性名、ポジティブ語、ネガティブ語、男性関連ポジティブ語、女性関連ネガティブ語という 5 タイプの文字刺激項目を使用した。男性名には、本試行用の項目として、たかし、あつし、ひろき、こうた、まさお、の 5 語、練習用の項目として、けんた、を用いた。ポジティブ語、男性関連ポジティブ語、女性関連ネガティブ語は実験 1 と同様であった。

**IAT タイプ** IAT には 2 タイプあり（一般的態度 IAT、ステレオタイプの態度 IAT）、実験 1 と同様に、判断するカテゴリ・ラベルと実施の手順は同じだが、用いられる刺激項目がそれぞれ異なっていた。一般的態度 IAT では、男性名、ポジティブ語、ネガティブ語を刺激項目として用いた。ステレオタイプの態度 IAT では、男性名、ポジティブ語として男性関連ポジティブ語、ネガティブ語として女性関連ネガティブ語を用いた。

**SC-IAT** SC-IAT の基本的な手順は、実験 1 と同様であった。ただし、判断するカテゴリは、実験 4 と異なり、男性名、ポジティブ語、ネガティブ語の 3 つであった。実験 5 の SC-IAT は、①男性ネガティブ・ブロックと②男性ポジティブ・ブロックの 2 ブロックから構成されており、①男性ネガティブ・ブロックでは、男性名・ポジティブ語・ネガティブ語を呈示し、好ましい単語であった場合は「F」キー、好ましくない言葉または男性名だった場合は「J」キーを押すことで判断させた。②男性ポジティブ・ブロックでは、好ましい単語または男性名であった場合は「F」キー、好ましくない言葉の場合は「J」キーを押すことで判断させた。

### 手続き

男性に対する潜在的態度を測定する SC-IAT に変更した以外、実験 1 と同様であった。初めに、脅威の操作として、性格検査と思考能力テストを行い、脅威あり条件の参加者には、2 つのテストに対するネガティブな結果をフィードバックを行い、脅威なし条件の参加者には、フィードバックを行わなかった。その後、潜在的態度の測定のために、SC-IAT を行った。参加者は 2 つの SC-IAT を両方行った。いずれの参加者も、ステレオタイプの偏見 SC-IAT を先に行い、次に一般的偏見 SC-IAT を行った。2 つの SC-IAT が終了した後、操作チェックを含む質問紙に回答させた。質問紙への回答後、参加者に本当の実験目的に気づいたかに関する質問を口頭で行った。その後、参加者に本当の目的を告げ、デブリー

フィングを行った。最後に再度データの使用を承諾するかどうかを確認し、実験を終了した。

## 結 果

**操作チェックおよび質問項目** 操作チェックのため、脅威状況においてフィードバックされた結果が悪かったと認識されていたかの確認を行った。まず、「結果のフィードバックを受けましたか」という項目では、脅威あり条件のすべての参加者が「はい」、脅威なし条件のすべての参加者が「いいえ」と回答していた。そして、この設問で「はい」と回答した場合には、「フィードバックされた結果はどのようなものでしたか？」という設問に回答させていたが、その平均値は 1.69 点であり、「悪かった」という極に近かった。またこの項目で中点以上をつけた参加者はいなかった。また、「思考能力テストはどれくらいできましたか？」という設問では、脅威なし条件よりも脅威あり条件のほうが出来ていないと答えていた ( $M_s=4.67, 1.83; t(22)=34.93, p<.001$ )。これらの結果は、脅威の操作が正しく認識されていたことを示すものである。また、実験後に真の実験目的に気づいたと報告した参加者はいなかった。

**潜在的態度の効果** 算出された平均反応時間を従属変数とした。実験 4 と同様に、平均反応時間を従属変数として、自尊心(連続量)×脅威(あり vs.なし, 参加者間要因)×IATタイプ(一般的偏見 SC-IAT vs. ステレオタイプの偏見 SC-IAT, 参加者内要因)×ブロック(男性ポジティブ・ブロック vs.男性ネガティブ・ブロック, 参加者内要因)自尊心×脅威×IATタイプ×ブロックを要因とした一般線形モデルを用いた分析を行った。その結果、IATタイプ×ブロックの交互作用のみが有意だった( $F(1,36) = 5.58, p<.05$ )。この効果を詳しく見るため、Bonferroni法を用いて、IATタイプごとのブロックの効果を見たところ、一般的態度 IAT においては、男性ポジティブ・ブロックへの反応 ( $M=2.75$ ) のほうが、男性ネガティブ・ブロックへの反応 ( $M=2.76$ ) より速い傾向が見られた ( $p<.05$ )。対して、ステレオタイプの態度 IAT においては、男性ポジティブ・ブロックと男性ネガティブ・ブロックへの反応との間に有意な差はみられなかった ( $M_s=2.76, 2.76; ns$ )。これは、男性のステレオタイプに関連したポジティブ刺激項目を用いた IAT における効果が、一般的なポジティブ刺激項目を用いた IAT における効果よりも、小さくなることを示している。そのほかの効果は、脅威が関連する効果を含め、みられなかった ( $F_s<1$ )。Figure 2 には実験 1 と同様な自尊心×脅威の結果を示した。この結果は、自己価値への脅威は男性の潜在的な男性ポジティブ評価を増加させないことを示している。

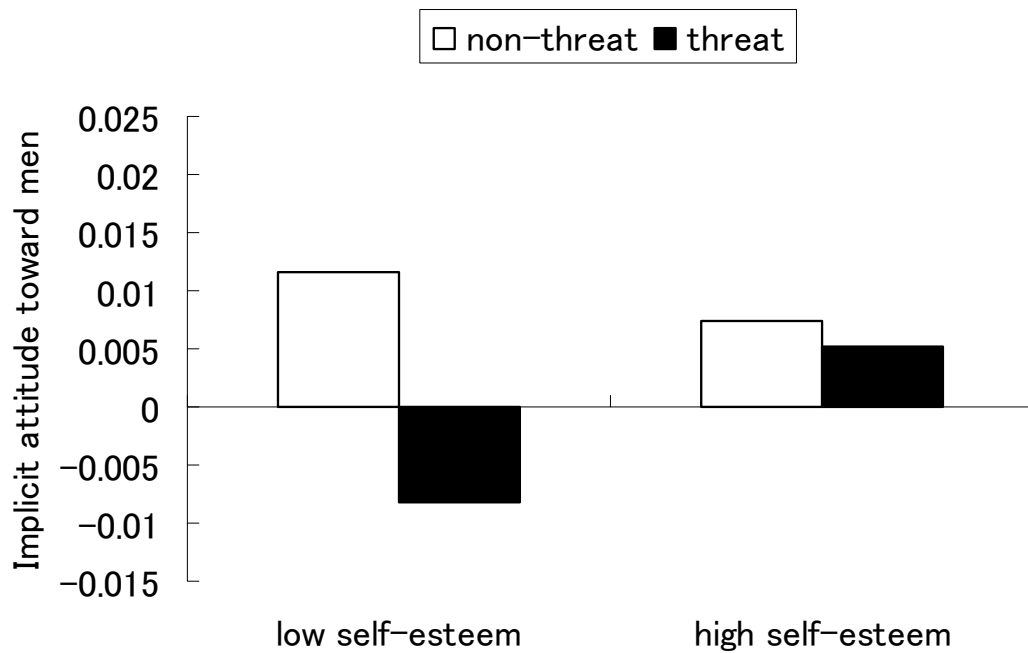


Figure 2. Implicit attitude to men as a function of threat and trait self-esteem (low self-esteem: -1SD, high self-esteem: 1SD). Implicit attitude to men means the association between men and positive attributes.

#### 考 察

実験 2 は、自己価値が脅威にさらされた男性において、男性という内集団にポジティブな属性を結びつけるという潜在的態度が生じるかを検討するものであった。脅威による男性への潜在的態度への影響は見られなかった。この結果は、自己価値への脅威下では、男性は内集団である男性に対してポジティブな属性を結びつけないことを示唆している。実験 2 の結果と実験 1 の結果をあわせて考えると、石井・沼崎(2011)においてみられた、自己価値への脅威下においてジェンダーに関する潜在的態度の集団間バイアスが増加したという効果は、男性に対するポジティブな態度の増加ではなく、女性に対するネガティブな潜在的態度の増加によってもたらされたということが考えられる。

#### 総合考察

本研究は、自己価値が脅威にさらされた男性において、女性という単一の対象にネガティブ評価概念を結びつける潜在的偏見が生じるかを検討するものであった。結果として、顕在的自尊心の高い男性において、ネガティブ・フィードバックを受けた場合に、ネガティブ評価概念を結びつける女性に対する潜在的偏見が生じるが、顕在的自尊心の低い男性においてはそうした影響が生じないことが示された。この結果は、少なくとも顕在的自尊心の高い男性において、自己価値への脅威が女性への潜在的偏見を生じさせることを示している。顕在的自尊心の高い男性は、肯定的な自己イメージを強くもつために、ネガティ

ブ・フィードバックによって自己イメージが脅かされたと感じやすく、そのため自己価値を防衛する反応として外集団をより否定的に評価したことが考えられる。先行研究では、顕在的自尊心の高い人は、脅威下におかれたときに、顕在的態度における内集団バイアスを生じさせることが示されてきた(Crocker *et al.*, 1987)。特に本研究の結果は、そうした影響が顕在的偏見だけではなく、潜在的偏見においても生じることを示している。一方で、顕在的自尊心の低い男性は、もともと自己イメージを低く認知しているために、ネガティブ・フィードバックを受けても自己価値への脅威と感じにくく、自己防衛のための反応としての潜在的偏見が生じにくかったのだと考えられる<sup>4</sup>。

本研究の結果は、石井・沼崎(2011)においては明確ではなかった、女性に対する潜在的偏見が脅威下では強まることを明らかにしたといえる。特に重要な結果は、顕在的自尊心の高い男性は、脅威にさらされていないときには、女性に対する潜在的偏見をみせなかったが、自己価値への脅威下においては、女性に対する潜在的偏見をみせるようになっていたことである。これは、通常では女性に対する潜在的偏見が生じていなくても、自己価値への脅威下ではそれが強く生じ得ることを示している。先行研究ではマイノリティ外集団のような、もともと潜在的偏見が強くもたれる外集団に対して、自己価値への脅威下においてはより強い潜在的偏見がもたれることが示されてきたが、この結果から、それほど潜在的偏見がもたれていない外集団に対しても、脅威下では潜在的偏見がもたれ得ることが示唆される。

脅威による効果には、石井・沼崎(2011)と同様に、潜在的偏見と潜在的ステレオタイプの偏見の違いはみられなかった。すなわち、脅威による潜在的偏見への影響は、女性と一般的なネガティブ評価概念との結びつきと、女性とステレオタイプと関連したネガティブ評価概念との結びつきとで異ならなかった。このことから脅威にさらされた男性において、女性と一般的なネガティブ評価概念の結びつきと、ステレオタイプのネガティブ評価概念との結びつきという両方の潜在的偏見が強まることが考えられる。ただしこの効果については、本研究の手続き的な点から別の説明可能性も考えられる。それは、常にステレオ

---

<sup>4</sup>本研究はフィードバックの操作として、課題の難易度を変えるという方法も用いた。このため、フィードバックあり条件で困難な課題をしたことによって制御資源枯渇(Baumeister, Bratslavsky, Muraven, & Tice, 1998)が生じ、潜在的偏見が強まった可能性も考えられよう。ただし、いくつかの理由でこの可能性は低いと考えられる。まず、制御資源枯渇が生じた場合には、あらかじめ顕著であった反応がより顕著となると考えられることである。もし、もともとあった潜在的偏見がより顕著にみられるようになったならばそうした可能性は考えられる。しかし、自尊心高条件の結果のパターンをみると、フィードバックなし条件では潜在的偏見はみられず、かつ有意ではないものの数値的には負の値というポジティブな潜在的態度がみられた。そしてフィードバックあり条件においては、そうした傾向から一転して、潜在的偏見が強くみられるようになった。すなわち、もともとみられなかった自動的反応が、操作によって生じるようになった。こうしたように、もともとの反応とはベレンスの異なる反応が生じたため、制御資源枯渇とは異なる要因による影響と考えられる。また、自尊心の調整効果があることから、制御資源の枯渇による影響とは考えにくい。

タイプの偏見 SC-IAT を先に行い、一般的偏見 SC-IAT を後に行ったことによって、脅威によって潜在的ステレオタイプの偏見が生じ、そのことが一般的潜在的偏見の増加につながった可能性である。石井・沼崎(2011)では、順序のカウンター・バランスをとっているため、この可能性は低いものの、否定はできないため、測定の順序を入れ替えることによって検討する必要があるだろう。

#### 今後の方向性

本研究は男性の女性に対する潜在的偏見を取りあげることで、もともと潜在的偏見がもたれない外集団に対しても、脅威下においては潜在的偏見がもたれ得ることを議論した。女性には好意的なステレオタイプがもたれる側面もあるが、キャリア場面などにおいて、偏見や差別的処遇を向けられ否定的に評価され得る面もある。そうしたネガティブな側面も女性にはあるために、男性において女性に対する偏見が生じやすかった可能性はある。脅威下において潜在的偏見が生じる現象が、一般的に生じるかを確かめるためには、他のさまざまな集団関係も取り上げ、適用可能性を検討する必要があるだろう。

また本研究は、自己価値への脅威にさらされた男性において、女性に対する潜在的偏見が生じることを示した。逆に、女性が自己価値への脅威にさらされたときにも、男性に対する潜在的偏見が生じる可能性がある。ただし、現代においても残る男尊女卑という価値観から、男性のほうが女性よりも、異性を否定的に評価することで自己高揚感を覚えやすく、偏見を自己高揚方略としても用いやすいのかもしれない。今後の研究では、脅威下における自己高揚方略の男女差について検討すべきだろう。

脅威によって生じた潜在的偏見が、どのように顕在的な偏見や差別的行動に影響を与えるかは検討すべきだろう。Sinclair & Kunda(2000)は、女性に対する顕在的態度が、自己価値への脅威下において否定的となることを示している。特に女性に対する顕在的偏見や差別的行動は、アンビバレントで微妙な形態をもつことが多い (Glick & Fiske, 1996, 2001)。今後は潜在的偏見と顕在的偏見の両方を測定することで、その関係性について明らかにしていく必要があるだろう。

本研究は、顕在的自尊心の高さについて考慮し、高い顕在的自尊心をもつ場合に、脅威を受けることで潜在的偏見が生じることを示した。しかし、高い顕在的自尊心をもつ人の中でも、潜在的自尊心の傾向が異なれば、脅威による影響が異なる可能性が指摘されている (Jordan, Spencer, Zanna, Hoshino-Browne, & Correll, 2003; Jordan, Spencer, & Zanna, 2005)。潜在的自尊心とは、非意識的に自己とポジティブさを結びつける傾向のことをさす (Greenwald & Banaji, 1995)。Jordan *et al.*(2005)は、顕在的自尊心は高いが潜在的自尊心が低い場合には、脅威によって外集団に対する差別行動が生じるが、顕在的自尊心と潜在的自尊心がともに高かった場合は、脅威にさらされたとしても差別行動が生じないことを示している。こうした潜在的自尊心と顕在的自尊心の効果は、潜在的偏見にも影響を及ぼす可能性がある。今後の研究においては、顕在的自尊心のみではなく、潜在的自尊心の高さ

も考慮することによって、人が脅威に対してどのように対処するのかについての、詳細な検討をする必要があるだろう。

## 引用文献

- Amodio, D. M., & Devine, P. G. (2006). Stereotyping and evaluation in implicit race bias: Evidence for independent constructs and unique effects on behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **91**, 652-661.
- Bargh, J. A., Chaiken, S., Govender, R., & Pratto, F. (1992). The generality of the automatic attitude activation effect. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**, 893-912.
- Baumeister, R. F., Bratslavsky, E., Muraven, M., & Tice, D. M. (1998). Ego depletion: Is the active self a limited resource? *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1252-1265.
- Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, **103**, 5-33.
- Brewer, M. B. (1999). The psychology of prejudice: Ingroup love or outgroup hate? *Journal of Social Issues*, **55**, 429-444.
- Crocker, J., & Park, L. E. (2004). The costly pursuit of self-esteem. *Psychological Bulletin*, **130**, 392-414.
- Crocker, J., Thompson, L. L., McGraw, K. M., & Ingerman, C. (1987). Downward comparison, prejudice, and evaluations of others: Effects of self-esteem and threat. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 907-916.
- Devine, P. G. (1989). Stereotypes and prejudice: Their automatic and controlled components. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 5-18.
- Dovidio, J. F., & Gaertner, S. L. (Eds.) (1986). *Prejudice, discrimination, and racism*. New York: Academic Press.
- Fazio, R. H., Sanbonmatsu, D. M., Powell, M. C., & Kardes, F. R. (1986). On the automatic activation of attitudes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 229-238.
- Fein, S., Hoshino-Browne, E., Davies, P. G., & Spencer, S. J. (2003). Self-image maintenance goals and sociocultural norms in motivated social perception. In S. J. Spencer, S. Fein, M. Zanna, & J. M. Olson (Eds.), *Motivated social perception: The Ontario symposium*. Vol. 9. Mahwah, NJ: Erlbaum. pp. 21-44.
- Fein, S., & Spencer, S. J. (1997). Prejudice as self-image maintenance: Affirming the self through negative evaluation of others. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 31-44.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (1996). The Ambivalent Sexism Inventory: Differentiating hostile

- and benevolent sexism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 491-512.
- Glick, P., & Fiske, S. T. (2001). Ambivalent sexism. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology*. Vol. 33. Thousand Oaks, CA: Academic Press. pp. 115-188.
- Govorun, C. L., & Williams, K. D. (2004). Changing the affective valence of the stimulus items influences the IAT by re-defining the category labels. *Journal of Experimental Social Psychology*, **40**, 357-365.
- Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. (1995). Implicit social cognition: Attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, **102**, 4-27.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1464-1480.
- Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003). Understanding and using the Implicit Association Test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 197-216.
- Hogg, M. A., & Abrams, D. (1988). *Social identifications: A social psychology of intergroup relations and group processes*. London: Routledge.
- 星野 命 (1970). 感情の心理と教育 児童心理, **24**, 1445-1477.
- Inquisit 2.0.61004.3 [Computer software]. (2006). Seattle, WA: Millisecond Software.
- 石井国雄・沼崎 誠 (2009). ジェンダー態度 IAT におけるステレオタイプの刺激項目の影響 社会心理学研究, **25**, 53 - 60.
- 石井国雄・沼崎 誠 (2011). 自己価値への脅威が男性のジェンダーに関する潜在的態度に及ぼす影響 社会心理学研究, **27**, 24 - 30.
- Jordan, C. H., Spencer, S. J., & Zanna, M. P. (2005). Types of high self-esteem and prejudice: How implicit self-esteem relates to racial discrimination among high explicit self-esteem individuals. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **31**, 693-702.
- Jordan, C. H., Spencer, S. J., Zanna, M. P., Hoshi-no-Browne, E., & Correll, J. (2003). Secure and defensive high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 969-978.
- Jost, J. T., Pelham, B. W., & Carvallo, M. (2002). Non-conscious forms of system justification: Cognitive, affective, and behavioral preferences for higher status groups. *Journal of Experimental Social Psychology*, **38**, 586-602.
- Karpinski, A., & Steinman, R. B. (2006). The single category implicit association test as a measure of implicit social cognition. *Journal of Personality and Social Psychology*, **91**, 16-32.



- Nosek, B. A., Banaji, M. R., & Greenwald, A. G. (2002). Harvesting implicit group attitudes and beliefs from a demonstration website. *Group Dynamics*, *6*, 101-115.
- Petty, R. E., Fazio, R. H., & Briñol, P. (Eds.). (2009). *Attitudes: Insights from the new implicit measures*. New York: Psychology Press.
- Rudman, L. A., & Goodwin, S. A. (2004). Gender differences in automatic ingroup bias: Why do women like women more than men like men? *Journal of Personality and Social Psychology*, *87*, 494-509.
- Sinclair, L., & Kunda, Z. (1999). Reaction to a black professional: Motivated inhibition and activation of conflicting stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, *77*, 885-904.
- Sinclair, L., & Kunda, Z. (2000). Motivated stereo-typing of women: She's fine if she praised me but incompetent if she criticized me. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *26*, 1329-1342.
- Spencer, S. J., Fein, S., Wolf, C., Fong, C., & Dunn, M. (1998). Stereotype activation under cognitive load: The moderating role of self-image threat. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *24*, 1139-1152.
- Tajfel, H. & Turner, J. C. (1979). An Integrative Theory of Intergroup Conflict. In W. G. Austin & S. Worchel (Eds.), *The Social Psychology of Intergroup Relations*, (pp. 33-47). Monterey, CA: Brooks-Cole .
- Taylor, S. E., & Lobel, M. (1989). Social comparison activity under threat: Downward evaluation and upward contacts. *Psychological Review*, *96*, 569-575.
- Wittenbrink, B., Judd, C. M., & Park, B. (1997). Evidence for racial prejudice at the implicit level and its relationship with questionnaire measures. *Journal of Personality and Social Psychology*, *72*, 262-274.
- Wittenbrink, B., Judd, C. M., & Park, B. (2001). Evaluative versus conceptual judgments in automatic stereotyping and prejudice. *Journal of Experimental Social Psychology*, *37*, 244-252.

## 17章 男女の顕現性が脅威下における潜在的偏見に及ぼす効果<sup>1</sup>

石井 国雄 沼崎 誠

(首都大学東京大学院人文科学研究科)

多くの研究は、自己価値への脅威下においては、外集団への偏見が生じやすくなることを示している (Crocker, Thompson, McGraw, & Ingerman, 1987; Fein & Spencer, 1997)。自己価値への脅威下では、自己高揚動機が強く生じ、自我を防衛する反応が生じる。外集団を否定的に評価することは、内集団価値の高揚や下方比較を通して、自己価値の高揚につながる。そのため、脅威下では外集団に対する否定的な評価、すなわち偏見が生じやすくなるのである。とくに近年の研究は、脅威下における外集団への偏見の発生は自動化されており、外集団との単純な接触が否定的評価を非意識的に活性化させることを示している (石井・沼崎, 2011, 印刷中; Sinclair & Kunda, 1999; Spencer, Fein, Wolfe, Fong, & Dunn, 1998)。脅威下において自動的に外集団偏見が生じることを想定すると、その本質的な解決には脅威下において活性化を生じさせなくする方法を見出す必要があるだろう。本研究は、自己価値への脅威下における自動的偏見の増強効果の低減のための認知方略を検討した。とくに、その視点として内外集団カテゴリの顕現性の低減を取り上げた。

### 自己価値への脅威と自動的偏見

脅威下における外集団への自動的偏見の増強効果を示した研究として、Spencer *et al.* (1998, study 1) の実験がある。まず、参加者は知的テストに取り組み、その後、結果のフィードバックが与えられた。結果の出来は操作してあり、脅威あり条件の参加者にはネガティブなフィードバックが与えられた。その後、活性化の測定として、単語完成課題が行われた。その際、アジア系アメリカ人女性またはヨーロッパ系アメリカ人女性が語幹の書かれたフリップを持っているビデオテープが呈示され、参加者はそのフリップから連想される単語を記述した。語幹には、アジア人のステレオタイプが連想できるものが含まれていた (e.g., s\_y (shy), n\_p (nip), poli\_e (polite))。なお、活性化が測定される際、参加者には認知負荷がかけられていた。これは認知負荷の状況においては概念の活性化が生じにくいという知見から (Gilbert & Hixon, 1991)、活性化が生じにくい状況においても脅威の影響があると活性化が生じるようになるかを検討するためである。その結果、脅威にさらされていない参加者においてはビデオに登場した女性の人種の違いによるステレオタイプ関連語の完成数の違いはみられなかった。それに対して、脅威にさらされた参加者においては、アジア系アメリカ人女性がフリップを持っていた場合に、ステレオタイプ関連語の完成数が有意に多かった。さらにこの効果は、否定的なバイレンスを持ったステレオタイプ

---

<sup>1</sup>成果の一部は The 10th annual meeting of SPSP. (Tampa, Florida)において発表した。

関連語においてのみみられた。この結果は、認知負荷がある場合でも、自己価値への脅威下では、否定的なステレオタイプの活性化が促進されることを示している。同様の結果は、外集団の呈示が関下で行われた場合にも生じていた (Spencer *et al.*, 1998, study 3)。さらに、脅威による否定的な概念の活性化の増強効果は、マイノリティ外集団 (アジア人、黒人) のようにもともと否定的な態度が強く持たれる集団に対してだけでなく、それほど否定的な態度が強くもたれない外集団への態度 (男性による女性に対する自動的態度) においても生じることが示されている (石井・沼崎, 2011, 印刷中)。

こうしたように自己価値への脅威は外集団への否定的評価の活性化に強く影響し、さまざまな外集団に対して広範に生じる。また、脅威下における否定的概念の活性化の強まりは、後続の意識的な偏見の適用および差別的な行動にも影響を及ぼすことが示されており (Spencer, Fein, Straham, & Zanna, 2004)、実際の判断にも悪影響を及ぼす可能性がある。近年の研究は自動的偏見の抑制について多く検討しているが (Dasgupta & Greenwald, 2001; Kawakami, Dovidio, Moll, Hermsen, & Russin, 2000)、脅威下における自動的偏見の増強効果のように、動機づけられた状況での自動的偏見を低減する方略についてはまだ研究は少ない。

#### 外集団偏見と自己高揚

脅威下における外集団との接触が自動的偏見を生じさせる重要な理由は、脅威下では外集団の評価を低めることが脅かされた自己価値を肯定化することにつながることである (Fein, Hoshino-Browne, Davies, & Spencer, 2003)。人は他者をけなしたり低く評価したりすることによって自己高揚感を感じることがあり、その現れかたは状況において異なる。とくに外集団との接触する状況では、その形態は社会的比較や集団間バイアス、否定的なステレオタイプなど外集団に対する否定的反応となるのである。自己価値への脅威は自己高揚のための動機づけを高め、自己肯定化のための反応を生じさせるが (Steele, 1988; Steele, Spencer, & Lynch, 1993)、外集団への偏見もこうした自己高揚機能から脅威下で生じるのである。実際、Fein and Spencer (1997)は、脅威下において外集団に対する顕在的偏見が強く生じること、そして偏見が強く生じるほど状態自尊心が回復することを示している。Spencer *et al.* (1998) は、こうした脅威下における外集団偏見は習慣的な経験を通して自動化されるとしている。人々は頻繁に外集団をけなすことによって自己高揚を感じており、偏見を自己高揚の手段として用いている。こうした経験が積み重ねられることによって、自己高揚目標と外集団偏見が連合するようになる。その結果、自己高揚に動機づけられたときに外集団と接触すると、自動的に偏見が生じるようになるようになるのである。

こうした自己高揚的な偏見を低減する要因として、これまでの研究では個人の特性として安定的な自尊心を持つこと (Jordan, Spencer, Zanna, 2005) や脅威を受ける前に自己肯定化を行っておくこと (Fein & Spencer, 1997) など、脅威にさらされる前に、あらかじめ自己価値を高めておくといった手段が検討されてきた。こうしたアプローチは有効な手段

であるが、現実的な実施にはいくつか問題点が考えられる。たとえば安定的な自尊心を個人に形成させることには、多くの時間と努力が必要と考えられる。また、自己肯定化操作は、基本的に脅威を受ける前に実施する方略であるが、現実では思いもよらぬ形で脅威が生じる可能性があり、必ずしも事前に実施ができるとは限らない。とくに脅威を受けた事後になされた自己肯定化操作は、逆に防衛的バイアスを増加させうることを示す研究もある (Critcher, Dunning, & Armor, 2010)。このように考えると、このように考えると、脅威下における偏見の増強を避けるための、他の方略を見出すことは重要だろう。そこで本研究は、内外集団カテゴリーの顕現性という視点から、脅威による外集団に対する否定的な評価の活性化の増強効果を低減させる認知方略を検討した。

### 内外集団カテゴリーの顕現性と脅威下における偏見

脅威下での外集団接触は偏見を自動的に生じさせるとしたが、偏見が生じない場合もあることを示す研究も報告されている。たとえば、Florack, Scarabis, and Gosejohann (2005) は、内集団アイデンティティが弱い参加者においては脅威下において外集団に対する顕在的偏見が強まらないことを示している。彼らは、脅威下における外集団 (ポーランド人) への偏見の強さと内集団 (ドイツ人) アイデンティティの強さとの関係を検討した。ドイツ人参加者に困難なテスト (vs. 容易なテスト) を受けさせることによって自己価値への脅威にさらした後、内集団アイデンティティの強さを評定し、外集団ターゲットに対する顕在的態度を測定した。その結果、内集団アイデンティティの弱い参加者は、内集団アイデンティティの強い参加者と比べて、脅威下において外集団成員へのネガティブな顕在的態度が弱かった。ドイツ人にとってポーランドは近隣の国であり、頻繁に社会的比較の対象として用いられていると考えられる。そのためポーランドの評価を貶めることはドイツの評価を高めることと関連すると考えられる。とくにドイツ人としての内集団アイデンティティ高い人は、ドイツの評価を高めることによって自己高揚をより感じやすいと考えられるため、ポーランドを貶め、ドイツの評価の高揚させることで、自己高揚を感じていると考えられる。つまり、ドイツ人としての内集団アイデンティティの高い人においては、ポーランド人への偏見が自己高揚的な機能を果たしうると考えられる。一方で、内集団アイデンティティの低い人は、ドイツの評価を高めることが自己評価を高めることに関連しないため、ポーランド人の評価を低めることが自己高揚的な機能を持たないのだと考えられる。つまり、Florack *et al.* (2005) の結果から、外集団偏見はどのようなときでも自己高揚につながるわけではなく、当該の外集団の評価を低めることが自己高揚につながる時にのみ、自己高揚につながるが考えられる。こうした考えは、当該の外集団への評価が自己評価と結びつきにくい状況ならば、脅威下においても偏見が生じないであろうという考えを導く。Florack *et al.* (2005) は、顕在的偏見を検討しており、また個人差としての内集団アイデンティティを検討しているため、自動的偏見に及ぼす影響や具体的なプロセスは明らかではなく、詳細な検討は必要と考えられる。

ならば、どのように外集団への評価が自己評価と結びつく認知を生じさせられるだろうか。一つの可能性は、内外集団カテゴリの顕現性を操作することである。カテゴリの顕現性とは、ある状況において特定の社会的カテゴリが活性化し、注意をひきつける程度のことをさす (Gaertner, Mann, Murrell, & Dovidio, 1989)。とくに内外集団カテゴリの顕現性を強めることは、当該の内集団カテゴリに沿った自己カテゴリ化を強めることで内集団へのアイデンティフィケーションを生じさせ (e.g., Turner, Hogg, Oakes, Reicher, & Wetherill, 1987)、内外集団間の評価的な差異を広げるよう動機づけさせる (Gaertner *et al.*, 1989; James & Greenberg, 1989)。社会的アイデンティティ理論は、内外集団に関する区別がわずかに呈示されただけでも、こうした集団間バイアスが生じることを示している (Tajfel & Turner, 1979)。逆に内外集団の顕現性を低めることは集団間バイアスの低減につながる (Gaertner *et al.*, 1989)。たとえば、Gaertner *et al.* (1989) は、2つの集団の間に共通の上位カテゴリを知覚させた場合には、当該の内集団と外集団のカテゴリの顕現性が低まり、集団間バイアスが低減することを実証的に示している。内外集団の顕現性が弱まることは、自己カテゴリ化における当該の内外集団に関わるアイデンティフィケーションの重要性を弱め、内外集団に関する評価と自己評価との関連性を弱めると考えられる。

こうしたことから内外集団カテゴリの顕現性を操作することにより、内外集団に関する評価と自己評価との関連性を変化させることは可能と考えられる。とくに、内外集団の顕現性を低めた場合には、当該の外集団の評価の重要性が低まり、外集団への偏見が自己高揚的な機能を果たしにくくなるために、脅威下であっても当該の外集団偏見は生じないと考えられる。そこで本研究は内外集団カテゴリの顕現性の低減が、脅威による自動的偏見の増強効果を弱めるかを検討した。

#### 男性による女性に対する自動的偏見

本研究は、内外集団カテゴリとして男女カテゴリを取り上げ、男性におけるジェンダーに関する自動的態度を検討した。男性における男女に関する自動的態度は、黒人やゲイなどといったマイノリティ外集団への自動的態度と異なり、外集団（女性）に対する否定的なバイアスが生じにくいことが指摘されている (Rudman & Goodwin, 2004; 石井・沼崎, 2009)。否定的なバイアスが弱い理由として、Rudman and Goodwin(2004)は、男性は記憶において、女性を母親イメージや異性と結びつけ、また同性である男性を脅威と結びつけているために、男女に関する自動的態度の内集団バイアスが生じにくいことを指摘している。

しかしその一方で、自己価値への脅威にさらされた男性においては、女性と否定的評価を結び付ける自動的偏見が生じることが示されている (石井・沼崎, 2011, 印刷中)。石井・沼崎 (2011) は、男性を参加者とし、テストのネガティブ・フィードバックを与えることによって脅威を与えた後に、IATを用いて男女のいずれをより否定的概念と結びつけるかを測定した (ジェンダーに関する自動的態度の集団間バイアス)。その結果、脅威にさらさ

れなかった男性においては集団間バイアス反応は見られなかったが、脅威にさらされた男性においては、男よりも女を否定的概念を結びつける傾向が強くみられた。また石井・沼崎 (印刷中)は、こうした集団間バイアスから男性への態度の成分を取り除き、女性単独に対する自動的態度を測定した場合にも、同様に女性を否定的概念と自動的に結びつける傾向が生じることを示した。こうした態度の状況的な違いは、男性にとって女性は異性愛の対象として賞賛すべき対象である一方で (Eagly & Mladinic, 1989)、高い達成が求められる状況においては低い価値を持つものとしてもとらえているといったように両面価値的な態度が持たれること (e.g., Glick & Fiske, 1996) が関わると考えられる。脅威下におかれた男性における、女性に対する偏見の増加は、顕現性の低減によって解消することができるかを検討するために、本研究は男女カテゴリの顕現性の操作による影響を検討した。

### 本研究の概要

男女カテゴリの顕現性を低める操作を行った男性参加者において、高める操作を行った参加者と比べて、自己価値への脅威による女性に対する自動的偏見の増強効果が弱くなるかを検討することを目的とした。

**カテゴリ顕現性の操作** 男女カテゴリの顕現性を低める操作として、別の集団カテゴリ (年齢カテゴリ) とのカテゴリ交差を行う方法を用いた。カテゴリ交差とは、社会的判断の際に、二つのカテゴリ次元を呈示する方法である (レビューとして、Crisp, Ensari, Hewstone, & Miller, 2002; Crisp & Hewstone, 1999)。この方法は、あるひとつのカテゴリでの分化をもうひとつのカテゴリでの共通性によって対抗するものである。たとえば、男女カテゴリとともに年齢カテゴリを顕現化させた場合には、内外集団を男女カテゴリ単独では区別しにくくなる。なぜならば若者男性と若者女性といったように、男女カテゴリにおける外集団の中に、年齢カテゴリにおける内集団が存在するようになるためである。本研究では、男女カテゴリの顕現性を低減するために年齢カテゴリ (若者-高齢者) の顕現性を高める条件 (顕現性低条件) と、男女カテゴリの顕現性のみを高める条件 (顕現性高条件) を設定した。

**閾下評価プライミング課題** 本研究は、閾下評価プライミング課題を用い (Wittenbrink, Judd, & Park, 1997; also Wittenbrink & Schwartz, 2007)、自動的偏見を測定した。評価プライミング課題は、態度対象のプライミングが、評価概念の活性化を生じさせるかを測定する。態度対象に関連した単語 (女性、男性) をプライム刺激として短い時間呈示し、その後、ポジティブあるいはネガティブ単語を呈示し、ターゲット刺激への評価的判断を行わせた (ポジティブ vs.ネガティブ)。態度対象の単語のプライミングは、態度対象に関連付けられている評価を活性化させ、後続の評価判断に影響を与える。もし、ある態度対象とネガティブな概念が結びつけられていたならば、ネガティブな単語への反応が促進され、ポジティブな単語への反応が抑制される。本研究は、男女に関するプライム刺激の呈示が、評価的な概念を活性化させるかを検討した。また脅威による影響は内集団に対する

態度にも影響を及ぼす可能性もあるため、男性プライムも呈示し、男性との接触による評価概念の活性化も検討した。ただし、男性に関する評価は内集団への評価であり、自動的偏見（外集団に対する否定的評価）とは言えないため、今後、男性と女性の双方への評価を含めた議論をする際には自動的態度という用語を用いる。

また重要なこととして、内外集団に関する意識的な処理を完全に除去することを目的として、プライム刺激を閾下で呈示した。内外集団に関するプライムを閾上で呈示してしまうと、参加者はプライムについて何らかの懸念を持つかもしれない。たとえば、実験において男女についての評価を測定していると考え、男女カテゴリの顕現性を高めてしまう可能性がある。そのため、本研究ではすべてのプライム刺激は閾下で呈示することで、男女に関する意識的な処理をさせないようにした。

**仮説** 顕現性は脅威による自動的態度への影響を調整すると考えられる。顕現性高条件においては、脅威あり条件のほうが脅威なし条件よりも、女性に対する自動的態度は否定的となるだろう。一方で、顕現性低条件においては、脅威あり条件と脅威なし条件の間に、女性に対する自動的態度の差はみられないだろう。また、男性に関する態度についても、同様なパターンが考えられる。顕現性高条件においては、脅威あり条件のほうが脅威なし条件よりも、男性に対する自動的態度は肯定的となるだろう。一方で、顕現性低条件においては、脅威あり条件と脅威なし条件の間に、自動的態度の差はみられないだろう。

## 方 法

**実験参加者** 首都大学東京または東京都立大学の男子学生 44 名が参加した。実験に参加し、参加レポートを提出することにより一般教養科目「心理学」の授業の加点をされることが予告されていた。2（脅威あり vs. なし）×2（顕現性高 vs. 顕現性低）の条件にランダムに割り当てた。

**装置と刺激項目** 実験に使用した装置は TOSHIBA 製のノート PC の dynabook AX/650LS と 17 インチの CRT モニターであった。実験刺激の呈示とデータ収集は Inquisit software package (version 2.0, Millisecond Software) を用いて制御した。モニターの解像度は 1024 x 768 ピクセルに設定した。すべての文字刺激項目は 49 ポイントの MS ゴシック・フォントで呈示した。

カテゴリ分類課題には、男性若者、女性若者、男性高齢者、女性高齢者の 4 タイプの写真刺激項目を用いた。各タイプに 10 枚の写真を用意した。これらの写真は事前に行われた調査（若者に見えるか、高齢者に見えるか）に基づいて選択した。

評価プライミング課題においては、プライム刺激項目およびターゲット刺激項目に文字刺激を用いた。プライム刺激には女性プライム、男性プライムと無関連プライムの 3 タイプを用い、女性プライムとして“おんな”、男性プライムとして“おとこ”、無関連プライムとして“ひと”を用いた。ターゲット刺激には、ポジティブ語とネガティブ語の 2 タイ

プの文字刺激項目を用いた。ポジティブ語には、輝かしい、元気、最高、見事な、すばらしい、正当、良い、正しい、好き、うれしい、喜び、幸運な、きれい、あたたかい、明るい、おもしろい、快い、積極的、の 18 語、ネガティブ語には、痛ましい、ひどい、最低、悪い、失敗、不当、不正、劣っている、間違い、不快、嫌い、吐き気、不運な、きたない、つめたい、いじわる、つまらない、暗い、の 18 語を用いた。

### 手続き

実験は1人ずつ個別に行った。まず参加者には2つの異なる実験が行われると説明した。最初に性格と思考能力を測定するテストの妥当性の検証のための実験を行い、次に認知判断に関連する実験を行うと説明した。実験に関する注意事項を説明した上で、参加に承諾する場合には同意書に記入させた。

**テストの実施および顕現性の操作** 自己価値への脅威は、石井・沼崎 (2011, 印刷中) と同様に、テストのネガティブな結果のフィードバックを行うことによって操作した。フィードバックは、思考能力と対人能力という2つの領域についてネガティブな結果を与えるというものであった。ネガティブ・フィードバックを受ける条件（脅威あり条件）と受けたくない条件（脅威なし条件）を設定した。まず、PC上で性格検査、カテゴリ分類課題、思考能力テストという3つのテストを行った。これらのうち、カテゴリ分類課題は顕現性の操作のために行った。最初に、性格検査を行った。性格検査は、文章を呈示し、5件法での回答を求めるものであった。

次にカテゴリ分類課題を行った。この課題では、まず人物の顔写真が画面の四隅のいずれかに呈示された。呈示された顔写真は、男性若者、女性若者、男性高齢者、女性高齢者の4タイプのいずれかのカテゴリに属していた。参加者には呈示された写真の人物が属するカテゴリについて2択で判断させ、キー押しをさせた。判断するカテゴリは条件ごとに異なっていた。高顕現性条件の参加者には男女のカテゴリに基づいて判断するように求め、写真の人物が自分と同じ性別であったらFキー、異なる性別であったらJキーを押すように求めた。一方、低顕現性条件の参加者には年齢カテゴリに基づいて判断するように求め、写真の人物が自分と同じ年齢であったらFキー、異なる年齢であったらJキーを押すように求めた。キー押しをすると800msの間隔をおいて次の試行となった。試行セッションは、練習セッションと本試行セッションの2つに分かれており、ともに同じ課題が行われた。練習セッションは8試行、本試行セッションは120試行であった。

3つ目に思考能力テストを行った。このテストでは図形に関するパズル問題を呈示した。この思考能力テストについては、条件ごとに難易度が異なっていた。フィードバックなし条件では、参加者は、難易度の易しい問題を比較的長時間をかけて行うことができたが（1問ごとの制限時間が30秒）、フィードバックあり条件では、難易度の高い問題を短い時間で解かなければならなかった（1問ごとの制限時間が10秒）。

**脅威の操作** テストが終了した後、脅威の操作を行った。「性格検査は対人的な特性を、



カテゴリ分類課題と思考能力テストは仕事に関連した特性を測定しており、これらは将来の成功に関連する」とテストで測定される特性についての概説を行った。これは自己にとって重要な特性が測定されるという認識を促すためのものであった。その説明が終わった後、結果のフィードバックの操作を行った。フィードバックあり条件の参加者には、PCの画面上にテストの成績を表示することでフィードバックした。表示された結果は偽のネガティブな結果であり、E 評価 (A~F の間の評価で下から 2 番目) であり、これまでテストを受けた男性大学生「110 人中 85 位~104 位」に位置するというものであった。対して、脅威なし条件には、成績は次の実験後に返すと説明し、フィードバックを行わなかった。フィードバックに関する操作を行った後に、1 つ目の実験は終わりであると告げた。

**自動的態度の測定** 脅威の操作後、認知判断のテストと称して、閾下評価プライミング課題を行った。評価プライミング課題は、Wittenbrink *et al.* (1997) を参考に作成した。まずスクリーン上に注視点 (+) を 1000ms 呈示し、その後、男性プライム、女性プライムまたは無関連プライムのいずれかをプライム刺激として 17ms 呈示した。すべての試行においていずれかのプライム刺激は必ず呈示された。プライム刺激の直後に、視覚記憶への影響を取り除くために、マスク刺激 (#####) を 221ms 呈示した。マスク刺激の呈示後、34ms の間画面をブランクとした (SOA=272ms)。次に、ターゲット語を呈示した。ターゲット語としてポジティブ語・ネガティブ語のいずれかが呈示された。ターゲット語は 238ms 持続させ、その後消失させた。参加者には、ターゲット語が一般的な意味で好ましい単語か好ましくない単語であるかの判断を求め、ターゲット語が好ましい単語であったら F キー、好ましくない単語であったら J キーを押すように求めた。回答が正解であった場合は正解を示す記号 (“○”)、不正解であった場合には不正解を示す記号 (“×”) をそれぞれ 500ms 画面に呈示した。その後 800ms の試行間隔をおいて次の試行となった。

試行セッションは、練習セッションと本試行セッションの 2 つに分かれていた。練習セッションは課題に慣れてもらう目的で行った。練習セッションでは、常に無関連刺激項目をプライム刺激として呈示し、本試行セッションで用いない単語をターゲット語とした(幸福、不幸)。練習セッションは 8 試行行われた。

本試行セッションでは、プライム刺激として女性プライム、男性プライムと無関連プライムを呈示した。本試行セッションにおいて、それぞれのターゲット語は 1 回のみ呈示した。そのため各カテゴリのターゲット語 18 語のうち、それぞれのプライムに 6 語ずつ割り当てた。プライム刺激とターゲット語の組み合わせは参加者間で異なっており、実験スク립トを 3 パターン作成することにより、参加者間ですべてのプライムとターゲット語を対応させた。プライム刺激とターゲット語の組み合わせにはラテン方格を用いた。本試行セッションは 36 試行であった。

課題の終了後、プライム刺激への気づきに関する質問を行った。ターゲット語の呈示前に呈示された刺激は何であったかという質問項目に対して、自由記述させた。その後、参

加者に本当の目的を告げデブリーフィングを行った。デブリーフィングの最後には、本当の目的を聞いた上でデータの使用を承諾するかどうかを尋ね、承諾する場合には同意書を提出させた。

## 結 果

**プライム刺激および実験目的への気づき** ターゲット語の呈示前に呈示された刺激について尋ねたところ、マスク刺激の前に何らかの刺激が呈示されたと回答する参加者はいたものの、その刺激が何であるかを正確に回答できた参加者はいなかった。このため、自覚を伴わずにプライム刺激を呈示するという操作は成功していたと考えられる。また、実験後に真の実験目的に気づいたと報告した参加者はいなかった。

**従属変数の算出** 評価プライミング課題の反応時間を分析に用いた。まずそれぞれの参加者の平均反応時間と標準偏差を算出し、平均から 3SD 以上反応時間が長かった反応を外れ値として除外した。次に、誤反応を分析から除外した。それら除外した反応は全体の反応の 3.4%であった。次に、データの歪度を調整するために反応時間に対して対数変換を施した。この値を使って参加者ごとに 3 (プライム) × 2 (ターゲット感情価) ごとに平均反応時間を算出した。こうして算出された平均反応時間を用い、自動的態度の集団間バイアスを算出した。算出は Wittenbrink and Schwarz (2007) の方法に基づいた。まずポジティブ語、ネガティブ語それぞれにおいて、女性プライム・男性プライムそれぞれの平均反応時間を、無関連プライムの平均反応時間から減算し、ジェンダー・プライムによる促進量を算出した。次に、女性プライム、男性プライムそれぞれにおいて、ポジティブ語の促進量からネガティブ語の促進量を減算することで、男女それぞれに対する自動的態度を算出した。自動的態度の値は、態度対象のプライミングによって、ポジティブな概念の反応促進の方がネガティブな概念の反応促進よりも大きかったことを示しており、この値が大きいほど、当該の性別にポジティブさを結びつけていることになる。

**男女への自動的態度** 男女それぞれへの自動的態度の得点を従属変数とした 2 (脅威：参加者間) × 2 (顕現性：参加者間) × 2 (態度対象：女性態度 vs. 男性態度：参加者内) の混合 ANOVA を行った。すると、3 要因の交互作用のみが有意となった ( $F(1, 40)=4.37, p<.05$ , Figure 1)。そこで、男女それぞれの自動的態度に分けて脅威×顕現性の単純交互作用を検定した。すると、女性への自動的態度において有意に近い脅威×顕現性の交互作用がみられた一方で ( $F(1, 40)=3.22, p=.08$ )、男性への自動的態度においては有意な効果は見られなかった ( $F_s<1$ )。そこで女性への自動的態度における、顕現性条件ごとの脅威の影響を Bonferroni の方法を用いて検定したところ、顕現性高条件では脅威なし条件 ( $M=.026$ ) よりも脅威あり条件 ( $M=-.004$ ) のほうが女性への自動的態度が否定的になる一方で ( $p=.08$ )、顕現性低条件においては、脅威なし条件 ( $M=-.010$ ) と脅威あり ( $M=.002$ ) に差は見られなかった ( $ns$ )。また、脅威あり条件と脅威なし条件ごとに、女性への自動的態度に対する

顕現性の効果を検討したところ、脅威なし条件においては顕現性低条件よりも顕現性高条件のほうが自動的態度が肯定的となったが ( $p < .05$ )、脅威あり条件においては顕現性による差は見られなかった ( $ns$ )。

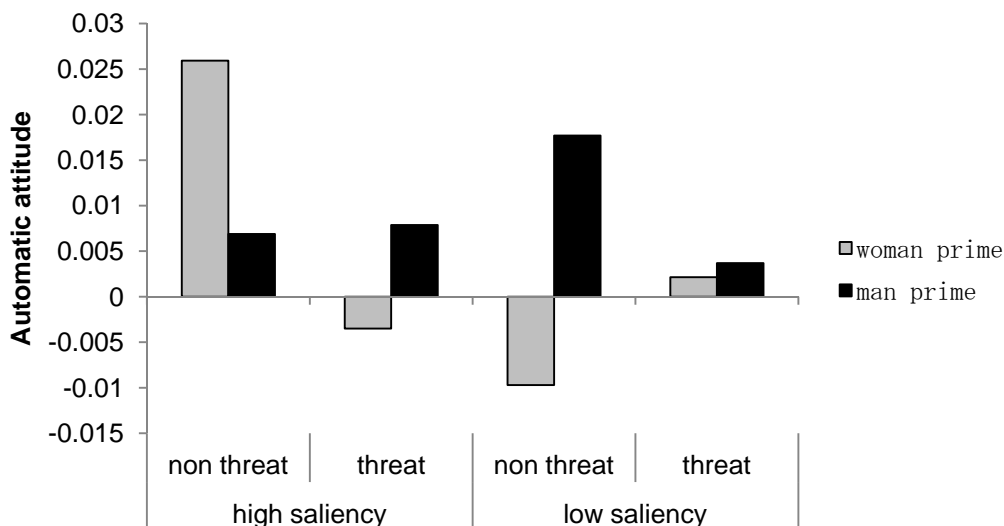


Figure 1. Automatic attitude as a function of saliency of gender category, threat, and prime gender. Higher score indicate that participants display more positive automatic attitude.

### 考 察

男女カテゴリの顕現性は、脅威による、女性に対する否定的な評価概念の活性化への影響を調整した。顕現性高条件では、脅威あり条件の男性は脅威なし条件よりも、女性に対する自動的態度がより否定的となる傾向がみられた。一方で顕現性低条件では、脅威によって女性に対する自動的偏見が強まる傾向は見られなかった。この結果から、男女に関わるカテゴリの顕現性を低めた場合には、脅威にさらされても女性に対する自動的偏見は強まらないことが示された。一方で、男性に対する自動的態度には顕現性および脅威による影響はみられなかった。

男女カテゴリの顕現性は男女カテゴリと自己評価との関連性に影響を与えることで、脅威下における自動的態度の現れかたに影響を及ぼしたと考えられる。社会的アイデンティティ理論 (Tajfel & Turner, 1979) は、内集団と外集団との区別の認知が、内外集団の評価的な差異を広げるような動機づけを生じさせるとしている。内外集団カテゴリの顕現性を高めることで区別を生じさせることは、当該の内外集団カテゴリに関する評価が自分評価と関連するという認知を生じさせる一方で、顕現性が低めることは、一時的に当該のカテゴリと自己評価との関連性を弱めると考えられる。人は自己価値を随伴する領域において最も自己高揚に動機づけられると考えたと (Crocker & Wolfe, 2001)、男女カテゴリの顕現

性が低まることで、一時的に男女の重要性が低まった顕現性低条件では、女性に対する偏見が自己肯定的な機能をもたなくなつたと考えられる。

また、男女に関する刺激は閾下で呈示されたものであり、非常に微妙な接触であつたことも注目すべきである。顕現性が高い場合には、閾下で呈示された外集団の刺激が評価概念の活性化に影響を与えた。これは、脅威下における自動的偏見を扱った先行研究における結果と一致するものであり、活性化が生じにくい状況であっても、脅威下では外集団との接触がより否定的な評価概念を活性化させる考えを支持するものである。一方で、顕現性が低い場合には外集団接触による影響が消失した。こうしたことから、脅威状況における顕現性の低減は、外集団に対する自動的な否定的処理を抑制しうることが示唆される。こうしたように、本研究における顕現性の低減方略は、脅威下における偏見の増強を避けるため認知方略として、状況的な効果が期待できる点で価値があるだろう。

ただし、本研究の結果における解釈の注意点として、顕現性の操作自体が、女性に対する自動的態度に影響を与えていたことがある。脅威がない状況において、顕現性を高めた条件は顕現性を低めた条件よりも女性に対する自動的態度が肯定的になっていた。また、脅威あり条件を比較しても、顕現性高条件と低条件との間に女性への態度の差は見られなかった。こうした結果は、内外集団カテゴリーの顕現性の低減が偏見の低減につながるという従来の考えと異なるし、また顕現性が高い場合に脅威によって自動的偏見が生じるという考えとも一致しない。ここには、男女という内外集団カテゴリーの特殊性が関わっていると考えられる。まず脅威なし条件における顕現性による違いについて述べる。女性に対しては、ポジティブなステレオタイプや異性愛の対象としてのイメージなど、さまざまなポジティブなイメージが結びつけられており (Eagly & Karau, 1993)、そのため、脅威にさらされていないとき、男性は女性に対して肯定的な自動的態度をもつ (石井・沼崎, 2009; Rudman & Goodwin, 2004)。集団カテゴリーが二分化されて知覚されたときには、集団カテゴリー間の対比的な認知が生じやすくなるとされる (Doise, Descamp, & Meyer, 1978; Taylor, Fiske, Etcoff, & Ruderman, 1978)。そのため、脅威なし条件において男女カテゴリーの顕現性を高めることは、女性の肯定的なイメージを活性化しやすくさせることによって、女性に対する肯定的概念の活性化を生じさせたと考えられる。一方で、カテゴリーの顕現性を低めることは、カテゴリーに基づく好意をも除去することもある (e.g., Gaertner *et al.*, 1989)。脅威なし条件において男女カテゴリーの顕現性を低めた場合には、女性に対する肯定的なイメージの活性化をしにくくさせることで、肯定的な自動的態度が生じにくくさせたと考えられる。脅威あり条件における差異のなさは、こうした顕現性による態度の初期状態の違いを踏まえて考えるべきであろう。顕現性高条件では、肯定的態度であつた女性態度が脅威を受けることによってより否定的となつた。これは普段は女性に対する好意的な態度を持つ一方で、脅威にさらされると一転して蔑視の対象とみなしてしまうという状況依存で両面価値的な態度を現したとも解釈することができよう。一方で、顕現性が低い条件では初

期状態として女性に好意的態度を示さなくなっただが、脅威にさらされても蔑視の対象ともみなさなくなっただと言える。男女カテゴリ顕現性がもたらす認知・評価への影響については今後の研究による詳細な検討が必要であろう。

顕現性の低減方略は、他の外集団カテゴリに対しても同様に適用可能と考えられる。とくにマイノリティ外集団のように、否定的態度が脅威にさらされていない状況においても強く生じる場合には、顕現性を低減させることによって脅威がない場合も初期値としての否定的態度を低減することが可能と考えられ、また、脅威にさらされた場合にも否定的態度の増加を抑制させることにつながると考えられる。

ただし、本研究における制限として、あるカテゴリ（男女カテゴリ）の顕現性を低める操作が他カテゴリ（年齢カテゴリ）の顕現性を高める操作となっていたという点は考慮しなければならない。このことにより、一方の外集団偏見を低減させるが、他方の外集団偏見を増加させてしまうかもしれない。たとえば年齢カテゴリを顕現化させることで、男女に関する偏見は弱まっても、年齢に関する偏見は強まると考えられる。そのため、もし社会的カテゴリが多面的にかかわる状況であるならば使用は避けるべきだろう。こうした制約はあるものの、当該の偏見に関わる内外集団カテゴリの顕現性を低めることによって、自己価値への脅威下における自動的偏見の高まりを状況的に低減させることができることは社会的にも有益であろう。内外集団カテゴリの顕現性を低める方法には、他の集団カテゴリの顕現性を高める以外にも、共通内集団へのアイデンティフィケーション(Gaertner & Dovidio, 2000) や、脱カテゴリ化 (Turner *et al.*, 1987) など多く考えられる。今後の研究では応用的な観点からも、さまざまな集団カテゴリの顕現性の低減の方法についても同様に検討し、脅威下における偏見を解消するための、より包括的なアプローチの可能性を模索していく必要があるだろう。

## 引用文献

- Crisp, R. J., Ensari, N., Hewstone, M., & Miller, N. (2002). A dual-route model of crossed categorization effects. In W. Stroebe, & M. Hewstone (Eds.). *European Review of Social Psychology* (vol. 13, pp. 35-74). Hove, E. Sussex: Psychology Press (Taylor & Francis).
- Crisp, R. J., & Hewstone, M. (1999). Differential evaluation of crossed category groups: Patterns, processes, and reducing intergroup bias. *Group Processes and Intergroup Relations*, **2**, 303-333.
- Crisp, R. J., & Hewstone, M. (2001). Multiple categorization and implicit intergroup bias: Differential category dominance and the positive-negative asymmetry effect. *European Journal of Social Psychology*, **31**, 45-62.
- Crisp, R. J., Hewstone, M., & Cairns, E. (2001). Multiple identities in Northern Ireland: Hierarchical ordering in the representation of group membership. *British Journal of*

- Social Psychology*, **40**, 501-514.
- Crisp, R. J., Stone, C. H., & Hall, N. R. (2006). Recategorization and subgroup identification: Predicting and preventing threats from common ingroups. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **32**, 230-243.
- Critcher, C. R., Dunning, D., & Armor, D. A. (2010). When self-affirmations reduce defensiveness: Timing is key. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **36**, 947-959.
- Crocker, J., Thompson, L. L., McGraw, K. M., & Ingerman, C. (1987). Downward comparison, prejudice, and evaluations of others: Effects of self-esteem and threat. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 907-916.
- Crocker, J., & Wolfe, C. T. (2001). Contingencies of Self-Worth. *Psychological Review*, **108**, 593-623.
- Dasgupta, N., & Greenwald, A.G. (2001). On the malleability of automatic attitudes: Combating automatic prejudice with images of admired and disliked individuals. *Journal of Personality and Social Psychology*, **81**, 800-814.
- Doise, W., Descamp, J. C., & Meyer, N. E. (1978). The accentuation of intracategory similarities. In H. Tajfel (ed.), *Differentiation between Social Groups: Studies in the social psychology of intergroup relations*, London: Academic Press. Dovidio, J. F., & Gaertner, S. L. (Eds.) (1986). *Prejudice, discrimination, and racism*. New York: Academic Press.
- Eagly, A. H., & Mladinic, A. (1989). Gender stereotypes and attitudes toward women and men. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **15**, 543-558.
- Fein, S. & Spencer, S. J. (1997). Prejudice as self-image maintenance: Affirming the self through negative evaluation of others. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 31-44.
- Fein, S., Hoshino-Browne, E., Davies, P. G., & Spencer, S. J. (2003). Self-image maintenance goals and sociocultural norms in motivated social perception. In S. J. Spencer, S. Fein, M. Zanna, & J. M. Olson (Eds.), *Motivated social perception: The Ontario symposium* (Vol. 9), pp. 21-44. Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Florack, A., Scarabis, M. & Gosejohann, S. (2005). The Effects of self-image threat on the judgment of out-group targets. *Swiss Journal of Psychology*, **64**, 87-101.
- Gaertner, S. L., & Dovidio, J. F. (2000). *Reducing intergroup bias: The Common Ingroup Identity Model*. Philadelphia, PA: The Psychology Press.
- Gaertner, S. L., Mann, J., Murrell, A., & Dovidio, J. F. (1989). Reducing intergroup bias: The benefits of recategorization. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 239-249.
- Gilbert, D. T., & Hixon, J. G. (1991). The trouble of thinking: Activation and application of stereotypic beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 509-517.

- Glick, P. & Fiske, S. T. (1996). The Ambivalent Sexism Inventory: Differentiating hostile and benevolent sexism. *Journal of Personality and Social Psychology*, *70*, 491-512.
- Inquisit 2.0.61004.3 [Computer software]. (2006). Seattle, WA: Millisecond Software.
- 石井国雄・沼崎誠 (2009). ジェンダー態度 IAT におけるステレオタイプのな刺激項目の影響 社会心理学研究, *25*, 53-60.
- 石井国雄・沼崎誠 (2011). 自己価値への脅威が男性のジェンダーに関する潜在的態度に及ぼす影響 社会心理学研究. *27*, 24-30.
- 石井国雄・沼崎誠 (印刷中). 自己価値への脅威が男性の女性に対する潜在的偏見に及ぼす影響 対人社会心理学研究. *12*.
- James, K. & Greenberg, J. (1989). In-group salience, intergroup comparison, and individual performance and self-esteem. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *15*, 604-616.
- Jordan, C. H., Spencer, S. J., & Zanna, M. P. (2005). Types of high self-esteem and prejudice: How implicit self-esteem relates to racial discrimination among high explicit self-esteem individuals. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *31*, 693-702.
- Kawakami, K., Dovidio, J. F., Moll, J., Hermsen, S., & Russin, A. (2000). Just say no (to stereotyping): Effects of training in the negation of stereotypic associations on stereotype activation. *Journal of Personality and Social Psychology*, *78*, 871-888.
- Rudman, L. A. & Goodwin, S. A. (2004). Gender differences in automatic ingroup bias: Why do women like women more than men like men? *Journal of Personality and Social Psychology*, *87*, 494-509.
- Sinclair, L., & Kunda, Z. (1999). Reaction to a black professional: Motivated inhibition and activation of conflicting stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, *77*, 885-904.
- Spencer, S. J., Fein, S., Wolf, C., Fong, C., & Dunn, M. (1998). Stereotype activation under cognitive load: The moderating role of self-image threat. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *24*, 1139-1152.
- Spencer, S. J., Fein, S., Straham, E., & Zanna, M. P. (2004). The Role of Motivation in the Unconscious: How Our Motives Control the Activation of Our Thoughts and Shape Our Actions. In Joseph P. Fogas, Kipling D. Williams, Simon M. Laham (Eds.) *Social motivation: Conscious and unconscious process* (pp. 113-129). Cambridge University Press.
- Steele, C. M. (1988). The psychology of self-affirmation: Sustaining the integrity of the self. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 21, pp. 261-302). San Diego, CA: Academic Press.

- Steele, C. M., Spencer, S. J., & Lynch, M. (1993). Self-image resilience and dissonance: The role of affirmational resources. *Journal of Personality and Social Psychology*, **64**, 885-896.
- Tajfel, H. & Turner, J. C. (1979). An Integrative Theory of Intergroup Conflict. In W. G. Austin & S. Worchel (Eds.), *The Social Psychology of Intergroup Relations*, (pp. 33-47). Monterey, CA: Brooks-Cole .
- Taylor, S. E., Fiske, S.T., Etcoff, N.L., & Ruderman, A.J. (1978). Categorical and contextual bases of person memory and stereotyping. *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 778-793.
- Turner, J. C, Hogg, M. A., Oakes, P. J., Reicher, S. D., & Wetherell, M. S. (1987). *Rediscovering the social group: a self-categorization theory*. Oxford, England: Basil Blackwell.
- Wittenbrink, B., Judd, C. M., & Park, B. (1997). Evidence for racial prejudice at the implicit level and its relationship with questionnaire measures. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 262-274.
- Wittenbrink, N., & Schwarz. S. (Eds.). (2007). *Implicit measures of attitudes*. New York: Guilford Press.



## V 部

女性のジェンダー関連自己ステレオタイプ化と性役割偏見

## 18章 女性の女性に対する偏見とステレオタイプの適用 —サブカテゴリー自己表象からの検討—

高林久美子

沼崎誠

(一橋大学社会学研究科)

(首都大学東京人文科学研究科)

V部では、女性が女性に対する偏見とステレオタイプの適用について、女性の「伝統的女性」「非伝統的女性」という2つのサブカテゴリー自己表象の機能から検討を行った。

女性の社会進出がはじまった初期においては、心理学におけるジェンダー研究では、女性の社会進出を阻害する要因の解明に関する研究が多く提出された。特に、男性は社会進出を果たした女性に対して、なぜ、どのようにして偏見やステレオタイプを示すのかに関する知見や理論が多く提出された。その理由のひとつには、特に女性の社会進出初期で男性中心社会において女性がまだ珍しい存在であったころ、社会進出を遂げた非伝統的女性がいつ、どのように男性から偏見やステレオタイプ、差別を受けるのかについて解明することが、男女平等社会を築く上で重要な課題であったからであろう。また、このような現実的な問題に加えて、男性が女性よりも女性に対して偏見やステレオタイプを示す理由も存在する。そのひとつに、男性は女性よりも優位な地位を享受してきたため、その優位性を維持したいという動機があることが挙げられる (Burgess & Borgida, 1999)。このような社会の権力の不平等を維持したいという男性側の動機は、女性よりも男性のほうが女性に対して偏見やステレオタイプを示す動機づけが強いことを示唆している (Parks-Stamm, Heilman, Hearn, 2008)。これらの理由から、ジェンダーに関する偏見やステレオタイプの研究は、男性による女性への偏見とステレオタイプという側面に重点が置かれてきた。

しかし、その一方で男女ともに実験参加者とした場合には、多くの研究で女性への偏見やステレオタイプには性差がないことが示されている (e.g., Heilman, Wallen, Fuchs, Tamkins, 2004; Heilman & Okimoto, 2007)。ではなぜ、女性は女性に対して偏見やステレオタイプを示すのであろうか。従来の研究では、女性実験参加者は、あくまで男性実験参加者の比較として存在しているに過ぎず、なぜ女性が女性に対して偏見やステレオタイプを示すのかという観点から積極的に検証されてこなかった。そこで本研究では、この点に焦点を当てて検討する。

V部では、なぜ女性が同性の女性に対して偏見やステレオタイプを示すのかという問いに対して回答するために、女性のサブカテゴリー化の進行に注目した。近年、女性の社会進出はある程度定着し、働く女性はめずらしい存在ではなくなりつつある (Diekmann, & Eagly, 2008)。それに伴い、女性に対する認知は多様化する傾向にある。女性はもはや女性というひとつのカテゴリーで捉えられることは少なく、主婦のような伝統的女性、キャリア女性のような非伝統的女性、性的対象としての女性の3つのカテゴリーレベルから捉えられやすことが指摘されている (Six & Eckes, 1991)。このように女性の中に伝統的女性と非伝統的女性という異なった

カテゴリーが生じるということは、女性も同性の女性に対して偏見やステレオタイプを示すという予測を可能にする。すなわち、伝統的女性が別のカテゴリーである非伝統的女性に偏見やステレオタイプを示す、あるいは非伝統的女性が別のカテゴリーである伝統的女性に偏見やステレオタイプを示すという可能性がでてくるのである。さらにV部では、女性のサブカテゴリー化の進行のほかに、近年の女性の「家庭」と「仕事」の両立志向化という現象に注目する。そして、この両立志向は、一人の女性の中に「伝統的女性」としての自己表象と「非伝統的女性」として自己表象の両方を内在化させる可能性を高めると予測する。そして、そのような両方の自己表象は、状況依存的に顕現化し、そのカテゴリー化した集団を正当化するように、同性の女性に対して偏見やステレオタイプを示すことにつながると予測する。

そこでまず19章では、女性の2つのサブカテゴリー自己表象が状況依存的に顕現化することを、重要他者のジェンダーに関連した期待と女性の自己ステレオタイプ化との関連から検討した。もし「伝統的女性」と「非伝統的女性」両方の自己表象が内在化しているとするならば、重要他者のジェンダーに関連した期待に応じて、あるときには伝統的な女性としての自己表象が優勢となり、あるときには非伝統的な女性としての自己表象が優勢となると考えられる。そしてそれに応じた自己ステレオタイプ化がみられるであろう。次に、状況依存的にいずれか一方の自己表象が顕現化したときに、同性の女性に対してどのような偏見やステレオタイプ化がみられるのかについて顕在レベル(20章)と潜在レベル(21章)で検討を行った。

## 引用文献

- Burgess, D., & Borgida, E. (1999). Who women are, who women should be: Descriptive and prescriptive gender stereotyping in sex discrimination. *Psychology, Public Policy, and Law*, 5, 665-692.
- Diekmann, A. B., & Eagly, A. H. (2008). Of women, men, and motivation: A role congruity account. In J. Y. Shah & W. L. Gardner (Eds.), *Handbook of motivational science* (pp. 434-447). New York: Guilford Press.
- Heilman, M. E., & Okimoto, T. G. (2007). Averting penalties for women's success: Rectifying the perceived communality deficiency. *Journal of Applied Psychology*, 92, 81-92.
- Heilman, M. E., Wallen, A. S., Fuchs, D., & Tamkins, M. M. (2004). Penalties for success: Reactions to women who succeed at male gender-typed tasks. *Journal of Applied Psychology*, 89, 416-427.
- Parks-Stamm, E.J., Heilman, M.E., & Hearn, K.A.(2008). Motivated to Penalize: Women's Strategic Rejection of Successful Women. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 34, 237-247.
- Six, B., & Eckes, T. (1991). A closer look at the complex structure of gender stereotypes. *Sex Roles*, 24, 57-71.

## 19章 重要他者からのジェンダー・ステレオタイプの期待が 女性の自己ステレオタイプ化に及ぼす効果 —性役割観による調整効果—

高林久美子

沼崎誠

(一橋大学社会学研究科)

(首都大学東京人文科学研究科)

両親や親友などの重要な人物は、私たちの価値観や行動に大きな影響を与えるが、その影響は慢性的なものばかりではなく、一時的に及ぶ場合がある。例えば、Fitzsimons & Bargh(2003)は実験1において、実験参加者に友人もしくは同僚について簡単な質問に回答させた後に、将来も実験に参加してくれるかどうかについてたずねた。その結果、友人プライム群のほうが同僚プライム群に比べて実験に協力すると回答した。これは、友人を一時的にプライムされた実験参加者は、友人を助けるという対人的な目標が活性化したために、同僚についてプライムされた実験参加者よりも、援助行動が増加したためだと考えられる。実験3では、母親を喜ばせるという目標をもっている実験参加者は母親をプライムされると統制群に比べて、アナグラム課題における成績が良くなることが示されている。これは、一時的に母親をプライムされると母親に対する「喜ばせたい」という対人的な目標が活性化したためだと考えられる。また、重要他者に対する目標は非意識的に活性化することが示されている(Fitzsimons & Bargh, 2003; Shah, 2003)。近年では、このような目標追求に関わる自己制御において重要他者が与える対人的影響について検討が進められている(e.g., Fitzsimons & Finkel, 2010)。

Sinclair & Lun(2006)は、共有された現実理論(shared reality theory)に依拠して重要他者からのステレオタイプに沿った期待が自己ステレオタイプ化に及ぼす効果について検討している。共有された現実理論によると、他人と信念や経験を互いに共有していると感じるほど対人的な絆が確立され、維持されるという。このため他人とうまくやっとうこうとする親和目標が促進したときには自身の信念を他人のものに合わせるようになる(Sinclair, Huntsinger, Skorinko, & Hardin, 2005)。そして、もしステレオタイプのターゲットが、重要他者は自分のことをステレオタイプ的に評価していると感じているならば、その重要他者との繰り返しの相互作用の結果、自分自身をステレオタイプ的に捉えるようになる。この理論に基づき、Sinclair & Lun(2006)は、自分のことを女性的(i.e., 養育的で、感傷的で、他人に関心がある)と思っている重要な人物について思い出したときには、そのように思っているが重要でない人物について思い出したときに比べて、自分を女性的だと回答し、自己ステレオタイプ化がみられることを示している。

このように重要他者の表象が活性化すると、その重要他者に対する目標や重要他者からの期待に一致した認知や行動が生起することが多くの研究で示されている。そこで本研究では、日本の女性において重要他者が活性化したときに、その重要他者のもつジェンダー・ステレオタイプの期待が自己ステレオタイプ化を引き起こすのかについて検討を行う。

しかし重要他者に対する目標や重要他者からの期待は、必ずしも常に同化効果として現れるわけではない。Chartrand, Dalton, & Fitzsimons(2007)は、慢性的なリアクタンス傾向が高い人は、重要他者をサブリミナルに提示すると、その重要他者の期待とは逆の行動が生起することを示している。具体的には、実験参加者に対して「勉強してほしい」もしくは「リラックスしてほしい」と思っている重要な人物の名前をサブリミナルに提示した後に、アナグラム課題をさせ、その遂行数を測定した。その結果、慢性的なリアクタンス傾向が低い実験参加者では、重要他者の期待に対して同化効果が生じた。すなわち、勉強してほしいと期待する重要他者を提示された実験参加者は、リラックスしてほしいと期待する重要他者を提示された実験参加者よりもアナグラム課題の遂行数が多かった。他方、慢性的なリアクタンス傾向が高い実験参加者は、重要他者の期待に対して対比効果が生じた。すなわち、勉強してほしいと期待する重要他者を提示された実験参加者は、リラックスしてほしいと期待する重要他者を提示された実験参加者よりもアナグラム課題の遂行数が少なかった。このように重要他者の表象が活性化したときに、その重要他者に対する目標や重要他者からの期待が自己に同化効果をもたらすのか、対比効果をもたらすのかについては個人差が調整することが分かっている。そこで本研究では、重要他者からのジェンダー・ステレオタイプの期待が女性の自己ステレオタイプ化に及ぼす効果を検討する上で、その効果を調整する要因として女性実験参加者の平等主義的性役割観に注目する。伝統的な性役割観の強い女性は、保守的な性役割を肯定し、伝統的な女性としての自己観を保持していると考えられる。伝統的な女性のステレオタイプのひとつに「従順」があるため、伝統的な性役割観をもつ女性は、そのステレオタイプを慢性的に内在化させ、平等主義的な性役割観をもつ女性に比べて重要他者に対して従順で、その影響を受けやすいと考えられる。よって、伝統的な性役割観の強い女性のほうが、平等主義的な性役割観の強い女性よりも重要他者からのジェンダー・ステレオタイプの期待に沿った自己ステレオタイプ化が生じると考えられる。そこで研究1では、重要他者からのジェンダー・ステレオタイプの期待の知覚、ジェンダー・ステレオタイプに関する自己評価、性役割観を測定し、それら3つの変数において想定されるような関係がみられるかについて相関的検討を行った。研究2では、その3つの変数の因果関係を特定するため、プライミングにより重要他者の表象を活性化させ、重要他者のジェンダー・ステレオタイプの期待が自己評価に及ぼす影響について検討を行った。

## 研究 1<sup>1</sup>

研究1では、重要他者のもつジェンダー・ステレオタイプの期待が、その重要他者といるときの女性のジェンダーに関連した自己ステレオタイプ化との関連性について検討する。さらにその関連性と、実験参加者本人の性役割観がどのように関係しているのかにも検討する。重要他者といるときの自分について考えたとき、伝統的性役割観の強い女性は平等主義的性役

---

<sup>1</sup> 本研究で使用したデータセットは、10章の研究1と同一のデータセットである。

割観の強い女性よりも、その重要他者のジェンダー・ステレオタイプの期待に沿った自己ステレオタイプ化が見られるだろう。

## 方 法

**実験参加者** 首都大学東京の女子大学生で2回の調査に参加し、回答に不備のなかったもの100名であった。

**手続き** 第1回目の調査では、実験参加者のジェンダーに関連した自己評定と性役割観について測定した。ジェンダーに関連した自己評定は40項目で、男性性ポジティブ特性、男性性ネガティブ特性、女性性ポジティブ特性、女性性ネガティブ特性の各10項目より構成されていた。性役割観は、短縮版平等主義的性役割観尺度 (SESRA : Scale of Egalitarian Sex Role Attitudes、鈴木, 1991, 1994 ; 以下、SESRA) を用いた。この尺度は15項目から構成され、値が高いほど平等主義的性役割観が強いことを示す。

約1ヶ月半後に行った第2回目の調査では、まず実験参加者に好きな重要他者を挙げさせ、その人の特徴を記述させるとともに、その他者といるときのジェンダー関連自己評定を測定した。このジェンダー関連の自己評定は第1回目の調査で用いた項目と同様であった。最後に重要他者が実験参加者にどのようなジェンダー・ステレオタイプの期待を抱いているのかについて回答させた。重要他者のジェンダー・ステレオタイプに関する期待を測定する項目は6項目あり、「あなたが男らしいこと」「あなたが将来、家事育児を熱心にする事」「あなたが指導力のあること」「あなたが世話好きであること」「あなたが将来、仕事に熱心に打ち込むこと」「あなたが女らしいこと」を7件法で尋ねた。

Table 1. 重要他者のジェンダー・ステレオタイプ期待の因子構造 (研究1)

	因子 1	因子 2
あなたが男らしいこと	.09	.95
あなたが将来、家事育児を熱心にする事	.77	.15
あなたが指導力のあること	.69	.07
あなたが世話好きであること	.70	.02
あなたが将来、仕事に熱心に打ち込むこと	.64	-.27
あなたが女らしいこと	.54	.13

## 結 果

### 重要他者のジェンダー・ステレオタイプの期待

重要他者のジェンダー・ステレオタイプの期待として入れた6項目に対して因子分析 (主成分・バリマックス回転) を行った。その結果、Table1 のとおり、第1因子には「男らしいこと」の1項目が高く負荷し、第2因子には残りの「家事育児を熱心にする事」「指導力のあること」「世話好きであること」「仕事に熱心に打ち込むこと」「女らしいこと」の5項目が高く負荷し

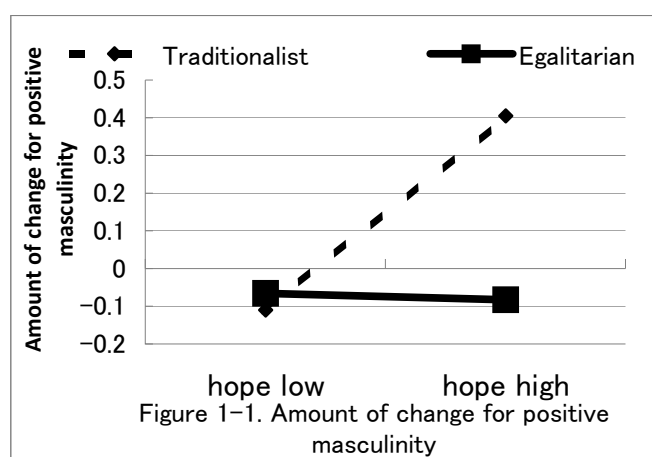
た。負荷した内容から、第2因子は性役割に特定されない一般的な社会的期待の因子として解釈できる。よって第1因子に負荷した「男らしいこと」の1項目を、重要他者のジェンダー・ステレオタイプに関連した期待として採用した。

### 重要他者と一緒にいるときの自己評定の変化

重要他者と一緒にいるときに自己評定がどのように変化するかを調べるために、男性性ポジティブ特性、男性性ネガティブ特性、女性性ポジティブ特性、女性性ネガティブ特性ごとに、重要他者と一緒にいるときの自己評定（2回目調査）から1回目調査時の自己評定を減算した値の平均値を算出し、それぞれの特性の変化量を算出した。

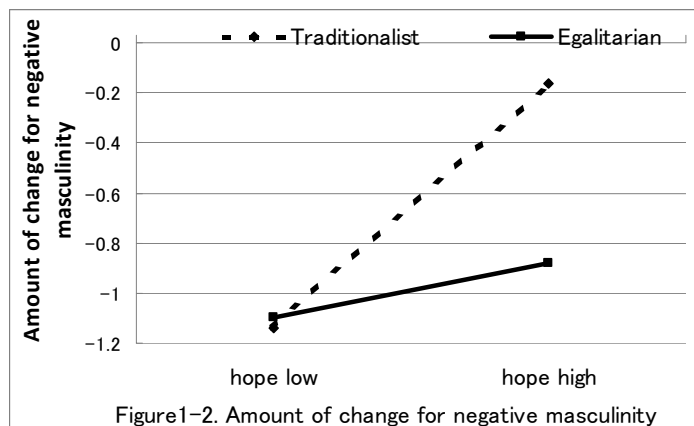
「男らしさ期待」の因子得点と SESRA の標準化得点を用いて、男性性ポジティブ特性変化量、男性性ネガティブ特性変化量、女性性ポジティブ特性変化量、女性性ネガティブ特性変化量ごとに、男らしさ期待×SESRA の全ての主効果と交互作用項を含む一般線形モデルによる回帰分析を行った。

男性性ポジティブ特性の変化量において、男らしさ期待の主効果( $F(1, 96)=2.85, p<.10$ )が有意であり、重要他者から男らしさ期待を知覚しているほど、男性性ポジティブ特性が当てはまると自己評定するようになっていた。さらに男らしさ期待×SESRA( $F(1, 96)=3.12, p<.10$ )の交互作用効果が有意に近い効果であった。この交互作用効果を詳しくみるために、男らしさ期待高(+1 $\sigma$ )、男らしさ期待低(-1 $\sigma$ )、平等主義的性役割観(+1 $\sigma$ )、伝統的性役割観(-1 $\sigma$ )として、男性的ポジティブ得点変化量をプロットした (Figure 1-1)。伝統的性役割観をもつ女性は「男らしい」ことを期待する重要他者と一緒にいるときは男性性ポジティブ特性が自分にあてはまると回答するようになった ( $\beta=.35, t=2.28, p<.05$ )。平等主義的性役割観をもつ女性ではこのような傾向はみられなかった ( $\beta=-.01, t=-.10, ns$ )。



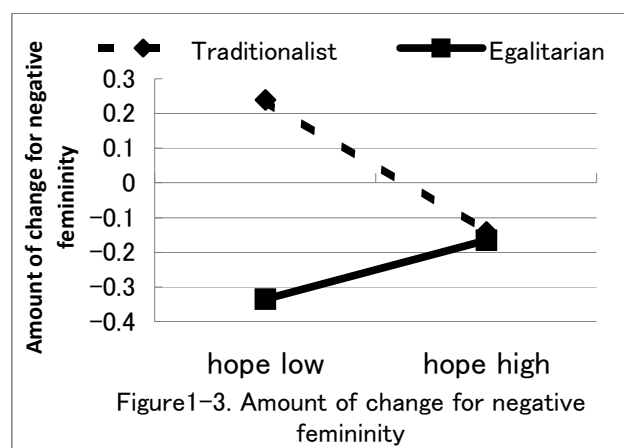
男性性ネガティブ特性変化量において、男らしさ期待の主効果( $F(1, 96)=12.27, p<.01$ )と SESRA の主効果( $F(1, 96)=4.13, p<.01$ )が有意であった。重要他者から男らしさ期待を知覚しているほど、男性性ネガティブ特性が当てはまると自己評定するようになっていた。また、平等主義的性役割観をもつ女性は、伝統的性役割観をもつ女性よりも男性性ネガティブ特性が当てはまると回答した。さらに、男らしさ期待×SESRA の交互作用効果( $F(1, 96)=4.88, p<.05$ )が有意で

あった。先と同様にこの交互作用効果をプロットしたものが Figure1-2 である。この図から分かるように、伝統的性役割観をもつ女性は「男らしい」ことを期待する重要他者と一緒にいるときは男性性ネガティブ特性が自分にあてはまると回答するようになった ( $\beta = .49, t = 3.79, p < .01$ )。平等主義的性役割観をもつ女性ではこのような傾向はみられなかった ( $\beta = .11, t = .96, ns$ )。



女性性ポジティブ特性変化量においては、主効果、交互作用ともに有意な効果は見られなかった ( $F_s < 1.85, ns$ )。

女性性ネガティブ特性変化量において、SESRA の主効果 ( $F(1, 96) = 4.23, p < .05$ ) が有意であり、伝統的性役割観をもつ女性は、平等主義的性役割観をもつ女性よりも女性性ネガティブ特性が当てはまると回答した。さらに、男らしき期待  $\times$  SESRA の交互作用効果 ( $F(1, 96) = 3.39, p = .07$ ) が有意に近い効果であった。Figure1-3 のとおり、伝統的性役割観をもつ女性は「男らしい」ことを期待する重要他者と一緒にいるときは女性性ネガティブ特性が自分にあてはまらないと回答する傾向にあった ( $\beta = -.19, t = -1.70, p = .092$ )。平等主義的性役割観をもつ女性ではこのような傾向はみられなかった ( $\beta = .09, t = .89, ns$ )。



## 考 察

研究 1 では、知覚される重要他者のジェンダー・ステレオタイプの期待と女性のジェンダー関連自己評定がどのように関係しているのかについて検討を行った。さらに、性役割観がそれらの関係をどのように調整するかについても検討した。その結果、男性ポジティブ特性と男性



ネガティブ特性、女性ネガティブ特性において重要他者の期待に一致する方向で、自己にステレオタイプを適用する傾向が認められた。さらにこの傾向は、伝統的性役割観をもつ女性ほど顕著に現れた。この結果は、本研究が想定している仮説と一致するものであった。

ただし、研究1で示された結果は、重要他者のジェンダー・ステレオタイプの期待と自己評定の変化量、性役割観の相関的な関係であり、その因果について特定することはできない。そこで研究2では、研究1で見られた相関的な関係が本研究で想定した因果関係によって説明できるかどうかを確認するために、プライミング手法を用いて重要他者の活性化を操作し、重要他者のジェンダー・ステレオタイプの期待と女性の自己ステレオタイプ化の因果関係について明らかにすることにした。

## 研究2

### 方法

**実験参加者** 多摩美術大学の女子大学生で2回の調査に参加し、回答に不備のなかったもの187名であった。

**手続き** 第1回目の調査では、重要他者として母親の実験参加者に対するジェンダー・ステレオタイプの期待について尋ねた。母親の期待を測定する項目は4項目あり、「あなたが社会的に高い地位につくこと」「あなたが家事や育児をすること」「あなたが女らしく振舞うこと」「あなたが男性と対等に働くこと」を母親がどのくらい望んでいると思うかについて7件法で尋ねた。また実験参加者の性役割観を測定するために、SESRAに回答させた。

約2ヶ月後の本実験では、まず母親の表象のプライム操作を行った。半数の実験参加者には自分の母親の絵を5分間、描いてもらった。残りの半数の実験参加者には大学を正門から見た絵を描いてもらった。その後、研究1で用いたジェンダーに関連した40特性がどのくらい自分に当てはまると思うかを7件法で回答してもらった。

Table 2. 母親の期待の因子分析結果 (研究2)

	因子1	因子2
あなたが社会的に高い地位につくこと	.69	.45
あなたが家事や育児をすること	.65	-.36
あなたが女らしく振舞うこと	.68	-.43
あなたが男性と対等に働くこと	.25	.84

### 結果

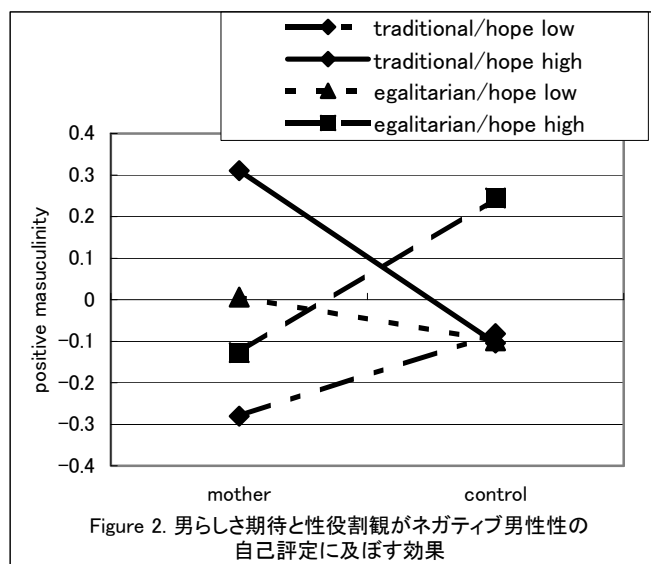
#### 重要他者のジェンダー・ステレオタイプの期待

重要他者のジェンダー・ステレオタイプの期待として入れた4項目に対して主成分分析(回転なし)を行った。その結果、想定した因子構造にはならず、Table 2に示したように、第1

成分には「社会的に高い地位につくこと」「家事や育児をすること」「女らしく振る舞うこと」の3項目が高く負荷し、第2成分には「男性と対等に働くこと」の1項目が負荷した。第1成分はすべて正の値で負荷していることから、性役割に特定されない一般的な社会的期待の因子として解釈できる。よって第2成分に負荷した「男性と対等に働くこと」の項目を、重要他者の男らしさ期待として採用した。

### 母親プライム後の自己評定

自己評定項目の男性性ポジティブ、男性性ネガティブ、女性性ポジティブ、女性性ネガティブとなるようにそれぞれの特性語ごとの平均値を算出した。母親のプライムによって母親のジェンダー・ステレオタイプの期待に沿った自己ステレオタイプ化がみられるか、またその傾向は伝統的性役割観をもつ女性に顕著に現れるかについて調べるために、「男らしさ期待」とSESRAの得点を標準化し、母親プライム群を“1”、統制群を“-1”とした上で、男性性ポジティブ特性、男性性ネガティブ特性、女性性ポジティブ特性、女性性ネガティブ特性の平均値に対して、それぞれプライム×男らしさ期待×SESRAの全ての交互作用項を含む回帰分析を行った。



男性性ポジティブ項目において、プライム×男らしさ期待×SESRAの3要因の交互作用効果が有意であった ( $F(1, 179)=4.05, p<.05$ )。伝統的性役割観者を $-1\sigma$ 、平等主義的性役割観者を $+1\sigma$ 、男らしさ期待低を $-1\sigma$ 、男らしさ期待高を $1\sigma$ として、3要因の交互作用効果のパターンをプロットしたものが、Figure 2である。伝統的性役割観をもつ女性で「男らしい」ことを期待している母親を思い浮かべた女性は、統制群よりもポジティブな男性的特性は自分にあてはまると回答するのに対し、「男らしい」ことを期待していない母親を思い浮かべた女性は、統制群よりもポジティブな男性的特性は自分にあてはまらないと回答していた。他方、平等主義的な性役割観の強い女性ではむしろ「男らしい」ことを期待している母親を思い浮かべた女性は、統制群よりもポジティブな男性的特性は自分にあてはまらないと回答し、「男らしい」ことを期待していない母親を思い浮かべた女性は、統制群よりもポジティブな男性的特性は自分に

当てはまると回答するという、伝統主義的な性役割観をもつ女性とは逆のパターンがみられた。これは仮説と一致したパターンであった。ただし simple slope 検定の結果、いずれの回帰も有意ではなかった。

男性性ネガティブ項目において、SESRA の主効果 ( $F(1, 179)=7.13, p<.01$ ) が有意であり、平等主義的な性役割観をもつ女性ほど、自分に男性性ネガティブ特性があてはまると回答していた。さらに SESRA×母親の期待の交互作用効果 ( $F(1, 179)=5.61, p<.05$ ) が有意で、「男らしいこと」を期待している母親を思い出したときに平等主義的な性役割観をもつ女性ほど自分に男性性ネガティブ特性があてはまると回答していた。

女性性ポジティブ特性と女性性ネガティブ特性では有意な効果は見られなかった。

## 考 察

研究 2 では、重要他者の表象をプライムすることにより、その重要他者のジェンダー・ステレオタイプに関する期待が女性の自己ステレオタイプ化に及ぼす因果的影響を検討した。その結果、男性性ポジティブ特性においてのみ、仮説と一致した効果がみられ、重要他者の期待に応じた自己ステレオタイプがみられた。男らしいことを期待する母親をプライムされた女性は自分を男性的なポジティブ特性があてはまると評定し、男らしいことを期待しない母親をプライムされた女性は男性的なポジティブ特性は当てはまらないと評定した。しかしこの傾向は伝統的性役割観をもつ女性において見られ、平等主義的性役割観をもつ女性においてはむしろ逆のパターンがみられた。これは研究 1 と対応した結果であり、かつ仮説と一致したパターンであった。しかしながら、男性性ポジティブ特性以外の特性では、仮説を支持する結果は得られなかった。この点に関しては、研究 1 の結果の考察と併せて次節の総合考察において考察する。

## 総合考察

本研究では重要他者のジェンダー・ステレオタイプに関する期待が女性の自己ステレオタイプ化に及ぼす影響について検討した。またその影響の調整変数として、実験参加者の性役割観に注目をした。研究 1 では、女性的ポジティブ特性以外の特性の変化量において、重要他者が「男らしいこと」を期待しているほど、その重要他者と一緒にいるときの自己評定が男性的な方向に変化していた。さらにその傾向は、伝統的性役割観をもつ女性において顕著であり、仮説と一致したパターンが得られた。ただし、研究 1 で示されたのは相関的な関連であったため、研究 2 では重要他者の表象をプライミングして、重要他者（母親）の期待と自己ステレオタイプ化の因果関係について検討を行った。その結果、男性的ポジティブ特性においてのみ仮説と一致したパターンが得られた。男らしいことを期待する母親をプライムされた女性は、統制群に比べて男性的ポジティブ特性があてはまると自己評定していた。さらにこの傾向は伝統的性役割観をもつ女性において顕著であった。

研究 1 と研究 2 において、主に男性的特性において仮説と一致した結果がみられた。この原因のひとつに、女性にとって自分が女性的か否かの自己評定は状況を超えて安定したものであ

り、プライムによる影響を受けにくかったからだと考えられる。それに対し、女性にとって自分が男性的か否かの自己評定は明確なものではなく、状況によって変化しやすい可能性がある。よって、本研究でも母親の表象が活性化したときに母親の期待に応じた自己評定の変化は男性的特性において見られやすかったのかもしれない。

今後の課題として、母親のジェンダー・ステレオタイプに関する期待の構造を把握することが挙げられよう。研究1と研究2ともに分析の結果、母親のジェンダー・ステレオタイプに関する期待を「男らしさ」に関する1項目を母親の期待として用いることになった。確かに娘に対する母親の「女らしさ」に関する期待は、ジェンダー・ステレオタイプに関連する期待というよりも、「女らしくあること」は当然のこととして一般的な期待として持たれている可能性は高いかもしれない。母親のジェンダー・ステレオタイプに関連した期待が娘にどのように認知されているのか、今後調査を行うことによって、安定したジェンダー関連期待を測定できるようにする必要がある。

今後の課題の2つ目に、本研究では伝統的性役割観をもつ女性は、「女性は従順であるべき」という規範を内在化しているため、重要他者の期待に応じた自己ステレオタイプ化がみられるだろうと予測した。しかしながら伝統的性役割観が強いということが、具体的にどのような心理的枠組みを形成し、どのような処理を導くのかについては明らかではない。今後はこの点に関しても詳細な検討が必要であろう。

女性が自分を女性として捉えることの弊害のひとつとして、ステレオタイプ脅威により数学課題の遂行が低減することが挙げられるだろう (Spencer, Steele, & Quinn, 1999)。しかし本研究で示されたように重要他者の期待が反ステレオタイプのものならば、たとえ伝統的性役割観をもつ女性であっても、自己ステレオタイプ化は生じないため、ステレオタイプ脅威を回避できる可能性がある。重要他者との相互作用は頻繁であることが多いことを考えると、その影響は大きく、今後、重要他者との間で生じうる対人的問題に焦点を当てた研究の更なる発展が望まれる。

#### 引用文献

- Bladwin, M.W. (1992) Relational schemas and the processing of social information. *Psychological Bulletin*, 112, 461-484.
- Chartrand, T.L., Dalton, A., & Fitzsimons, G.J.(2007). Relationship reactance: When priming significant others triggers opposing goals. *Journal of Experimental Social Psychology*, 43, 719-726.
- Fitzsimons, G.M., & Finkel, E.J.(2010). Interpersonal Influence on Self-Regulation. *Current Directions in Psychological Science*, 19, 101-105.
- Fitzsimons, G.M., & Bargh, J.A. (2003). Thinking of you: Nonconscious pursuit of interpersonal goals associated with relationship partners. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84,

148-164.

Shah, J. (2003). Automatic for the people: How representations of significant others implicitly affect goal pursuit. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84, 661-681.

Sinclair, S., & Lun, J. (2006). Significant other representations activate stereotypic self-views among women. *Self and Identity*, 5, 196-207.

Sinclair, S., Huntsinger, J., Skorinko, J., & Hardin, C. (2005). Social tuning of the self: Consequences for the self-evaluations of stereotype targets. *Journal of Personality and Social Psychology*, 89, 160-175.

Spencer, S.J., Steel, C.M., & Quinn, D.M. (1999). Stereotype threat and women's math performance. *Journal of Experimental Social Psychology*, 35, 4-28.

鈴木淳子 (1991). 平等主義的性役割態度 : SESRA (英語版) の信頼性と妥当性の検討および日米女性比較 社会心理学研究 . 6, 80-87.

鈴木淳子 (1994). 平等主義的性役割態度スケール短縮版 (SESRA-S) の作成 心理学研究, 65, 34-41.

## 20章 女性のサブカテゴリー自己表象が 女性に対する偏見とステレオタイプ化に及ぼす効果 —顕在レベルからの検討—<sup>1</sup>

高林 久美子<sup>1</sup> 沼崎 誠<sup>2</sup> 小野 滋<sup>3</sup> 石井 国雄<sup>2</sup>

(<sup>1</sup>一橋大学社会学研究科) (<sup>2</sup>首都大学東京人文科学研究科) (<sup>3</sup>シノベイト)

近年、男女平等の意識の高まりにより、社会進出を果たす女性はますます増え、結婚・出産後もフルタイムで働く女性は今では決して珍しい存在ではなくなってきた。本研究では、そのような現代の女性の多くは、伝統的な女性と非伝統的な女性の、二つのサブカテゴリーの自己表象を保持し、その結果、特定の状況では、同性の女性に対して偏見を示したり、ステレオタイプ的な判断を行うことがある可能性について検討した。さらに感情価を伴う評価としての偏見と認知レベルの判断としてのステレオタイプの適用を区別して測定すべきという指摘(Wittenbrink, Judd, & Park, 2001)を受け、本研究ではこの二つを区別して検討することを試みた。

### 女性による女性への偏見

従来、ジェンダーに基づくステレオタイプの適用や偏見の研究は、主に男性による女性へのステレオタイプの適用や偏見に力点が置かれてきた。しかし、女性の社会進出が実現されつつある現代において、女性による女性への偏見という視点も必要であろう。女性が女性に対して偏見を示すという知見はすでにいくつかの研究で報告されている。例えば、女性の権威者に対して、顕在レベルでは、女性は男性よりもポジティブな態度を示すのに対し、潜在的なレベルでは女性も男性と同様にネガティブな態度を持っていることが示されている(Rudman & Kilianski, 2000)。しかし、女性のあり方が多様化し、女性を単純な1つのカテゴリーではとらえきれなくなった現代において、女性がどのようなときにどのような女性に対して偏見を示すのか、という視点は特に必要であると考えられるが、この点について検討した研究は乏しい。

一般に人は女性を、主婦のような伝統的な女性、キャリア女性のような非伝統的な女性、性的対象としての女性の三つのサブカテゴリーから捉えやすいことが指摘されている(Six & Eckes, 1991)。また、ワーキングマザーのように、伝統的性役割と非伝統的性役割の両方に就く(あるいは、両方を志向する)女性も多く、一人の女性においても伝統的な自己表象と非伝統的な自己表象両方が存在し、自分を両方から捉えることが可能だと考えられる。この場合、常に伝統的女性と非伝統的女性両方に好意的になるという可能性もあるだろう。しかし、一人の女性が両方の自己表象を保持しているからこそ、ある状況においては、伝統的女性に対して

---

<sup>1</sup>本論文は、日本心理学研究第79号に掲載されたものの再掲である。前報告書ですでに報告した研究であるが、本報告書で扱った問題と密接に関係するため、日本心理学研究に掲載された形で再掲する。

ネガティブな評価をし、別の状況においては、非伝統的女性にネガティブな評価をしてしまう可能性も考えられよう。この根拠に、ステレオタイプの活性化や偏見は、自己が置かれた状況に応じて状況依存的に生じるという知見が挙げられる (e.g., Blair, 2002)。

#### 本研究で想定するプロセス—現象的自己の機能

本研究では、女性が女性に対する偏見やステレオタイプを示すプロセスとして、状況に応じて活性化する自己表象の機能に注目する。

“自己”研究において、自己概念は、さまざまな自己に関する知識を含んでおり、非常に複雑で多面的であることが指摘されている。そして、ある側面の自己が活性化すると、それと連合したさまざまな属性や行動事例が想起・使用されやすい状態になると考えられている(沼崎, 2002)。このような、ある側面の自己が顕現的になると、一時的にそれが自己概念として機能する自己は、“現象的自己”と呼ばれる。

家庭と仕事の両方を志向する女性は、伝統的な女性としての自己表象と非伝統的な女性としての自己表象の両方が自己概念の中に含まれていると考えられる。現象的自己の考え方に基づくと、このような女性は、家庭にいて育児に専念しているときは伝統的な自己が自己概念として機能し、仕事をしているときには非伝統的な自己が自己概念として機能し、自己制御をおこなっていると考えられる (Bodenhausen, Macrae & Hugenberg, 2003)。これらの知見から、伝統的な女性と非伝統的な女性の両方の自己を保持している女性は、一方の自己表象が活性化している場合には、他方の自己表象を抑制させ、その後の対象に対する評価や判断が異なってくる事が予測される。

#### 女性サブカテゴリーに対する偏見とステレオタイプ化

本研究では、自己表象の活性化の操作として、女性実験参加者に将来家庭にいる自分あるいは働いている自分を想像させる。その後、架空の家庭女性あるいはキャリア女性の印象について複数の特性語に評定させることによって、評価としての偏見と判断としてのステレオタイプの適用を区別して検討する。

偏見に関しては、自分が所属する集団に対しては外集団に比べて好意を示しやすいという知見から (Tajfel & Turner, 1986)、ある一方のタイプの自己表象が活性化している場合、同じタイプの女性に対して、他方のタイプの女性よりも好意的に評価をすると予測される。すなわち、伝統的な女性としての自己表象がプライムされた場合、非伝統的な女性としての自己表象がプライムされた場合に比べ、家庭女性をキャリア女性よりもポジティブに評価するようになると予測できる (仮説1)。

ステレオタイプの適用に関しては以下のような予測ができよう。(非) 伝統的な女性としての自己表象が活性化している場合には、(非) 伝統的な女性と連合したのも同時に活性化し、(非) 伝統的な女性も持っている (非) 伝統的な価値観も活性化すると考えられる。Cater, Hall, Carney, & Rosip(2006)は、伝統的性役割観が強い者ほど社会的ステレオタイプの保持や適用を許容するという相関関係を見出している。これらから、伝統的女性の自己表象が活性化しているときに

は、非伝統的女性の自己表象が活性化しているときに比べ、伝統的性役割観が顕現化するため、女性サブカテゴリー・ステレオタイプを許容・適用しやすくなると予測できよう。

Fiske, Cuddy, Glick, & Xu (2002) は、多くのステレオタイプは“能力”と“あたたかさ”の二つの次元から構成され、この二つの次元が負に相関しやすく、両面価値的な内容になると指摘している。女性サブカテゴリーに関して、伝統的な女性は「能力は低い、あたたかい」という、典型的な女性性を表す属性 (e.g., 面倒見の良い、おしゃべりな) を多く含むステレオタイプに、非伝統的女性は「能力は高い、冷たい」という、典型的な男性性を表す属性 (e.g., 決断力のある、傲慢な) を多く含むステレオタイプになることが知られている (Glick, Diebold, Bailey-Werner, & Zhu, 1997)。以上のことから、伝統的な女性としての自己表象がプライムされた場合には、非伝統的な女性としての自己表象がプライムされた場合に比べ、家庭女性に女性的なステレオタイプを、キャリア女性に男性的なステレオタイプを適用しやすくなるだろうと予測した (仮説2)。

本研究では上記二つの仮説の検証を目指したが、自己表象のプライムの操作でどのくらいうまく想像できたかということと、実験参加者のキャリア志向度が、結果に影響する可能性が考えられたため、その点も探索的に確認した。

## 方 法

### 実験参加者

女子大学生 53 名 回答に不備のあった 3 名を分析から除外した。最終的な分析対象者は 50 名であった。

### 実験計画

プライム (伝統的・非伝統的) × ターゲット人物 (家庭女性・キャリア女性) × 評定語の性 (男性性・女性性) × 評定語の感情価 (ポジティブ・ネガティブ) の、前二つが参加者間要因、後ろ二つが参加者内要因の混合要因計画であった。

### 手続き

実験は授業中に一斉に行った。実験参加者には、二つの無関連な調査に協力してほしいと依頼した。まず、最初に、“イメージングの研究”と称して、実験参加者は将来の自分の姿を想像するよう求められた。その際、伝統的・非伝統的プライム群では、“将来、結婚して良き妻、良き母になった自分”を想像させた。非伝統的・キャリアプライム群では、“将来、キャリアウーマンとしてバリバリ働いている自分”を想像させた。三分半想像させた後で、想像した内容を書き出すよう依頼した<sup>2</sup>。

次に、前の調査とは無関連であることを強調するために、異なった大きさの質問紙を用いた

---

<sup>2</sup> プライムの操作チェックは行わなかったが、実験参加者が想像した内容を書き出したものを確認した。全ての参加者において、伝統的・非伝統的プライム群は家庭生活を中心にした内容が、非伝統的・キャリアプライム群は仕事生活を中心にした内容が記述されていた。



上で、対人認知の研究と称して架空のキャリア女性あるいは家庭女性のプロフィール<sup>3</sup>を提示し、そのターゲット人物の印象を尋ねた。家庭女性のプロフィールには30歳の専業主婦であり、お菓子作りが趣味で、今後は安らげる家庭を築きたいと思っており、他者からは“周囲への配慮ができ、古典的な日本人女性の良さが備わっている”と評価されているなどの情報が含まれていた。一方、キャリア女性のプロフィールには30歳雑誌編集者であり、趣味はアウトドアで、将来は仕事で業績をあげていきたいと思っており、他者から“仕事面で優秀であり、自分の生き方にはっきりした目標を持っている”と評価されているなどの情報が含まれていた。そのプロフィールを読んだ後に、そのターゲット人物の印象を43の特性語に対して7件法（1：全く当てはまらない-7：非常に当てはまる）で回答させた。これらの特性語は、沼崎・小野・石井・高林（2006）に基づいて選定し、性（男性性・女性性）×感情価（ポジティブ・ネガティブ）の4つのカテゴリーから構成されていた。それぞれのカテゴリーには、ほぼ同数の特性語が用意されていた。

最後に、最初の調査での想像のしやすさについて確認するために、“将来の自分の姿を想像するのがどのくらい困難だったか”と“どのくらいうまく将来の自分の姿を想像することができたか”について7件法（1：全くできなかった-7：非常にできた）で尋ねた。さらに、実験参加者本人のキャリア志向度を確認するため、“女性は結婚後も働き続けるべきだと思うか”と“あなたは結婚後も仕事を続けたいか”について7件法（1：全く思わない-7：非常に思う）で尋ねた<sup>4</sup>。

実験終了後、実験目的と内容が説明されてある紙を配布し、デブリーフィングを行った。

## 結 果

### 仮説の検証

4カテゴリーの特性の得点をそれぞれ信頼性係数が最も高くなるように項目を選び算出した。男性性・ポジティブ特性に関しては、“有能”“決断力のある”等の10項目（ $\alpha = .96$ ）、男性性・ネガティブ特性に関しては、“強引”“威圧的”等の10項目（ $\alpha = .94$ ）、女性性・ポジティブ特性に関しては、“優しい”“あたたかい”等の10項目（ $\alpha = .93$ ）、女性性・ネガティブ特性に関しては、“うるさい”“うわさ好き”等の10項目（ $\alpha = .92$ ）の平均値を算出した。それらの得点に対し、プライム×ターゲット人物×評定語の性×評定語の感情価の分散分析を行った。その結果、評定語の感情価の主効果が有意であり、実験参加者はターゲット人物をネガティブ特性よりもポジティブ特性があてはまると評定した（ $F(1, 42) = 42.50, p < .001$ ）。また、ターゲット

<sup>3</sup> 本研究で用いたプロフィールのほぼ同様なものを使用した実験では（沼崎，2006），女性実験参加者に、家庭女性はキャリア女性よりも家庭志向が有意に高く、キャリア志向が有意に低いと評定されていた。

<sup>4</sup> キャリア志向度を要因に含めた分析では、プライムとターゲット人物を含んだ、仮説に関わる有意な効果はみられなかったため、仮説検証のための分析には要因として含めなかった。

人物×評定語の性の交互作用効果も有意であり、家庭女性はより女性的に、キャリア女性はより男性的に判断されていた ( $F(1, 42)= 256.56, p<.001$ )。仮説 1 から予測されるプライム×ターゲット人物×評定語の感情価の交互作用効果 ( $F(1, 42)=1.45, F<1, ns$ )、仮説 2 から予測されるプライム×ターゲット人物×評定語の性の交互作用効果を含め、それ以外の効果は有意ではなかった ( $F_s<3.35, ns$ )。

### 事後的分析

次に事後的な分析として、自己表象のプライムの操作の段階で伝統的女性としての自己あるいは非伝統的女性としての自己をどのくらいうまく想像できたか、ということが結果に影響を及ぼしている可能性があると考えられたため、想像容易性を要因に含んだ分析を行った。想像しやすさについて尋ねた二つの質問項目の得点を合計し ( $r(50)=.80, p<.001$ )、中央値 (8.5) よりも高い得点の人を想像容易群、低い得点の人を想像困難群とした。両群の平均値は Table 1 に示した。これに対して、プライム×ターゲット人物×想像の困難度×評定語の性×評定語の感情価の分散分析を行った結果、先の分析と同様に、評定語の感情価の主効果と評定語の性×ターゲット人物の交互作用効果が有意であった (順に、 $F(1, 42)=40.78, p<.001$ ;  $F(1, 42)=227.01, p<.001$ )。これらの効果に加え、評定語の感情価×ターゲット人物の交互作用効果が有意で、ポジティブな特性は家庭女性よりキャリア女性のほうが当てはまると判断されたのに対し、ネガティブな特性では両者に差はみられなかった ( $F(1, 42)=4.10, p<.05$ )。さらに、評定語の性×評定語の感情価の交互作用効果も有意であったが ( $F(1, 42)=4.76, p<.05$ )、これはプライム×想像の困難度×評定語の性×評定語の感情価の交互作用効果により制限を受けた ( $F(1, 42)=5.18, p<.05$ )。想像容易群でのみ、キャリア女性がプライムされた場合にだけ、女性的特性に比べて男性的特性においてネガティブな特性よりもポジティブな特性がターゲット人物に当てはまると評定されやすかった ( $F(1, 23)=5.30, p<.05$ )。

Table 1

Mean evaluative and stereotypic ratings.

	Poorly				Well			
	homemaker		career women		homemaker		career women	
	TP	NTP	TP	NTP	TP	NTP	TP	NTP
positive	4.30	4.12	4.90	4.44	4.71	3.65	4.72	4.61
negative	3.75	3.47	3.53	3.64	3.24	3.95	3.78	3.41
masculine	3.31	2.69	5.18	5.01	2.80	3.01	5.60	5.04
feminine	4.73	4.88	3.36	3.14	5.14	4.57	3.00	3.08

Note. Possible range for means was 1 to 7. TP=traditional prime; NTP=nontraditional prime

上記効果に加えて、本研究の仮説を検証する上で重要となるプライムとターゲット人物の両方の要因を含む効果として、仮説1に関わるプライム×ターゲット人物×想像の困難度×評定語の感情価の交互作用効果が有意であった ( $F(1, 42)=4.32, p<.05$ )。また、仮説2に関わるプライム×ターゲット人物×想像の困難度×評定語の性も有意であった ( $F(1, 42)=5.97, p<.05$ )。

プライム×ターゲット人物×想像の困難度×評定語の感情価の効果を詳しく検討するために、ポジティブな評定語とネガティブな評定語への回答の平均値をそれぞれ算出し、それらに対して想像容易群と想像困難群ごとでプライム×ターゲット人物×評定語の感情価の分散分析を行った。想像容易群において評定語の感情価の主効果に加え ( $F(1, 21)=18.39, p<.001$ )、仮説1から予測されるプライム×ターゲット×評定語の感情価の3要因の交互作用効果が有意であった ( $F(1, 21)=6.89, p<.05$ )。この交互作用効果のパターンを分かりやすくするために、ポジティブな特性の評定値からネガティブな特性の評定値を引いた値をターゲット人物へのポジティブ度評定として算出し、その値の各群の平均値を Figure 1 に示した。想像容易群において伝統的女性の自己表象がプライムされた場合には非伝統的女性の自己表象がプライムされた場合に比べてキャリア女性より家庭女性をポジティブに評定していた。これは仮説1を支持するものであった。一方、想像困難群では評定語の感情価の主効果のみが有意であり ( $F(1, 21)=8.12, p<.001$ )、仮説1から予測される3要因の交互作用効果は有意ではなかった ( $F(1, 21)=.74, ns$ )。よって、仮説1を支持する効果は想像容易群においてのみ見られた。

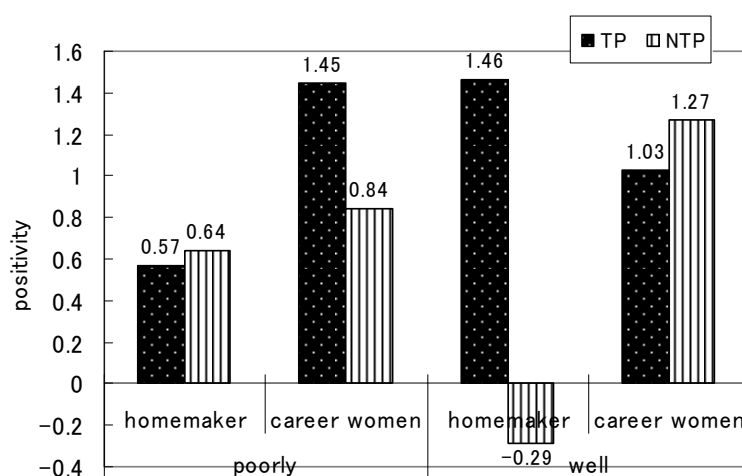


Figure 1 Mean evaluative ratings in each condition

次に、仮説2に関わる、プライム×ターゲット人物×想像の困難度×評定語の性の効果を詳しく検討するために、男性性特性語と女性性特性語への回答の平均値をそれぞれ算出し、それらに対して想像容易群と想像困難群ごとでプライム×ターゲット人物×評定語の性の3要因の分散分析を行ったところ、想像容易群と想像困難群ともにすでに述べたパターンのターゲット人物×評定語の性の交互作用効果が有意であった (順に  $F(1, 21)=48.71, F(1, 21)=187.67, p<.001$ )。想像容易群と想像困難群どちらにおいても、3要因の交互作用効果は有意ではなく (順に、 $F(1, 21)=2.13, F(1, 21)=2.24, ns$ )、下位検定でも有意な効果は見られなかったものの、4要因の交互作用

用効果を平均値パターンから検討してみたい。4 要因の交互作用のパターンを分かりやすくするために、女性的特性の評定値から男性的特性の評定値を引いた値をターゲット人物への女性性評定として算出し、その値の各群の平均値を Figure 2 に示した。ここからわかるように、想像容易群において伝統的女性の自己表象がプライムされた場合には非伝統的女性の自己表象がプライムされた場合に比べて家庭女性に女性的特性を、キャリア女性に男性的特性を適用したのに対して、想像困難群ではそのような傾向がみられなかったことがわかる。よって、想像容易群のみ仮説 2 と一致するパターンであったといえるだろう。

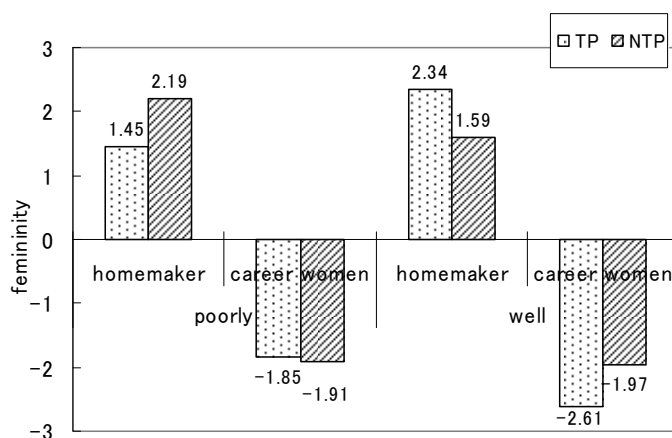


Figure2 Mean stereotypic ratings in each condition

#### 代替説明の検証

先の分析では、想像の困難度を要因に含んだ効果しか有意ではなかった。ここから、伝統的女性プライム群で想像が容易だった実験参加者は、もともと伝統的な性役割態度をもっていたため、キャリア女性をネガティブに評価し、ターゲット人物をステレオタイプ的に判断したという代替説明の可能性が考えられよう。また、同様に、非伝統的女性プライム群で想像が容易だった実験参加者は、もともと非伝統的な性役割を支持する態度をもっていたため、家庭女性をネガティブに評価し、ターゲット人物をステレオタイプ的に判断することを抑制したのかもしれない。この代替説明について検討するために、実験参加者本人のキャリア志向度を尋ねた二つの質問項目 ( $r(50)=.80, p<.001$ ) を点が高いほどキャリア志向が高くなるように合計した得点に対して、プライム×想像の困難度の分散分析を行った。その結果、有意な効果は見られなかった ( $F_s(1, 42) < 2.23, ns$ )。この結果は、プライム群と想像困難度において、実験参加者の性役割の志向に偏りが無いことを示しており、上記の代替説明は排除されうると考えられる<sup>5</sup>。

#### 考察

本研究では、現代の女性が伝統的な女性としての自己と非伝統的な女性としての自己の両方

<sup>5</sup> 平均値パターンもこの代替仮説を支持するようなものではなかった (想像容易・伝統的女性プライム群  $M=9.93$ , 想像容易・非伝統的女性プライム群  $M=9.09$ , 想像困難・伝統的女性プライム群  $M=7.90$ , 想像困難・非伝統的女性プライム群  $M=9.31$ )。

を内在化させ、一方の自己表象が活性化すると他方の女性に対して偏見を示したり、ステレオタイプを適用する可能性について検討を行った。その結果、仮説は部分的に支持された。まず、プライムされた自己表象と一致したタイプのターゲット女性は不一致なタイプのターゲット女性よりも好意的に評価された。さらに、伝統的な女性としての自己表象が顕現化したときには、非伝統的な女性としての自己表象が顕現化したときに比べて、ターゲット人物をよりステレオタイプ的に判断する傾向にあった。しかし、これらの効果は自己表象をうまく顕現化することができた実験参加者のみに限られたものであった。

自己表象をうまく顕現化することができた実験参加者のみ仮説が支持されたため、本研究の結果は、実験参加者が本来持っている志向の効果によるものだという代替説明が考えられた。そこで、実験参加者の性役割の志向度に対して、プライム×想像の困難度の分散分析を行ったが、有意な効果は得られなかったため、この代替説明の可能性は小さいと考えられた<sup>6</sup>。想像容易群と想像困難群で得られた差は、指示された事柄を想像しやすい人としにくい人の差異であり、つまるところ操作が成功した人と成功しなかった人の差異という可能性も考えられる。今回の知見からでは、このような差異がなぜ生じたかについて明らかにすることは難しく、この点は今後、自己表象の活性化の操作を工夫して追試を行う必要がある。

本研究では、現象的自己の機能を前提に置いたプロセス、すなわち、偏見の表明やステレオタイプ化という帰結には、ある特定の自己表象の活性化が媒介していると考えていた (DeMarree, Wheeler, & Petty, 2005)。しかし、今回得られた結果が、“伝統的女性としての自己”や“非伝統的女性としての自己”という自己表象の活性化によるものなのか、あるいは自己を含まない“伝統的女性”“非伝統的女性”という単なる概念構成体の活性化によるものなのか区別することはできない。イデオモータ (ideomotor) 理論では、ある行動を生じさせるには、自己に無関連なものであっても、その行動に関連した表象を活性化させるだけで十分であるとされている (Dijksterhuis & Bargh, 2001)。一方、自動動機理論では、プライムと行動の効果は、目標や動機の自動的な活性化を媒介した間接的な効果であるとされている (Bargh, 1997)。今後は、これらの理論を踏まえて、本研究のプライムとターゲット女性への反応の間には何が媒介しているのかについて特定していく必要があるだろう。

以上のような限界はあるが、本研究から女性でも同性の女性サブカテゴリーに対して状況に依存して偏見やステレオタイプを示すことがある、ということは明らかになった。従来の研究では、一方の女性サブカテゴリーのみに焦点を当てた研究がほとんどであったが、本研究では伝統的女性と非伝統的女性の両方のカテゴリーに焦点を当て、自己との関連で状況依存的にあらわれる偏見やステレオタイプの適用について明らかにすることができた。また、本研究では、ターゲット女性に対する反応を偏見とステレオタイプの適用の二つから検討したが、この二つ

---

<sup>6</sup> さらに、実験参加者がもともと持っている志向の効果で4要因の交互作用効果が得られているのであれば、想像困難群では逆の方向で3要因の交互作用効果が得られるはずであるが、想像困難群ではこの効果は見られなかった。この結果も代替説明が排除されうること示唆している。

は異なった効果をもつことも明らかとなった。潜在レベルでこれら二つの反応が独立したものであることを示した研究はあるが (Amodio & Devine, 2006), 顕在レベルにおいても二つの反応が独立している可能性が高いことを本研究では示すことができた。今後, この二つのプロセスがどのような場合に相互作用するのかについて検討することも必要であろう。さらに, 潜在指標で測定される反応と顕在指標で測定される反応や, それらが予測するものは異なることが多くの研究者によって指摘されていることから (e.g., Dovidio, Kawakami, & Gaertner, 2002), 本研究で得られた効果を, 潜在指標を用いて検討する必要もあるだろう。この検討から, 偏見やステレオタイプの潜在と顕在の関係についても有益な知見を提供できることが期待できるだろう。

#### 引用文献

- Amodio, D.M., & Devine, P.G. (2006). Stereotyping and evaluation in implicit race bias: Evidence for independent constructs and unique effects on behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 91, 652-661.
- Bargh, J. A. (1997). The automaticity of everyday life. In R. S. Wyer Jr. (Ed.), *Advances in social cognition* (Vol. 10). Mahwah, NJ: Erlbaum. pp.1-61.
- Blair, I.V. (2002). The malleability of automatic stereotypes and prejudice. *Personality and Social Psychology Review*, 6, 242-261.
- Bodenhausen, G. V., Macrae, C. N., & Hugenberg, K. (2003). Activating and inhibiting social identities : Implications for perceiving the self and others. In G. V. Bodenhausen & A. J. Lambert (Eds.), *Foundations of social cognition*. Mahwah, NJ: Erlbaum. pp. 131-154
- Cater, J.D., Hall, J.A., Carney, D.R., & Rosip, J.C. (2006). Individual differences in the acceptance of stereotyping. *Journal of Research in Personality*, 40, 1103-1118.
- DeMarree, K.G., Wheeler, S.C., & Petty, R.E. (2005). Priming a new identity: Self-monitoring moderates the effects of non-self stereotype primes on self-judgments and behavior, *Journal of Personality and Social Psychology*, 89, 657-671.
- Dijksterhuis, A., & Bargh, J.A. (2001). The perception—behavior expressway: Automatic effects of social perception on social behavior. In M.P.Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol.33. San Diego, CA: Academic Press. pp.1-40
- Dovidio, J.F., Kawakami, K., & Gaertner, S.L. (2002). Implicit and explicit prejudice and interracial interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 62-68.
- Fiske, S. T., Cuddy, A. J., Glick, P., & Xu, J. (2002). A Model of (often mixed) stereotype content : Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 878-902.
- Glick, P., Diebold, J., Bailey-Werner, B., & Zhu, L. (1997). The two faces of Adam: Ambivalent sexism and polarized attitudes toward women. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23,

1323-1334.

沼崎 誠(2002). 自己概念 安藤 清・船津 衛 (編者). 自我・自己の社会心理学 (Pp.78-95).  
北樹出版.

(Numazaki, M)

沼崎 誠(2006). 潜在的性役割的偏見の発現とジェンダー・ステレオタイプの受容における心理  
過程の検討 文部科学省科学研究費補助金・研究成果報告書

(Numazaki, M)

沼崎 誠・小野 滋・高林久美子・石井国雄 (2006). Sequential Priming によるジェンダー・ス  
テレオタイプの活性化の研究 首都大学東京・東京都立大学 人文学報, 369, 21-52.

(Numazaki, M., Ono, S., Takabayashi, K., & Ishii, K (2006). On the activation of subtypes of  
gender stereotypes: A preliminary investigation using sequential priming task. *Journal of  
Social Sciences and Humanities*, 369, 21-52.

Rudman, L. A. & Kilianski, S. E. (2000). Implicit and explicit attitudes toward female authority.  
*Personality and Social Psychological Bulletin*, 26, 1315-1328.

Six, B., & Eckes, T. (1991). A closer look at the complex structure of gender stereotypes. *Sex  
Roles*, 24, 57-71.

Tajfel, H., & Turner, J.C. (1986). The social identity theory of intergroup behavior. In S.  
Worchel, & W. Austin (Eds.) , *Psychology of intergroup reactions*. Chicago: Nelson. pp.7-24

Wittenbrink, B., Judd,C.M., & Park, B. (2001). Evaluative versus conceptual judgments in  
automatic stereotyping and Prejudice. *Journal of Experimental Social Psychology* , 37, 244-252.

Wilson, T. D., Lindsey, S., & Schooler, T. Y. (2000). A model of dual attitudes. *Psychological  
Review*, 107, 101-126.

## 21 章 女性による伝統的女性と非伝統的女性への偏見とステレオタイプの適用<sup>1</sup> —潜在レベルからの検討—

高林久美子

沼崎誠

(一橋大学社会学研究科)

(首都大学東京人文科学研究科)

近年女性の社会進出に伴い、家庭と仕事の両立を目指す女性が増えている（国立社会保障・人口問題研究所，2006）。このような女性の場合、将来の自己の表象として、従来の伝統的性役割規範に従う伝統的な女性（以下、伝統的女性）としての自己表象と、そのような規範に従わない非伝統的な女性（以下、非伝統的女性）としての自己表象の両方を内在化させている可能性がある<sup>2</sup>。本研究の目的のひとつは、将来の自己表象として、伝統的女性としての自己表象と非伝統的女性としての自己表象の両方を内在化させる女性が、同性の女性に対してどのように偏見やステレオタイプを示すのかについて検討を行うことである。従来の女性に対する偏見やステレオタイプ化の研究は、主に男性による女性への偏見やステレオタイプ化という文脈から検討されたものがほとんどであるが、女性がどのように同性に対して偏見とステレオタイプ化を示すのかを明らかにすることができれば、男性が示すものとは異なった視点から、その問題を指摘することができるだろう。そして、女性の上記2つの自己表象の内在化が同性の偏見やステレオタイプ化に関与していることを明らかにすることができれば、自己表象の内在化に大きく影響していると考えられる女性のキャリア選択の障害を取り除くような環境を整えることが、同性への偏見とステレオタイプ化の低減につながる可能性を提示できるかもしれない。

本研究のもうひとつの目的は、偏見に関わる反応とステレオタイプに関わる反応を区別し、その2つの反応の差異について検討することである。従来から、偏見とステレオタイプは概念的に区別され論じられてきた。偏見は、感情価を伴う態度レベルのものとして、ステレオタイプは認知レベルのものとして捉えられている。測定に関しても、この2つは区別して測定されるべきだと指摘されている（e.g., Judd, Blair, & Chapleau, 2004; Wittenbrink, Judd, & Park, 2001）。さらに、近年では、この2つの反応が対応するものなのか、独立したものなのかに関して議論がわかれている。本研究では、偏見に関わる反応とステレオタイプに関わる反応に影響を及ぼす要因の差異について検討することにより、この2つの反応の関係について明らかにすることを旨とする。

### 女性が女性に対して示す偏見とステレオタイプ化

従来、女性に対する偏見やステレオタイプ化に関する研究の多くは、男性対女性という観点から検討がなされてきた。しかし、女性に対して偏見やステレオタイプを示すのは男性ばかり

<sup>1</sup>本論文は、社会心理学研究第26号に掲載されたものの再掲である。

<sup>2</sup>本研究では、より一般的な意味で「伝統的女性」「非伝統的女性」という用語を用いる。



ではない。女性も女性に対して非好意的に反応することがある。例えば、女性が結婚や子育てを犠牲にしてまで働くことへの非難や専業主婦への税制優遇措置への非難などは、同性の女性側から発せられる場合もある。直感的に考えると、同じ「女性」というカテゴリーゆえに女性は同性の女性に対して好意的になることも十分に考えられる。ではなぜ、女性は女性に対して偏見やステレオタイプを示すことがあるのだろうか。本研究はこの問いに答えるために女性のサブカテゴリー化、すなわち伝統的女性と非伝統的女性の出現に注目する。さらに、近年の女性は「家庭と仕事」の両立を目指すことにより、一人の女性においても「伝統的女性としての自己」と「非伝統的女性としての自己」の両方を内在化しうる可能性に注目し、その両方の自己表象の保持が状況依存的な女性による女性への偏見やステレオタイプ化につながることを明らかにする。

それでは両方の自己表象を内在化した女性の、同性の女性に対する偏見に関わる反応とステレオタイプに関わる反応はどのように予測できるだろうか。Markus & Wurf(1987)によると、両方の自己表象を内在化した女性は、状況によって、伝統的女性としての自己表象が活性化する場合と、非伝統的女性としての自己表象が活性化する場合があると考えられる。そして、伝統的女性としての自己表象が活性化している場合には、伝統的女性としての自己が顕現化し、伝統的女性が示す態度や行動を示しやすくなる。一方、非伝統的女性としての自己表象が活性化している場合には、非伝統的女性としての自己が顕現化し、非伝統的女性が示す態度や行動を示しやすくなる。人は自分が所属する内集団成員に対して外集団成員よりも好意的に評価するという知見 (Tajfel & Turner, 1986) を踏まえると、偏見に関しては、顕現化した自己表象と一致するタイプの女性を、一致しないタイプの女性よりも好意的に評価するだろうと予測できる。ステレオタイプの適用に関しては、Carter, Hall, Carney, & Rosip (2006) は、伝統的性役割観が強い人ほど社会的ステレオタイプを適用しやすいという関連を見出している。ここから、伝統的女性としての自己表象が顕現化したときのほうが非伝統的女性としての自己表象が顕現化したときに比べて、伝統的女性に対しても非伝統的女性に対してもステレオタイプを適用しやすくなると予測できる。伝統的女性に対するステレオタイプは、典型的な女性性を表す属性 (e.g., 面倒見の良い、おしゃべりな) を多く含むのに対し、非伝統的女性に対するステレオタイプは、典型的な男性性を表す属性 (e.g., 決断力のある、傲慢な) を多く含むことが知られている (Glick, Diebold, Bailey-Werner, & Zhu, 1997)。よって、伝統的な女性としての自己表象が顕現化した場合には、非伝統的な女性としての自己表象が顕現化した場合に比べ、家庭女性に女性的なステレオタイプを、キャリア女性に男性的なステレオタイプを適用しやすくなるだろうと予測できる。

高林・沼崎・小野・石井 (2008) では、これらの仮説を、顕在指標を用いて検討を行っている。彼らは、女性を実験参加者として、まず、自己表象のプライムの操作として、「家庭女性としての自分の姿」あるいは「働いている自分の姿」をイメージさせた。その後、ターゲット人物として架空の家庭女性あるいはキャリア女性のプロフィールを提示し、印象を回答させるこ

とによって偏見とステレオタイプの適用を測定した。その結果、プライムされた自己表象によってステレオタイプの適用と偏見の反応が異なっていた。偏見に関しては、伝統的女性の自己表象をプライムされた女性は、非伝統的女性の自己表象をプライムされた女性に比べて、キャリア女性より家庭女性を好意的に評価していた。ステレオタイプの適用に関しては、伝統的女性として自己表象をプライムされた女性は、非伝統的女性としての自己表象をプライムされた女性よりも、家庭女性に女性的ステレオタイプを、キャリア女性に男性的ステレオタイプを適用した。すなわち、伝統的女性としての自己表象が顕現化しているときは、非伝統的女性としての自己表象が顕現化しているときよりも、女性サブカテゴリー・ステレオタイプの適用を強めた。しかし、これらの結果は、自己表象のプライムの操作で「自分の姿をうまく想像できた」と回答した参加者に限定されていた。このため、この結果はプライムによる効果ではなく、実験参加者の個人差（性役割観）によって得られた可能性がある。すなわち、伝統的女性の自己プライム群で想像が容易だった実験参加者は、もともと伝統的な女性としての自己が優位で、伝統的な性役割を支持する態度をもっていたため、家庭女性よりキャリア女性をネガティブに評価し、ターゲット人物をステレオタイプ的に判断した可能性が考えられる。また、同様に、非伝統的女性の自己プライム群で想像が容易だった実験参加者は、もともと非伝統的女性としての自己が優位で、非伝統的な性役割を支持する態度をもっていたため、キャリア女性より家庭女性をネガティブに評価し、ターゲット人物をステレオタイプ的に判断することを抑制した可能性がある。高林ほか（2008）では、実験の最後に測定した実験参加者のキャリア志向性と想像容易性に関係があるかを検討し、関連は見いだされなかったことから、上記の代替説明の可能性は小さいとしている。

#### 先行研究の問題点

高林ほか（2008）では、ステレオタイプの適用と偏見に関わる効果は、それぞれ別々の交互作用効果として有意であった。このことはステレオタイプの適用に関わる認知的反応と偏見に関わる感情的反応が異なったプロセスを経ている可能性を示唆している。しかしながら、高林ほか（2008）で得られた反応は、意識によって統合された顕在的な反応であり、ステレオタイプの適用に関わる認知的反応と偏見に関わる感情的反応を分離して測定できていない可能性がある。それらの反応を区別して測定するためには、意識の影響をできるだけ排除できる段階でそれらを測定することが望ましいだろう。そこで本研究では、反応時間で測定できる潜在指標で、ステレオタイプの適用に関わる認知的反応と偏見に関わる感情的反応を測定した。

高林ほか（2008）で残されたもうひとつの課題として、得られた結果が個人差によるものだという代替説明の可能性は小さいことが示唆されているものの、その個人差は事後的に測定したものであるため、その代替説明を完全に排除するにいたっていないことが挙げられる。よって、本研究では高林ほか（2008）で得られた結果が、自己表象のプライムの操作によるものか、あるいは個人差の影響によるものかを明確に区別するために、個人差を事前に測定するように手続きを変更し、検討を行った。

## 偏見的反応とステレオタイプの反応

本研究において、個人差の影響について検討することにはもうひとつの意義がある。近年、偏見に関わる感情的反応とステレオタイプに関わる認知的反応が独立した関係にあるのか、対応した関係にあるのかについて議論がなされている。その点に関して、個人差の影響の差異をみることによって、検討できる可能性があるからである。

偏見に関わる反応とステレオタイプに関わる反応が独立しているとする主張として、感情的連合と意味的連合に関わる神経基盤は異なっており、感情的学習と記憶には扁桃体の働きが大きく関与するのに対し、意味的学習と記憶は、より高次の情報処理に関係する系統発生的な新規な新皮質によって支えられていると指摘されている (e.g., Bartholow, Fabiani, Gratton, & Bettencourt, 2001)。さらに、Amodio & Devine (2006) は、潜在的な偏見的反応は、接近/回避行動などの完了的行動 (consummatory behavior) を予測するのにに対し、潜在的なステレオタイプの反応は、印象形成などの道具的行動 (instrumental behavior) を予測することを示し、これら 2 つの反応は、独立のプロセスから生じていると主張している。そして、偏見に関わる感情的反応とステレオタイプに関わる認知的反応が独立であるならば、それらの差異は異なったメカニズムの学習から生じると指摘している。潜在的評価は潜在的認知よりも素早く学習されるが、いったん学習されるとそれらを捨て去ることは困難であるため、潜在的偏見はたった一度の実験操作 (状況的要因) だけでは影響を受けづらはずだと主張している。

しかし、その一方で、偏見に関わる感情的反応とステレオタイプに関わる認知的反応が連動していることを示唆する議論もある。Gawronski & Bodenhausen (2006) は、感情的反応と認知的反応がどのように影響しあうのかについてレビューした上で、感情的反応は認知的反応に応じて変わりうると主張している。Gawronski, Deutsch, Mbirkou, Seibt, & Strack (2008) では、この主張に一致して、ステレオタイプ不一致情報を肯定すると、自動的なステレオタイプの反応と同様に偏見の反応も低減することを示している。

本研究では、これらの議論を検証するために、偏見に関わる感情的反応とステレオタイプに関わる認知的反応に影響する要因として、状況的要因と個人差要因に注目した。もし、Gawronski *et al.* (2008) の主張のとおり、偏見に関わる反応とステレオタイプに関わる反応が対応するのであれば、同じ要因によってそれらの反応は同じ様に影響を受けると予測できよう。一方、Amodio & Devine (2006) の主張のとおり、偏見に関わる反応とステレオタイプに関わる反応が独立したプロセスであるならば、それらの反応は異なった要因によって影響を受け、少なくとも偏見に関わる反応は個人差によって影響を受けると予測できる。

## 偏見的反応とステレオタイプの反応の測定

本研究では、潜在的な偏見の反応とステレオタイプの反応を測定するために、Implicit Association Test (以下、IAT ; Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998) を用いた。IAT とは、概念間の連合強度を測定するものである。IAT では、パソコン上に現れるカテゴリー (例えば「キャリア女性 vs. 家庭女性」と属性 (例えば「男性的 vs. 女性的」) の 4 タイプの刺激を、2

つのキーを使ってカテゴリー分けを行い、キー押しに要した反応時間を測定する。もし同じ回答キーに割り当てられたカテゴリーどうしが強く連合しているのであれば、連合が弱い場合よりもキー押しの反応時間が短くなると想定される。一般に IAT では、ステレオタイプに一致した試行（例えば、「家庭女性」と「女性的属性」を同じキーで反応する試行）のほうが、ステレオタイプに不一致な試行（例えば、「家庭女性」と「男性的属性」を同じキーで反応する試行）よりも反応時間が速くなることが知られている（e.g., Greenwald, Banaji, Rudman, Farnham, Nosek, & Mellott, 2002）。

さらに本研究では、偏見に関わる感情的成分とステレオタイプに関わる認知的成分を区別して同時に測定するために、2種類の IAT を実施した。Bluemeke & Friese (2006) では、IAT で用いるステレオタイプ属性<sup>3</sup>の感情価を系統的に変えることによって、ステレオタイプの反応だけではなく、その偏見の反応の影響についても検討できることが示唆されている。石井・沼崎 (2009) は、ジェンダーに関して同様の手法を用いて、偏見に加えて、ステレオタイプによる影響も同時に測定できることを示している。本研究では、石井・沼崎 (2009) の手法にならい、IAT で提示する伝統的女性と非伝統的女性のステレオタイプ属性の感情価を系統的に変えることにより、ステレオタイプに関する反応と偏見に関する反応の両方を検討した。具体的には、女性タイプ（家庭女性 vs. キャリア女性）と属性（好ましい vs. 好ましくない）を分類する IAT を2つ実施した。ここで、一方の IAT では好ましい属性に女性的特性（例、優しい）を、好ましくない属性に男性的特性（例、傲慢な）を提示し（以下、向女性タイプ）、他方の IAT では好ましい属性に男性的特性（例、有能な）を、好ましくない属性に女性的特性（例、うわさ好き）を提示した（以下、向男性タイプ）。本研究では、IAT 効果を評価するために、家庭女性に好ましくない特性を割り当てる試行から家庭女性に好ましい特性を割り当てる試行の平均反応時間を減算して、IAT 量を算出した。このように算出された IAT 量は、正に大きいほど、家庭女性に好意的に反応したことを示し、潜在的な偏見の指標となる。さらに、向女性タイプの IAT において IAT 量が大きいということは、同時に女性サブカテゴリー・ステレオタイプと一致した反応を示したことを意味する。なぜなら、この IAT において、家庭女性に好ましい属性を連合させ、キャリア女性に好ましくない属性を連合させる試行は、家庭女性に女性的特性を、キャリア女性に男性的特性を連合させる試行となっているためである。一方、向男性タイプの IAT において、IAT 量が小さいということは、同時に女性サブカテゴリー・ステレオタイプと一致した反応をしたことを意味する。なぜなら、この IAT において、家庭女性に好ましい属性を連合させ、キャリア女性に好ましくない属性を連合させる試行は、家庭女性に男性的特性を連合させ、キャリア女性に女性的特性を連合させる試行となっているためである。すなわち、向女性タイプの IAT 量と向男性タイプの IAT 量の違いが潜在的なステレオタイプ化の指標となり、

---

<sup>3</sup> Bluemeke & Friese(2006)では、ステレオタイプ属性だけではなく、カテゴリータイプの感情価も系統的に変えて、その影響についても検討しているが、本研究では、カテゴリータイプ（女性サブカテゴリー）の感情価については検討しない。

前者が後者に比べて大きいほどステレオタイプの影響を受けたことを示すこととなる。このような2種類のIATを実施することにより、伝統的女性と非伝統的女性のどちらにより好意的であるのかという反応に加えて、その反応がどの程度ステレオタイプの影響を受けているかについても検討することができる。

本研究では、「伝統的女性」と「非伝統的女性」というサブカテゴリー女性に対して快不快を付与する反応を偏見的反応、サブカテゴリー女性に対して男性的および女性的ステレオタイプを付与する反応をステレオタイプの反応とした。本研究のIATで測定する偏見的反応とステレオタイプの反応は、家庭女性とキャリア女性全般に対する反応であるのに対し、先行研究（高林ほか, 2008）で測定した偏見とステレオタイプの反応はある特定の個人に対する反応であるという点で異なっている。よって、本研究で測定している反応と先行研究で測定している反応は同等のものではないだろう。しかし本研究では、IATで測定された潜在レベルでの連合強度が、顕在レベルにおける特定の個人に対する判断へと導くという過程を想定しており、先行研究と対応していると考えられる。

### 本研究の概要と仮説

本研究では、潜在レベルで測定された偏見的反応とステレオタイプの反応が、高林ほか(2008)で得られた顕在的な偏見とステレオタイプ化をもたらすと想定した上で仮説を立てた<sup>4</sup>。ただし、高林ほか(2008)の結果が実験参加者の性役割観の個人差によるものか、一時的な女性サブカテゴリーの自己表象のプライムによるものかを明確にするため、本研究ではこの2つの効果を区別して仮説を立てた。一時的な自己表象のプライムによる効果の予測は以下のようになる。伝統的女性としての自己表象がプライムされた女性は、非伝統的女性としての自己表象がプライムされた女性に比べてキャリア女性より家庭女性に潜在的に好意的になるだろう（仮説1-1）。仮説1-1が支持された場合には、IAT量に対してプライムの主効果が有意となり、家庭的自己プライム群のほうがキャリア的自己プライム群よりもIAT量が大きくなるだろう。また、伝統的女性としての自己表象がプライムされた女性は、非伝統的女性としての自己表象がプライムされた女性に比べて、潜在的に女性サブカテゴリーに対してステレオタイプに一致した反応をより強く示すだろう（仮説1-2）。仮説1-2が支持された場合には、向女性タイプのIAT量が向男性タイプのIAT量に比べ大きいほどステレオタイプの影響を受けたことを示すため、IAT量に対してプライム×IATタイプの交互作用効果が有意となり、家庭的自己プライム群はキャリア的自己プライム群に比べて、向女性IATタイプのIAT量と向男性IATタイプのIAT量の違いが大きくなるだろう。

本研究では、性役割観の慢性的な個人差の指標として、短縮版平等主義的性役割観尺度（SESRA : Scale of Egalitarian Sex Role Attitudes, 鈴木, 1991, 1994 ; 以下、SESRA）を用いた。

---

<sup>4</sup> 潜在レベルと顕在レベルの反応の不一致に関しては、一致する場合と不一致な場合と両方の予測が可能である。しかし、仮説を立てるにあたり、不一致な場合に潜在的反応と顕在的反応が、どのように異なるのかが明確ではなかったため、一致した場合を想定した。

この尺度は15項目から構成され、値が高いほど平等的性役割観が強いことを示す。その妥当性や信頼性は数多くの研究で報告されている（鈴木, 1991, 1994, 1999）。本研究では、その尺度において伝統的性役割態度が強い女性ほど、慢性的に伝統主義的性役割信念が強く、伝統的女性としての自己が優位であり、平等主義的性役割観が強い女性ほど、慢性的に平等主義的性役割信念が強く、非伝統的女性としての自己が優位であると想定した。実際に鈴木（1996）では、有職女性は無職の女性よりも、この得点が高くなることが確認されている。個人差による効果の予測は以下のようになる。伝統主義的性役割観が強い女性は、平等主義的性役割観が強い女性に比べて、キャリア女性より家庭女性に潜在的に好意的になるだろう（仮説 2-1）。仮説 2-1 が支持された場合、IAT 量に対して SESRA の主効果が有意で、SESRA の得点が高い女性のほうが SESRA の得点が高い女性よりも IAT 量が大きくなるだろう。また、伝統主義的性役割観が強い女性は、平等主義的性役割観が強い女性よりも、潜在的に女性サブカテゴリに対してステレオタイプに一致した反応をより強く示すだろう（仮説 2-2）。仮説 2-2 が支持された場合には IAT 量に対して IAT タイプ×SESRA の交互作用効果が有意で、SESRA の得点が高い女性は、SESRA の得点が高い女性に比べて、向女性 IAT タイプの IAT 量と向男性 IAT タイプの IAT 量の違いが大きくなるだろう。

次に、潜在的なステレオタイプの反応と偏見的反応の関係に関する予測は以下のとおりである。この2つの反応が対応するのであれば、それらは同じ要因によって影響を受けると考えられるため、個人差要因がステレオタイプの反応に影響を及ぼすのなら偏見的反応にも影響を及ぼし、状況的要因がステレオタイプの反応に影響を及ぼすのなら偏見的反応に影響を及ぼすと考えられる。もし、潜在的なステレオタイプの反応と偏見的反応が独立したものであるならば、ステレオタイプの反応と偏見的反応では異なった要因によって影響を受けよう。もし異なった影響を受けるとすると、偏見的反応は個人差の影響を受けよう。

## 方法

### 実験参加者

東京都内の共学の4年生大学に通う女子大学生69名であった（平均年齢19.26歳、SD=1.59）。そのうち、個人差尺度の回答に不備があった4名を分析から除外した。よって、分析対象は65名であった。実施時期は1月であった。

### 刺激材料

向男性タイプの IAT では、好ましい特性に男性的特性（有能な・決断力のある・自信のある・指導力のある・勇敢な）が、好ましくない特性に女性的特性（うるさい・うわさ好き・でしゃばり・おせっかい・おしゃべり）が提示された。他方の向女性タイプの IAT では、好ましい特性に女性的特性（優しい・思いやりのある・温かい・献身的な・親しみやすい）が、好ましくない特性に男性的特性（傲慢な・強引な・威圧的な・頑固な・高圧的な）が提示された。これらの特性語は、沼崎・小野・高林・石井（2006）に基づいて選定した。女性タイプは、エプロンを身につけ、料理や掃除をしている女性の写真5枚を家庭女性関連刺激とし、スーツを着て

プレゼンをしたり、パソコンにむかっている女性の写真5枚をキャリア女性関連刺激とした。

## 実験計画

プライム（家庭的自己 vs. キャリア的自己）×IATタイプ（向女性タイプ vs. 向男性タイプ）×平等主義的性役割観で、プライムは実験参加者間要因、IATタイプは実験参加者内要因、平等主義的性役割観は実験参加者間要因で分析では連続変量として用いた。

## 手続き

事前調査で実験参加者は、本実験の約3ヶ月前に短縮版 SESRA（鈴木、1994）に回答した。

本実験は大学の教室において実験参加者2~6名で個別に実施した。実験参加者は無関連な2つの研究に参加するように依頼された。まずイメージングの研究として、実験参加者は将来の自分の姿を想像するよう求められた。家庭的自己プライム群では、「将来、結婚して良き妻、良き母になった自分」を想像させた。キャリア的自己プライム群では、「将来、キャリアウーマンとしてバリバリ働いている自分」を想像させた。3分半想像させた後で、想像した内容を書き出すよう依頼した<sup>5</sup>。

次に単語分類課題による心理表象の検討の研究として、コンピュータを用いた IAT (inquisit2.0) を実施した。IAT は上述の通り、向男性タイプと向女性タイプの2種類あり、実験参加者は連続してこの2種類の IAT に従事した。向男性タイプと向女性タイプの順序は、カウンターバランスがとられた。各 IAT とともに7つのブロックで構成され、いずれのブロックにおいてもコンピュータ画面上に提示される刺激語が、どのカテゴリーに属するかを「d」あるいは「k」のキーを押して回答させ、その反応に要した時間を測定した。第1ブロックでは PC 画面中央に呈示される写真を「家庭女性」「キャリア女性」のカテゴリーに分類させた（12試行）。第2ブロックでは PC 画面中央に呈示される特性語を「好ましい」「好ましくない」のカテゴリーに分類させた（12試行）。第3ブロックでは画面中央に提示される写真あるいは特性語を「家庭女性」「キャリア女性」「好ましい」「好ましくない」の4カテゴリーを使った混合課題(練習)を実施し（14試行）、第4ブロックではこの混合課題の本番を実施した（44試行のうち最初の4試行はフィラー）。第5ブロックでは、第2ブロックとはキーの配置を逆にして、「好ましい」「好ましくない」を使った課題を実施し（12試行）、第6(練習)ブロック（14試行）と第7(本番)ブロック（44試行のうち最初の4試行はフィラー）では、第4ブロックとカテゴリーの組み合わせを変えた混合課題を実施した。混合課題のステレオタイプ一致試行とステレオタイプ不一致試行の順序はカウンターバランスがとられた。実験参加者は誤答した場合、PC画面中央下に「×」が表示され、正答キーを押すように求められた。試行間隔は200msであった。IAT 終了後、実験参加者に質問紙を渡し、最初の調査での想像のしやすさや実験参加者本

---

<sup>5</sup> プライムの操作が成功していたかを調べるために、条件をしらない第三者に想像内容の記述を読んで、いずれの条件であるかを判別してもらった。その結果、すべての実験参加者の条件を正確に答えることができたため、操作は成功していたと考えられる。

人のキャリア志向度について尋ねた<sup>6</sup>。最後にデブリーフィングを行い、実験を終了した。本実験の目的を正しく推測できた実験参加者はいなかった。

## 結果

分析には、向女性タイプと向男性タイプともに第4ブロックと第7ブロックの本試行の反応時間を使用した。いずれのブロックにおいても、エラー試行は分析から除外した。エラー率は、向女性タイプが6.72%、向男性タイプが5.87%であった。また、300ms以下の反応は300msに（向男性タイプ1試行）、3000ms以上の反応は3000msに（向女性タイプ12試行、向男性タイプ7試行）置き換えた（Greenwald *et al.*, 1998）。全ての反応時間を対数変換し、「家庭女性」と「好ましくない特性」を結びつける試行から「家庭女性」と「好ましい特性」を結びつける試行の平均を減算し、各IATタイプのIAT量を算出した<sup>7</sup>。SESRA得点を標準化し、家庭プライムを1、キャリアプライムを-1とした上で、向女性タイプのIAT量の平均と向男性タイプのIAT量の平均に対して、プライム×IATタイプ×SESRAのすべての交互作用効果項を含む一般線形モデルによる分析を行った（O'Conner, 1998）。その結果、SESRAの主効果（ $F(1,61)=6.09, p<.05$ ）、IATタイプ的主効果（ $F(1,61)=99.69, p<.01$ ）、プライム×IATタイプの交互作用効果（ $F(1,61)=4.35, p<.05$ ）が有意であった。

SESRAの主効果に関して、伝統的性役割観が強い者を1 $\sigma$ とし、平等主義的性役割観が強い者を-1 $\sigma$ としてIAT量をもとめると、伝統的性役割観が強い者のIAT量の平均は.05、（反応時間では99.37ms）、平等主義的性役割観が強い者のIAT量の平均は.02（反応時間では49.81ms）であった。IAT量が大きいということは、キャリア女性よりも家庭女性に好意的に反応したことを意味するため、伝統的性役割観が強いものは平等主義的性役割観が強いものに比べてキャリア女性より家庭女性に好意的に反応していたことになる。これは仮説2-1を支持する結果であった。

IATタイプ的主効果は、家庭女性に好意的な反応を示すことがステレオタイプ一致反応にな

---

<sup>6</sup> 想像容易性と事後に測定したキャリア志向度を要因にして分析を行った結果、いずれの効果に関して有意な効果はみられなかったため、分析結果については割愛する。

<sup>7</sup> IAT効果は、ステレオタイプ不一致試行からステレオタイプ一致試行を減算することによって算出することも可能である。この場合、IAT量が大きいことはステレオタイプ一致反応が促進したことを意味する。この方法で算出されたIAT量に対して、プライム×IATタイプ×SESRAの分散分析を行うと、プライムの主効果（ $F(1,61)=4.35, p<.05$ ）、IATタイプ的主効果

（ $F(1,61)=33.05, p<.01$ ）、IATタイプ×SESRAの交互作用効果（ $F(1,61)=6.09, p<.05$ ）が有意であった。プライムの主効果は、家庭的自己プライム群のほうがキャリア的自己プライム群よりもIAT量が大きく、ステレオタイプの反応が強いことによるものであった。IATタイプ的主効果は、向女性タイプのほうが向男性タイプよりもIAT量が大きく、ステレオタイプの的に判断されることによるものであった。しかし、この主効果はIATタイプ×SESRAの交互作用効果に制限を受けた。ステレオタイプ一致試行が家庭女性に好ましい特性を割り当てる試行になる向女性タイプのIATでは伝統主義的性役割観者の方が平等主義的性役割観者よりIAT量が大きく、ステレオタイプ一致試行がキャリア女性に好ましい特性を割り当てる試行になる向男性タイプのIATではIAT量が小さかった。すなわち、伝統主義的性役割観者は平等主義的性役割観者に比べてキャリア女性より家庭女性により好意的に評価していた。これらの結果は、本研究で報告したIAT量と対応した結果であった。



る向女性タイプのほうが ( $M=.07$ 、反応時間では $-136.97\text{ms}$ )、家庭女性に好意的な反応を示すことがステレオタイプ不一致反応になる向男性タイプよりも ( $M=.00$ 、反応時間では $-14.55\text{ms}$ )、IAT 量が大きいことによる効果であった。この効果は、家庭女性に対する好意の反応が、ステレオタイプと一致した反応か不一致な反応かによって異なり、ステレオタイプによって影響を受けたことを示している。さらにこの主効果は、プライム×IAT タイプの交互作用効果によって制限される。その交互作用のパターンを、分かりやすくするために反応時間 (ms) で示したものが Figure1 である。この効果をさらに詳しくみるために、下位検定を行った。まず IAT タイプにおけるプライムの効果を検討したところ、向男性タイプと向女性タイプ両方においてプライムの効果は有意ではなかった (順に  $F(1,63)=.46, ns$ ,  $F(1,63)=1.75, ns$ )。次に、プライムにおける IAT タイプの効果を検討したところ、家庭的自己プライム群とキャリア的自己プライム群ともに、IAT タイプの効果が有意であり (順に、 $F(1,29)=60.13, p<.01$ ;  $F(1, 34)=38.60, p<.01$ )、家庭女性に好意的な反応を示すことがステレオタイプ一致試行となる向女性タイプのほうが、家庭女性に好意的な反応を示すことがステレオタイプ不一致試行となる向男性タイプよりも IAT 量が大きかった。すなわち、家庭的自己プライム群とキャリア的自己プライム群ともに、ステレオタイプ一致の影響を受けていた。しかし、Figure1 から、家庭的自己プライム群はキャリア的自己プライム群に比べて、向男性 IAT の IAT 量と向女性 IAT の IAT 量との違いが大きいことが分かる。これは、家庭的自己プライム群のほうがキャリア的自己プライム群よりもステレオタイプ一致反応が促進したことをあらわしており、仮説 1-2 を支持する結果であった。

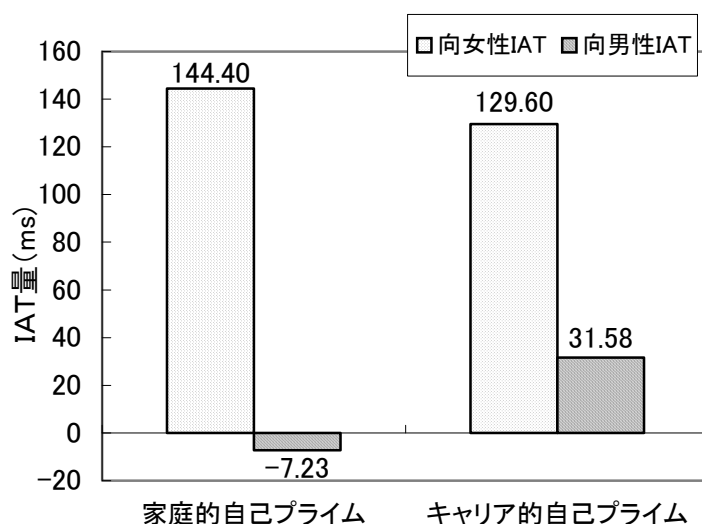


Figure 1.プライムとIATタイプの効果

仮説 1-1 から予測されるプライムの主効果 ( $F(1, 61)=.16, ns$ ) と仮説 2-2 から予測される SESRA×IAT タイプの交互作用効果 ( $F(1, 61)=.94, ns$ ) は有意でなく、仮説 1-1 と仮説 2-2 は支持されなかった。偏見の反応に関しては、仮説 2-1 のみが支持された。また、偏見の反応とステレオタイプの反応は別の要因によって影響を受けていた。これらの結果から、偏見の反応と

ステレオタイプの反応は連動した関係ではなく、独立した関係であることが示された。

### 考察

本研究の第一の目的は、伝統的女性としての自己と非伝統的女性としての自己の両方を内在化させる女性が、女性サブカテゴリーとしての自己表象の一方が顕現化したときにサブカテゴリー女性に対してどのように偏見やステレオタイプを示すのかについて、潜在指標を用いて検討を行うことであった。また、先行研究（高林ほか, 2008）と関連して、その偏見とステレオタイプに影響するものが、一時的な自己表象のプライムの操作なのか慢性的な個人差なのかを明確化することを試みた。第二の目的は、ステレオタイプの反応と偏見的反応の関係が独立したものなのか、対応したものなのかについて、それらに影響を及ぼす要因を特定することで検討することであった。

その結果、ステレオタイプの反応に関しては、伝統的女性としての自己表象をプライムされた女性は非伝統的女性としての自己表象をプライムされた女性に比べて、女性サブカテゴリー・ステレオタイプに一致した反応を強めた。偏見的反応に関しては、慢性的に伝統的性役割観の強い女性は平等主義的性役割観の強い女性に比べてキャリア女性より家庭女性に好意的な反応が強かった。本研究でみられた偏見とステレオタイプに関わる反応は、高林ほか（2008）のものと類似し、潜在レベルで示される偏見とステレオタイプの反応が顕在レベルで示される偏見とステレオタイプ適用を予測しうることを示唆されている。また、先行研究では偏見とステレオタイプ化が状況要因によって影響を受けるのか個人差によって影響を受けるのか曖昧であったが、本研究の結果から潜在レベルにおける偏見的反応とステレオタイプの反応はそれぞれ別の要因によって影響を受け、ステレオタイプの反応には一時的なプライムの操作が影響し、偏見的反応には実験参加者の慢性的な個人差が影響することが示された。

### 偏見的反応とステレオタイプの反応の関係—本研究からの示唆

本研究の結果は、偏見的反応とステレオタイプの反応の関係性を考える上でも示唆的である。ステレオタイプの反応と偏見的反応が異なったものによって影響を受けたという本研究の結果は、これらの2つの反応は Amodio & Devine (2006) の主張するように独立している可能性が高いことを示している。さらに Amodio & Devine (2006) は、潜在的評価は潜在的認知よりもいったん学習されるとそれらは根強く残り、一度の実験操作によって変化しづらいと主張している。ここから、偏見的反応は状況要因よりも、幼少時から今までにわたって長期的に学習された結果である個人差のほうが影響しやすいと考えられるが、本研究の結果はこれと一致して、偏見的反応は個人差によってのみ影響を受けていた。ただし、この結果は、単にサブカテゴリー女性の一女性の選好の顕在指標と潜在指標との相関に過ぎないという解釈も可能である。すなわち、SESRA で測定していたものは性役割志向的な態度であったため、同じ態度に基づく潜在的な偏見的反応と関連したと解釈できる。今後はもっと明確に「家庭的自己」「キャリア的自己」を測定する尺度を開発した上で、それらと偏見的反応の関係について再度検討する必要があるだろう。

一方、ステレオタイプの反応に関しては、プライムという一時的な要因が影響を与えていた。この結果は、認知的反応が状況の変化に敏感であることを示唆しているのかもしれない。そうであれば、ステレオタイプの変容という観点においては、非常に有益な示唆を与えるだろう。なぜならば、ステレオタイプの解消もしくは変容には、個人の自己観や価値観の変容を促すよりも、環境を整えることが有効であることを意味しているからである。ただし、ステレオタイプの反応に個人差が影響しなかったのは、今回の実験参加者の SESRA 得点が 57.08 ( $SD=8.17$ ) であり、やや平等主義的な方向に偏っていたことが影響している可能性がある。今後は 4 年制大学の女性以外の幅広い女性を対象に追試を行い、本研究の知見の一般化を検討する必要があるだろう。

注意したいのは、ここで議論しているのはあくまで個人差と状況的要因の相対的な影響力の差異に過ぎない、ということである。よって、偏見的反応が状況的要因の影響を受ける場合もあるし、ステレオタイプの反応が個人差の影響を受ける場合もあるだろう。例えば、Dasgupta & Greenwald(2001)は、好ましい黒人と好ましくない白人を提示させると自動的な人種的偏見が低下することを示している。また、Rudman, Greenwald, & McGhee(2001)は、潜在的な自己概念によって潜在的なジェンダー・ステレオタイプが異なることを示している。本研究で示されたことは、あくまで偏見的反応は個人差要因の影響を受けやすく、ステレオタイプの反応は状況的要因の影響を受けやすいだろう、ということに過ぎない。

偏見的反応とステレオタイプの反応の関係については、まだ明らかになっていない点が多く、検討の余地があるものの、多くの関心があつまっている (e.g., Amodio & Lieberman, 2009)。偏見にかかわる感情的反応とステレオタイプにかかわる認知的反応の関係を体系的に理解していくための研究の蓄積が望まれる。

#### 女性による女性への偏見とステレオタイプ化—本研究からの示唆

慢性的な自己観は偏見に影響を及ぼし、状況的に顕現化した自己観はステレオタイプ化に影響するという本研究の結果は、現代の女性の複雑な性役割観や自己観が偏見やステレオタイプにどのように影響するかを考える上でも示唆を与える。現代の女性の性役割に関する自己観は、個人的な志向のみで決まるのではなく、状況に応じて形成される部分も大きいと考えられる。例えば、仕事をしたくても出産・育児のため働けない女性が多いことは頻繁に指摘されている (国広, 2005)。その一方で家庭に入りたくても仕事を続けざるをえない女性もいるだろう。また、家庭と仕事の両方に就いていたとしてもその両立がうまくいかず、「育児の影響が大きく仕事に満足していない」あるいは「仕事の影響が大きく育児に満足していない」女性は多い (日本労働研究機構, 2003)。このような事例を考えると、慢性的な自己観と状況に依存した自己観を区別して考えることは重要であろう。本研究の慢性的な自己観と偏見の結果では、近年の非伝統的女性を積極的に容認しようとする平等主義的信念の強化はかえって、家庭女性への偏見までも招いてしまう可能性を示している。信念を変えていくことによって偏見やステレオタイプ化を低減していくには限界がある中で、状況に制約された自己観をどのように形成させてい

くかが重要な課題になるだろう。そして本研究の状況依存的な自己観とステレオタイプ化の結果は、働きたくても家庭にとどまらざるを得ない女性が働けるような環境（例えば、保育所の増設や父親の育児参加の推進）を整備していくことにより、少なくとも、そのような女性が示すステレオタイプ化は低減できる可能性があることを示唆している。しかし本研究では、「家庭的自己」と「キャリア的自己」の両立を、その2つの自己が存在しているという意味でしか検討できていない。現実には、その2つの自己がうまく両立している女性もいれば、両方の自己が葛藤している女性もいるだろう。2つの自己が葛藤している場合には、今回得られた結果とどう異なってくるのだろうか。今後は2つの自己表象が内在している場合でも、その2つがどのような関係にあるのかについて直接示して、より具体的に検討していく必要があるだろう。

現代は、一昔前のように女性の性役割の選択は一通りではなく、様々な選択が可能になってきた。しかしその選択は様々な制約を受け、それゆえに今までにはなかった女性の性役割に対する考え方や葛藤、それに伴う心理的問題につながるおそれもある。今後、このような女性の性役割意識の変化に基づいた検討が必要となってくるだろう。

#### 引用文献

- Amodio, D.M., & Devine, P.G. (2006). Stereotyping and evaluation in implicit race bias: Evidence for independent constructs and unique effects on behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 91, 652-661.
- Bartholow, B. D., Fabiani, M., Gratton, G., & Bettencourt, B. A. (2001). A psychophysiological examination of cognitive processing of and affective responses to social expectancy violations. *Psychological Science*, 12, 197-204.
- Bluemke, M., & Friese, M. (2006). Do features of stimuli influence IAT effects? *Journal of Experimental Social Psychology*, 42, 163-176.
- Carter, J. D., Hall, J. A., Carney, D. R., & Rosip, J. C. (2006). Individual differences in the acceptance of stereotyping. *Journal of Research in Personality*, 40, 1103-1118.
- Dasgupta, N., & Greenwald, A. G. (2001). On the malleability of automatic attitudes: Combating automatic prejudice with images of admired and disliked individuals. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 800-814.
- Gawronski, B., & Bodenhausen, G. V. (2006). Associative and propositional processes in evaluation: An integrative review of implicit and explicit attitude change. *Psychological Bulletin*, 132, 692-731.
- Gawronski, B., Deutsch, R., Mbirikou, S., Seibt, B., & Strack, F. (2008). When "Just Say No" is not enough: Affirmation versus negation training and the reduction of automatic stereotype activation. *Journal of Experimental Social Psychology*, 44, 370-377.
- Glick, P., Diebold, J., Bailey-Werner, B., & Zhu, L. (1997). The two faces of Adam: Ambivalent sexism and polarized attitudes toward women. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23,

1323-1334.

Greenwald, A. G., Banaji, M. R., Rudman, L. A., Farnham, S. D., Nosek, B. A., & Mellott, D. S. (2002). A unified theory of implicit attitudes, stereotypes, self-esteem, and self-concept. *Psychological Review*, 109, 3-25.

Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1464-1480.

Inquisit 2.0 [Windows XP] . (2003). Seattle, WA: Millisecond Software.

石井国雄・沼崎誠 2009 ジェンダー態度 IAT におけるステレオタイプ的な刺激項目の影響, 社会心理学研究

Judd, C. M., Blair, I. V., & Chapleau, K. M. (2004). Automatic stereotypes versus automatic prejudice: Sorting out the possibilities in the Payne (2002) weapon paradigm. *Journal of Experimental Social Psychology*, 40, 75-81.

国立社会保障・人口問題研究所 2006 第13回出生動向基本調査 結婚と出産に関する全国調査 独身者調査の結果概要 <http://www.ipss.go.jp/> (2006年9月22日)

国広陽子(2005) 仕事と子育ての両立をめぐる一母親の就業と子ども 井上輝子・江原由美子(編) 女性のデータブック 性・からだから政治参加まで pp.150-151.

Amodio, D. M. & Lieberman, M. D. (2009). Pictures in our heads: Contributions of fMRI to the study of prejudice and stereotyping. In T. Nelson (Ed.) *Handbook of Prejudices, Stereotyping and Discrimination*. Psychology Press. pp. 345-363.

Markus, H., & Wurf, E. (1987). The dynamic self-concept: A social psychological perspective. In M. R. Rosenweig & L. W. Porter (Eds.), *Annual Review of Psychology*, 38, 299-337.

沼崎 誠・小野 滋・高林久美子・石井国雄 (2006). Sequential Priming によるジェンダー・ステレオタイプの活性化の研究 首都大学東京・東京都立大学 人文学報, 369, 21-52.

日本労働研究機構 2003 育児や介護と仕事の両立に関する調査 <http://www.jil.go.jp/kokunai/statistics/doko/h1507/index.html> (2003年7月)

高林久美子・沼崎誠・小野滋・石井国雄 (2008). 活性化した自己表象が女性サブカテゴリーへの偏見とステレオタイプ化に及ぼす効果 心理学研究, 79, 372-378.

O'Connor, B. P. (1998). All-in-one programs for exploring interactions in moderated multiple regression. *Educational and Psychological Measurement*, 58, 833-837.

Rudman, L.A., Ashmore, R.D., & Gary, M.L. (2001). "Unlearning" automatic biases: The malleability of implicit stereotypes and prejudice. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 856-868.

Rudman, L. A. & Kilianski, S. E. (2000). Implicit and explicit attitudes toward female authority. *Personality and Social Psychological Bulletin*, 26, 1315-1328.

- Rudman, L. A., Greenwald, A. G., and McGhee, D. E. (2001). Implicit self-concept and evaluative implicit gender stereotypes: Self and ingroup share desirable traits. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 27, 1164-1178.
- Six, B., & Eckes, T. (1991). A closer look at the complex structure of gender stereotypes. *Sex Roles*, 24, 57-71.
- 鈴木淳子 (1991). 平等主義的性役割態度：SESRA（英語版）の信頼性と妥当性の検討および日米女性比較 社会心理学研究 6, 80-87.
- 鈴木淳子 (1994). 平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S）の作成 心理学研究, 65, 34-41.
- 鈴木淳子 (1996). 若年女性の平等主義的性役割態度と就労との関係について—就労経験および理想の仕事キャリア・昇進パターン—. 社会心理学研究, 11, 149-158.
- 鈴木淳子 (1999). 高学歴夫婦における性役割態度の関係—就労とのかかわりに関する社会心理学的考察—. 理論と方法, 14, 35-50.
- Tajfel, H., & Turner, J.C. (1986). The social identity theory of intergroup behavior. In S. Worchel, & W. Austin (Eds.), *Psychology of intergroup reactions*. Chicago: Nelson. pp.7-24
- Wittenbrink, B., Judd, C.M., & Park, B. (2001). Evaluative versus conceptual judgments in automatic stereotyping and prejudice. *Journal of Experimental Social Psychology*, 37, 244-2

## VI 部

### ステレオタイプのカテゴリー機能

## 22章 反ステレオタイプの情報のステレオタイプの連合低減効果に 競争マインドセットが及ぼす影響

長田 眞由子

沼崎 誠

(一橋大学社会学研究科<sup>1</sup>)

(首都大学東京人文科学研究科)

ステレオタイプとは、カテゴリーに結びついたある集団の成員がもつ特性や行動の傾向について過度に一般化された知識のことをいう。国籍、性別などのカテゴリーによって異なるステレオタイプが持たれている。例えば、「ドイツ人は勤勉である」、「女性は感情的である」といったようなものである。人はこのようなステレオタイプを用いることによって多様な現実世界を単純化でき、迅速な認知的処理が可能になる。このような機能はステレオタイプのカテゴリー化機能と呼ばれる。だがその一方で、ステレオタイプの使用は、集団の成員の多様性を無視した正確さに欠ける認知を引き起こす。このような認知はある特定の集団の人々への差別的な行動などの様々な問題の原因となる。そのため、ステレオタイプを変容させるた方略を検討する研究が数多く行われてきた。そのような方略の1つとして、ステレオタイプに反する事例に接するといった方略がある。

反ステレオタイプの事例に接すると、そのような事例は例外とみなされ、集団判断の際に考慮されなくなるため、顕在的なステレオタイプはそのまま維持されてしまうことが実証されている (e.g., Weber & Crocker, 1989)。このような現象はサブタイプ化と呼ばれ、ステレオタイプの変容が困難な理由の1つと考えられてきた。しかし、反ステレオタイプの事例の提示によって、潜在的なステレオタイプの連合が低減することが示されている。Dasgupta & Greenwald(2001)は、黒人と望ましくない特性、白人と望ましい特性とのステレオタイプの連合を利用し、反ステレオタイプの事例によってそのようなステレオタイプの連合が低減したことを実証した。この研究では、反ステレオタイプの事例として望ましい黒人と望ましくない白人を提示し、潜在的尺度と顕在的尺度でステレオタイプを測定した。反ステレオタイプの事例を提示した群とステレオタイプに関連のない事例を提示した群で測定したステレオタイプを比較した結果、顕在的尺度の測定結果では両群の間に差は見られなかったが、潜在的尺度の結果では、反ステレオタイプ事例を提示した群では、そうでない群に比べて、黒人と望ましくない特性、及び白人と望ましい特性のステレオタイプの連合が弱まっていたことが示された。黒人と白人を老人と若者に変えた場合でも、同様の結果が出ている。また、Dasgupta & Asgari(2004)では、女性とサポーター的特性のステレオタイプの連合を利用し、リーダー的特性を備えている女性を反ステレオタイプの事例として女性の実験参加者に提示したが、ここでも反ステレオタイプの事例によって潜在的なステレオタイプの連合が低減したことが示されている。

---

<sup>1</sup> 現所属 株式会社 SRA



このように、反ステレオタイプの事例によるステレオタイプの連合を低減効果は実証されているが、この効果を調整する要因を検討した研究は少ない。そこで、本研究は反ステレオタイプの事例がステレオタイプの連合の低減に及ぼす効果の調整要因の検討を目的とし、この要因として競争マインドセットを取り上げて検討を行った。

マインドセットとは、受け入れる情報の選択、受け入れた情報の処理に関わる認知的手続きをいう。特定の状況に接することでその状況に適したマインドセットが活性化し、活性化された状況と異なる状況になっても、活性化されたマインドセットに沿った思考や行動が行われやすくなることが知られている (e.g., Sassenberg & Moskowitz, 2005 ; Sassenberg, Moskowitz, Jacoby & Hansen, 2007)。競争マインドセットは、競争状況で活性化されると考えられているマインドセットである。競争マインドセットが活性化されると、柔軟性のない堅い思考になりやすく、カテゴリー典型性が弱い事例をカテゴリーに含まれないと判断する傾向が高いことが示されている。Carnevale & Probst (1998)は、競争群では競争を予期させる状況、協同群では協同を予期させる状況、統制群では何も予期させない状況をそれぞれ作り、それぞれの群の参加者に、実験 1 では機能的固着のローソク問題(Dunker, 1945)を、実験 2 ではカテゴリー化課題(Rosch, 1975)を実施した。その結果、競争群の実験参加者は、他の群の参加者に比べ、実験 1 ではローソク問題の正解率が低く、実験 2 ではカテゴリー典型性が弱い事例 (e.g, 「乗り物」のカテゴリーにおける「ラクダ」) をカテゴリーに含まれないと判断する傾向が高いことが示された。

以上のような先行研究から、競争マインドセットが活性化したときには、カテゴリー典型性が低いと知覚される反ステレオタイプの事例は集団に含まれないと判断され、ステレオタイプの連合は低減しづらいと予測される。本研究ではジェンダー・ステレオタイプを用いて検討を行った。実験では、「男性は有能」「女性は温かい」というステレオタイプの連合を用い、反ステレオタイプの事例として有能な女性を提示した。実験では 2 つの仮説を設けた。

仮説 1 として、反ステレオタイプの事例を提示された実験参加者は、そうでない実験参加者に比べて、潜在的なステレオタイプの連合が低減するだろう、を設けた。

仮説 2 として、この低減効果は、競争マインドセットが活性化された実験参加者は、そうでない実験参加者に比べて小さくなるだろう、を設けた。

また、反ステレオタイプの事例と競争がステレオタイプの連合低減に及ぼす効果に個人差が見られるかについて、実験参加者の自尊感情を測定し、併せて検討した。

## 方 法

**実験参加者** 実験の約 2 ヶ月前に Rosenberg の自尊感情尺度の日本語版 (星野, 1970) に回答した首都大学東京男子学生 47 名 (内分析対象者 46 名)。2 (マインドセット操作: 競争なし vs. 競争あり) × 2 (提示する事例: 反ステレオタイプの事例 vs. ステレオタイプ無関連事例) の参加者間要因計画で実験を行った。

**事例** 反ステレオタイプ的な女性の事例として、男性的なものと考えられている職業（e.g. 実業家、政治家）で社会的に成功している実在の女性 10 名を選択した。インターネットから引用した女性の画像 1 枚とその女性の名前、誕生日、職業、プロフィールの 4 つの情報の組み合わせを 10 名分作成した。プロフィールには「IT 系企業の社長」などの業績を記載した。

ステレオタイプ無関連事例として、世界遺産の画像と情報の組み合わせを提示した。2007 年までに登録されている世界遺産の中から、日本とオセアニアにある世界遺産を 1 つずつ、ヨーロッパ、日本以外のアジア、アフリカ、北米・中南米の各地域から 2 つずつ、合計 10 個を選択した。インターネットから引用した遺産の画像 1 枚と、世界遺産の登録名、登録年、所在地、遺産種別の 4 つの情報の組み合わせを 10 個分作成した。

事例の画像は全てカラーで提示し、女性の画像の大きさは 200×200 ピクセル、世界遺産の画像の大きさは 280×203 ピクセルで統一した。

**IAT** 潜在的ジェンダー・ステレオタイプ測定には、男性名と女性名、有能さを表す特性語と温かさを表す特性語の 4 カテゴリーを使用した IAT を用いた。IAT の刺激は全て背景が黒の画面の中央に提示された。

刺激として 1 カテゴリー 5 語ずつ、合計 20 語の単語を用いた。それぞれの単語は 1 人の実験参加者に対して繰り返し提示された。男性名・女性名カテゴリーの単語は、明治安田生命の年代別名前ランキングを参考に、実験参加者と同じくらいの年代（昭和 58～65 年）に生まれた人で多かった名前から男性名・女性名をそれぞれ 5 つずつ選び、全てひらがなで提示した。特性語の有能さ・温かさ関連語は沼崎・小野・高林・石井（2006）で用いられた作動性高ポジティブ語から 5 語を有能さ関連語として、共同性高ポジティブ語から 5 語を温かさ関連語としてそれぞれ選び、全て漢字とひらがなが混ざった形式で提示した。IAT に使用した全ての刺激は、Table 1 に示した通りである。

Table 1. IAT の刺激語

カテゴリー	刺激語
男性名	だいすけ, たつや, けんた, たくや, かずや
女性名	めぐみ, かおり, あゆみ, ゆうこ, みほ
「有能さ」関連語	有能な, 勇敢な, 自信のある, 決断力のある, 意志の強い
「温かさ」関連語	献身的な, 温かい, 世話好きな, 親しみやすい, 優しい

**装置** 事例の画像と情報の提示と IAT には、東芝製 dynabook Satellite T20 173L/5 を使用した。また、刺激の提示には Inquisit2.0 を使用した。

**手続き** 2 つの異なる研究を行うという名目で実験参加者を募集した。実験は競争あり・

なし群ごとに4人1組で実施した。1つ目の研究ではマインドセット操作と事例の提示を、2つ目の研究ではステレオタイプ測定を行った。

1つ目の研究はカバー・ストーリーとして、競争なし群では報酬が記憶に及ぼす効果について検証する研究、競争あり群では競争が記憶に及ぼす効果について検証する研究と説明した。そのうえで報酬についての教示を行うことでマインドセット操作を行った。競争あり群では「再生再認テストの正解数が一番多かった人に報酬2000円を与える」、競争なし群では「再生再認テストの正解率5割以上の人に500円を与える」という教示を行った。実験参加者全員を4人1組のグループに分け、実験はグループごとに実施した。実験室では、競争あり群は自分以外の参加者全員が見えるように、競争なし群では自分以外の参加者は見えないように席を配置した。

1つ目の研究ではまず、マインドセット操作として、競争あり群と競争なし群で異なる報酬の教示を行った。競争あり群では、「再生再認テストの正解数が4人の中で一番多かった人に2000円を与える」という教示を行い、競争なし群では、「再生再認テストの正解率が5割以上の人に500円を与える」という教示を行った。次の記憶課題では、実験参加者の前に設置したPCに、画像と4つの情報の組み合わせを10組提示した。提示時間は1組10秒で、提示は2回行った。事例の提示順序はランダムではなく、統一した順序での提示を行った。記憶課題終了後、再生再認テストを行った。ここでは、画像のみを提示し、その画像の情報4つ全てを思い出す筆記式のテストを実施した。問題には選択式と自由記述式の二種類があり、4つの情報のうち2つを選択式で、残りの2つを自由記述式で解答させた。テストは8分間行った。記憶課題と再生再認テストで用いた画像と情報は、反ステレオタイプの事例群と無関連事例群では異なる組み合わせを用いた。反ステレオタイプの事例群では、男性的なものと考えられている職業で成功している女性10名の画像と情報を、無関連事例群では、世界遺産の画像と情報を用いて、記憶課題と再生再認テストを行った。再生再認テストが終了したら、テストの解答用紙を回収し、実験室の隣の部屋に待機していた協力者（実験参加者には採点者と説明した）に手渡し、実験室の外に持ち出してもらった。協力者がいない場合は実験者自身が解答用紙を隣の部屋に持ち出した。

解答の採点が終わるまでの時間に別の研究を行う、と説明し、2つ目の研究に移った。ここで、ステレオタイプ測定時に実験参加者同士の競争の意識が入らないようにするため、競争あり群のみ、席を競争なし群と同様の配置に移動させ、ステレオタイプ測定時に他の参加者が見えないようにした。

2つ目の研究は「言葉のカテゴリー分類に関する研究」というカバー・ストーリーの下、実施した。カテゴリー分類課題として、参加者全員にIATを実施した。参加者には、PC画面上に提示された単語が、指定された2つのカテゴリーのうちどちらに含まれるかを判断し、対応するキーを押して回答する課題と説明した。IATの1試行は、試行ブロックごとに異なる2つのカテゴリーが右上と左上に表示されている画面の中央に単語が提示され、

その単語が表示されているどちらの категорияに含まれるかを判断し、対応するキー（「D」、  
「K」キー）を押して回答するという流れだった。不正解の場合は画面に“×”が表示され、  
正解のキーを押すと次の試行に進むようになっていた。

試行ブロックは、特性語練習試行ブロック、名前練習試行ブロック a、不一致課題練習  
試行ブロック、不一致課題本試行ブロック、名前練習試行ブロック b、一致課題練習試行  
ブロック、一致課題本試行ブロックの7ブロックに分かれていた。不一致課題と一致課題  
のブロックは対になっており、全員不一致課題を先に実施した。

特性語練習試行ブロックでは特性語の判断のみを行い、10 試行行われた。有能さ関連語  
と温かさ関連語が提示され、提示された単語が有能さ関連語の場合には「D」キーを、温  
かさ関連語の場合には「K」キーを押して回答してもらった。グループとキーが変更する  
教示を画面上で行った後、名前試行ブロック a に移った。このブロックでは名前の判断の  
みを行い、10 試行行われた。男性名と女性名が提示され、その単語が男性名であった場合  
には「D」キーを、女性名であった場合には「K」キーを押して回答させた。次に、「ここ  
からは組み合わせ課題を行う」という教示を画面上で行い、不一致課題練習試行ブロック  
に入った。ここでは、特性語判断と名前判断を同時に行い、20 試行が行われた。有能さ関  
連語、温かさ関連語、及び男性名と女性名が提示され、単語が有能さ関連語または女性名  
だった場合「D」キーを、温かさ関連語または男性名だった場合「K」キーを押すことで回  
答させた。本試行に移る教示を画面上で行ってから、不一致課題本試行ブロックに入り、  
不一致課題練習試行ブロックと同様の課題を 40 試行行った。グループとキーが変更する教  
示を画面上で行ってから、名前試行ブロック b に入った。このブロックでは名前試行ブロ  
ック a と同様に名前の判断のみを行ったが、categoryと対応するキーが名前試行ブロ  
ック a と逆（提示された名前が女性名であった場合には「D」キーを、男性名であった場合  
には「K」キーを押して回答）になっていた。このブロックでは 10 試行が行われた。組  
み合わせ課題を行う教示を画面上で行ってから、一致課題練習試行に入った。このブロ  
ックでは、不一致課題と同様に、特性語判断と名前判断を同時に行い、20 試行行われた。有  
能さ関連語、温かさ関連語、及び男性名と女性名が提示され、有能さ関連語または男性名だ  
った場合「D」キーを、温かさ関連語または女性名だった場合「K」キーを押すことで回  
答させた。本試行に移る教示を画面上で行い、一致課題本試行ブロックに入った。このブロ  
ックでは、一致課題練習試行ブロックと同様の課題を 40 試行行った。単語の提示は、すべ  
てのブロックでランダムに行われた。

参加者全員が IAT を終えた後、顕在的ステレオタイプの連合質問紙に回答させた。ここで  
は、IAT で用いた有能さ関連語と温かさ関連語が、一般的な女性と男性にどの程度あては  
まるかを7件法で回答させ、全員女性の評定を先に行った。次にマインドセット操作の操  
作チェック項目を含む実験後質問紙を実施し、研究についての質問 21 項目に 1（よくあて  
はまる）～7（全くあてはまらない）の7段階で回答させた。質問項目のうち競争に関する

3項目（「再生再認テストでは、他の人よりも良い成績を取ろうと思った」、「他の人に負けないように課題に取り組んだ」、「他の人に勝てるように、課題に取り組んだ」）を競争マインドセット操作の操作チェックに用いた。

最後にデブリーフィングにおいて実験の本当の目的と実験条件、仮説を説明し、実験参加者全員に報酬として500円を支払った。

## 結果

**操作チェック** 実験後質問紙の質問項目のうち競争に関する質問3項目の評定平均を競争意識の指標とした( $\alpha = .96$ )。この指標に対して、競争×事例の分散分析を行った。その結果、競争の主効果のみ有意に近い効果が見られた ( $F(1,42) = 3.16, p = .08$ )。競争なし群に比べて ( $M = 3.89, SD = 1.57$ )、競争あり群の方では競争意識が高かった ( $M = 3.11, SD = 1.28$ )。その他の項目については、有意な効果は見られなかった。よってマインドセット操作は成功したといえるだろう。

**IAT** 反応時間が300ms以下と3000ms以上のデータを分析から除外し、反応時間に対数変換を行った。そのうえで、一致課題と不一致課題ごとに平均値を算出し、課題を要因に入れた課題×操作×事例の分散分析を行った。その結果、課題の主効果 ( $F(1,42) = 115.1, p < .01$ )、課題×操作の交互作用が有意だった ( $F(1,42) = 6.86, p < .05$ )。

一致課題の反応時間は、不一致課題の反応時間に比べ、速くなっていた ( $M = 2.75; M = 2.83$ )。このことから、男性と有能さ関連特性、女性と温かさ関連特性の潜在的なステレオタイプの連合が示された。しかしこの効果は、課題×操作の交互作用効果によって制限を受けた。不一致課題の平均値から一致課題の平均値を引いてIAT効果を算出したところ、競争なし群に比べ、競争あり群の方ではIAT効果が小さかった ( $M = .09; M = .06$ )。結果を図に示したものがFigure 1である。この結果は、競争状況の経験によって、ステレオタイプの連合が低減したことを示している。

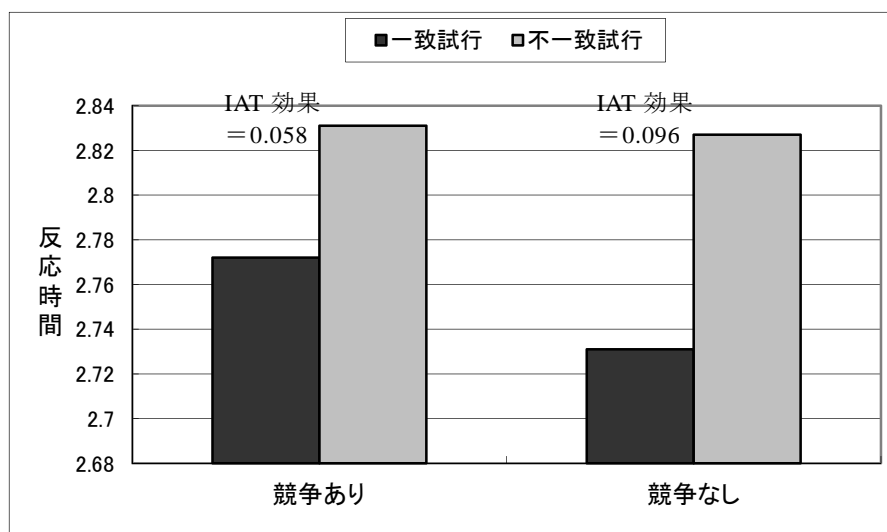


Figure 1 IATの反応時間

また、課題×事例と、課題×事例×操作の交互効果が有意ではなかったため( $F(1, 42) = .07$  ns. ;  $F(1, 42) = 3.30$  ns.)、仮説 1 と 2 のどちらも支持されなかった。

**顕在的ステレオタイプの連合質問紙** 女性の評定結果から、温かさ関連特性語の評定平均を女性\_温かさ得点、有能さ関連特性語の評定平均を女性\_有能さ得点として算出した。男性の評定結果からも、女性の場合と同様に、男性\_温かさ得点と男性\_有能さ得点を算出した。上記 4 つの指標全てに対し、操作×事例の分散分析を行った。その結果、女性\_温かさ得点において、操作の主効果のみが有意だった( $F(1, 42) = 6.98, p < .05$ )。女性\_温かさ得点を競争あり群、競争なし群ごとに示した図が、Figure 2 である。競争あり群の方が、競争なし群に比べ、女性\_温かさ得点を高く評定していた( $M = 5.55, SD = .58$  ;  $M = 5.00, SD = .86$ )。残りの 3 つの得点で有意になった効果はなかった。この結果から、競争マインドセットの活性化によって、女性と温かさ関連特性の顕在的なステレオタイプの連合が強まったと考えられる。

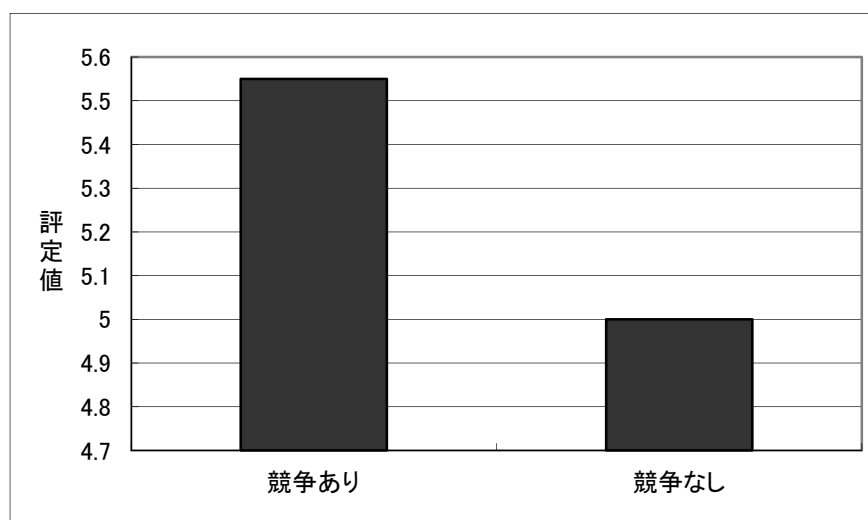


Figure 2 女性\_温かさ得点の評定値

**個人差要因(自尊感情)を含めた分析** Dasgupta & Greenwald (2001)と異なり、IATにおいて事例の効果が有意ではなかったため、さらに自尊感情を個人差要因として含め、分析を行った。この分析では、自尊感情尺度が無回答だった実験参加者 4 名を除いた 42 名を分析対象とした。実験前に測定した自尊感情尺度の得点を標準化し、IAT の反応時間の平均値に対して、課題×操作×事例×自尊感情の回帰分析を行った。その結果、課題×操作の交互作用効果に加えて( $F(1, 34) = 5.98, p < .05$ )、課題×事例×自尊感情の交互作用効果が有意であった ( $F(1, 34) = 5.15, p < .05$ )。結果を見やすくするため、不一致課題の平均値から一致課題の平均値を引いて IAT 効果を算出し、自尊感情高 (+1  $\sigma$ ) 自尊感情低 (-1  $\sigma$ ) ごとにプロットしたのが Figure.3 である。なお、IAT 効果が高い程、男性と有能さ関連特性、女性と温かさ関連特性の潜在的なステレオタイプの連合が活性化したことを示している。

自尊感情が低い実験参加者は、無関連の事例を見たときに比べ、反ステレオタイプの事

例を見たときの方が IAT 効果が小さくなっていたのに対し、自尊感情が高い実験参加者は、無関連の事例を見たときに比べ、反ステレオタイプの事例を見たときの方が IAT 効果が大きくなっていた。この結果から、自尊感情が低い実験参加者においてのみ、仮説 1 が支持されたと言える。また仮説 2 は、事例×競争を含む交互作用効果が有意ではなかったため ( $F(1, 34) = .23 ns.$ )、支持されなかった。

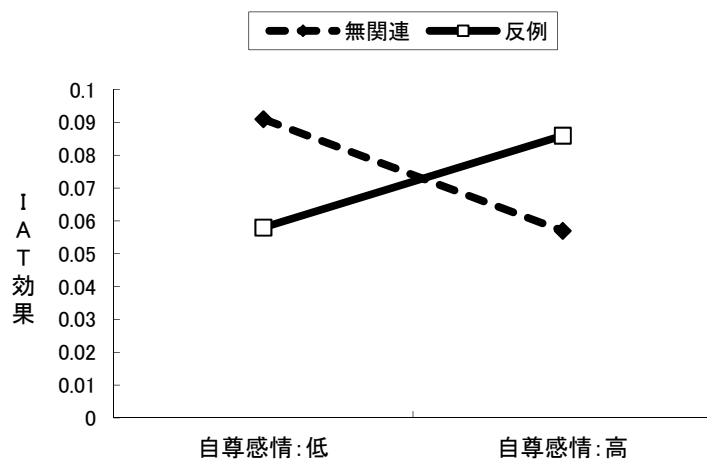


Figure 3. 自尊感情の高さによる事例の効果(IAT)

また、顕在的なステレオタイプの連合の結果に対しても自尊感情を含めた分析を行ったところ、女性\_温かさ得点における操作の主効果に加え ( $F(1, 34) = 8.13, p < .01$ )、女性\_有能さ得点において、事例×自尊感情の交互作用効果が有意に近い効果が見られた ( $F(1,34) = 3.92, p = .06$ )。他の 2 つの得点には有意な効果が見られなかった。自尊感情が低い実験参加者は、無関連の事例を見たときに比べ反ステレオタイプの事例を見たときの方が、女性\_有能さ得点が高くなる傾向があったのに対し、自尊感情が高い実験参加者は、無関連の事例を見たときに比べ反ステレオタイプの事例を見たときの方が、女性\_有能さ得点が低くなる傾向があった (Figure 4)。これは、IAT で見られた結果と同様のものである。

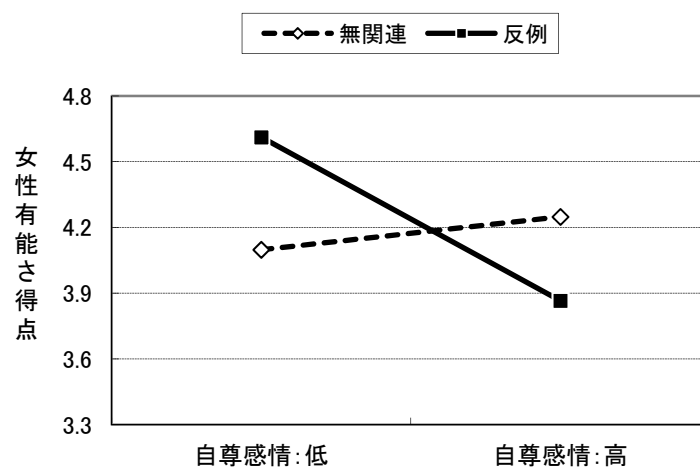


Figure 4. 自尊感情の高さによる事例の効果(質問紙)

## 考 察

IAT の分析結果では、仮説 1 と 2 はどちらも支持されなかった。また自尊感情を含めた分析では、自尊感情の低い実験参加者においてのみ仮説 1 が支持されたが、仮説 2 は支持されなかった。仮説 1 で予測していた反ステレオタイプの事例による潜在的なステレオタイプの連合の低減効果は、自尊感情の低い実験参加者のみに見られたが、仮説 2 で予測していた、反ステレオタイプの事例による潜在的なステレオタイプの連合の低減効果に競争マインドセットが及ぼす影響は見られなかった。また、競争マインドセットの活性化によって IAT 効果が小さくなったという、予想外の結果が得られた。この結果から、競争マインドセットの活性化が潜在的なステレオタイプの連合を低減させたと考えられるが、IAT における課題の実施順序を不一致課題、一致課題の順に統一したことが影響した可能性もある。競争あり群の実験参加者は競争マインドセットの活性化によって柔軟性のない堅い思考となり、IAT の課題が不一致課題から一致課題に変化した際、対応が遅れ一致課題の反応時間が遅くなり、IAT 効果が小さくなったと考えられる。

本研究ではさらに、自尊感情の高さによって反ステレオタイプの事例が潜在的ステレオタイプの連合へ及ぼす影響が異なっていたという興味深い結果が得られた。IAT において、自尊感情が低い参加者は、無関連事例を見た場合に比べて反ステレオタイプの事例を見た場合に IAT 効果が小さくなったという、仮説 1 通りの結果が示されたのに対し、自尊感情が高い参加者は、無関連事例を見た場合に比べて反ステレオタイプの事例を見た場合、IAT 効果が大きくなっていった。この結果は、反ステレオタイプの事例によって、自尊感情が低い参加者は潜在的なステレオタイプの連合を低減させたが、自尊感情が高い参加者は逆に潜在的なステレオタイプの連合を強めたことを示している。この結果から、反ステレオタイプの事例がもつ潜在的ステレオタイプの連合低減効果の調整要因は、自尊感情の高さである可能性が示された。では、何故自尊感情の高さが潜在的ステレオタイプの連合低減効果に影響を及ぼしたのだろうか。その理由として、心理的リアクタンスが考えられる。Brockner & Elkind (1985) の研究によると、ある一定の方向性をもつ説得的コミュニケーションを与えられた場合、自尊感情の高い人はそのコミュニケーションが自分にとっての脅威を伴った場合、リアクタンスが生じ、与えられたコミュニケーションとは反対の方向へ態度を変化させたのに対し、自尊感情の低い人は脅威を伴うコミュニケーションに対する抵抗が弱く、リアクタンスは生じなかったという結果が出ている。

今回の実験の場合、自尊感情が高い人は提示された反ステレオタイプの事例に対してのリアクタンスが起こり、女性に関する認知を、ステレオタイプに反した事例とは逆の方向、すなわちステレオタイプに一致する方向に変容させたのではないだろうか。一方で自尊感情が低い人にはこのリアクタンスが起こらずに、ステレオタイプの連合が低減したと考えられる。

今回の実験では、IAT の試行の順序を不一致課題を先に実施する順序に統一したため、



潜在的なステレオタイプの連合の結果に関して、競争マインドセットの効果と順序の効果が交絡した可能性があった。今後は、IATの順序の効果を取り除いて、競争マインドセットの潜在的なステレオタイプの連合への効果を検討する必要がある。また、自尊感情の高さが反ステレオタイプの事例による潜在的なステレオタイプの連合低減効果に影響した過程について、さらに詳しく検討していく必要があるだろう。

#### 引用文献

- Brockner, J., & Elkind, M. (1985). Self-esteem and reactance: Further evidence of attitudinal and motivational consequences. *Journal of Experimental Social Psychology, 21*, 346-361.
- Carnevale, P. J., & Probst, T. M. (1998). Social values and social conflict in creative problem solving and categorization. *Journal of Personality and Social Psychology, 74*, 1300-1309.
- Dasgupta, N., & Asgari, S. (2004). Seeing is believing: Exposure to counterstereotypic woman leaders and its effect on the malleability of automatic gender stereotyping. *Journal of Experimental Social Psychology, 40*, 642-658.
- Dasgupta, N., & Greenwald, A. G. (2001). On the Malleability of Automatic Attitudes: Combating Automatic Prejudice With Image of Admired and Disliked Individuals. *Journal of Personality and Social Psychology, 81*, 800-814.
- Sassenberg, K., & Moskowitz, G. B. (2005). Don't stereotype, think different! Overcoming automatic stereotype activation by mindset priming. *Journal of Experimental Social Psychology, 41*, 506-514.
- Sassenberg, K., Moskowitz, G. B., Jacoby, J., & Hansen, N. (2007). The carry-over effect of competition: The impact of competition on prejudice towards uninvolved outgroups. *Journal of Experimental Social Psychology, 43*, 529-538.
- Weber, R., & Crocker, J. (1983). Cognitive processes in the revision of stereotypic beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology, 45*, 961-977.